

小島北磯遺跡

－岬町多奈川地区多目的公園用地造成土砂採取事業に伴う発掘調査－

2000年8月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



小島北磯遺跡遠景 下部中央が当遺跡、右手奥は淡路島、その手前が友ヶ島



小島北磯遺跡近景



5トレンチ 第4面 全景



5トレンチ 第3面 石敷炉 39



5トレンチ 第5面 地床炉 46

序 文

大阪湾沿岸の泉南地域から和歌山県の沿岸や島嶼にかけて、特に岬町周辺では弥生時代以降の製塩土器が出土することで知られています。岬町小島東遺跡や山田海岸遺跡では製塩炉も見つかっており、この地域が古くから土器製塩の中心地のひとつであったことがわかっています。

関西国際空港第2期工事に伴い、かつて石敷きの製塩炉や多量の製塩土器が発見され、大阪湾南部の製塩土器編年の標式となった小島東遺跡のすぐ南の小さな海岸に、造成に伴って発生する土砂の積み出し施設が建設されることになりました。大阪府教育委員会によって試掘調査が実施された結果、多量の製塩土器と数基の製塩炉が発見され、新たに小島北磯遺跡として周知されることになりました。

そこで、岬町多奈川地区多目的公園用地造成事業に伴う発掘調査として、このたび財団法人 大阪府文化財調査研究センターが調査を実施いたしました。

今回の調査においては、弥生時代後期から奈良時代にかけて営まれた石敷きの製塩炉や、海岸へ続く石敷きの道が検出されたほか、多量の製塩土器や漁撈具なども出土しました。さらに、弥生時代中期にまで遡り、製塩に利用された可能性のある地床炉が検出されるなど、この地域のみならず瀬戸内海沿岸の製塩の成立と展開を解明するうえで貴重な資料を提供できたものと確信いたしております。また、これらの成果が、変貌著しいこの地域の将来のあり方を考えていくうえでのひとつの材料として活用されることを期待いたしております。

最後になりましたが、調査に際し協力を惜しまれなかった大阪府教育委員会、大阪府土地開発公社、岬町教育委員会、和歌山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係者の皆様に対し、厚くお礼を申し上げますとともに、当センターにより一層のご支援を賜りますよう切に希望いたします。

平成 12 年 8 月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理 事 長 水 野 正 好

例 言

1. 本書は大阪府泉南郡岬町多奈川小島地内に所在する小島北磯遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は岬町多奈川地区多目的公園用地造成土砂採取事業に伴うもので、大阪府土地開発公社の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人 大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は調査部長井藤 徹、参事兼調整課長中西靖人（平成 11 年度）、調整課長赤木克視（平成 12 年度）、南部調査事務所長瀬川 健の指示のもと、調査第 1 係長阪田育功（平成 11 年度）、調査第 1 係長金光正裕（平成 12 年度）、技師三宮昌弘、後藤信義、佐伯博光、専門調査員宮地聡一郎が行った。
4. 現地調査は平成 11 年 7 月 28 日から開始し、同年 11 月 19 日に終了した。整理作業並びに本書の作成は技師後藤と専門調査員宮地が平成 11 年 11 月 20 日から平成 12 年 8 月 31 日まで行い、全ての作業を完了した。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、岬町教育委員会、大阪府土地開発公社岬特定事業事務所などの関係諸機関をはじめ、多くの諸氏にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、組織五十音順、組織内五十音順）。
今村道雄・西口陽一（大阪府教育委員会）、石部正志（五條文化博物館）、積山 洋（財団法人大阪市文化財協会）、立岡和人・富加見泰彦（財団法人和歌山県文化財センター）、大野路彦・河田泰之（泉南市教育委員会）、水野聡哉（舞鶴市教育委員会）、小川正純（岬町教育委員会）、前田敬彦（和歌山市立博物館）
6. 発掘調査・遺物整理作業および本書作成作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た（五十音順）。
<発掘調査>
乙女さおり・阪上志緒里・富加見百合子・三山法子
<遺物整理>
秋山敦子・宇川里香・片山憲子・川田嘉代子・杉村裕美・田中映子・中筋英子・中村慎子・松永しのぶ・山口純枝
7. 現地調査中は理事堅田 直から現地において助言を得たほか、古市分室職員諸氏に協力を仰いだ。
8. 調査区全景および遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は南部調査事務所第 1 係主任技師立花正治が行った。また、巻頭図版の航空写真は拓殖建設計画株式会社の撮影によるものである。
9. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 本文中および挿図中の標高は、東京湾平均海面（T. P.）からのプラス値である。
2. 発掘調査に伴う地区割りは、国土座標の第 VI 座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北は座標北を基準としている。ちなみに座標北は、磁北より東へ $6^{\circ} 40'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 18'$ 振れている。また、座標の記載の単位は km である。
3. 遺物実測図の縮尺は、土器・土製品は $1/4$ （但し焼土塊は $1/2$ ）、脚台式製塩土器は $1/2$ 、丸底式製塩土器は $1/3$ 、石器・石製品は $1/2$ （但し白玉は原寸、砥石・錨石は $1/4$ ）、骨角器は $1/2$ である。
また、挿図では須恵器は黒塗り、それ以外はすべて白抜きで表している。
4. 挿図および図版における遺物番号は、すべて通し番号を付与している。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 本書の執筆については目次に記した。また、編集は後藤が行った。

目 次

卷頭図版	
序 文	
例言・凡例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	

I. 位置と環境（後藤信義）	1
II. 調査に至る経緯と経過（阪田育功）	3
III. 調査の方法（後藤）	4
IV. 調査成果	5
1. 試掘調査部（後藤）	5
2. 本調査部	15
a. 基本層序（後藤）	15
b. 遺構（後藤・宮地聡一郎）	15
c. 遺物（後藤・宮地）	37
V. まとめ（後藤）	73
VI. 考察（宮地）	75

挿 図 目 次

図 1 周辺遺跡分布図	2
図 2 トレンチ配置図	3
図 3 トレンチ位置図	4
図 4 1 トレンチ 東辺断面図	6
図 5 1 トレンチ 遺構平面図	6
図 6 2 トレンチ 北西辺・北東辺断面図	7
図 7 3 トレンチ 北東辺断面図	8
図 8 3 トレンチ 遺構平面図	8
図 9 4 トレンチ 南東辺断面図	9
図 10 4 トレンチ 遺構平面図	9
図 11 9 トレンチ 南西辺断面図	10
図 12 10 トレンチ 西辺断面図	10
図 13 12 トレンチ 南東辺断面図・遺構平面図	10
図 14 5 トレンチ 北辺断面図	11・12
図 15 5 トレンチ X = - 186, 820 ライン北辺断面図	11・12

図 16	5 トレンチ	X = - 186,840 ライン北辺断面図	11	・	12
図 17	5 トレンチ	南辺断面図	11	・	12
図 18	5 トレンチ	東辺断面図	13	・	14
図 19	5 トレンチ	第 1 面 遺構平面図	16		
図 20	5 トレンチ	第 2 面 遺構平面図	17		
図 21	5 トレンチ	第 2 面 石敷炉 3 平・断面図	18		
図 22	5 トレンチ	第 2 面 石敷炉 4 平・断面図	18		
図 23	5 トレンチ	第 2 面 石敷炉 5 平・断面図	19		
図 24	5 トレンチ	第 2 面 石敷炉 6 平・断面図	20		
図 25	5 トレンチ	第 2 面 石敷炉 7 平・断面図	20		
図 26	5 トレンチ	第 2 面 石敷炉 8 平・断面図	20		
図 27	5 トレンチ	第 2 面 礫群 1 断面図	21		
図 28	5 トレンチ	第 3 面 遺構平面図	22		
図 29	5 トレンチ	第 3 面 地床炉 24 平・断面図	23		
図 30	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 21 平・断面図	24		
図 31	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 29 平・断面図	24		
図 32	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 30 平・断面図	25		
図 33	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 40 平・断面図	26		
図 34	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 47 平・断面図	26		
図 35	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 48 平・断面図	26		
図 36	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 49・50 平・断面図	27		
図 37	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 53 平・断面図	27		
図 38	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 32 平・断面図	28		
図 39	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 39 平・断面図	28		
図 40	5 トレンチ	第 3 面 石敷炉 54 平・断面図	29		
図 41	5 トレンチ	第 3 面 ピット 58 平・断面図	29		
図 42	5 トレンチ	第 3 面 ピット 59 平・断面図	29		
図 43	5 トレンチ	第 3 面 ピット 20 平・断面図	29		
図 44	5 トレンチ	第 3 面 ピット 22 平・断面図	29		
図 45	5 トレンチ	第 4 面 遺構平面図	30		
図 46	5 トレンチ	第 4 面 地床炉 31 平面図	30		
図 47	5 トレンチ	第 4 面 石敷道路 35 平・断面図	31		
図 48	5 トレンチ	第 5 面 遺構平面図	32		
図 49	5 トレンチ	第 6 面 遺構平面図	32		
図 50	5 トレンチ	第 5 面 地床炉 33・41 平面図	33		
図 51	5 トレンチ	第 5 面 地床炉 34・42・43 平面図	33		
図 52	5 トレンチ	第 5 面 地床炉 36・51 平面図	34		
図 53	5 トレンチ	第 5 面 地床炉 46 平面図	34		

図 54	5 トレンチ 第 6 面 地床炉 55 平面図	35
図 55	5 トレンチ 第 6 面 地床炉 56 平面図	35
図 56	5 トレンチ 第 6 面 断ち割り断面図	36
図 57	5 トレンチ 第 6 面 地床炉 55・60 断面図	36
図 58	第 1 層出土遺物	37
図 59	第 2 層出土遺物 (1)	39
図 60	第 2 層出土遺物 (2)	40
図 61	第 2 面出土遺物	40
図 62	第 3 層出土遺物 (1)	42
図 63	第 3 層出土遺物 (2)	44
図 64	第 3 層出土遺物 (3)	46
図 65	第 3 層出土遺物 (4)	48
図 66	第 3 層出土遺物 (5)	51
図 67	第 3 面出土遺物 (1)	52
図 68	第 3 面出土遺物 (2)	54
図 69	第 3 面 石敷炉 21 出土遺物	54
図 70	第 4 層出土遺物 (1)	55
図 71	第 4 層出土遺物 (2)	56
図 72	第 4 層出土遺物 (3)	58
図 73	第 4 層出土遺物 (4)	59
図 74	第 4 層出土遺物 (5)	61
図 75	第 4 層出土遺物 (6)	62
図 76	第 4 層出土遺物 (7)	63
図 77	第 4 層出土遺物 (8)	64
図 78	第 4 層出土遺物 (9)	65
図 79	第 4 面 石敷道路 35 下部出土遺物	66
図 80	第 5 層出土遺物 (1)	68
図 81	第 5 層出土遺物 (2)	69
図 82	第 5 面 地床炉 36 出土遺物	69
図 83	第 6 層出土遺物	70
図 84	その他 出土遺物 (1)	71
図 85	その他 出土遺物 (2)	72
図 86	脚台式製塩土器型式分類	75

表 目 次

表 1	脚台式製塩土器脚部外面調整	77
表 2	脚台式製塩土器体部内面調整	77

巻頭図版目次

- 巻頭図版1 小島北磯遺跡遠景 下部中央が当遺跡、右手奥は淡路島、その手前が友ヶ島
巻頭図版2 上段 小島北磯遺跡近景 下段 5トレンチ 第4面 全景
巻頭図版3 上段 5トレンチ 第3面 石敷炉39 下段 5トレンチ 第5面 地床炉46

図版目次

図版 1

- | | | | | | | | | |
|----|----|-------|-----|----------|----|-------|-----|----------|
| 上段 | 左上 | 1トレンチ | 第1面 | 全景(北から) | 右上 | 1トレンチ | 第1面 | 全景(北東から) |
| | 左下 | 2トレンチ | 断面 | (南西から) | 右下 | 3トレンチ | 第2面 | 全景(南東から) |
| 下段 | 左上 | 4トレンチ | 第1面 | 全景(南西から) | 右上 | 6トレンチ | 第1面 | 全景(西から) |
| | 左下 | 7トレンチ | 第1面 | 全景(北から) | 右下 | 8トレンチ | 第1面 | 全景(東から) |

図版 2

- | | | | | | | | | |
|----|-------|--------|-----|----------|----|--------|-----|----------|
| 上段 | 左上 | 9トレンチ | 第1面 | 全景(南東から) | 右上 | 10トレンチ | 第1面 | 全景(南東から) |
| | 左下 | 11トレンチ | 第1面 | 全景(北西から) | 右下 | 12トレンチ | 第1面 | 全景(北東から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第2面 | 中央部 | 全景(南から) | | | | |

図版 3

- | | | | | |
|----|-------|-----|-----|---------|
| 上段 | 5トレンチ | 第2面 | 南半部 | 全景(東から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第2面 | 中央部 | 全景(東から) |

図版 4

- | | | | | |
|----|-------|-----|------|---------|
| 上段 | 5トレンチ | 第2面 | 北半部 | 全景(南から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第2面 | 石敷炉4 | (北から) |

図版 5

- | | | | | | | | | |
|----|-------|-------|------|-----------|----|-------|-----|-----------|
| 上段 | 左上 | 5トレンチ | 第2面 | 石敷炉3(東から) | 右上 | 5トレンチ | 第2面 | 石敷炉5(西から) |
| | 左下 | 5トレンチ | 第2面 | 石敷炉6(南から) | 右下 | 5トレンチ | 第2面 | 石敷炉7(北から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第2面 | 石敷炉8 | (北から) | | | | |

図版 6

- | | | | | |
|----|-------|-----|-----|---------|
| 上段 | 5トレンチ | 第3面 | 全景 | (南西から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第3面 | 中央部 | 全景(南から) |

図版 7

- | | | | | | | | | |
|----|-------|-------|-------|--------------|----|-------|-----|---------------|
| 上段 | 左上 | 5トレンチ | 第3面 | ピット20断面(北から) | 右上 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉39・47(南から) |
| | 左下 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉40(北から) | 右下 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉32(北西から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉21 | (北から) | | | | |

図版 8

- | | | | | | | | | |
|----|-------|-------|-------|------------|----|-------|-----|-------------|
| 上段 | 左上 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉47(西から) | 右上 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉39(北西から) |
| | 左下 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉49(東から) | 右下 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉48(東から) |
| 下段 | 5トレンチ | 第3面 | 石敷炉54 | (南西から) | | | | |

図版 9

- | | | | | | | | | |
|----|----|-------|-----|------------|----|-------|-----|------------|
| 上段 | 左上 | 5トレンチ | 第3面 | ピット57(西から) | 右上 | 5トレンチ | 第3面 | ピット58(西から) |
|----|----|-------|-----|------------|----|-------|-----|------------|

左下 5トレンチ 第3面 ピット59(西から) 右下 5トレンチ 第4面 全景(南西から)
下段 5トレンチ 第4面 中央部全景(南から)

図版10

上段 5トレンチ 第4面 石敷道路35(北西から)
下段 5トレンチ 第4面 石敷道路35(南西から)

図版11

上段 左上 5トレンチ 第4面 石敷道路35下部構造(東から) 右上 5トレンチ 第4面 調査区北壁断面(南から)
左下 5トレンチ 第5面 全景(南西から) 右下 5トレンチ 第5面 地床炉33(東から)
下段 5トレンチ 第5面 中央部全景(東から)

図版12

上段 左上 5トレンチ 第5面 地床炉34(北から) 右上 5トレンチ 第5面 地床炉36(東から)
左下 5トレンチ 第5面 地床炉41(東から) 右下 5トレンチ 第5面 地床炉42(西から)
下段 5トレンチ 第5面 地床炉46(東から)

図版13

上段 左上 5トレンチ 第5面 地床炉43(西から) 右上 5トレンチ 第5面 地床炉51(東から)
左下 5トレンチ 第6面 全景(南西から) 右下 5トレンチ 第6面 地床炉56(南から)
下段 5トレンチ 第6面 地床炉55(東から)

図版14 第2層出土遺物

図版15 第2層出土遺物

図版16 第3層出土遺物

図版17 第3層出土遺物

図版18 第3層出土遺物

図版19 第3層出土遺物

図版20 第3層出土遺物

図版21 第3層・第2面出土遺物

図版22 第2面出土遺物

図版23 第2面・第4層出土遺物

図版24 第4層出土遺物

図版25 第4層出土遺物

図版26 第4層出土遺物

図版27 第4層出土遺物

図版28 第4層出土遺物

図版29 第4層出土遺物

図版30 第4層出土遺物

図版31 第5層出土遺物

図版32 第5層・第5面遺構36・第6層出土遺物

図版33 その他出土遺物

図版34 脚台式製塩土器脚部接合痕・底部・見込み部

I 位置と環境

小島北磯遺跡は大阪府泉南郡岬町多奈川小島地内に所在する。当遺跡の地理的環境は、大阪府と和歌山県の府県境をはしる和泉山脈から派生した、海岸にまで迫る急峻な尾根に挟まれた独立した開析谷および海浜で、紀淡海峡に面する。海浜は広さ1,200 m²程の三日月状を呈し、海面との比高差は約2 mを測る。この海浜は地理学上、海浜堤および堤間低地に属する。現在は谷と海浜を分断する形で主要地方道岬・加太港線がはしる。

次に歴史的環境であるが、当遺跡が所在する岬町では旧石器時代の遺跡は明確ではない。縄紋時代には後期の集落が検出された淡輪遺跡がある。弥生時代にはいと淡輪遺跡で中期の竪穴住居や方形周溝墓や木棺墓が、後期にはみどりヶ丘遺跡や岬公園内遺跡が確認された。

古墳時代前期には明確な遺跡はみられないが、中期になると当遺跡の東約4 kmの地点に泉南地域最大の前方後円墳である宇度墓古墳（全長235 m）や西陵古墳（全長210 m）を筆頭に西小山古墳を含めた淡輪古墳群が築造される。後期には、主として段丘上に築かれた鴻ノ巣山古墳群、久保谷古墳群といった群集墳や、寺山古墳、白峠山古墳、真鍋山古墳などが築かれる。さらに、当遺跡の南西約300 mの地点には横穴式石室をもつ小島古墳がある。集落としては番川下流遺跡などがあげられ、竪穴住居や溝などが確認されたほか、須恵器、土師器とともに製塩土器や蛸壺などが出土した。

上記のほかに、当遺跡が所在する泉南地域から和歌山県北部にかけての沿岸部および島嶼には多くの製塩遺跡が点在することで知られる。その中でも特筆すべき遺跡として、小島北磯遺跡の北東約300 mの地点にある小島東遺跡があげられる。小島東遺跡は1977年に大阪府教育委員会が発掘調査を行い、弥生時代後期から奈良時代にかけての製塩炉をはじめとする遺構や多くの製塩土器を検出しており、土器製塩研究の指標となる遺跡といえる。山田海岸遺跡では古墳時代前期から中期に土器製塩が開始された。製塩炉は地面を掘り窪めただけの構造をもつ地床炉で、脚台Ⅱ～Ⅳ式の製塩土器を伴う。古墳時代後期には石敷製塩炉が出現し、丸底Ⅰ式の製塩土器が出土する。そして、山田海岸遺跡は奈良時代に土器製塩のピークを迎え、大形の礫を使用した石敷製塩炉とともに丸底Ⅲ式の製塩土器が多く出土した。阪南市に所在する田山遺跡は奈良時代の集落遺跡で、丸底Ⅲ式および壺形製塩土器などが多く出土したが、炉などの施設は検出されなかった。また、小島北磯遺跡が所在する岬町に隣接する和歌山県和歌山市においても、海岸線をはじめ紀淡海峡に浮かぶ友ヶ島や地ノ島といった島嶼に、弥生～奈良時代にかけて多くの製塩遺跡の存在が知られており、その中のいくつかを紹介する。和歌山市加太瀬戸に所在する深山遺跡は、その立地は小島北磯遺跡や小島東遺跡に似る。製塩炉と考えられる礫群や、脚台Ⅰ～Ⅳ式、丸底Ⅰ～Ⅱ式の製塩土器が出土する。さらに、知多・渥美半島で多く出土する棒状の底部をもつ製塩土器もみられる。和歌山市西庄、西脇に所在する西庄遺跡は、旧海岸線に近い砂堆の上に立地しており、古墳時代中期を中心とする50基以上の石敷製塩炉をもつ大規模な作業域と、竪穴住居、掘立柱建物などがある居住域とがわかる貴重な遺跡である。このように当遺跡の周辺では弥生時代末から奈良時代にかけて連綿と製塩遺跡が営まれていたことが看取できる。

1. 小島北段遺跡
2. 田山遺跡
3. 山田西遺跡
4. 山田海岸遺跡
5. 山田遺跡
6. 土浦藩邸遺跡
7. 医王寺跡
8. 土浦陣屋跡
9. 千間寺遺跡
10. 滝ノ原山古墳群
11. 淡輪遺跡
12. 宇上墓古墳
13. 淡輪跡跡
14. 西小山古墳
15. 番山下流遺跡
16. 西陵古墳
17. 神公園内遺跡
18. 久保谷古墳群
19. 久保谷中世墓群
20. 真鍋山古墳
21. 白崎山古墳
22. 寺山古墳
23. 幸山南古墳
24. 深田古墳群
25. 塚谷古墳
26. 金谷山古墳群
27. 深田跡跡
28. 深田遺跡
29. みどりヶ丘古墳群
30. みどりヶ丘遺跡
31. 細若館遺跡
32. 豊岡陣遺跡
33. 西光寺山古墳
34. 神加大塚北丘遺跡
35. 小島東遺跡
36. 小島古墳
37. 報恩講寺遺跡
38. 大川西方遺跡
39. 淡江遺跡
40. しょうぶ谷遺跡
41. 水谷遺跡
42. 男良の谷遺跡
43. 深山遺跡
44. 森崎北浜遺跡
45. 森崎南浜遺跡
46. 森崎西方遺跡
47. 神前西浜遺跡
48. 神前西浜遺跡
49. ハイブの浦遺跡
50. 大谷川遺跡
51. 加太川遺跡
52. 加太川遺跡
53. 平の谷遺跡
54. 田倉崎I遺跡
55. 田倉崎II遺跡
56. 船出遺跡
57. 船出遺跡
58. 西庄遺跡
59. 大谷古墳

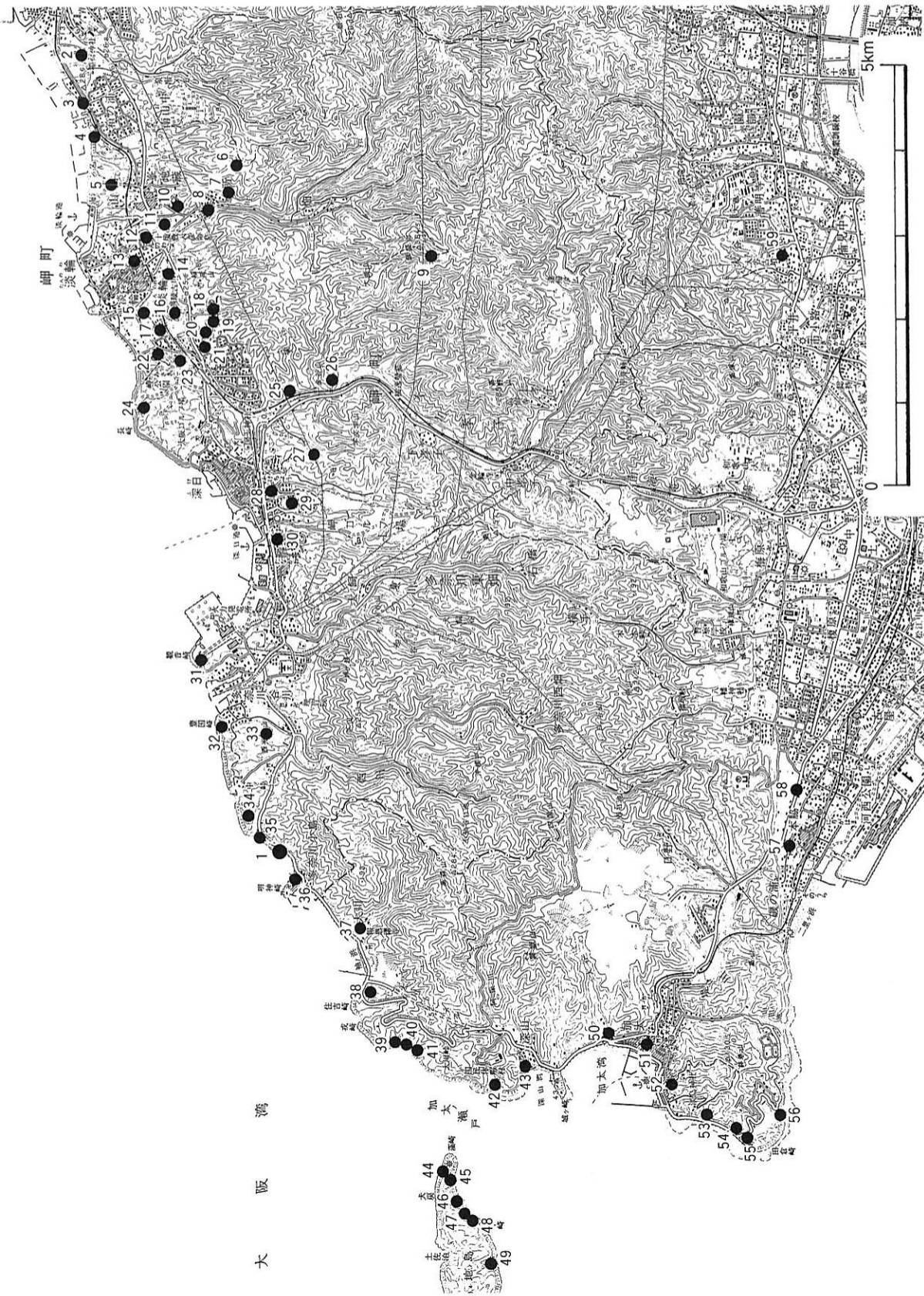


図1 周辺遺跡分布図

Ⅱ 調査に至る経緯と経過

平成8年12月、大阪府土地開発公社は、関西国際空港第2期工事に伴う埋め立て用土砂の採取についての計画を発表した。事業は岬町東畑地区内128haにおいて採取した土砂を、小島集落北東0.5kmの海岸までトンネル等を通して搬送し、海岸のストックヤードを経て積み出し栈橋から土砂運搬船に積み込むというものであった。大阪府土地開発公社は、平成9年2月当該工事区域における文化財の有無とその取り扱いについて、大阪府教育委員会文化財保護課に協議を行った。その結果、工事区域についてはまず、分布調査を行ったうえ、工事着手時に試掘調査を実施することで合意し、平成9年3月に文化財保護課によって分布調査が実施された。また、栈橋部分の海域の海底調査（磁気探査）が平成9年11月に実施された。

分布調査においては、海岸部で製塩関連遺物の分布が認められたほか、犬飼池の堤についての調査の必要性が確認された。なお、土取り用地には山城等の遺跡や遺物の分布は確認されなかった。

以上の経過を経て、平成11年5月、文化財保護課によって海岸部とそれに続く谷部分において、試掘調査が実施された。試掘調査においては、海岸に最も近い調査区で奈良時代から弥生時代の遺物、とりわけ多量の製塩土器が出土し、石敷きの製塩炉も検出された。そのほか数カ所の調査区で中世の遺物が出土した。

この試掘調査結果をうけて、文化財保護課は土地開発公社に対し、海岸部分の発掘調査と周辺部分の再試掘調査が必要であることを回答した。また、大阪府土地開発公社から文化庁長官あてに文化財保護法に基づく遺跡発見通知が提出されて、「小島北磯遺跡」として周知されることとなった。

文化財保護課と土地開発公社との協議により、発掘調査は財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施する事となり、平成11年7月1日付けで委託契約を締結したのち、7月28日から現地発掘調査に着手し、同年11月19日に現地発掘調査を完了した。その後、引き続き遺物整理・報告書作成作業を行い、平成12年8月に整理事業を完了した。



図2 トレンチ配置図

Ⅲ 調査の方法

今回の調査は、大阪府教育委員会の試掘調査によって製塩炉が確認された海浜部については全面調査を行うこととなり、防波堤と主要地方道岬・加太線に挟まれた部分の工事のおよぶ範囲である海浜の北側3/4を調査区（5トレンチ）として設定した。海浜部の南側については谷から海に注ぐ小河川があることや、工事範囲外であることなどから調査区から除外した。

遺物の取り上げについては国土座標に則って地区割りを設定してこれを行った。測量については全体図についてはヘリコプターによる航空測量を行い、各遺構や遺物出土状況については国土座標を基線とした平面図および平板測量でこれを行った。

谷部および丘陵部については、先の大阪府教育委員会の試掘調査の結果から谷部に陶磁器、瓦、須恵器、土師器などの遺物が散見できたことや、丘陵部に人工的に造られたテラスがみられること、さらに遺跡の範囲確認を行うため、開発による破壊を受ける箇所を中心に試掘調査を行い、その結果如何によっては本調査を行うという方針で谷部に5か所、丘陵部については6か所の調査区（1～4、6～12トレンチ）を設定した（図2）。

遺物の取り上げについては、調査区の設定が地形に則したものであることなどを理由に各トレンチごとにこれを行った。測量については、国土座標を基線とした平面図と平板測量によって行った。

なお、全景の写真撮影については、本調査部は高所作業車を使用してこれを行い、試掘調査部は地上からの撮影を行った。

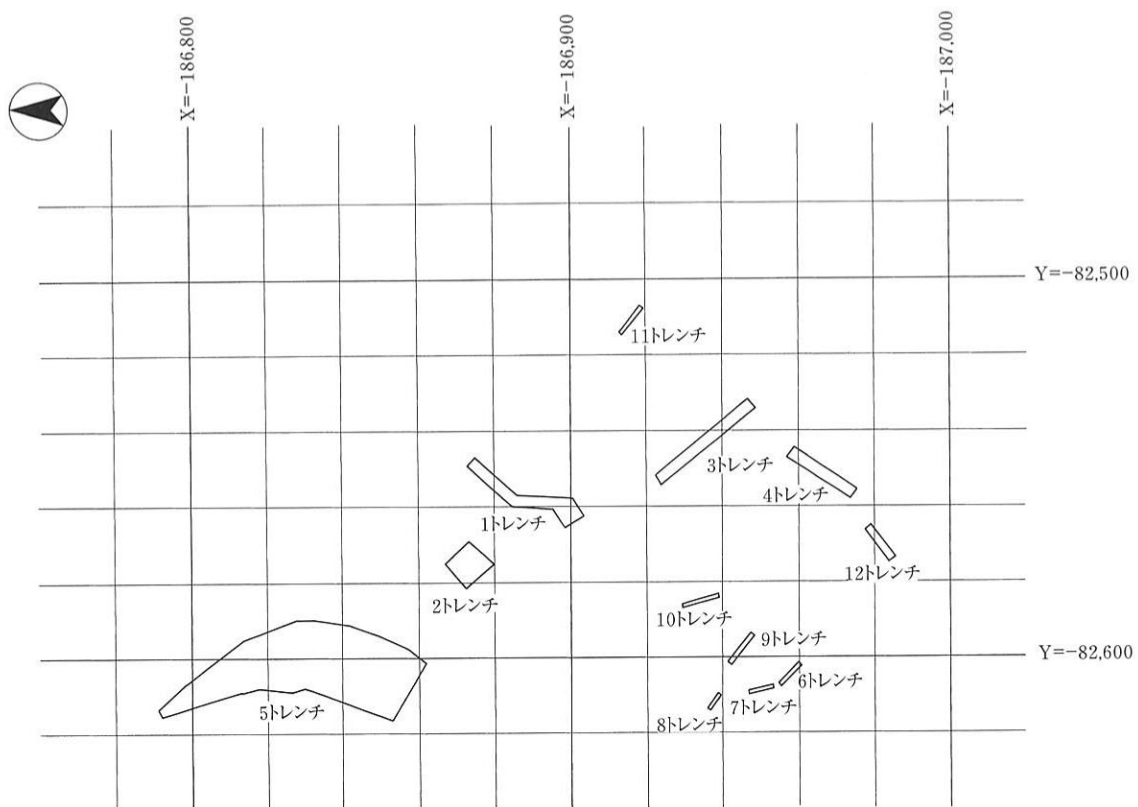


図3 トレンチ位置図

IV 調査成果

1. 試掘調査部（1～4，6～12 トレンチ）

試掘は南東－北西方向に延びる谷部とその両側に迫る尾根部に11箇所を行った。

1 トレンチ（図4・5）

当トレンチは工事用の導水路および沈砂池設置部分に谷を横断する形で、導水路部分は幅3m、沈砂池部分は6×6mの規模でトレンチを設定した。基本層序は、谷に堆積した角礫混じりシルト層をベースに、約0.2～0.4mの厚さの堆積層がみられる。その上層に厚さ約0.2～0.4mの旧耕作土層、さらに約0.5～0.9mの盛土を行ってから、現代の耕作土層が形成される。

まず、現耕作土層、盛土層、旧耕作土層の順に重機で除去して第1面を検出した。当該面は概ね水平であるが、トレンチの北辺部では北東隅に向かって下がる。溝、犁溝などを検出した。これらの遺構はすべて北東・南西方向に軸をもつ。犁溝の中から須恵器、土師器、瓦器、青磁などの小片が出土したが、図示できるものはない。なお、当該面の標高は6.4～6.7mを測る。第2面は地山面で、第1面のベース層を除去して検出したが、無遺構、無遺物であった。当該面の標高は6.0～6.5mを測る。

2 トレンチ（図6）

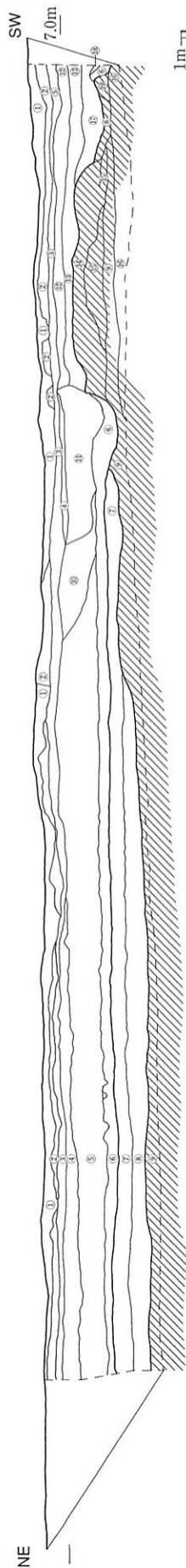
谷入口付近に9×9mのトレンチを設定した。厚さ1.3～2.1mの現代盛土および旧耕作土層を重機で掘削し、その後、人力で包含層を除去して地山面を検出したが、遺構は認められなかった。遺物は古墳時代の土師器高杯脚部が1点出土したのみである。地山面の標高は4.6～4.8mである。

3 トレンチ（図7・8）

中央部に3×30mのトレンチを設定した。谷奥から入口方向にかけて2つの段を有するが、これは水田を形成するために盛土を行ったためである。遺構面は2面検出した。第1面は地表面より0.4～1.3m下げて検出した。標高は9.1m～11.1mである。検出された遺構は耕作に伴う溝を5条と、径約3m、深さ約0.2mの土坑1基（遺構6）である。溝および土坑内より瓦器・土師器の小片が数点出土したが、図示できるものはない。第2面は第1面の耕作土層を除去して検出した地山面である。第1面と比べると段差は少なくなり、ゆるやかな傾斜をもつ。標高は8.8～10.8mを測る。検出された遺構は耕作に伴う溝3条（遺構7・8・10）、径約3m、深さ約0.2mの土坑1基（遺構9）、それに幅約5.5m、深さ約0.4mの溝（遺構11）である。土坑からは瓦器碗の小片1点が出土したのみである。

4 トレンチ（図9・10）

4 トレンチは幹線の谷から派生する南西方向に延びる支線の小さな谷部に3×20mの規模で設定した。この谷も水田を営むため、石垣を築いて段をつくる。第1面は旧耕作土層および盛土層を除去して検出した。トレンチの南半部は地山を検出し、北半部のみ堆積層が認められる。検出した遺構は谷の上部で落ち1基（遺構1）、谷の下部で土坑2基（遺構2・3）である。遺構2は楕円形の土坑で、長径1.0m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。遺構3は遺構2の北東に位置する土坑で、径0.4m、深さ0.2mを測る。いずれの遺構からも遺物の出土はない。標高は12.8m～17.6mを測る。第2面は北半部の堆積層を除去して検出して検出したが、幹線の谷に向かって急傾斜をなしており、遺構、遺物は認められなかった。標高は12.3～17.6mを測る。なお、包含層中より、瓦質土器、瓦器、土師器、青磁の小片が少量出土したが、図示できるものはない。



- ① 7.5YR 3/1 黒褐色中砂混シルト(田耕土)
- ② 2.5Y 5/1 黄灰色中細砂混シルト(床土)
- ③ 5YR 5/6 明赤褐色細砂混シルト
- ④ 2.5Y 6/2 明黄褐色シルトブロック層
- ⑤ 2.5Y 6/2 灰黄褐色シルトブロック層
- ⑥ 2.5Y 6/0 灰黄褐色シルト(灰田耕土)
- ⑦ 2.5Y 6/0 黄褐色細砂混シルト
- ⑧ 5Y 6/1 黄褐色細砂混シルト
- ⑨ 5Y 6/0 灰黄-10YR4/1黄灰色シルト(粘性强)
- ⑩ 5Y 6/1 灰褐色中砂混シルト
- ⑪ 5Y 6/1 灰褐色中砂混シルト(5~10cm大の角礫層)
- ⑫ 10YR 6/1 灰白色細砂混シルト(粘性强)
- ⑬ 5Y 6/1 灰白色細砂混シルト(粘性强)
- ⑭ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)
- ⑮ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)
- ⑯ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)
- ⑰ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)
- ⑱ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)
- ⑲ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)
- ⑳ 5Y 6/0 灰白色シルト(粘性强)

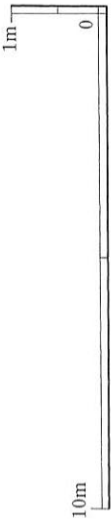


図4 1トレンチ 東辺断面図

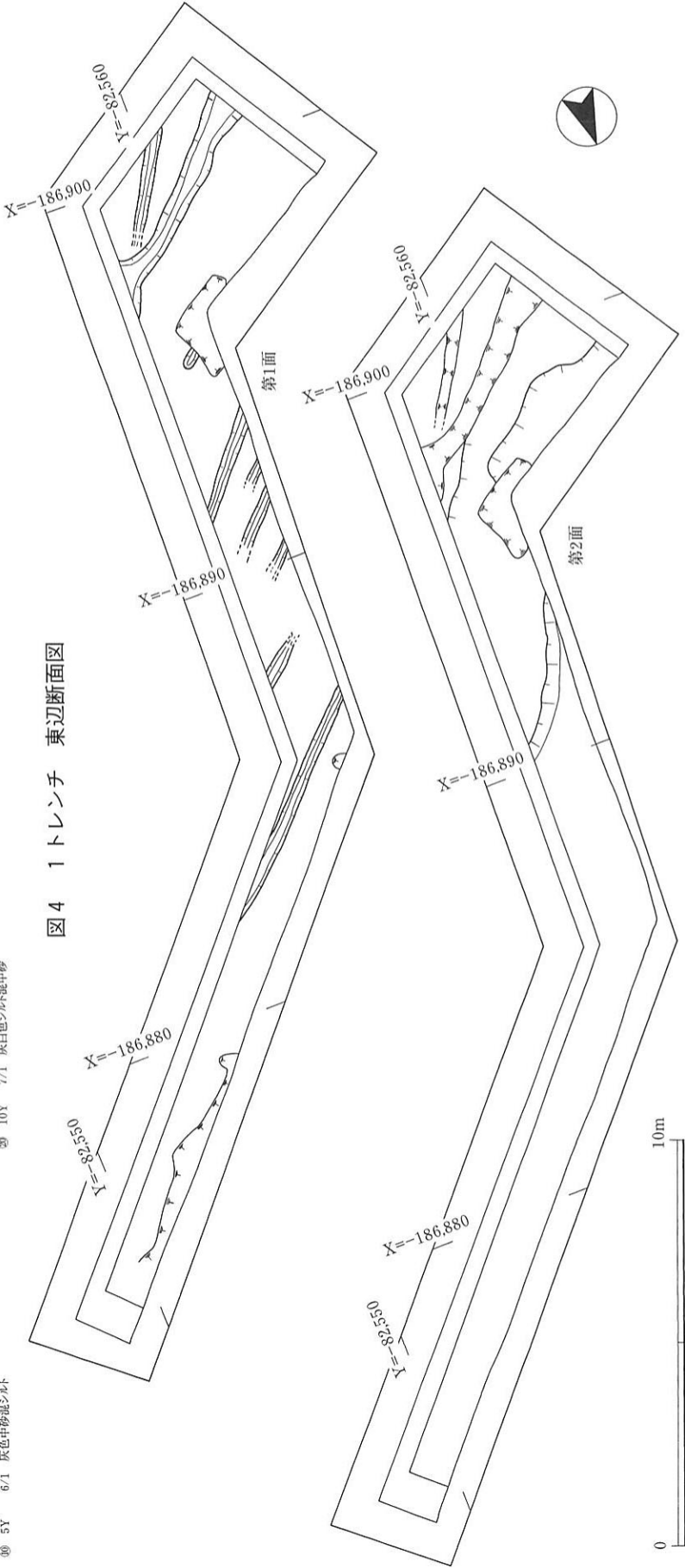


図5 1トレンチ 遺構平面図

6～8トレンチ

6～8トレンチは谷の南に延びる尾根上に設定した。規模は6トレンチは2×8m、7トレンチは2×7m、8トレンチは2×5mである。人力で表土層を除去した直下で地山面を検出した。いずれのトレンチも無遺構、無遺物であった。標高は6トレンチは41.3～42.1m、7トレンチは39.6～41.1m、8トレンチは37.7～38.0mを測る。

9・10トレンチ (図11・12)

9トレンチは山の斜面につくられた小段部分に1×10mの規模で設定した。表土を除去すると厚さ約0.4mの地山ブロックを含む堆積層が認められたが、自然堆積層と考えられ、堆積層の上面および地山面でも遺構は確認できなかった。また、遺物も出土しなかった。標高は33.3～34.2mを測る。

10トレンチも山の斜面につくられた小段部分に1×10mの規模で設定した。表土を除去すると0.5mの盛土層が堆積する。これは小段を形成するために斜面を削って盛土を行ったものと考えられる。盛土層の下に0.3mの旧表土層が堆積する。旧表土層の直下で地山面を検出したが、無遺構、無遺物であった。標高は24.7～25.7mを測る。

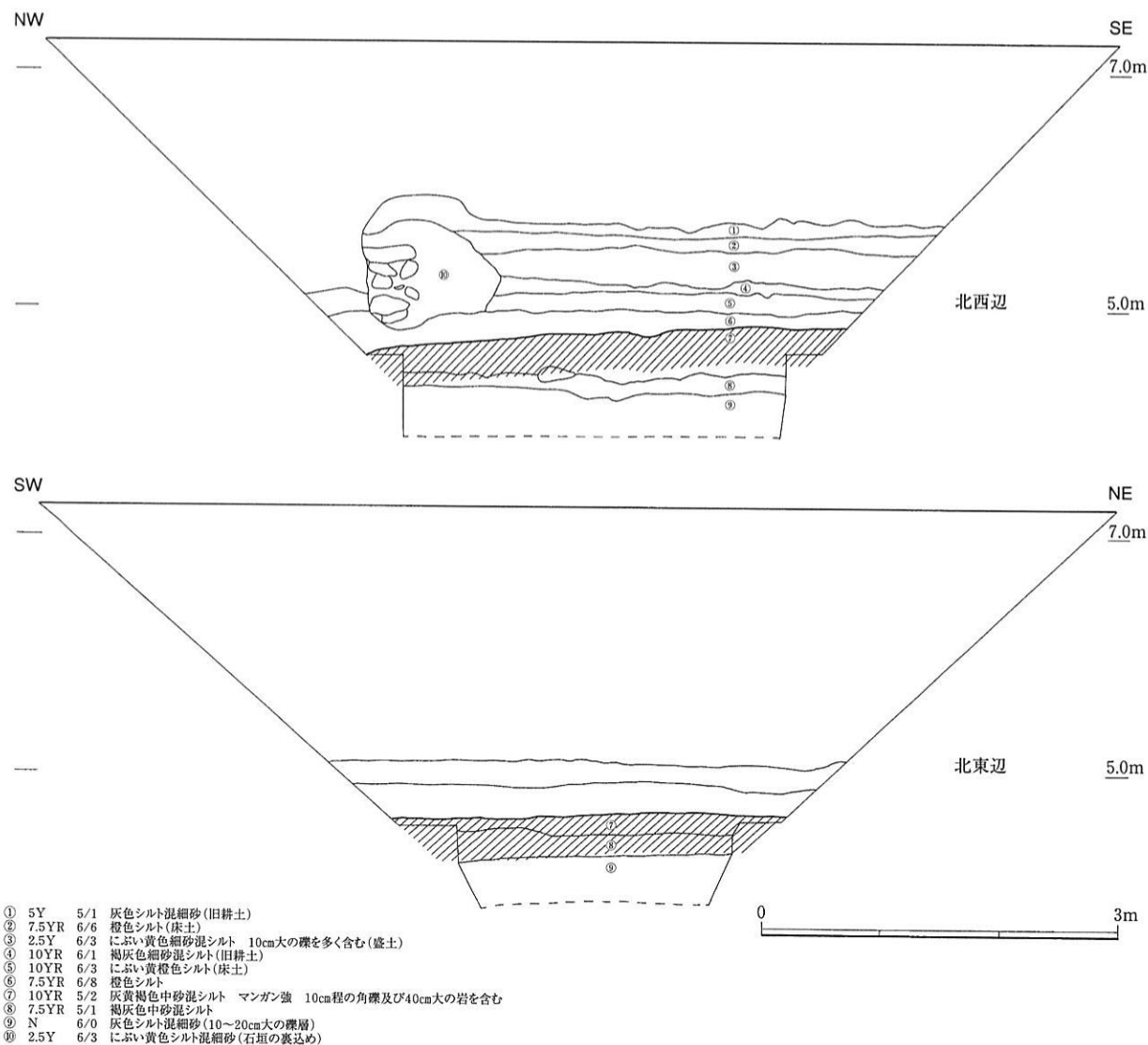
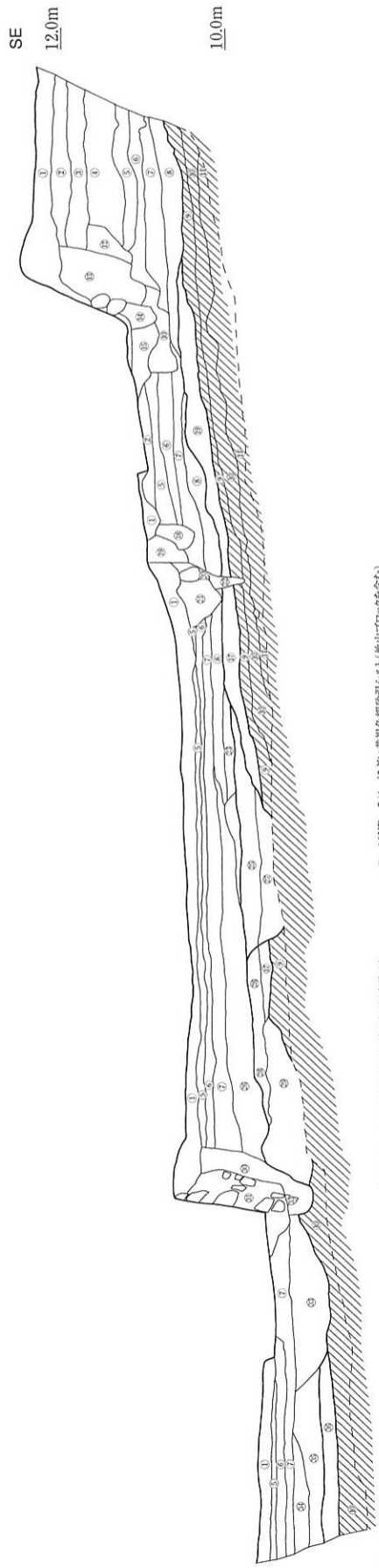


図6 2トレンチ 北西辺・北東辺断面図



- ① 表土
- ② 5YR 6/6 褐色砂質土 鉄分含量多い
- ③ 10YR 6/6 褐色細砂 鉄分含量多い
- ④ 2.5Y 6/1 黄灰色細砂 鉄分含量多い
- ⑤ 2.5Y 5/1 黄灰色砂質土 鉄分含量多い
- ⑥ 10YR 6/1 黄灰色砂質土 鉄分含量多い
- ⑦ 10YR 6/1 黄灰色砂質土 鉄分含量多い
- ⑧ 2.5Y 6/1 黄灰色砂質土 鉄分含量多い
- ⑨ 10YR 6/6 褐色砂質土
- ⑩ 10B6 5/1 黄灰色粘質土
- ⑪ 2.5Y 6/2 黄灰色粘質土
- ⑫ 2.5Y 6/2 黄灰色粘質土
- ⑬ 6/6 褐色砂質土
- ⑭ 5Y 5/1 黄灰色砂質土
- ⑮ 10YR 6/8 褐色細砂
- ⑯ 10YR 6/8 褐色細砂
- ⑰ 10YR 6/8 褐色細砂
- ⑱ 7.5YR 6/1 黄灰色砂質土
- ⑲ 2.5Y 6/1 黄灰色砂質土
- ⑳ 7.5Y 4/1 黄灰色砂質土
- ㉑ N 4/1 黄灰色砂質土
- ㉒ 10YR 5/1 黄灰色粘質土
- ㉓ 7.5YR 5/4 黄灰色粘質土
- ㉔ 5/2 黄灰色粘質土
- ㉕ 5/3 黄灰色粘質土
- ㉖ 5Y 5/1 黄灰色粘質土
- ㉗ 10YR 6/1 黄灰色粘質土
- ㉘ 7.5YR 6/1 黄灰色粘質土
- ㉙ 2.5Y 6/1 黄灰色粘質土
- ㉚ 2.5Y 4/3 黄灰色粘質土
- ㉛ 2.5Y 7/8 黄灰色粘質土
- ㉜ 5Y 6/1 黄灰色粘質土
- ㉝ 7.5YR 6/6 褐色粘質土
- ㉞ 10YR 6/4 黄灰色粘質土
- ㉟ 7.5YR 5/4 黄灰色粘質土
- ㊱ 5/4 黄灰色粘質土
- ㊲ 10YR 6/4 黄灰色粘質土
- ㊳ 10YR 6/8 褐色粘質土
- ㊴ 10YR 5/3 黄灰色粘質土
- ㊵ 2.5Y 4/3 黄灰色粘質土
- ㊶ 2.5Y 7/8 黄灰色粘質土
- ㊷ 5Y 6/1 黄灰色粘質土
- ㊸ 7.5YR 6/6 褐色粘質土
- ㊹ 10YR 6/4 黄灰色粘質土
- ㊺ 7.5YR 5/4 黄灰色粘質土

図7 3トレンチ 北東辺断面図

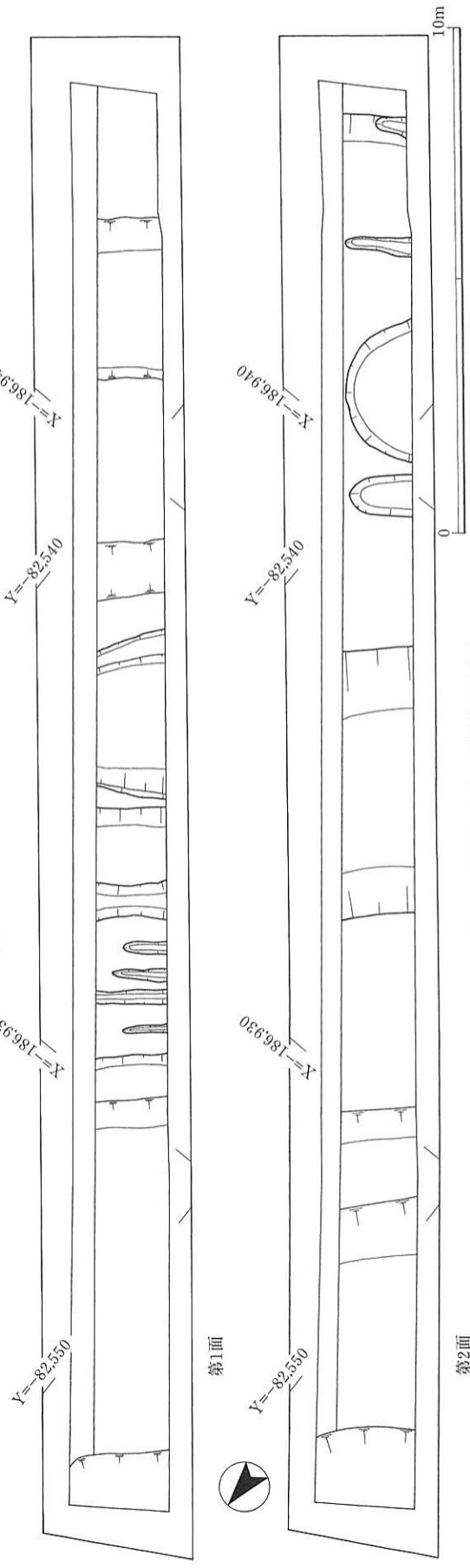


図8 3トレンチ 遺構平面図

9, 10 トレンチを設定した小段部分には直径 20 cm くらいの樺の木が植えられており、里山として利用するために山の斜面を切り開いて小段を築いたものと考えられる。

11 トレンチ

谷の北斜面の尾根部に 1 × 9 m のトレンチを設定した。表土層を除去してすぐに地山面を検出したが、無遺構、無遺物であった。標高は 17.2 ~ 21.2 m を測る。

12 トレンチ (図 13)

4 トレンチのさらに谷奥部に 2 × 11 m のトレンチを設定した。旧耕作土層を築くために盛土を行って段をつくる状況が看取できた。盛土層を除去して地山面を検出したが、無遺構、無遺物であった。標高は 22.2 ~ 24.6 m を測る。

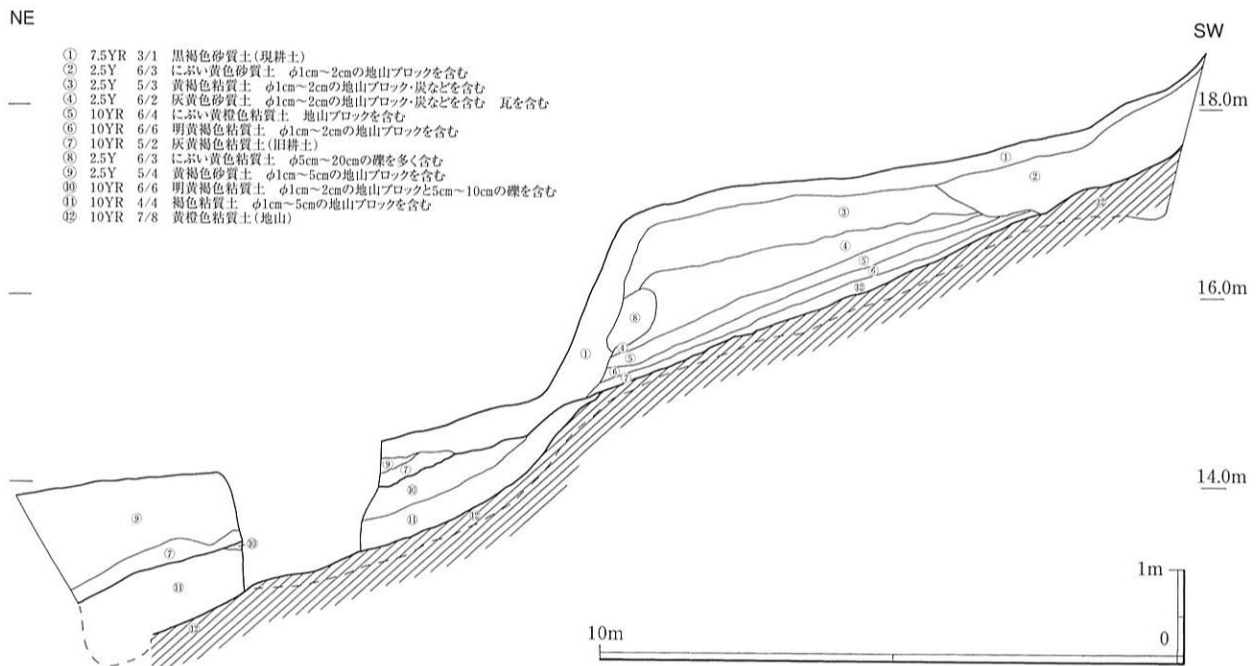


図 9 4 トレンチ 南東辺断面図

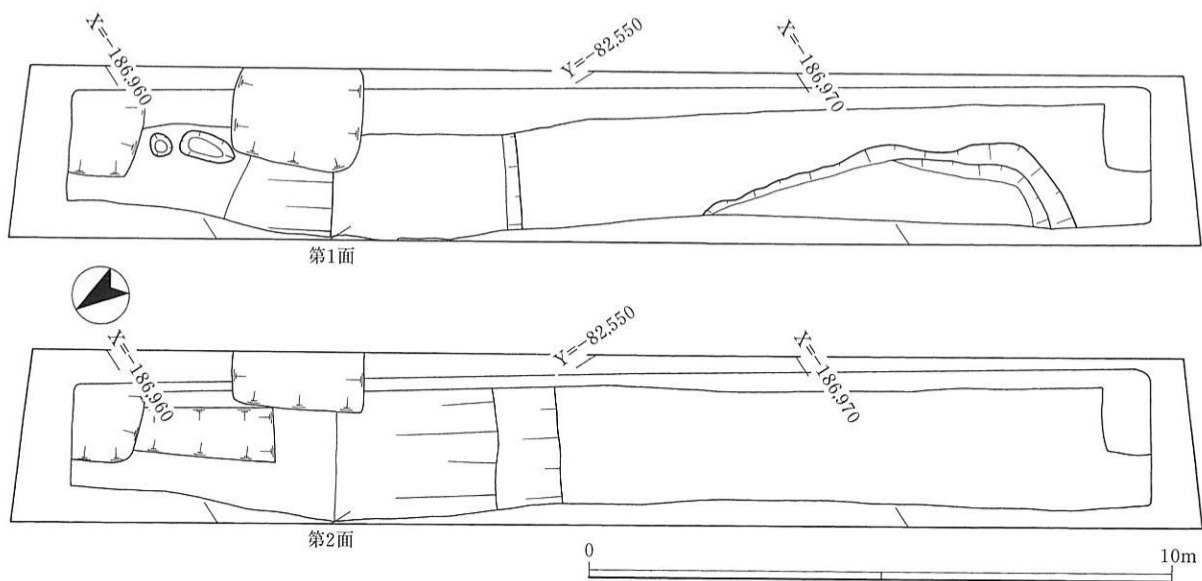


図 10 4 トレンチ 遺構平面図

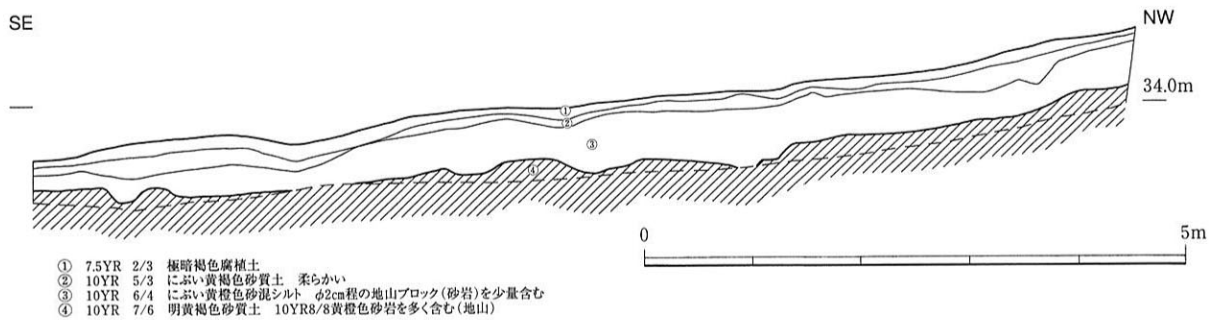


図 11 9 トレンチ 南西辺断面図

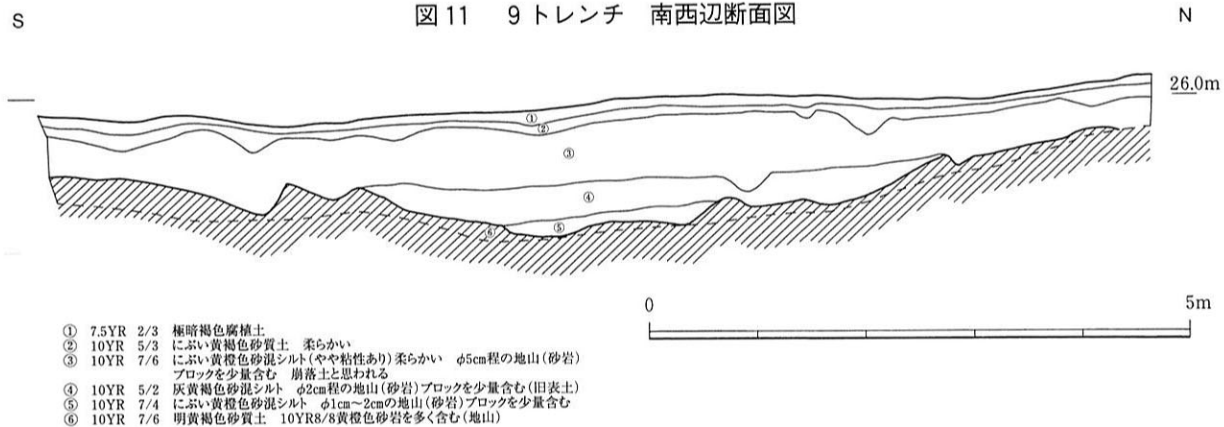


図 12 10 トレンチ 西辺断面図

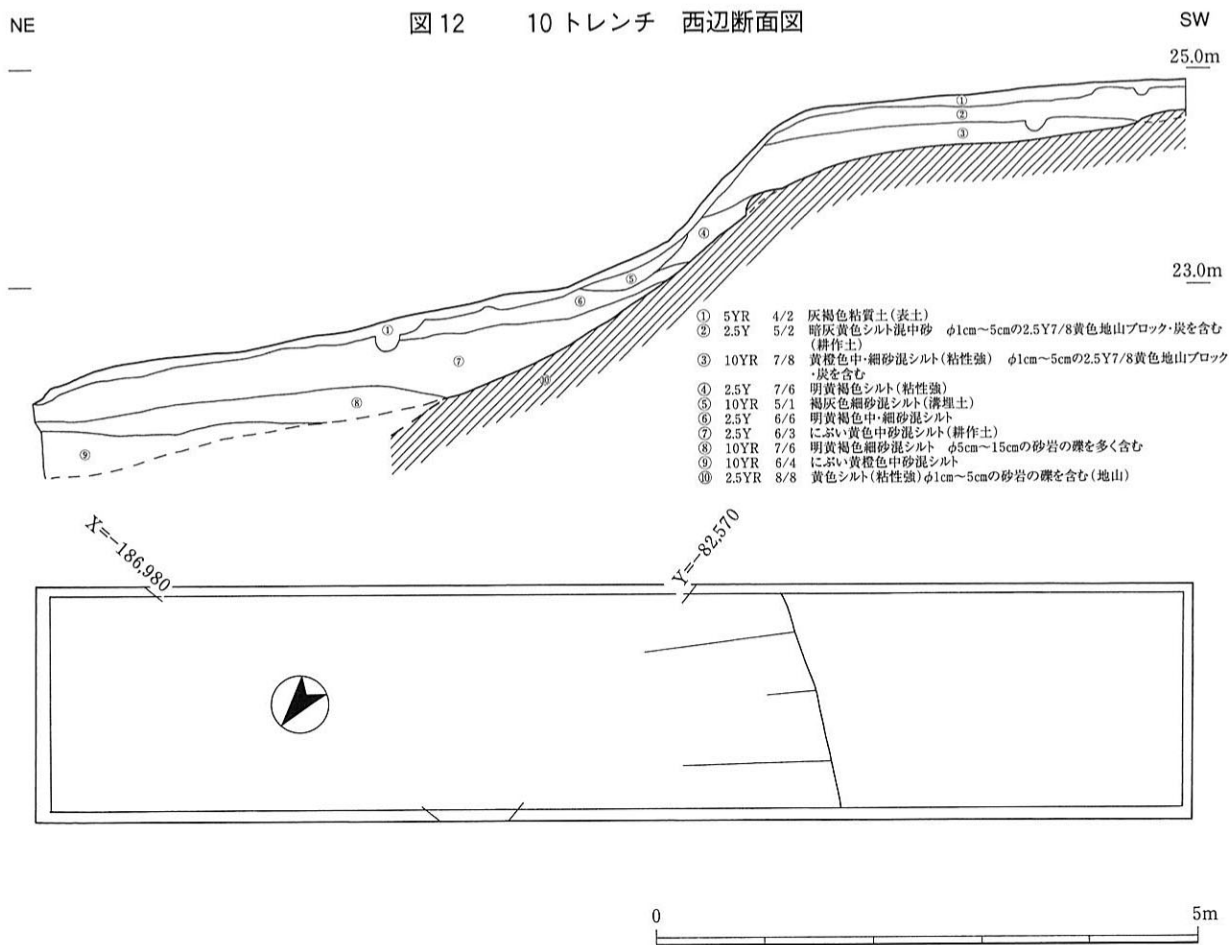
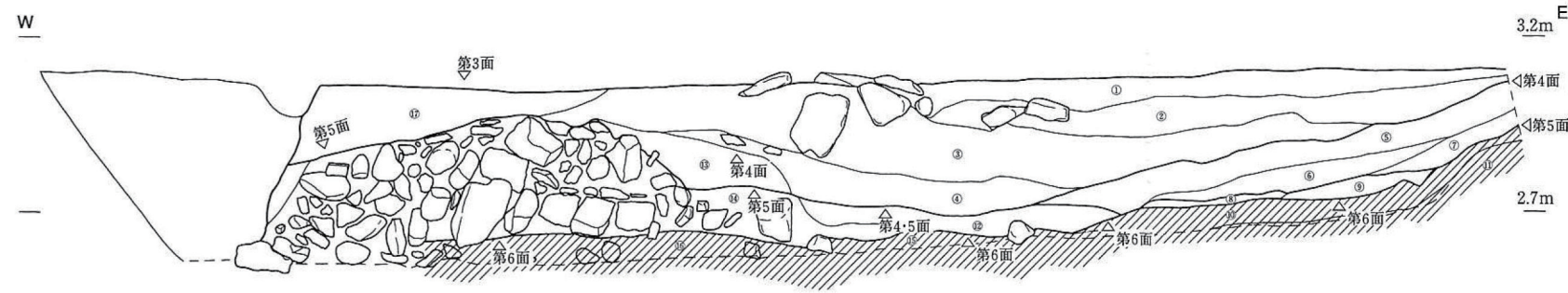
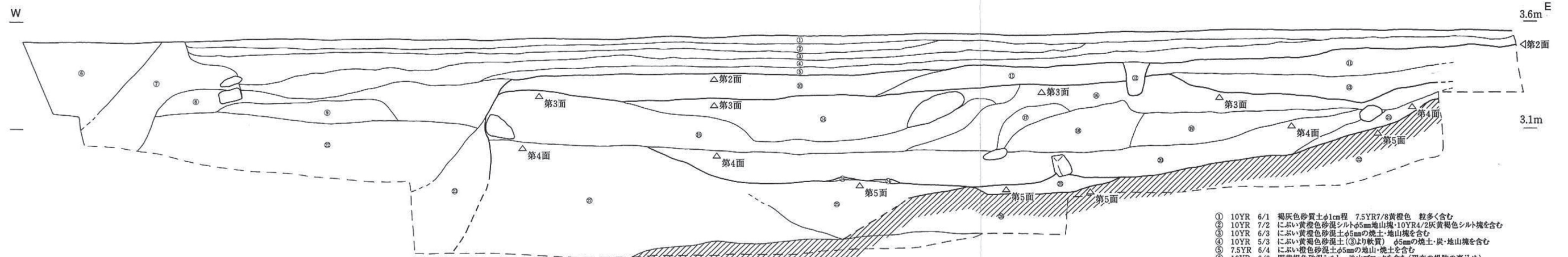


図 13 12 トレンチ 南東辺断面図・遺構平面図



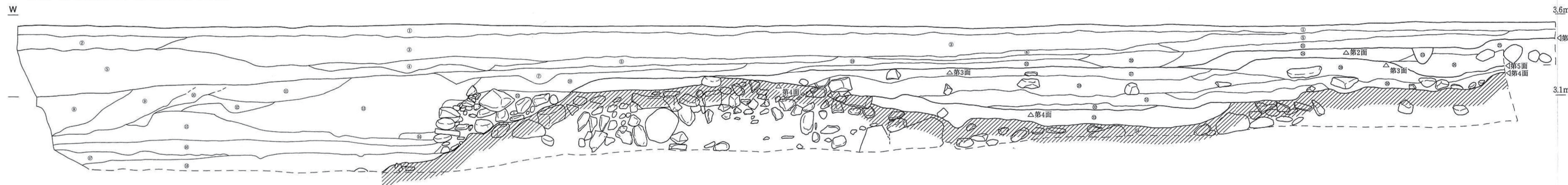
- ① 10YR 4/2 灰黄褐色~3/1黒褐色シルト 細砂若干あり 小~中礫あり 土器片若干あり
- ② 10YR 3/2 黒褐色~3/1黒褐色シルト~粘土 細砂若干あり 中~小礫あり 大礫若干あり 角礫や多し 土器片あり
- ③ 10YR 2/1 黒色シルト~粘土 小礫~土器片非常に多し 炭化物若干あり 中~大礫若干あり
- ④ 10YR 3/1 黒褐色粘土~シルト 小礫若干あり 中~大礫わずかにあり 円礫多し 炭化物若干あり 土器片若干あり
- ⑤ 2.5Y 3/1 黒褐色シルト~粘土 小~中礫若干あり 小は角礫 中は西に多く円礫多し 炭化物わずかにあり 斜面堆積
- ⑥ 2.5Y 4/1 黄灰色~3/1黒褐色シルト 細砂含む 小礫若干あり 中礫わずかにあり 角礫多し 炭化物わずかにあり 斜面堆積
- ⑦ 2.5Y 4/1 黄灰色シルト~細砂 2.5Y6/3に近い黄灰色シルト 小礫(角礫のみ)のブロック 角礫土
- ⑧ 2.5YR 4/6 赤褐色~2.5Y6/3に近い黄褐色シルト~細砂 小礫(角礫)若干あり基本的にブロック土塊の可能性がある
- ⑨ 2.5Y 4/1 黄灰色~2.5Y6/3に近い黄褐色シルト~細砂 小~中礫あり(角礫のみ) 炭化物わずかにあり
- ⑩ 2.5Y 7/4 淡黄褐色~2.5Y6/3に近い黄褐色シルトのブロック 炭化物~中~小礫あり 角礫土
- ⑪ はは砂におなじししかしブロック間の間隙少なくする 基本的には崩落土
- ⑫ 10YR 3/1 黒褐色シルト 細砂若干あり 小礫若干あり 中礫わずかにあり 至角礫多し 炭化物若干あり
- ⑬ サザエの貝から 中~小礫若干あり
- ⑭ 巨~大礫 至円~円礫 間隙の土は10YR3/1黒褐色シルト 貝から土器片は上からの落ち込み
- ⑮ 2.5Y 3/2 黒褐色シルト~細砂 小~中礫多し 角~至角礫多し
- ⑯ 7.5YR 3/1 黒褐色細砂シルト 巨~中礫多し 円礫
- ⑰ 2.5Y 3/1 黒褐色細砂シルト 小~中礫若干あり(円礫多し)土器片わずかにあり
- ⑱ 2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂シルト 中砂~粗砂わずかにあり 中~小礫あり

図14 5トレンチ 北辺断面図



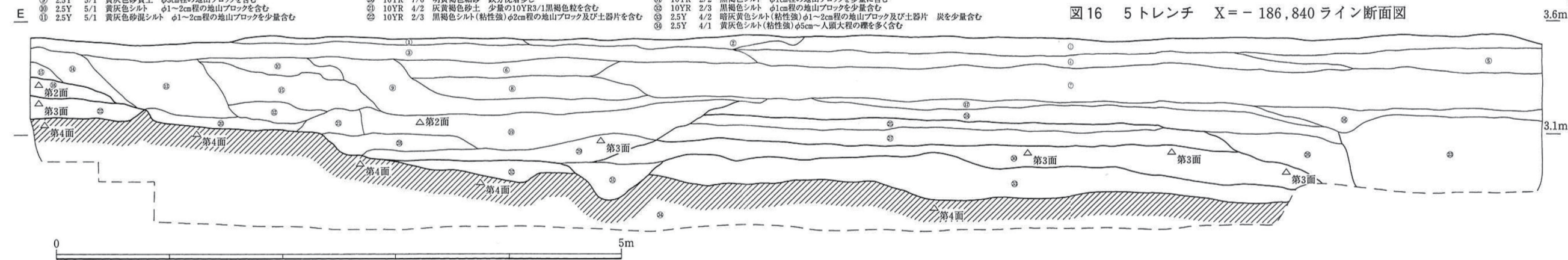
- ① 10YR 6/1 褐灰色砂質土φ1cm程 7.5YR7/8黄褐色 粒多く含む
- ② 10YR 7/2 近い黄褐色砂質土φ5mm地山塊~10YR4/2灰黄褐色シルト塊を含む
- ③ 10YR 6/3 近い黄褐色砂質土φ5mmの塊~地山塊を含む
- ④ 10YR 5/3 近い黄褐色砂質土(2.5Y6/3) φ5mmの塊~地山塊を含む
- ⑤ 7.5YR 6/4 近い黄褐色砂質土φ5mmの塊~地山塊を含む
- ⑥ 10YR 6/6 明黄褐色砂質シルト 地山ブロックを含む(現在の場所の裏返し)
- ⑦ 10YR 5/2 暗黄褐色砂質シルト 10~30cmの塊を含む(旧埋蔵)
- ⑧ 2.5Y 4/1 黄灰色砂質シルト φ3cmの塊を多量に含む(旧埋蔵)
- ⑨ 10YR 5/4 近い黄褐色砂質シルト 地山ブロックを多量に含む(旧埋蔵)
- ⑩ 10YR 2/3 暗褐色細砂シルトφ1cmの地山塊~土器片~炭を含む
- ⑪ 10YR 3/3 暗褐色細砂シルトφ1cm~3cmの地山塊を多量に含む(行く程多量に含み大きくなる)
- ⑫ 10YR 2/3 暗褐色シルト φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑬ 10YR 5/3 近い黄褐色砂質シルト φ2~5cm程の地山塊を多量に含む
- ⑭ 10YR 4/2 灰黄褐色シルト φ1cm程の地山ブロックを含む 西側の方は10YR2/1黒褐色シルトにφ1cm程の地山ブロックに土器片を多量に含む
- ⑮ 10YR 3/1 黒褐色シルト(粘性强) 土器片を多量に含む(北でかなり表らぬ)
- ⑯ 10YR 4/2 灰黄褐色シルト φ1~3cm程の地山ブロックを少量含む 土器片~炭も少量含む
- ⑰ 10YR 3/1 黒褐色シルト φ1cm程の地山ブロックを多く含む 土器片~炭を少量含む
- ⑱ 10YR 6/4 近い黄褐色砂質シルト φ1cm程の地山ブロックの塊 炭土を含む
- ⑲ 10YR 4/2 灰黄褐色シルト φ5~10cm程の地山塊を多く含む
- ⑳ 10YR 3/1 黒褐色シルト(粘性强) φ2~3cm程の地山ブロック少量の炭土を含む
- ㉑ 10YR 4/3 近い黄褐色シルト φ2~3cm程の地山ブロック 炭土を少量含む
- ㉒ 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト φ20cm程の塊を多量に含む
- ㉓ 10YR 4/3 近い黄褐色砂質シルト φ1cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉔ 10R 5/6 赤色シルト 炭土塊
- ㉕ 10YR 3/2 黒褐色細砂 炭を含む
- ㉖ 10YR 5/4 近い黄褐色シルト(粘性强) φ3~5cm程の地山塊を含む 極少量の炭を含む
- ㉗ 2.5Y 3/2 黒褐色シルト(粘性强) φ10~20cm程の塊を多く含む

図15 5トレンチ X=-186,820 ライン断面図



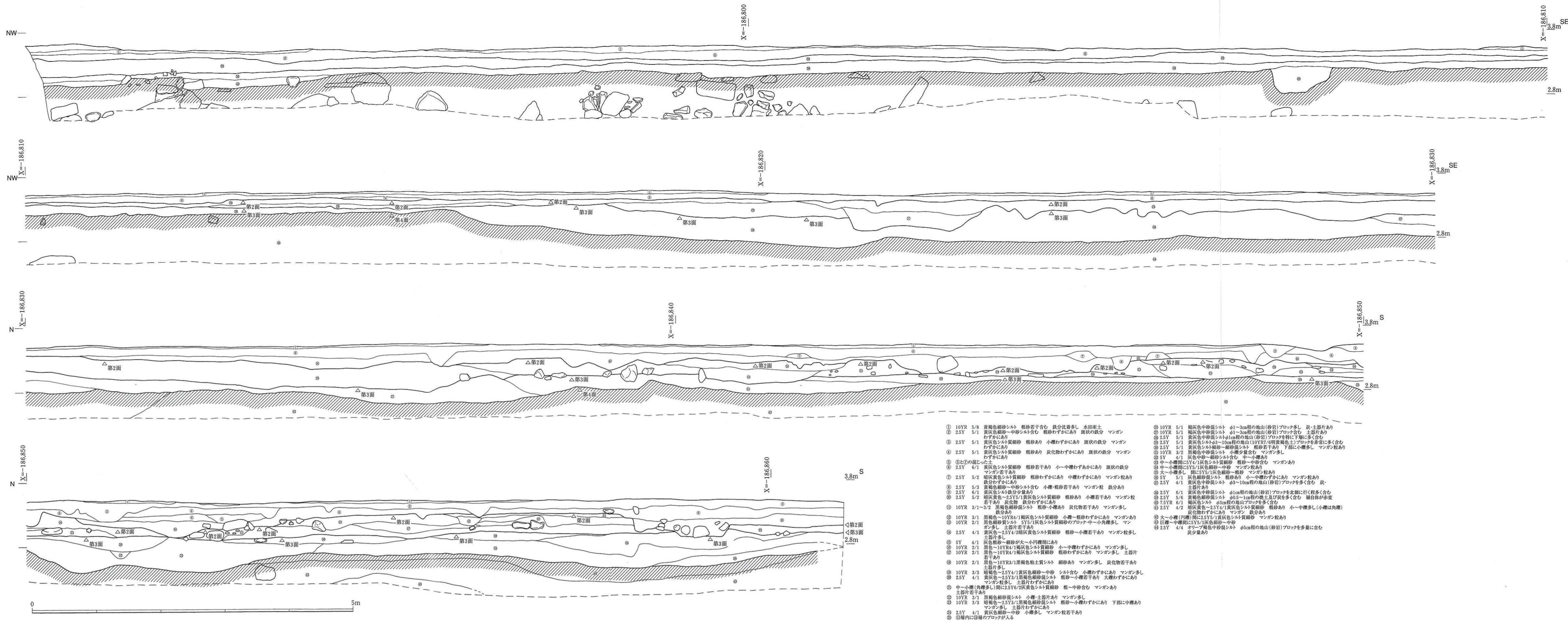
- ① 10YR 6/1 褐灰色砂質土 φ1cm程の 7.5YR7/8黄褐色 粒多く含む
- ② 10YR 7/1 灰白色細砂
- ③ 10YR 7/1 灰白色砂質シルトを主体としφ5~10cm程の塊や10YR3/1黒褐色土を含む
- ④ 10YR 7/2 近い黄褐色砂質シルト 10YR7/6明黄褐色土を少量含む
- ⑤ 10YR 7/2 近い黄褐色砂質シルト
- ⑥ 10YR 7/6 明黄褐色土(地山を埋めした土)
- ⑦ 10YR 6/4 近い黄褐色砂質土
- ⑧ 10YR 5/1 褐灰色砂質土 φ3cm程の地山ブロックの小石をやや多く含む
- ⑨ 2.5Y 5/1 黄灰色砂質土 φ3cm程の地山ブロックを含む
- ⑩ 2.5Y 5/1 黄灰色シルト φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑪ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑫ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑬ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑭ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑮ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑯ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑰ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑱ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑲ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ⑳ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉑ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉒ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉓ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉔ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉕ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉖ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉗ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉘ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉙ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉚ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉛ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉜ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉝ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉞ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㉟ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊱ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊲ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊳ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊴ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊵ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊶ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊷ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊸ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊹ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊺ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊻ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊼ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊽ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊾ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む
- ㊿ 10YR 4/2 灰黄褐色土 φ1~2cm程の地山ブロックを少量含む

図16 5トレンチ X=-186,840 ライン断面図



- ① 10YR 5/8 暗褐色細砂シルト 粗砂若干含む 鉄分沈着多し(木田床土)
- ② 10YR 5/1 褐灰色中砂~細砂シルト 鉄分沈着少量あり(線作土)
- ③ 2.5Y 5/1 灰白色中砂質シルト 粗砂あり 炭化物わずかにあり 斑状の鉄分・マンガンを多く含む
- ④ 7.5YR 6/1 褐灰色中砂~粗砂シルト マンガン沈着多し 鉄分沈着あり
- ⑤ 2.5Y 6/1 灰白色中砂質シルト 鉄分・マンガンを沈着あり
- ⑥ 10YR 6/1 暗褐色細砂シルト 鉄分・マンガンを沈着あり φ1cm程の地山ブロック少量含む
- ⑦ 2.5Y 6/1 灰白色中砂質シルト 鉄分・マンガンを沈着あり φ3cm程の地山ブロック少量含む
- ⑧ 10YR 7/4 暗褐色シルトを主体としφ3cm程の地山ブロック 7.5YR4/2灰黄褐色シルトブロックを含む
- ⑨ 2.5Y 7/1 灰白色中砂質シルト 鉄分沈着多し
- ⑩ 2.5Y 5/1 灰白色中砂質シルト 鉄分・マンガンを沈着多し φ1cm程の地山ブロック少量含む
- ⑪ 2.5Y 6/1 灰白色中砂質シルト 鉄分沈着多し
- ⑫ 2.5Y 6/1 灰白色中砂質シルト 鉄分・マンガンを沈着あり φ1cm程の地山ブロック少量含む
- ⑬ 10YR 5/1 暗褐色細砂シルト 鉄分あり φ1cm~3cm程の地山ブロックを含む
- ⑭ 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト質細砂 粗砂わずかにあり 中礫わずかにあり マンガン粒あり
- ⑮ 2.5Y 5/1 灰白色中砂質シルト 粗砂あり 炭化物わずかにあり 斑状の鉄分・マンガンを沈着多し
- ⑯ 10YR 5/1 暗褐色中砂質シルト φ3cm程の地山ブロック φ5cm程の塊を多く含む
- ⑰ 10YR 5/2 灰黄褐色中砂~粗砂シルト 鉄分・マンガンを沈着あり φ3cm程の7.5YR4/2灰黄褐色シルトブロックを含む
- ⑱ 10YR 5/1 暗褐色中砂質シルトφ1cm~3cm程の地山(砂岩)ブロック多し 炭土器片あり
- ⑲ 2.5Y 6/1 灰白色中砂質シルト 鉄分沈着あり φ5cm程の地山ブロックをやや多く含む
- ⑳ 10YR 6/3 近い黄褐色中砂シルト 鉄分沈着多し マンガンも少量沈着 φ1cm程の地山ブロック少量含む
- ㉑ 2.5Y 4/2 暗黄褐色シルト(粘性强) φ1cm程の地山ブロック多く含む
- ㉒ 5Y 5/1 灰白色中砂質シルト 粗砂あり 小~中礫わずかにあり
- ㉓ 10YR 5/1 暗褐色中砂質シルト 鉄分沈着多し φ10cm程の中礫を少量含む
- ㉔ 10YR 6/4 近い黄褐色中砂 φ5cm程の地山ブロック少量含む
- ㉕ 7.5YR 5/4 近い褐色中砂 マンガン沈着あり
- ㉖ 10YR 6/4 近い黄褐色細砂 φ5cm~10cmの塊を多量に含む
- ㉗ 10YR 6/1 暗褐色中砂シルト 鉄分沈着多し
- ㉘ 7.5YR 5/1 暗褐色シルト(粘性强) 鉄分・マンガンを沈着あり φ10cm程の塊を少量含む
- ㉙ 2.5Y 5/1 灰白色中砂質シルト 鉄分・マンガンを沈着あり
- ㉚ 10YR 3/1 黒褐色シルト(粘性强) 炭土器片を多く含む φ10cm~20cm程の塊を少量含む
- ㉛ 10YR 2/1 黒色シルト(粘性强) 炭を含む(ビツ57)
- ㉜ 7.5YR 5/1 暗褐色シルト(粘性强)
- ㉝ 10YR 2/2 黒褐色シルト(粘性强) 土器片は強ほど多く含まない(落ち込み3?)
- ㉞ φ10cm~20cm程の塊 塊の間に10YR4/1褐灰色シルト(粘性强)が入る(地山層)

図17 5トレンチ 南辺断面図



- ① 10YR 5/8 黄褐色細砂シルト 粗砂若干含む 鉄分沈着多し 水田床土
- ② 2.5Y 5/1 黄灰色細砂-中砂シルト含む 粗砂わずかにあり 斑状の鉄分 マンガン
- ③ 2.5Y 5/1 黄灰色シルト質細砂 粗砂あり 小礫わずかにあり 斑状の鉄分 マンガン
- ④ 2.5Y 5/1 黄灰色シルト質細砂 粗砂あり 炭化物わずかにあり 斑状の鉄分 マンガン
- ⑤ ⑤と⑦の混じった土
- ⑥ 2.5Y 6/1 黄灰色シルト質細砂 粗砂若干あり 小-中礫わずかにあり 斑状の鉄分
- ⑦ 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト質細砂 粗砂わずかにあり 中礫わずかにあり マンガン粒あり
- ⑧ 2.5Y 5/3 黄灰色細砂-中砂シルト含む 小礫-粗砂若干あり マンガン粒 鉄分あり
- ⑨ 2.5Y 6/1 黄灰色シルト鉄分少量あり
- ⑩ 2.5Y 5/2 暗灰黄色-2.5Y5/1黄灰色シルト質細砂 粗砂あり 小礫若干あり マンガン粒
- ⑪ 10YR 3/1-3/2 黒褐色細砂シルト 粗砂-小礫あり 炭化物若干あり マンガン多し
- ⑫ 10YR 3/1 黒褐色-10YR4/1黒灰色シルト質細砂 小礫-粗砂わずかにあり マンガンあり
- ⑬ 10YR 2/1 黒色細砂質シルト 5Y5/1灰色シルト質細砂のブロック-中-小角礫多し マン
- ⑭ 2.5Y 4/1 黄灰色-2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細砂 粗砂-小礫若干あり マンガン粒多し
- ⑮ 5Y 4/1 灰色細砂-粗砂が大-小円礫間にあり
- ⑯ 10YR 2/1 黒色-10YR4/1黒灰色シルト質細砂 小-中礫わずかにあり マンガン多し
- ⑰ 10YR 2/1 黒色-10YR4/1黒灰色シルト質細砂 粗砂わずかにあり マンガン多し 土器片
- ⑱ 10YR 2/1 黒色-10YR3/1黒褐色粘土質シルト 粗砂あり マンガン多し 炭化物若干あり
- ⑲ 10YR 3/3 暗褐色-2.5Y4/1黄灰色細砂-中砂 シルト含む 小礫わずかにあり マンガン多し
- ⑳ 2.5Y 4/1 黄灰色-2.5Y3/1黒褐色細砂シルト 粗砂-小礫若干あり 大礫わずかにあり
- ㉑ 中-小礫(角礫多し)間に2.5Y6/2灰黄色シルト質細砂 粗-中砂含む マンガンあり
- ㉒ 10YR 3/1 黒褐色細砂シルト 小礫-土器片あり マンガン多し
- ㉓ 10YR 3/3 暗褐色-2.5Y3/1黒褐色細砂シルト 粗砂-小礫わずかにあり 下部に中礫あり
- ㉔ 2.5Y 4/1 黄灰色細砂-中砂 小礫多し マンガン粒若干あり
- ㉕ ①層内に②層のブロックが入る
- ㉖ 10YR 5/1 褐灰色中砂混シルト φ1-3cm程の地山(砂岩)ブロック多し 炭-土器片あり
- ㉗ 10YR 5/1 褐灰色中砂混シルト φ1-3cm程の地山(砂岩)ブロック含む 土器片あり
- ㉘ 2.5Y 5/1 黄灰色中砂混シルトφ1cm程の地山(砂岩)ブロックを特に下部に多く含む
- ㉙ 2.5Y 5/1 黄灰色シルトφ3-10cm程の地山(10YR7.6明黄褐色土)ブロックを非常に多く含む
- ㉚ 2.5Y 5/1 黄灰色シルト細砂-粗砂混シルト 粗砂若干あり 下部に小礫多し マンガン粒あり
- ㉛ 10YR 3/2 黒褐色中砂混シルト 小礫少量含む マンガン多し
- ㉜ 5Y 4/1 灰色中砂-細砂シルト含む 中-小礫あり
- ㉝ 中-小礫間に5Y4/1灰色シルト質細砂 粗砂-中砂含む マンガンあり
- ㉞ 中-小礫間に5Y5/1灰色細砂-中砂 マンガン粒あり
- ㉟ 大-小礫多し 間に5Y5/1灰色細砂-粗砂 マンガン粒あり
- ㊱ 5Y 5/1 灰色細砂混シルト 粗砂あり 小-中礫わずかにあり マンガン粒あり
- ㊲ 2.5Y 4/1 黄灰色中砂混シルト φ3-10cm程の地山(砂岩)ブロックを多く含む 炭-土器片あり
- ㊳ 2.5Y 6/1 黄灰色中砂混シルト φ1cm程の地山(砂岩)ブロックを北側に行く程多く含む
- ㊴ 2.5Y 5/6 黄褐色細砂混シルト φ0.5-1cm程の焼土及び炭を多く含む 層自体が赤変
- ㊵ 10YR 6/1 暗褐色シルト φ5cm程の地山ブロックを多く含む
- ㊶ 2.5Y 4/2 暗灰黄色-2.5Y4/1黄灰色シルト質細砂 粗砂あり 小-中礫多し(小礫は角礫)
- ㊷ 炭化物わずかにあり マンガン 鉄分あり
- ㊸ 大-小礫(円礫)間に2.5Y5/1灰色シルト質細砂 マンガン粒あり
- ㊹ 巨礫-中礫間に5Y5/1灰色細砂-中砂
- ㊺ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色中砂混シルト φ5cm程の地山(砂岩)ブロックを多量に含む
- ㊻ 炭少量あり

図18 5トレンチ 東辺断面図

2. 本調査部（5トレンチ）

a. 基本層序（図14～18）

本調査区は海浜堤および堤間低地に立地するため全体に谷側から海岸線に向かって傾斜しており、土層が斜面堆積する傾向にあるが、その特徴は下層にいくほど顕著に認められる。従って基本的に汀線付近の堆積は厚く、谷側の堆積は薄い。特に調査区境である東壁付近は谷からの傾斜はきつく、堆積も複雑である。但し、汀線沿いに海浜堤が築かれてからは、谷側の調査区境と海浜堤の間は鞍部となる。また、海浜堤がある程度埋没した段階で、盛土による整地が行われて水平堆積が認められるようになる。

第1層 重機によって表土層を除去した後に検出した層で、10 YR 5/8 黄褐シルト混じり細砂がトレンチ全体に堆積する。これは近・現代の耕作土層で、厚さは概ね10 cmを測る。また、この耕作土層を形成するために、旧汀線の約5 m沖に現在のコンクリート製の堤防を築き、旧汀線との間を高さ約1.2 m埋め立て、さらに浜全体を0.2～0.8 mの厚さで整地する。

第2層 第1層を除去して検出した。調査区全体にシルト混じり細砂が堆積するが、東側から西側の海岸に向けて厚くなり、層厚約10 cmを測る。また、汀線沿いに古い海浜堤の外側に人頭大の角礫を使用して海浜堤の補強が認められる。層中より陶磁器・瓦器・黒色土器・青磁・瓦・錨石・土錘などが出土した。

第3層 奈良時代の遺構面である第2面を形成する層で、層厚約10 cmを測るが、東壁部分は浸食崖による段にあたるため堆積状況は確認できない。中砂混じりシルトで直径1～10 cm程度の地山ブロックを含む。この地山ブロックは谷部に迫っている砂岩質の地山が削られて堆積したもので谷部に近いほうに多く堆積し、粒径も大きい。

第4層 奈良時代の遺構面である第3面を形成する層で、2層に大別することができる。まず、下層は、古墳時代遺構面である第4面廃絶後に遺構面の鞍部を中心に堆積した黒褐色シルト層で、多量の製塩土器やサザエなどが含まれる。また、その断面の観察状況から、徐々に堆積したものと考えられる。次に上層みられるのが、下層の堆積が及ばなかった高台部と海浜堤の間の鞍部に堆積する灰黄褐色シルト層（地山ブロックを含む）で、第3面を形成する際の整地土層である。これは第3面をフラットにして作業スペースを確保するために行われたと考えられる。

第5層 当該層は、谷部から海部に向かって堆積する黒褐色粘質シルト層で鞍部に厚さ約30 cm堆積する。焼土や炭を少量含むが、これは第5面で検出した地床炉に関係するものと考えられる。

第6層 当該層は、谷部からのびる堆積層と汀線沿いに築かれた海浜堤に大別できる。堆積層はにぶい黄褐色微砂層でトレンチ全体にみられる。海浜堤は汀線に沿って弓形に築かれる。拳大～人頭大の角礫を使用して、検出長約19 m、下幅約7 m、上幅約3 m、高さ約0.9 mを測る。

第7層 地山層である。拳大～人頭大の角礫を含む堆積層で、土石流によって形成される。

b. 遺構

5トレンチは三日月状に広がる海浜に位置する。その海浜の北側約3/4を調査区として設定した。現地盤は3.5～3.8 mを測り、谷側から海側に向かって緩やかな傾斜をもつ。

第1面（図19）

第1面は近・現代の耕作土層を除去して検出した面である。主な遺構は、石積海浜堤・ピット・土坑・溝などが確認できたが、平面精査は行わなかった。出土した遺物から近世面に比定される。

第2面 (図20～27)

中・近世包含層を除去して検出した。当該面は海に向かって緩やかに傾斜しており、その比高は約0.4mを測る。調査区南半部は中・近世時の削平を受ける。また、遺構面は調査区の東辺部に境に傾斜するが、これは海からの浸食崖にあたる。調査区の西側には旧汀線がはしる。検出した遺構は礫群、石敷製塩炉などである。礫群1は調査区の北側にある汀線際で検出した。拳大～人頭大の角礫を使用しており、第3面検出の礫群2の拡張と考えられる。この礫群の中から須恵器平瓶が出土した。

石敷製塩炉は全部で6基検出したが、いずれも調査区の中央部に分布する。石敷炉3は調査区の中央部北東端の平坦面に位置する。径約2mの円形であったと考えられるが、炉の西半分は削平を受ける。炉は拳大～ひと抱えほどのやや偏平な円礫を不規則に並べたもので、その構築方法は、まず人頭大の礫を並べた後に拳大の礫を隙間に配するものである。炉の上面のレベルは3.2～3.2mを測る。石敷炉4は石敷炉3の南約1mに位置する。径約2mの円形を呈し、拳大～人頭大の偏平な円礫を使用する。構築方法は深さ約10～15cmの土坑を掘り、土坑の壁に円礫を立てかけるように配置した後、人頭大の礫を並べ、その隙間に拳大の礫を配する。高さは炉の中心部で3.2m、縁辺部で3.4mを測る。石敷炉5は旧汀線際に位置する。旧汀線は後世の堤防構築の際に削平を受けており、炉の西半部を失う。また、炉の南半部も石の抜き取りが認められるため、正確な規模や形状は不明である。構築方法は長辺2.8m、深さ0.1mを測る方形の土坑を掘り、その中に拳大～人頭大の偏平な円礫を並べるものである。高さは3.0mでほぼ水平であ

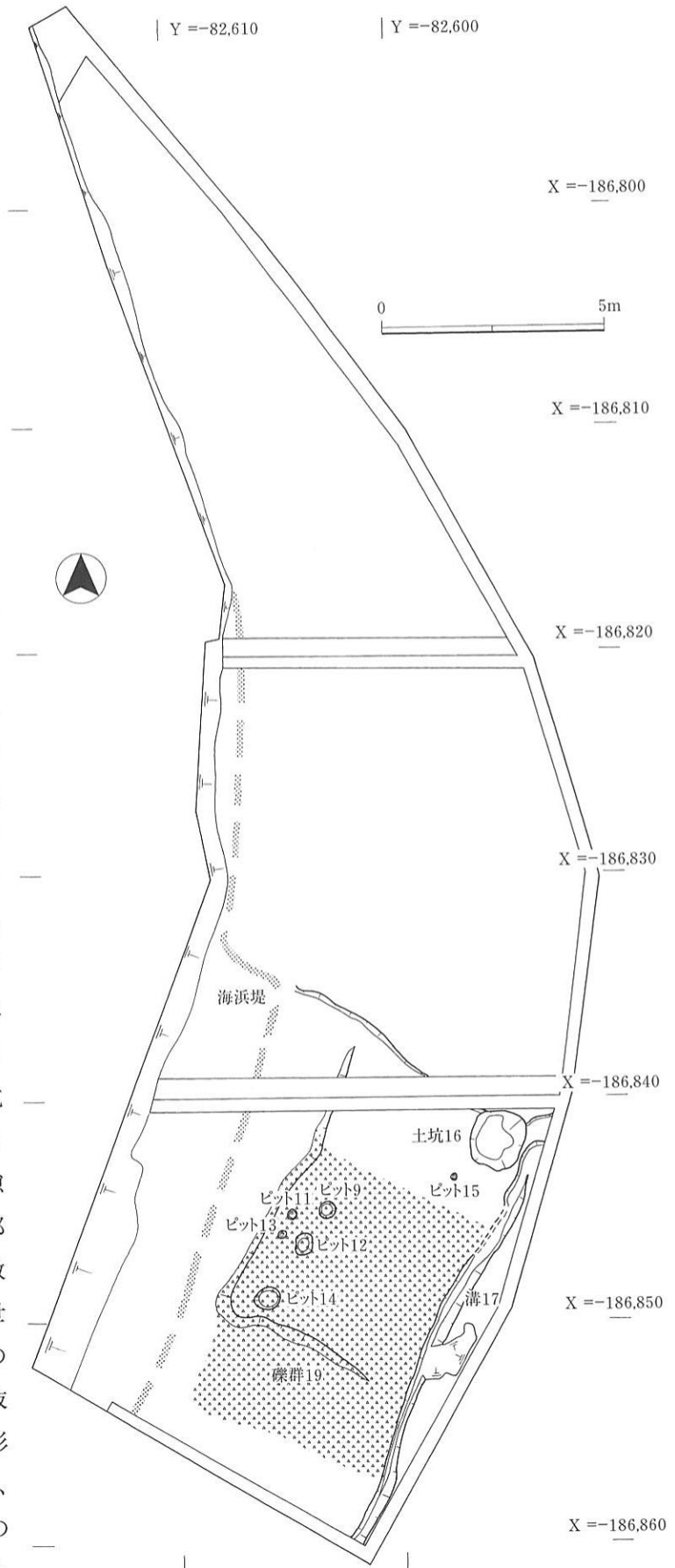


図19 5トレンチ 第1面 遺構平面図

る。石敷炉6は大阪府教育委員会の試掘調査により確認されたものであるが、残りが悪く、規模や形状は不明である。人頭大の円礫と角礫がみられるが、礫の表面は被火により赤変し、礫の表面に亀裂が生じているものも認められる。高さは3.1mを測る。石敷炉7は石敷炉6の南約4mに位置する。これも残りが悪く、規模や形状は不明であるが、現存する規模は1.7×1.1mである。使用される礫は偏平な和泉砂岩で、長径約40～60cmの大形の円礫と30cm以下の小振りの円礫をほぼ水平に配する。礫の表面は被火により赤変し、表面には亀裂が生じており、なかには剥離が認められるものもある。石敷炉の高さは3.1mを測る。石敷炉8は石敷炉7の東約4mに位置する。この遺構も後世の削平を受けており、規模や形状は不明であるが、現存する規模は1.0×1.1mを測る。使用される礫は和泉砂岩の偏平な円礫で20～40cm大のものである。まず、40cm大の礫をやや密に並べ、その隙間に小振りの礫を配する。礫の表面は被火の痕跡が顕著で赤変しており、礫表面の亀裂や剥離も著しい。

出土した遺物から当概面は奈良時代に比定される。

第3面 (図28～44)

第2面の整地層を除去して検出した。当該面も海側にやや傾斜するものの、概ね平坦である。検出した主な遺構は、礫群・ピット・地床炉・石敷炉などである。礫群2は調査区の北側にあり、礫群1を除去して検出した。調査区の北側は地山が露出して汀線を形成しており、その汀線に沿って人頭大の角礫を積みあげる。ピット20は調査区北部中央に位置し、径50～60cm、深さ15cmを測る。灰白色シルトブロックを充填する。ピット22は調査区中央部東側

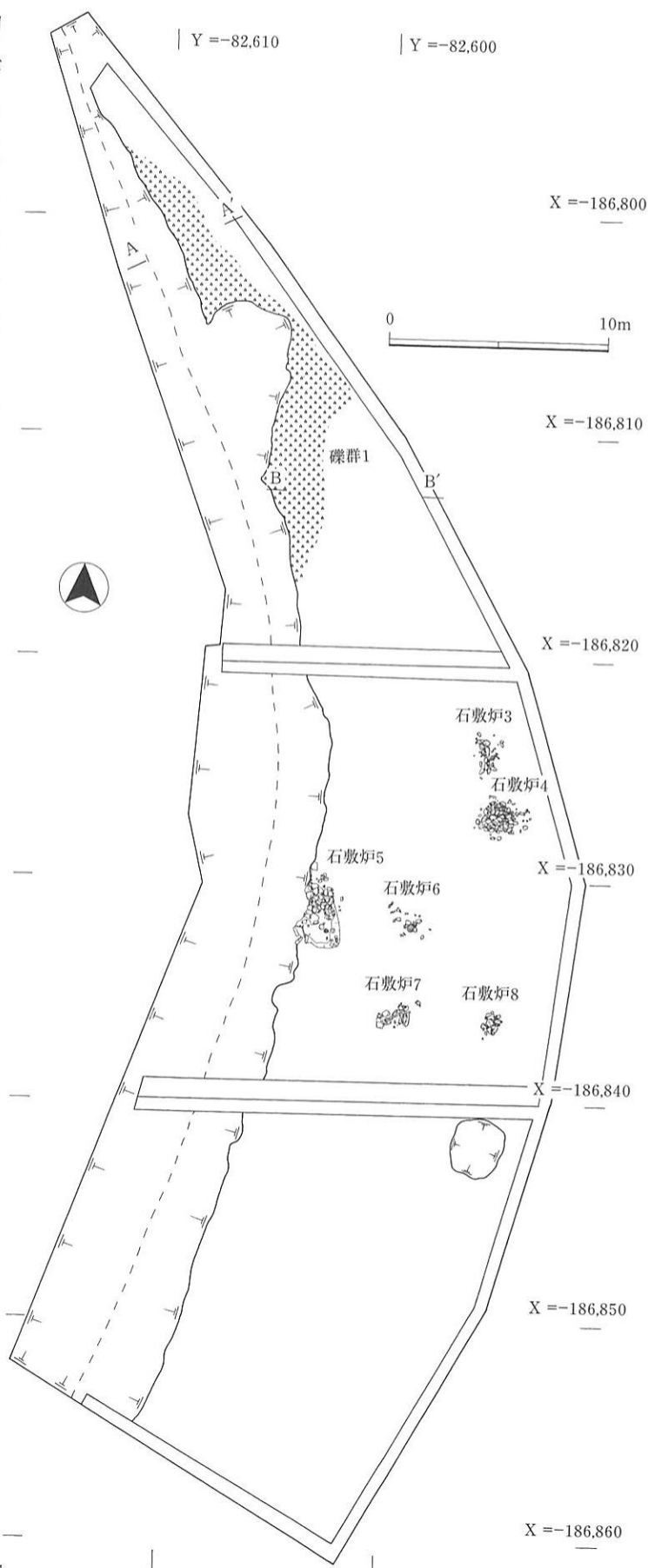


図20 5トレンチ 第2面 遺構平面図

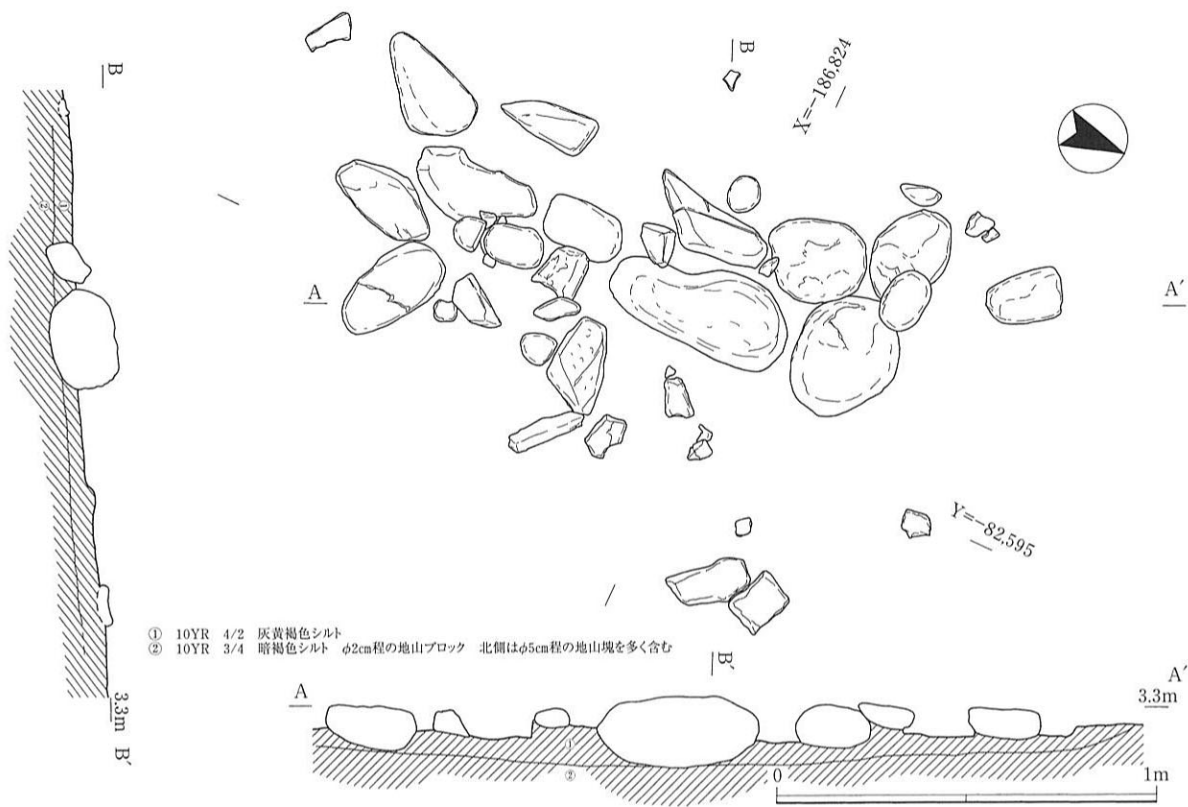


図21 5トレンチ 第2面 石敷炉3 平・断面図

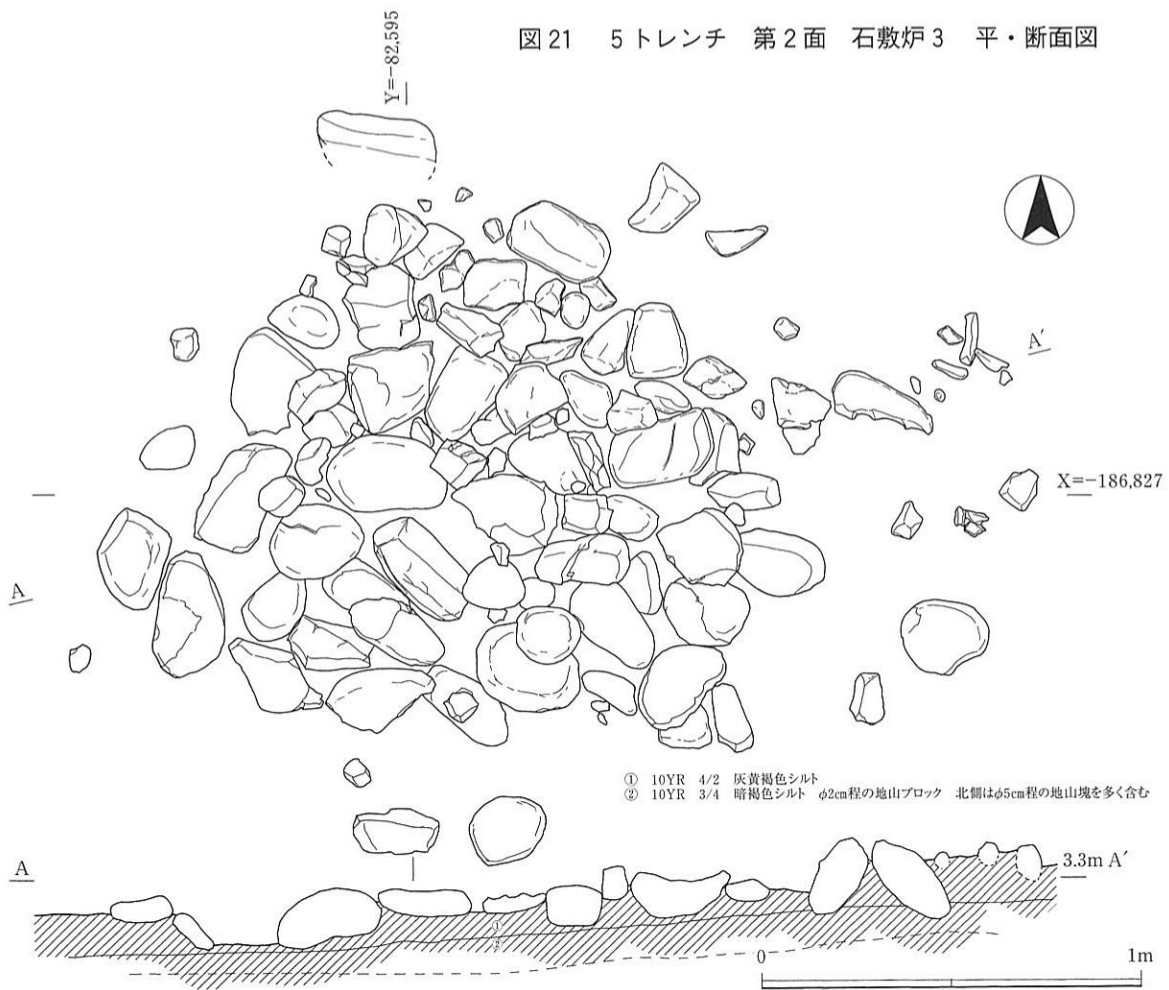


図22 5トレンチ 第2面 石敷炉4 平・断面図

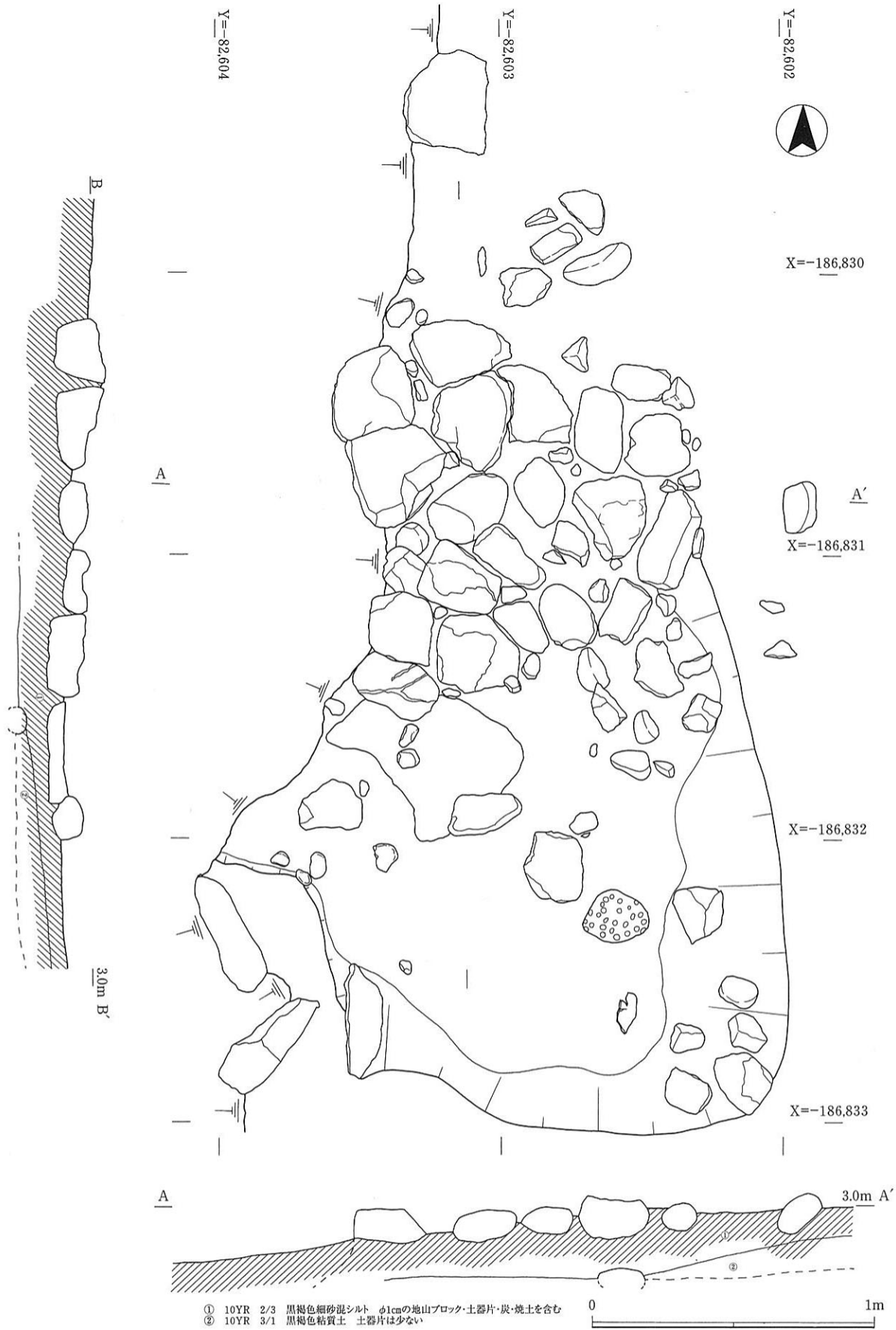
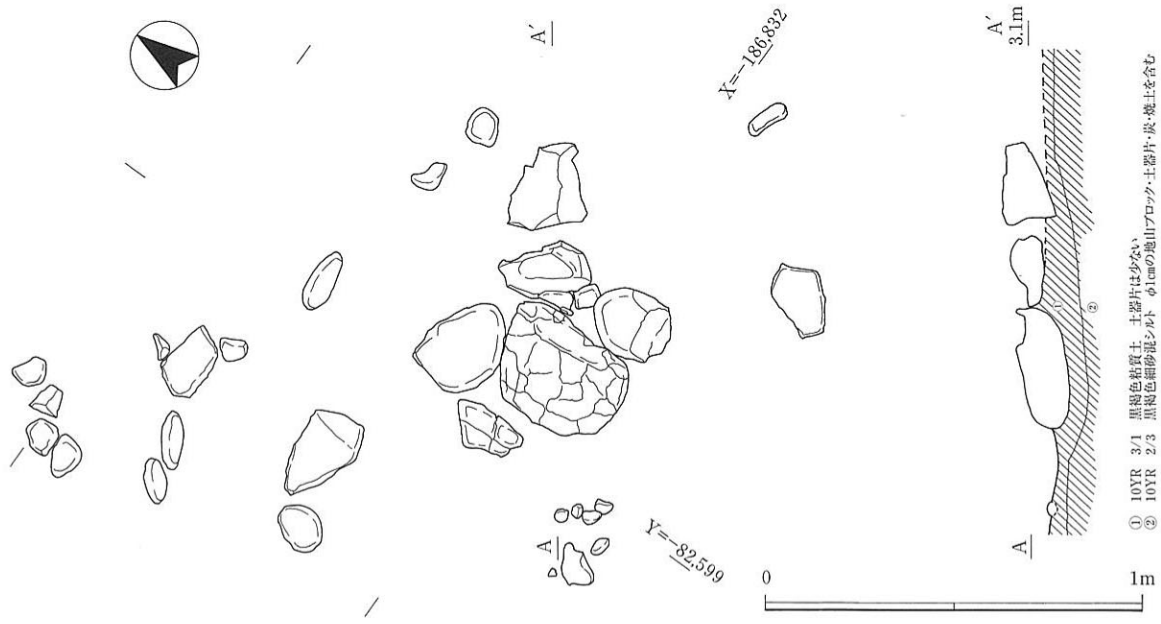
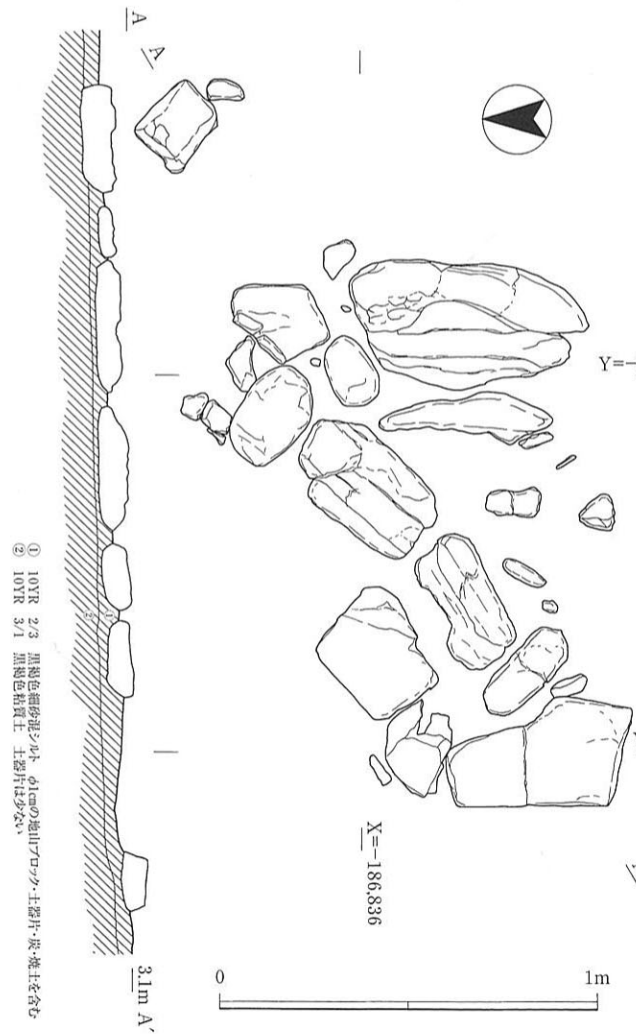


図23 5トレンチ 第2面 石敷炉5 平・断面図



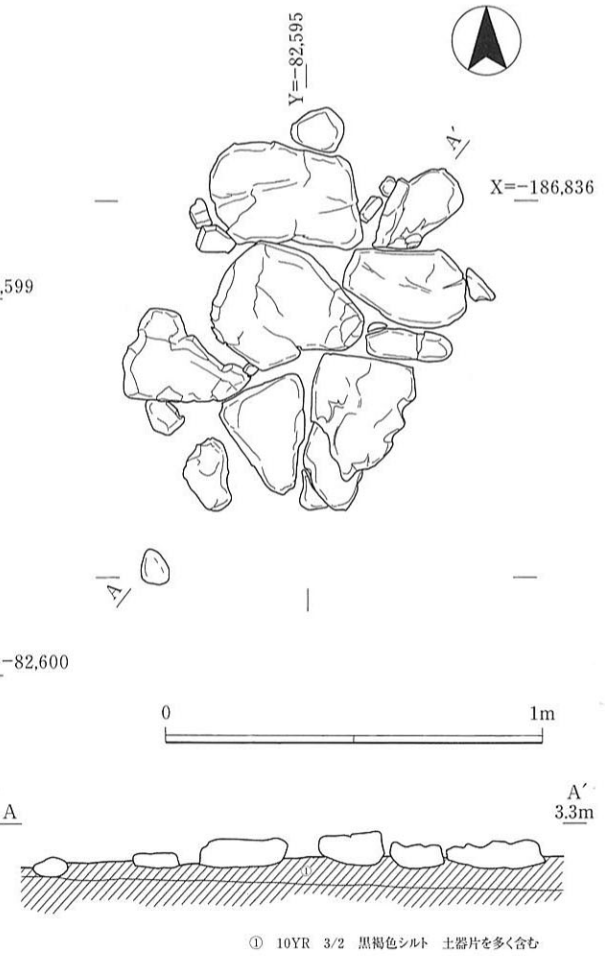
① 10YR 3/1 黒褐色粘質土 土器片は少ない
 ② 10YR 2/3 黒褐色細砂土 土器片は少ない

図24 5トレンチ 第2面 石敷炉6 平・断面図



① 10YR 2/3 黒褐色細砂土 土器片は少ない
 ② 10YR 3/1 黒褐色粘質土 土器片は少ない

図25 5トレンチ 第2面 石敷炉7 平・断面図



① 10YR 3/2 黒褐色シルト 土器片を多く含む

図26 5トレンチ 第2面 石敷炉8 平・断面図

に径 50 cm、深さ 10 cm で灰白色シルトブロックを充填する。地床炉 24 は調査区中央に位置する。一辺 1.4 m の不整形を呈しており、床面および礫が被火による変色が認められる。石敷炉 21 は調査区中央部西側に位置する。炉の西側および南側は、後世の攪乱による削平を受けて礫が数個抜き取られているが、比較的残りのよい東辺が直線的に延びることなどから、残存規模が東西方向 2.5 m、南北方向 1.7 m の平面長方形を呈していたと考えられる。しかし、東辺から 1.7 m 西に並べられた礫の目地が通ることや、礫の大きさや東と西の炉上面のレベルが異なることなどから、炉 21 は西側に拡張されたものと考えられる。拡張前の規模は東西方向、南北方向とも 1.7 m を測る正方形となる。炉の構築方法を復原すると、まず 20 ~ 30 cm の角礫を炉の周縁に斜めに立て並べた中に、40 ~ 50 cm の扁平な角礫をまず西辺を礫の目地を揃えて並べて西端とし、その後、炉の隙間に礫を敷き並べるが、西辺に比して雑である。しかし、炉事態のつくりは非常に丁寧である。また、礫の表面は被火による赤変や亀裂がみられる。次に拡張部分であるが、前述したように後世の攪乱を受けているため従来の形状は不明である。使用されている礫は、一辺 30 cm 以内の小振りなものである。また、その構築の仕方も拡張以前のものに比べると雑である。炉の上面のレベルは 2.8 m を測るが、拡張部はそれよりも約 10 cm 低い。石敷炉 29 は調査区の南部に位置する。残りが悪いいため正確な規模や形状は不明であるが、残存する規模は 2.2 × 1.6 m である。使用する礫は一辺 40 cm を超えるものもあるが、多くは 30 cm 以下の扁平な角礫を並べる。礫の表面には被火による赤変や亀裂がみられるものもある。炉のレベルは概ね 2.6 m を測る。石敷炉 30 は石敷炉 29 の南に位置する。これも残りが悪く残存する規模は一辺 1.6 m を測る。使用する礫は一辺 60 cm のものみられるが、多くは一辺 30 cm 内外のものを使用する。礫の表面は被火による亀裂がみられる。炉のレベルは概ね 2.6 m を測る。石敷炉 40 は石敷炉 39 構築の際に削平を受けており、形状は不明である。残存する規模は 1.0 × 1.4 m で、人頭大の礫で囲んだ中に拳大の円礫を敷きつめる。炉のレベルは 2.5 m を測る。石敷炉 47 は西半部を落ち込み 37 に、東半部を石敷炉 53 に

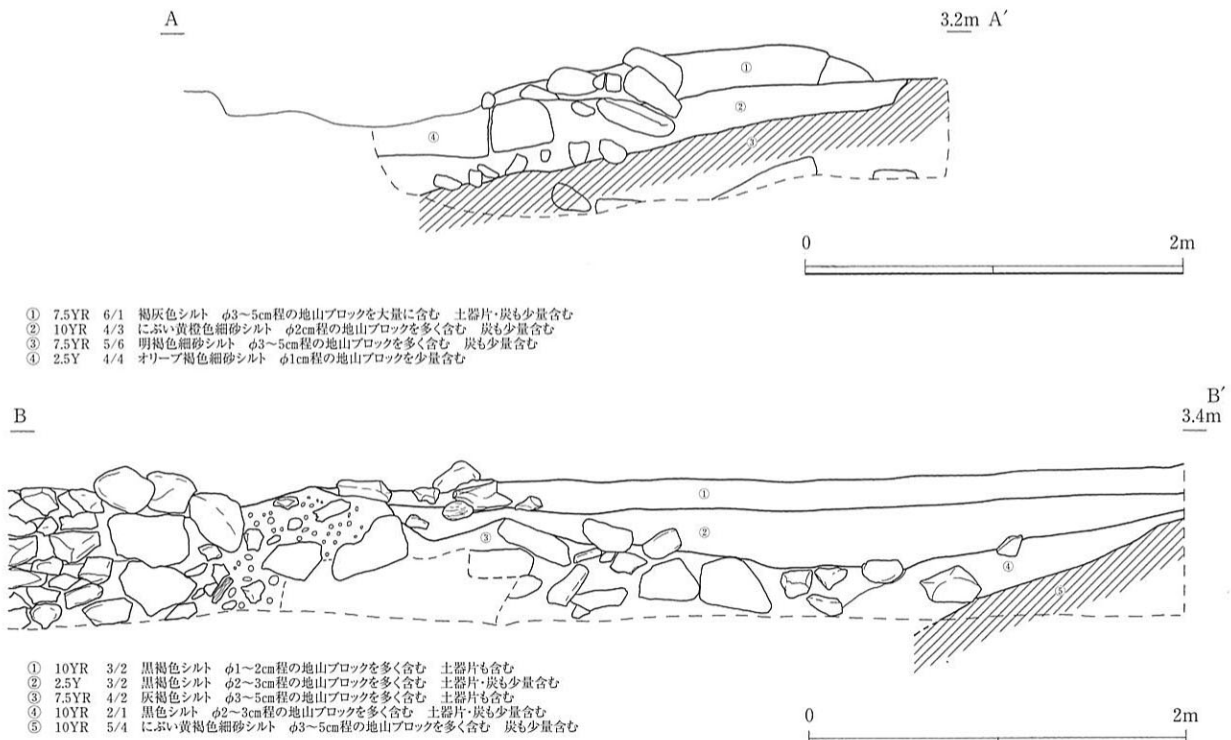


図 27 5 トレンチ 第 2 面 礫群 1 断面図

よって削平を受けているため形状は不明である。残存する規模は 0.6×1.9 mで拳大の円礫を並べる。炉のレベルは3.3 mである。石敷炉 48は調査区の南西隅に位置し、西側を後世の汀線による削平を受けているため残りが悪く、全容は不明であるが、方形であったと考えられる。残存する規模は一辺 1.3×1.3 mである。炉の構築方法は、まず $10 \sim 20$ cm大の角礫を「L」字形に並べる。但し、コーナー部分には 25×40 cmの大きめの角礫を配置する。その後角礫で囲った内側にこぶし大の円礫を敷き並べる。レベルは周囲の角礫の上面は2.8 m、炉の上面は2.6 mを測る。石敷炉 49は石敷炉 48の北側に隣接する。この炉も後世の汀線による削平を受けているため正確な規模は不明である。残存する規模は 1.2×1.1 mを測る。この炉も炉 48と同じく 20 cm内外のやや大振りな礫で周囲を囲い、その中に拳大の円礫を配する。レベルは周囲の礫の上面が2.8 m、炉の上面は2.7 mである。石敷炉 50は炉 49の北側に隣接する。この炉も後世の汀線による削平を受けているため正確な形状および規模は不明である。炉は拳大の円礫を敷き並べた部分しか残っておらず、その範囲は 1.6×1.0 mである。炉 49と同一の炉若しくは炉 49の拡張とも考えられたが、若干の隙間があることや、礫の大きさに差がみられることなどから別の炉と判断した。炉の上面のレベルは2.1 mである。石敷炉 53は下層の海浜堤の礫を利用して構築されており、非常に識別が困難であった。炉は一辺 30 cmの角礫で鍵の手状に囲い、その中に一辺 $10 \sim 20$ cmの角礫を配する。炉の内部には径 20 cm程度、礫を配さない部分が4箇所ほど見受けられる。炉の高さは周囲の角礫の上面で2.5 m、炉内部

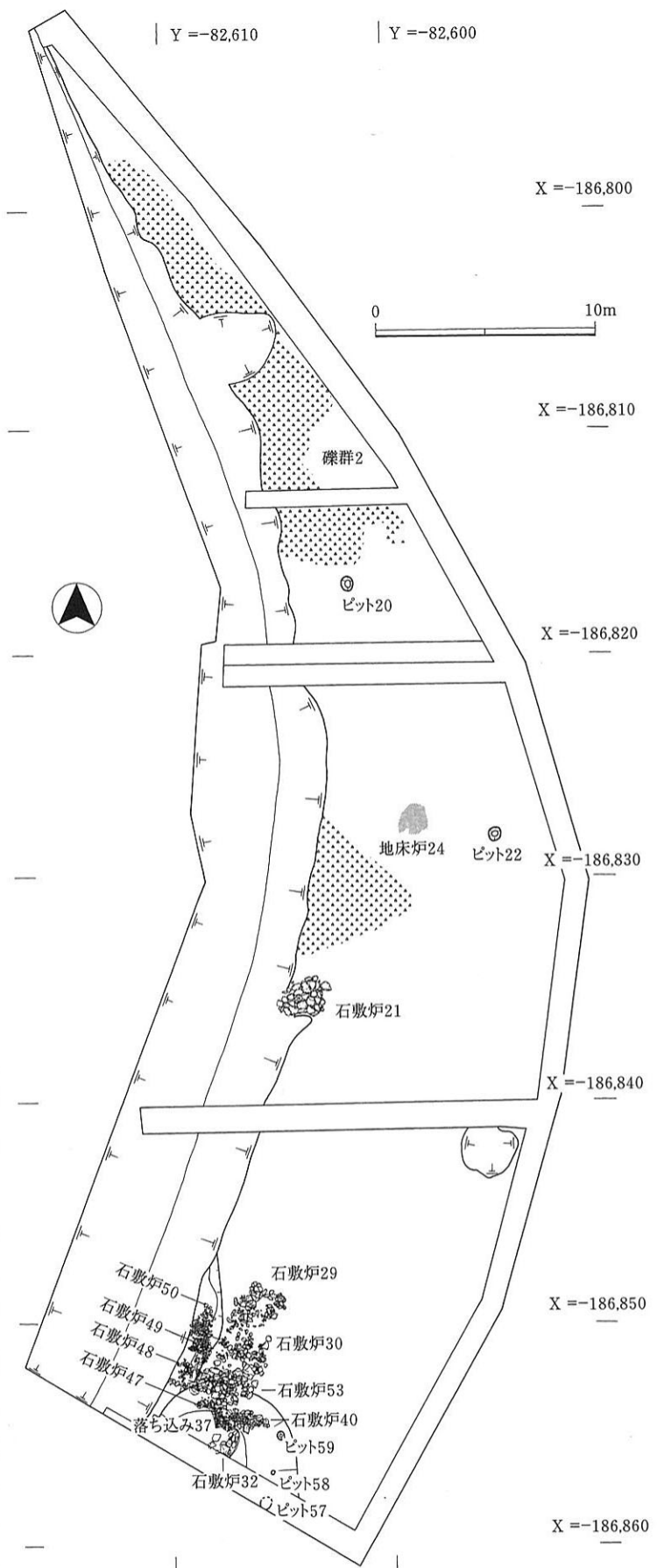


図 28 5 トレンチ 第 3 面 遺構平面図

の上面で2.3 mを測る。石敷炉 32・39・54は調査区南端部に位置しており、それぞれの炉の上につきり替えられたものである。炉の南側が調査区外に延びるため、正確な形状および規模は不明であるが、残存する炉から平面は円形若しくは楕円形と考えられる。炉 32は削平を受けているため残りが悪く、磔も10数点しか残っていなかった。残存する規模は径1.2 mの楕円形である。構築方法は炉 39の上面に炉の形状に合わせて10数cmのシルトを貼った上に20～40 cmの扁平な角磔を配する。炉の南東隅には拳大の角磔がみられることや、下層にある炉 39や炉 54の形状から、従来炉の周囲をこれらの小振りの磔で囲っていたと考えられる。炉の上面の高さは2.5 mである。石敷炉 39は炉 32の磔と基盤層を除去して検出した。残存する規模は短径1.6 mの楕円形を呈する。構築方法は炉 54の上面に厚さ約10 cmのシルトを貼った後、周囲を10 cm以下の円磔で囲い、その中に20～40 cmの扁平な磔を並べ、隙間を小磔で埋める。炉の上面の高さは2.4 mである。石敷炉 54は3基のうちで最も残りが良く、平面楕円形を呈し、残存する規模は短径1.5 m、長径1.5 m以上を測る。炉の構築は非常に丁寧で、深さ20 cm程に掘り窪めた肩口を15 cm前後の円磔でかため、その中に一辺20～40 cmの扁平な磔を敷き並べたのち、小磔で隙間を埋める。炉はすり鉢状を呈しており、縁辺部の高さは2.4 m、炉の上面は2.3 mを測る。ピット 20は調査区北半部に位置する。平面50×60 cmの楕円形を呈し、深さ10 cmを測る。埋土は灰白色シルトがブロック状に堆積する。ピット 22は調査区中央部に位置し、径50 cm、深さ10 cmを測る。埋土は灰白色シルトで、上層には第2層が堆積する。ピット 58および59は調査区南半部で、石敷炉群の東側に位置する。ピット 58は径20 cm、深さ20 cmを測る。ピット 59は径40 cm、深さ20 cmを測る。

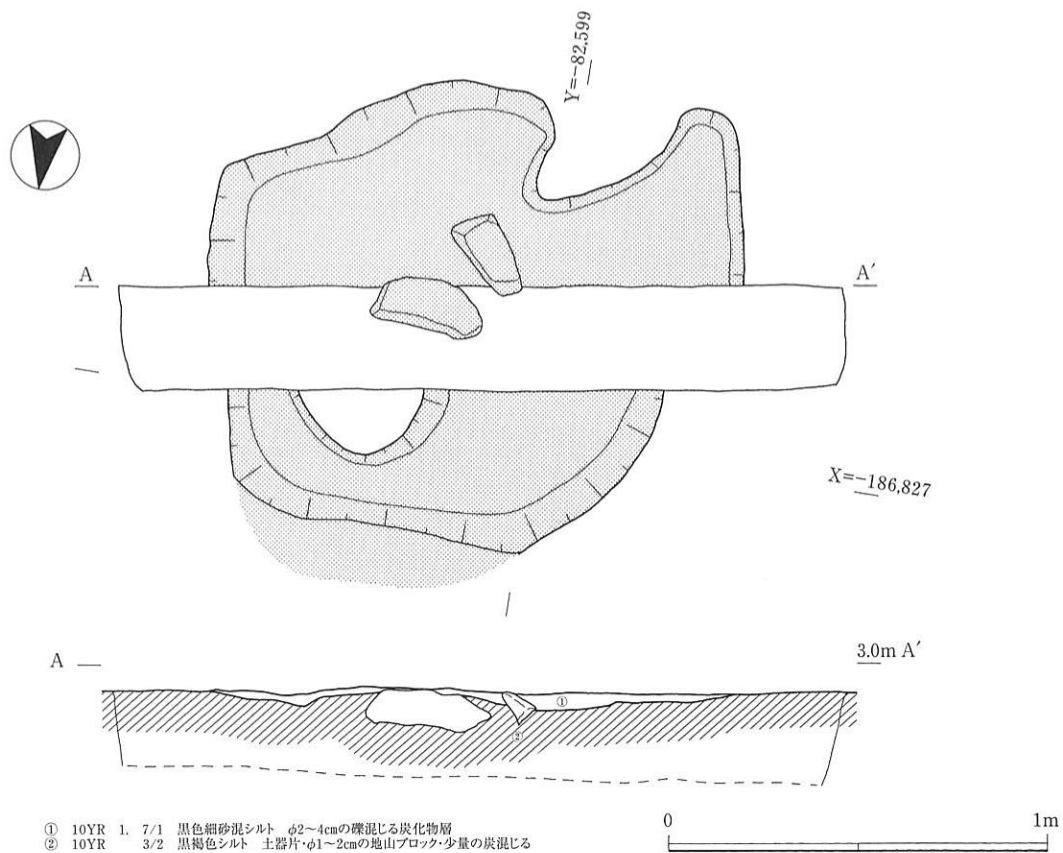


図 29 5 トレンチ 第 3 面 地床炉 24 平・断面図

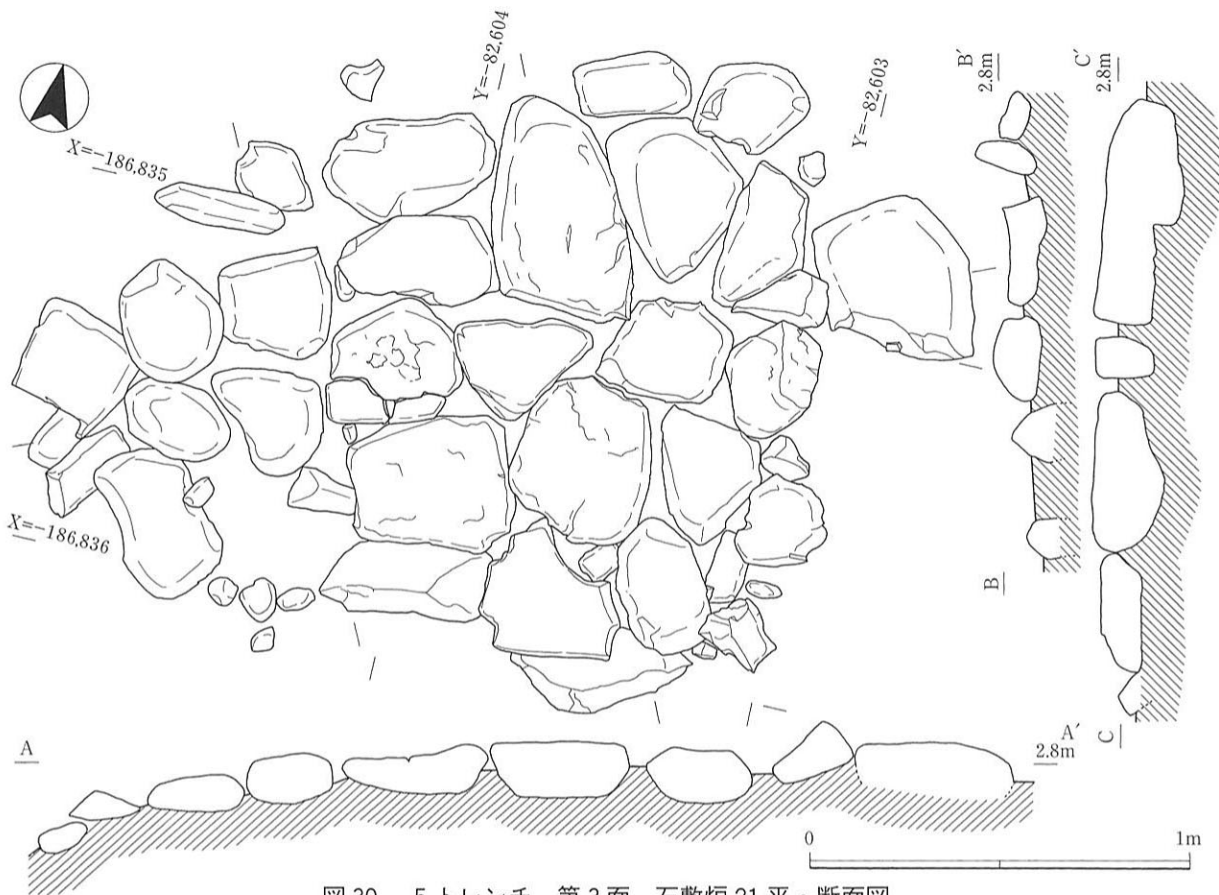


図30 5トレンチ 第3面 石敷炉21平・断面図

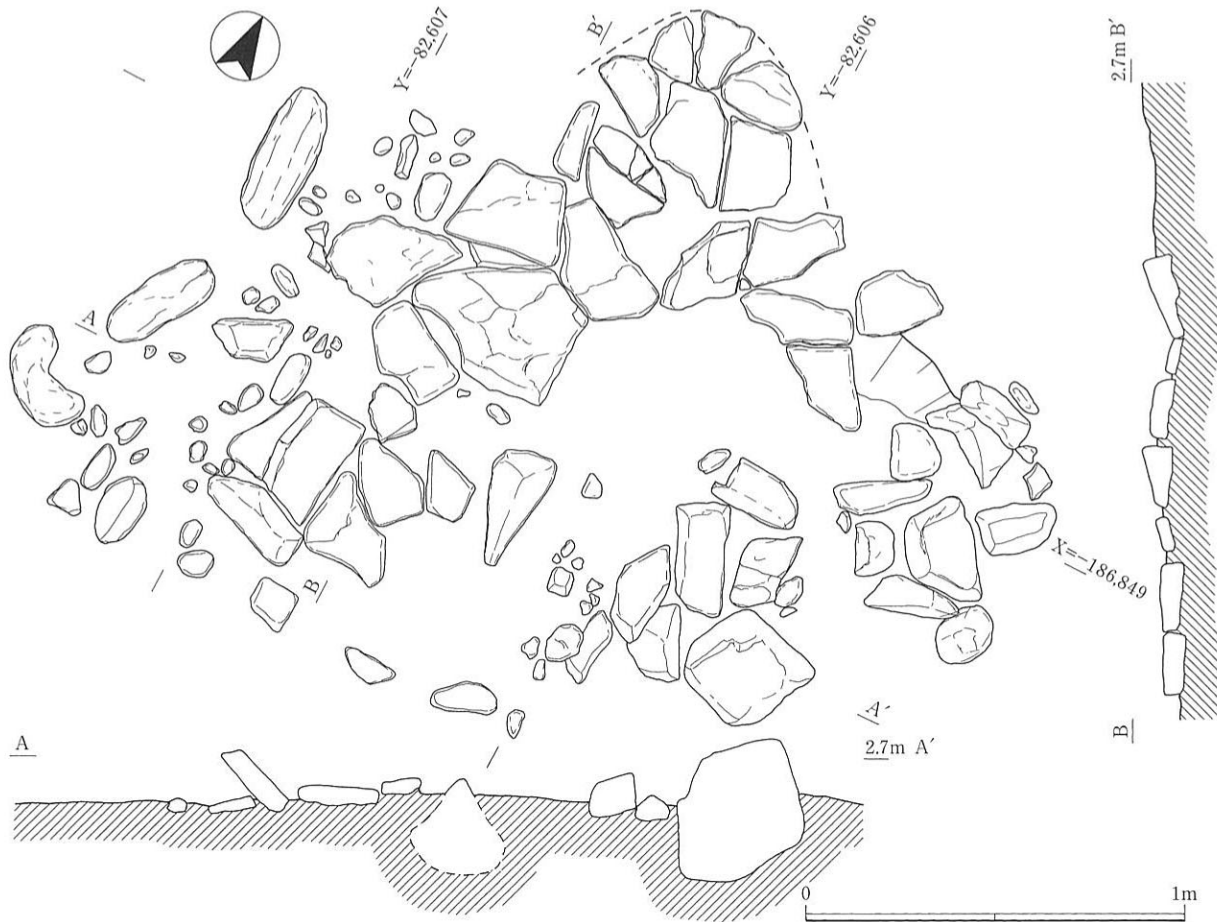


図31 5トレンチ 第3面 石敷炉29平・断面図

第4面 (図45～47)

当該面は第3面の基盤層、および弥生時代後期から布留式併行の土器を含む包含層を除去して検出した面であり、第2、第3面とは異なり起伏に富む。調査区の東辺は東から西側に向かって緩やかに傾斜しており、西辺は海側に沿って礫による海浜堤の高まりが形成されるため、中央部分が窪地状を呈する。

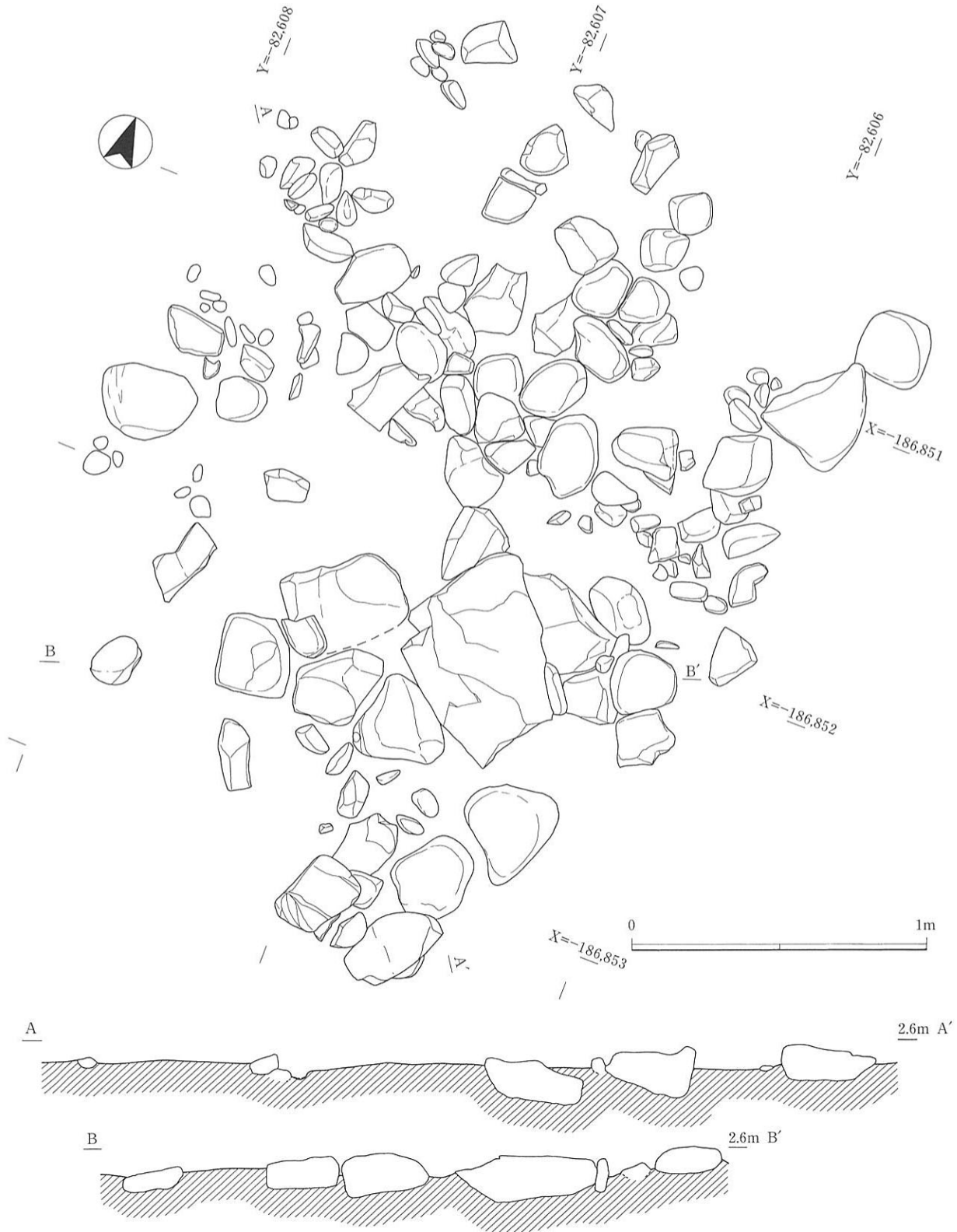


図32 5トレンチ 第3面 石敷炉30平・断面図

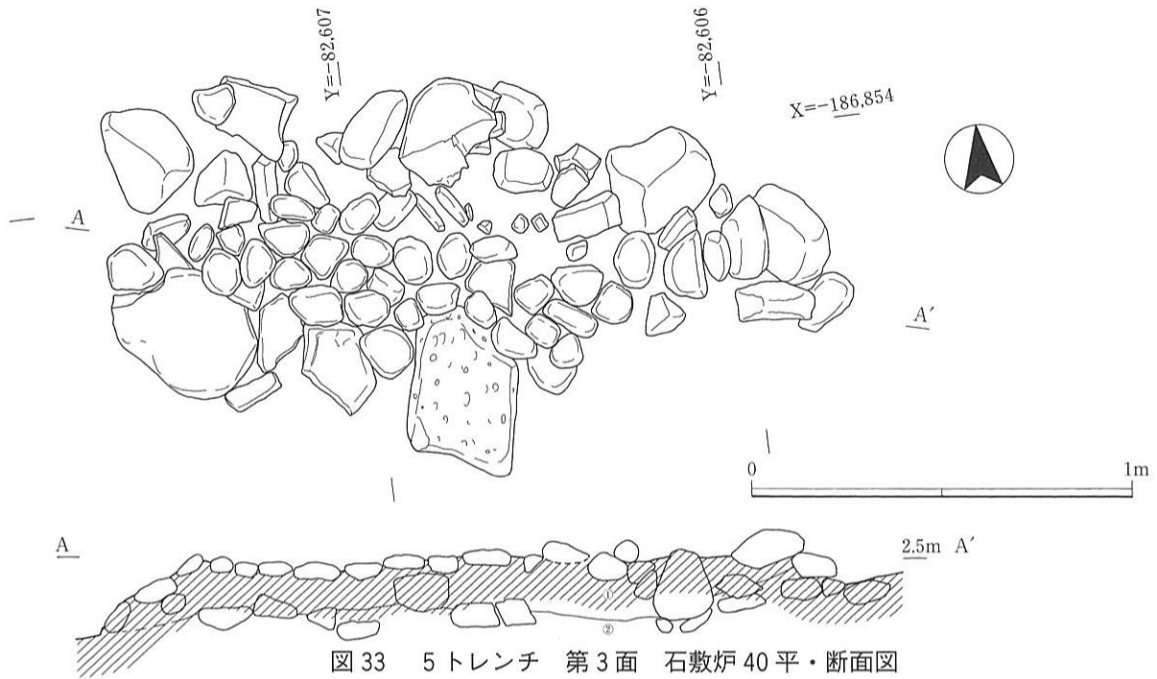


図33 5トレンチ 第3面 石敷炉40平・断面図

- ① 10YR 3/1 黒褐色～10YR2/1黒色シルト～粘土 細砂若干あり 炭化物・小礫・小土器片あり
- ② 2.5Y 4/2 灰赤色シルト～細砂 ①よりやや黄灰色系の細砂多く含む

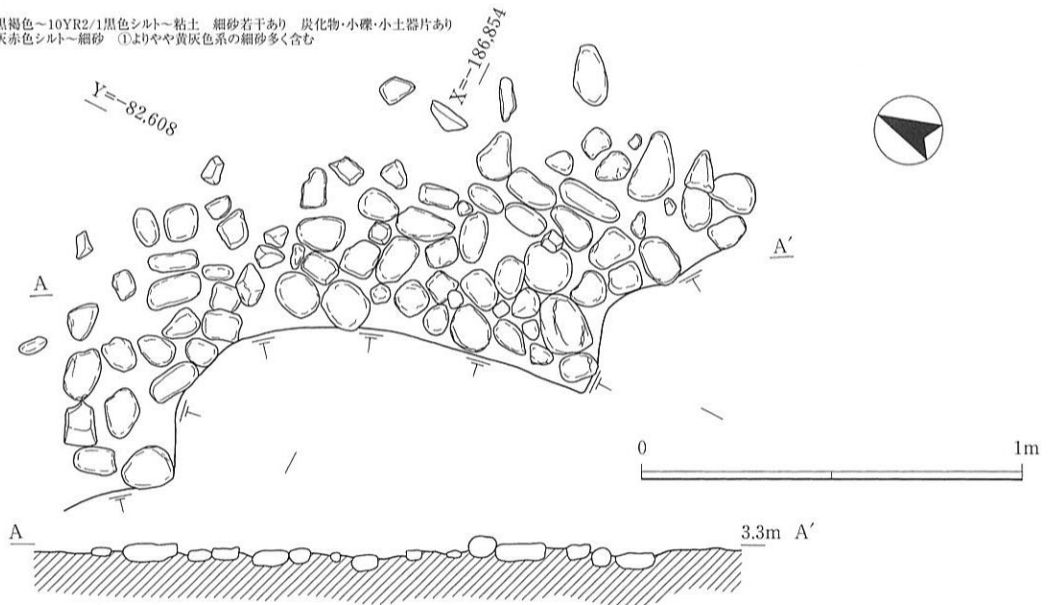


図34 5トレンチ 第3面 石敷炉47平・断面図

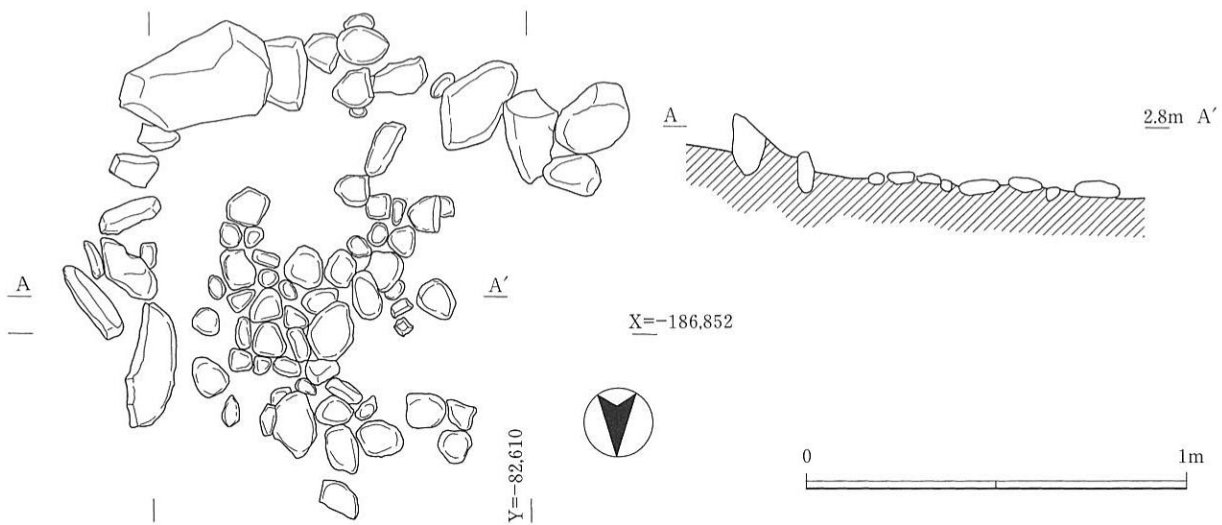


図35 5トレンチ 第3面 石敷炉48平・断面図

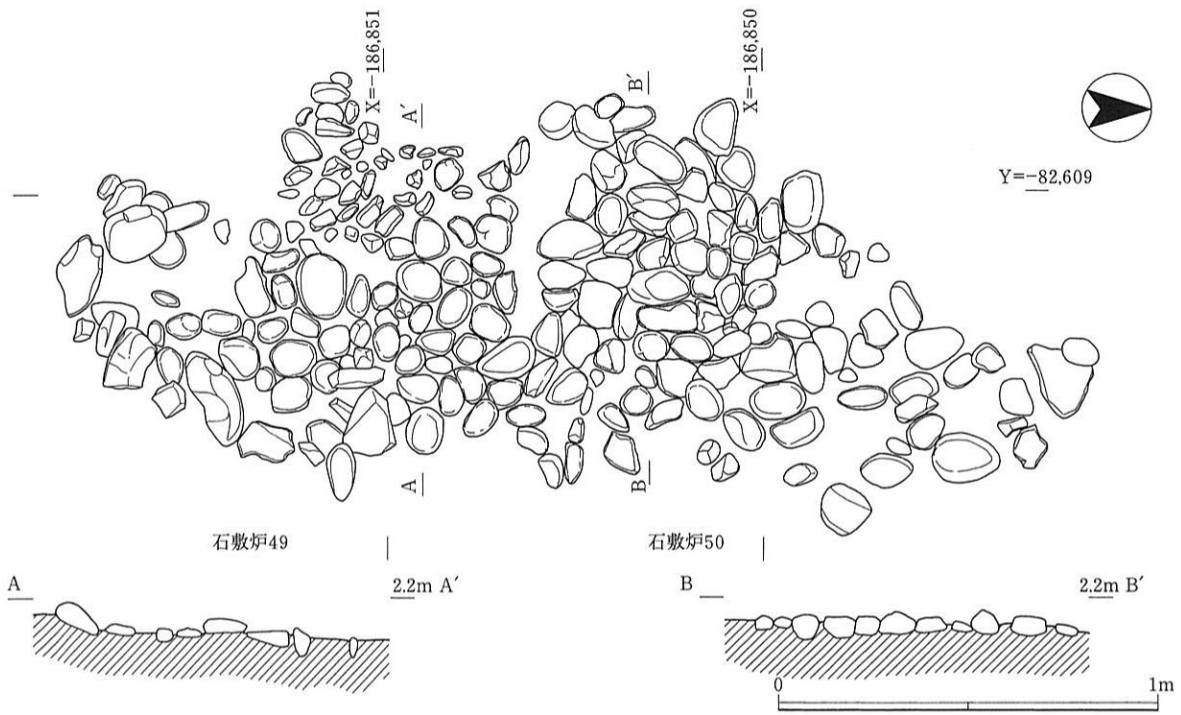
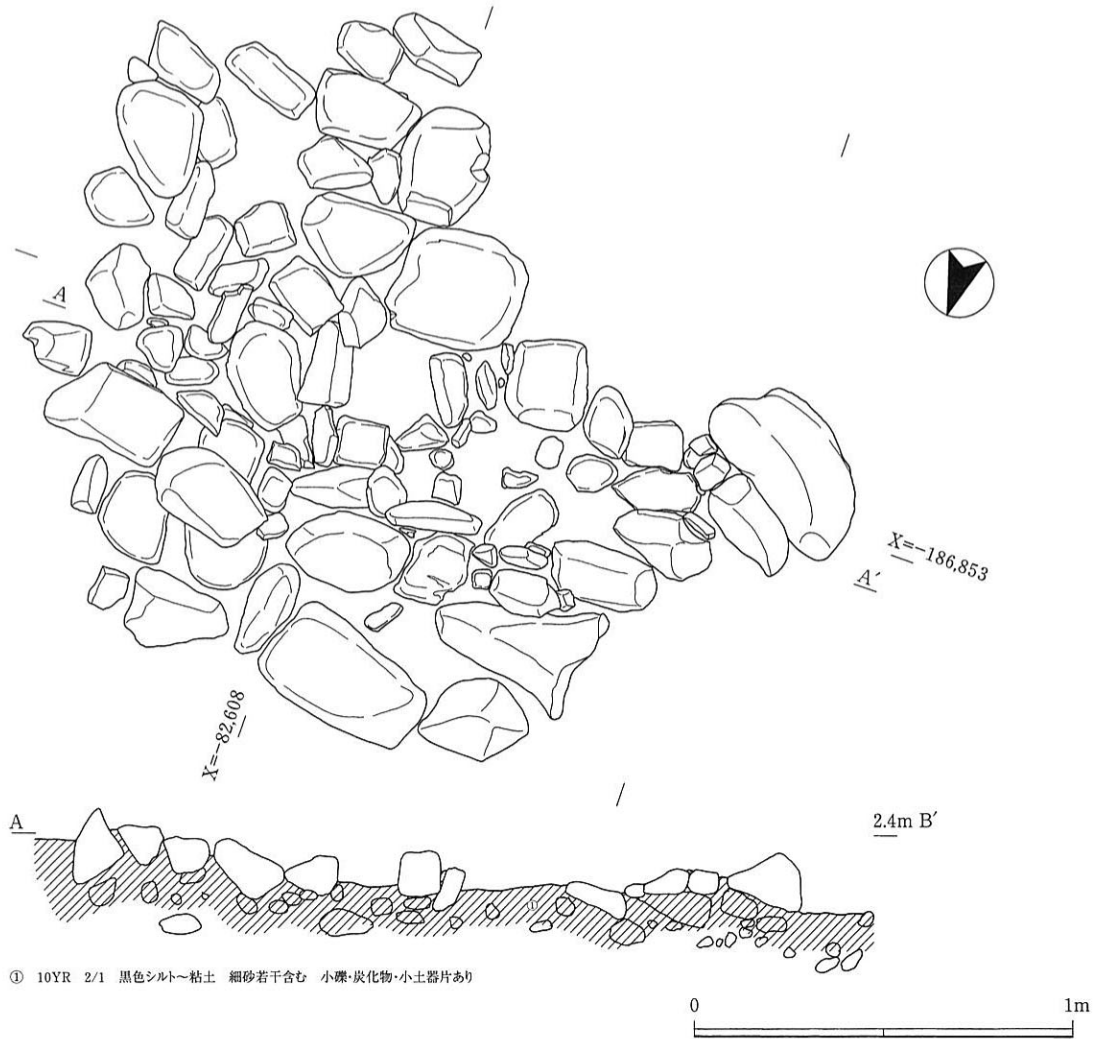


図36 5トレンチ 第3面 石敷炉49・50平・断面図



① 10YR 2/1 黒色シルト～粘土 細砂若干含む 小礫・炭化物・小土器片あり

図37 5トレンチ 第3面 石敷炉53平・断面図

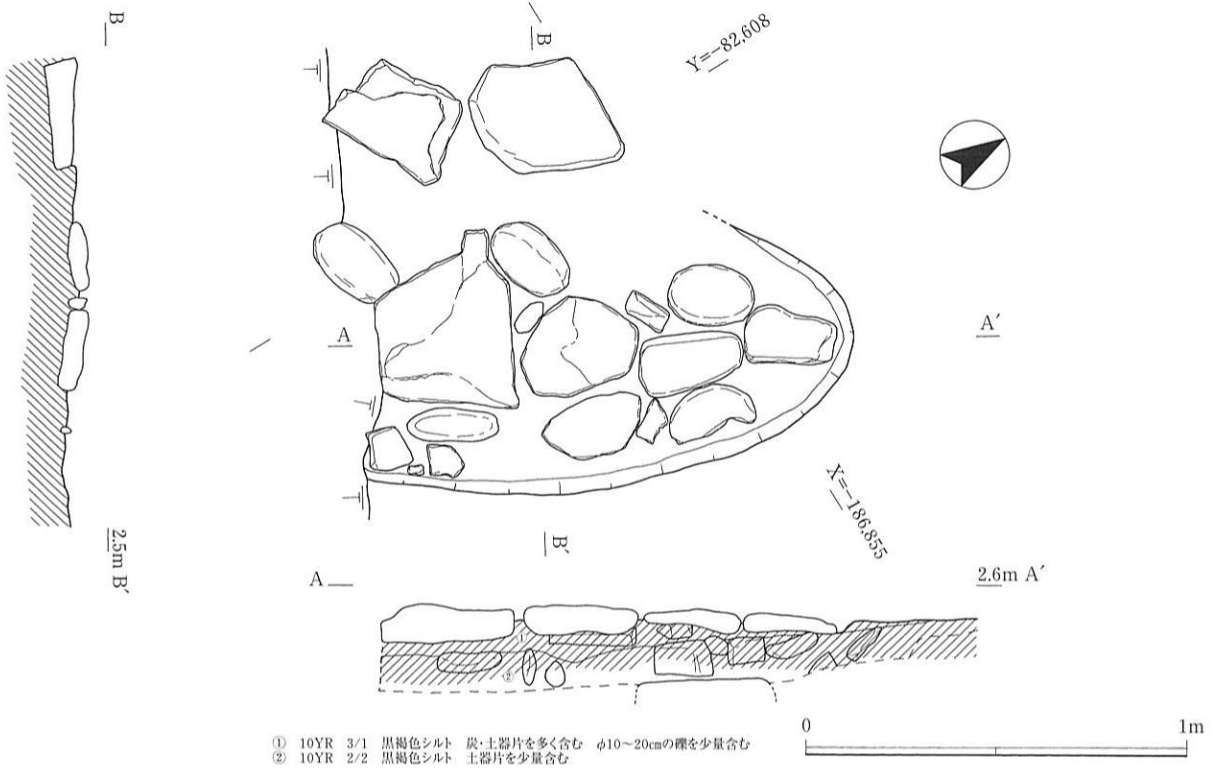


図38 5トレンチ 第3面 石敷炉32平・断面図

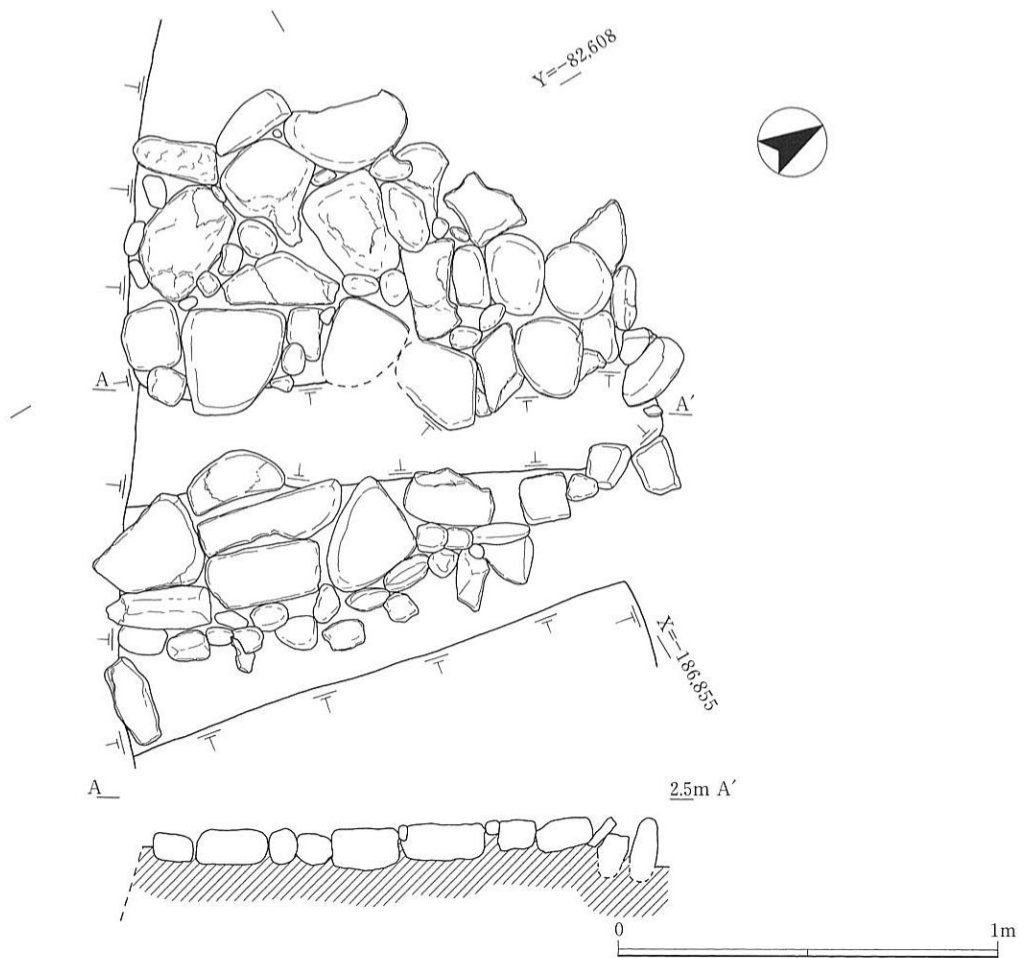


図39 5トレンチ 第3面 石敷炉39平・断面図

遺構は地床炉 1 基と石敷道路を検出した。

地床炉 31 は調査区の中央やや北よりに位置し、長径約 120 cm、短径約 60 cm の不整楕円形の範囲で赤変した焼土の広がりとして確認した。炉の南側では薄い炭層があったが、掘り込み等は確認できなかった。遺物を伴っていないため詳細な時期は不明であるが、4 層包含層出土の土器から弥生時代後期～古墳時代前期（布留式併行）と考えられる。

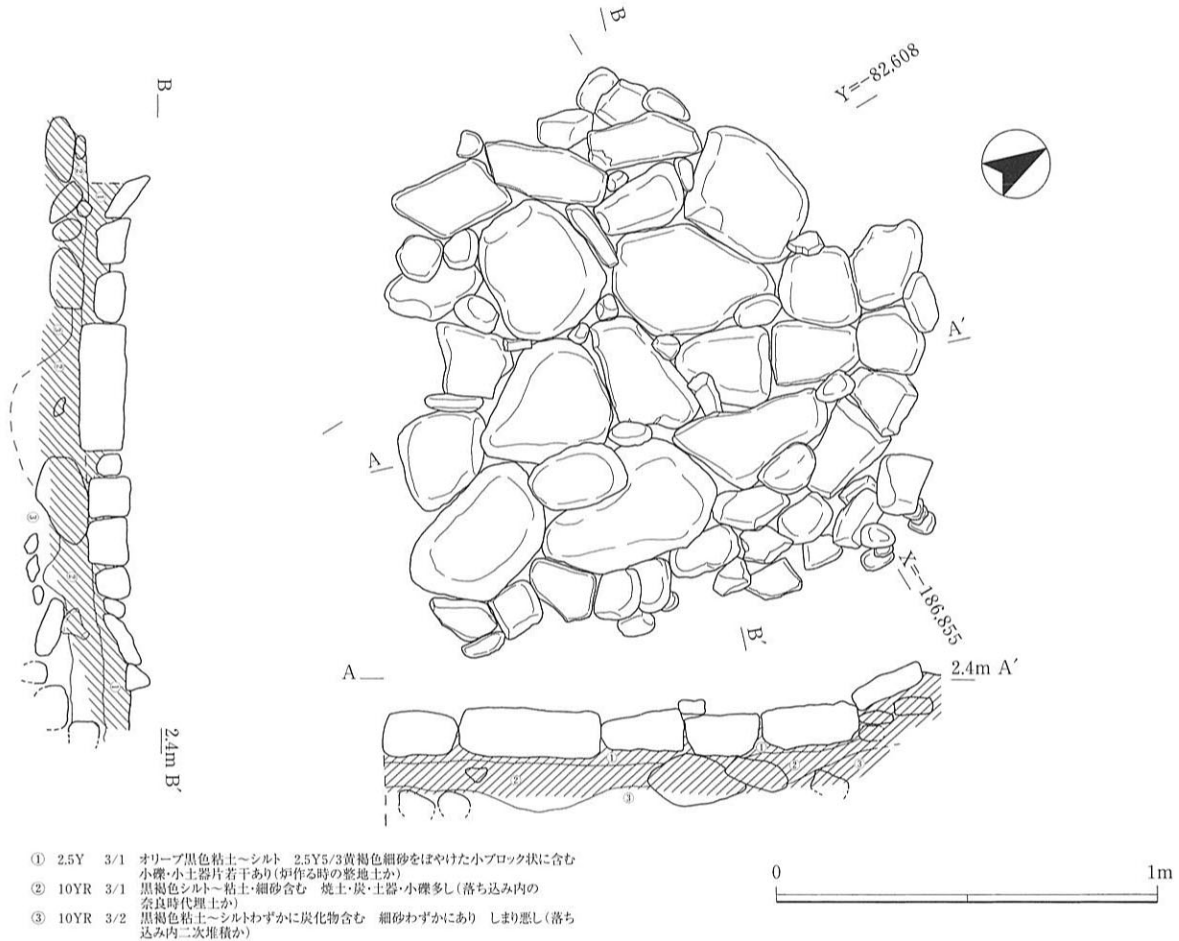


図 40 5 トレンチ 第 3 面 石敷炉 54 平・断面図

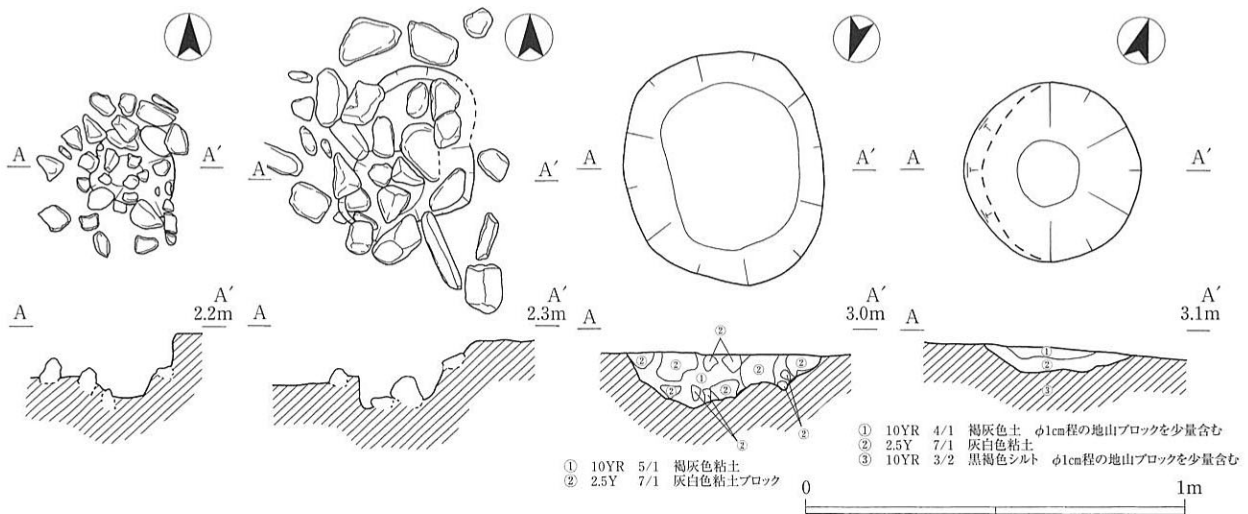


図 41 5 トレンチ 第 3 面
ピット 58 平・断面図

図 42 5 トレンチ 第 3 面
ピット 59 平・断面図

図 43 5 トレンチ 第 3 面
ピット 20 平・断面図

図 44 5 トレンチ 第 3 面
ピット 22 平・断面図

石敷道路 35 は調査区中央の窪地に位置し、調査区東辺の傾斜地形の裾部から調査区西辺の海浜堤を結ぶ格好で、北に弧を描きながら南東-北西方向に延びる。規模は上端幅約 1 m、長さ約 6.5 m で、幅約 25 cm、長さ約 50 cm 程の大きく細長い礫の頂部を合わせるように 2 列に配置し構成している。上面は各々の礫の面を揃えているが、全体的に南側に若干傾斜する。これらの上石の下には幅約 3.5 m の土台が存在しており、これはベース面に径 15 ~ 20 cm の礫を多数敷いた上に、炭や地山ブロックを多量に含む土で約 20 cm 盛りあげて構築している。この遺構が窪地に位置し海浜堤の頂部で止まること、また上面を揃えていることなどを勘案すると、道路の役割を果たした可能性が高い。時期は下部の盛土より弥生時代後期から庄内式併行の土器が出土していることから、庄内式併行と思われる。

第 5 面 (図 48・50 ~ 53)

当該面は、石積みの海浜堤の周囲に広がる低地に堆積した第 4 面の基盤層を除去して検出した。検出した主な遺構は地床炉、土坑などである。地床炉はいずれも石積みの海浜堤と浸食崖の間にある狭小な低地部分に分布する。地床炉はいずれも残りが悪く、遺構面と露出する礫が赤変している範囲は不定形を呈するものが殆どであり、上部構造の有無についても不明であった。地床炉 33・41 は調査区中央部に隣接して位置する。地床炉 33 の規模は概ね 1.0 × 2.6 m でレベルは 2.3 m を測る。地床炉 41 は赤変部分に分布する礫は比較的少ないが、いずれの礫の表面も熱による亀裂が入る。炉の規模は概ね 2.2 × 1.1 m でレベルは 2.3 m を測る。地床炉の 34・42・43 は地床炉 33 の南に位置する。地床炉 34 の規模は概ね 2.1 × 0.4 m の帯状を呈

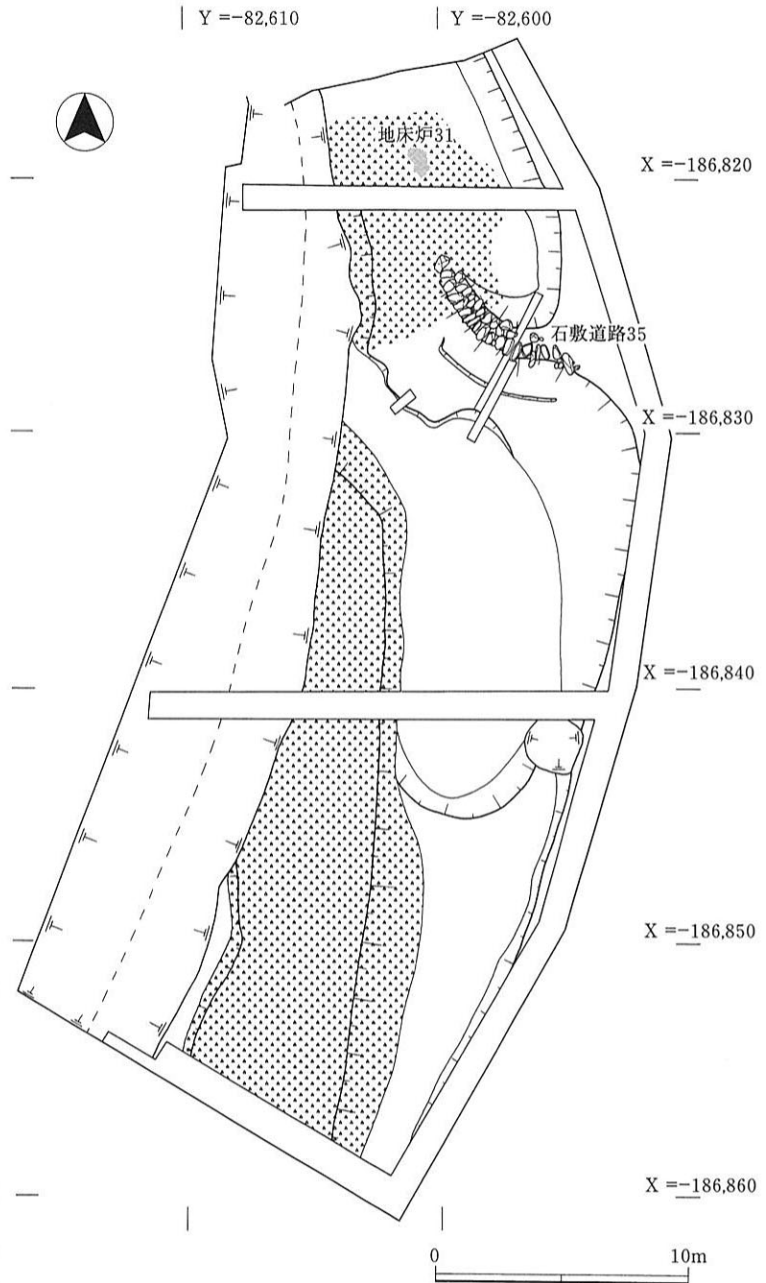


図 45 5 トレンチ 第 4 面 遺構平面図

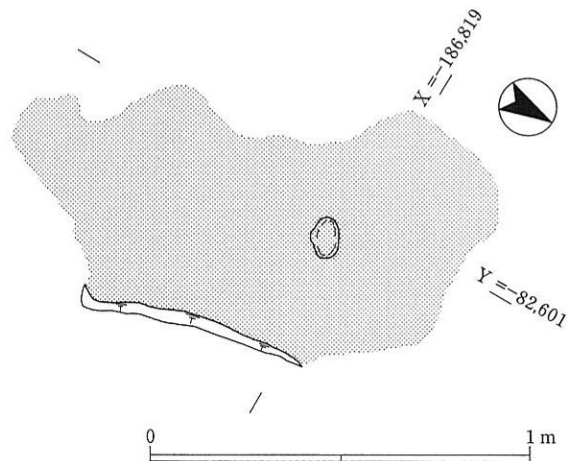
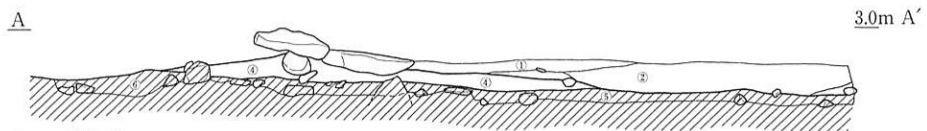
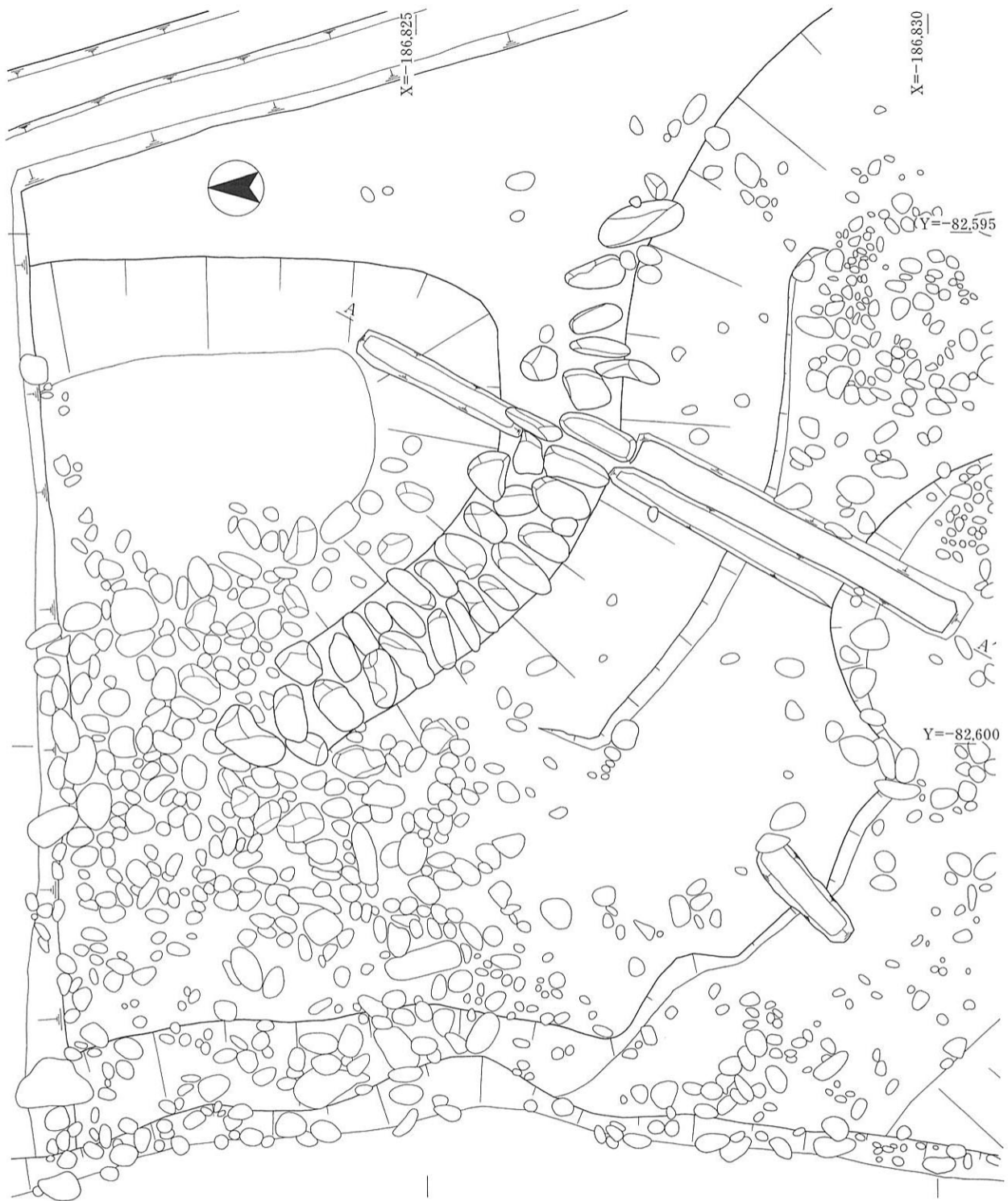


図 46 5 トレンチ 第 4 面 地床炉 31 平面図



- ① 10YR 4/1 褐灰色シルト I・II区間14層
- ② 10YR 3/1 黒褐色シルト I・II区間15層
- ③ 10YR 3/2 黒褐色細砂混シルトφ5~10mm程の地山塊を含む盛土の流土
- ④ 7.5YR 4/2 灰褐色シルト10YR5/2灰褐色の細砂ブロックを含む炭・土器片・φ3~10mm程の地山塊を含む盛土である
- ⑤ 10YR 3/1 黒褐色シルト 固く締まっている 炭・φ3~5mm程の地山ブロック含む
- ⑥ 10YR 3/1 黒褐色シルト 地山ブロック多く含む 第3遺構面ベース層 I・II区間20層

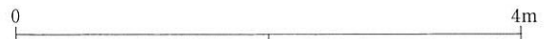


図 47 5 トレンチ 第 4 面 石敷道路 35 平・断面図

し、レベルは2.4 mを測る。地床炉42の規模は概ね0.9 × 0.7 m、レベル2.3 mを測る。地床炉43は側溝による削平を受けているため正確な規模は不明であるが、残存する規模は概ね1.2 × 0.5 m、レベル2.4 mを測る。地床炉36および51は調査区中央部北西隅に位置するが、比較的残りがよい。地床炉36は西辺を後世の汀線によって失うが、平面「コ」字状を呈し、規模は概ね2.4 × 1.6 m、レベルは2.0 mを測る。地床炉51は平面楕円形を呈し、規模は概ね1.9 × 1.4 m、レベルは2.0 mである。地床炉46は調査区の北半部に位置し、第4面の地床炉31の下層より検出した。炉内および炉の周囲に露出する礫は少ない。規模は概ね2.7 × 1.4 m、レベル2.0 mを測る。土坑52は地床炉46の南に位置し、平面砲弾形を呈する。長辺2.6 m、短辺1.5 m、深さ0.1 mを測る。なお、出土した遺物から当該面は弥生時代中期後葉に比定される。

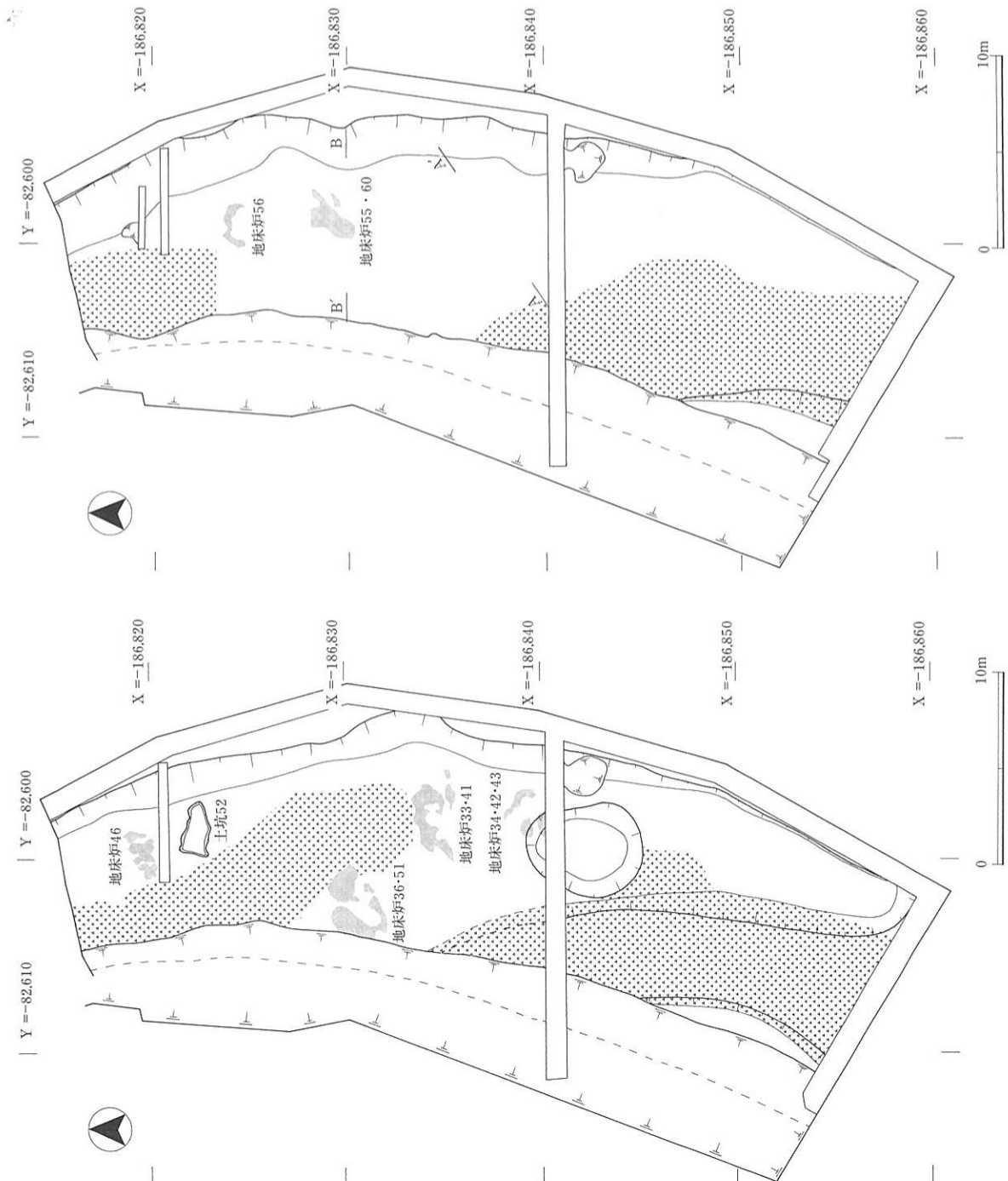


図 49 5 トレンチ 第6面 遺構平面図

図 48 5 トレンチ 第5面 遺構平面図

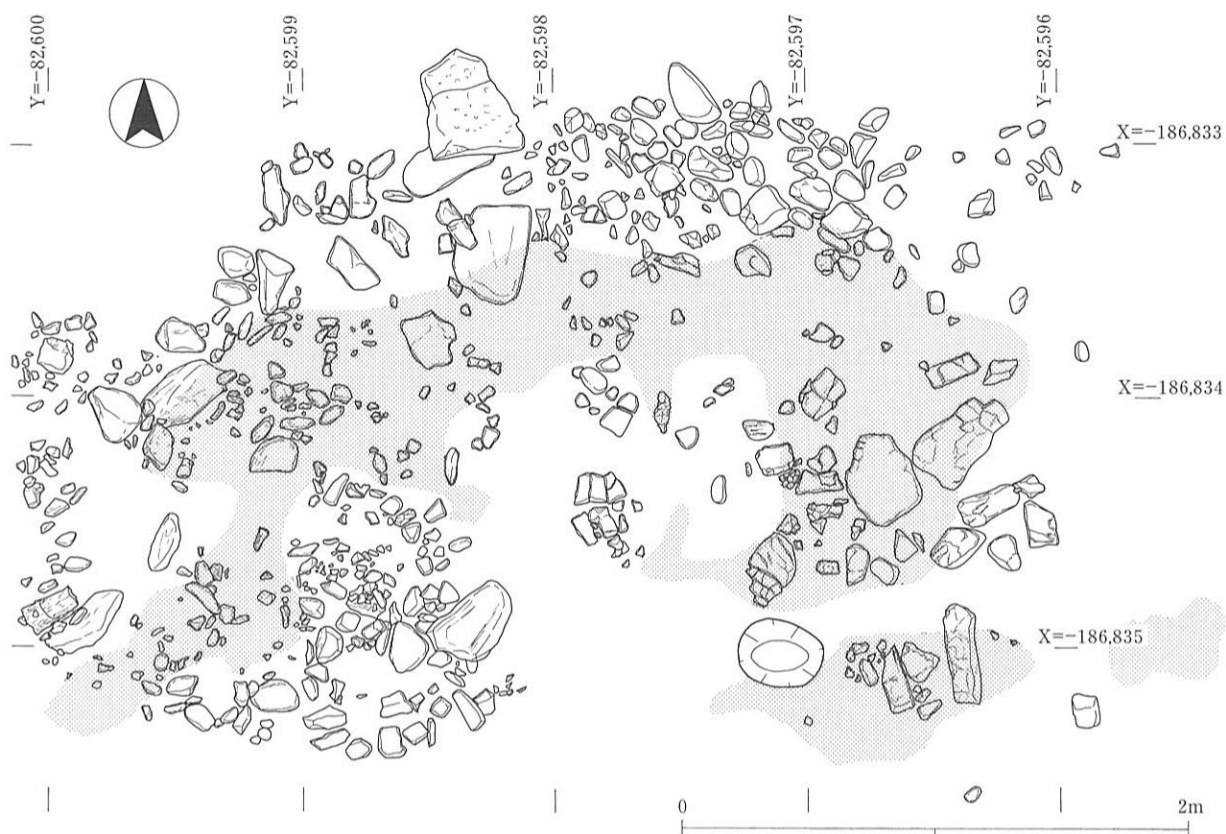


図50 5トレンチ 第5面 地床炉 33・41 平面図

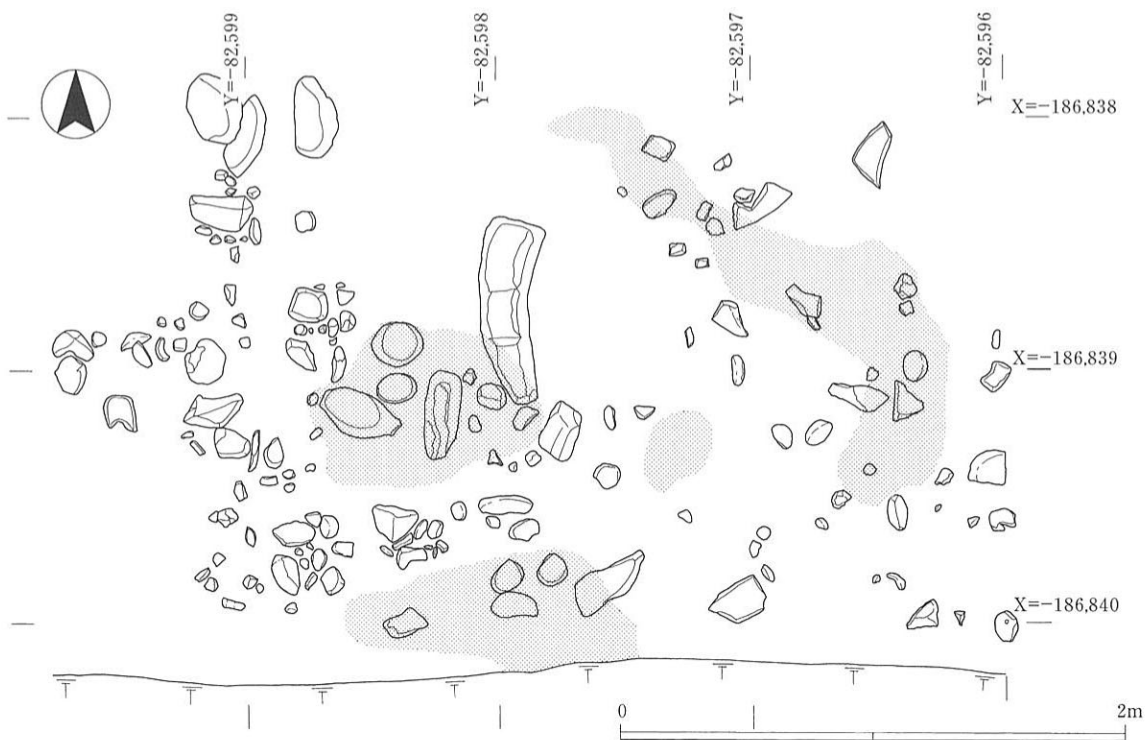


図51 5トレンチ 第5面 地床炉 34・42・43 平面図

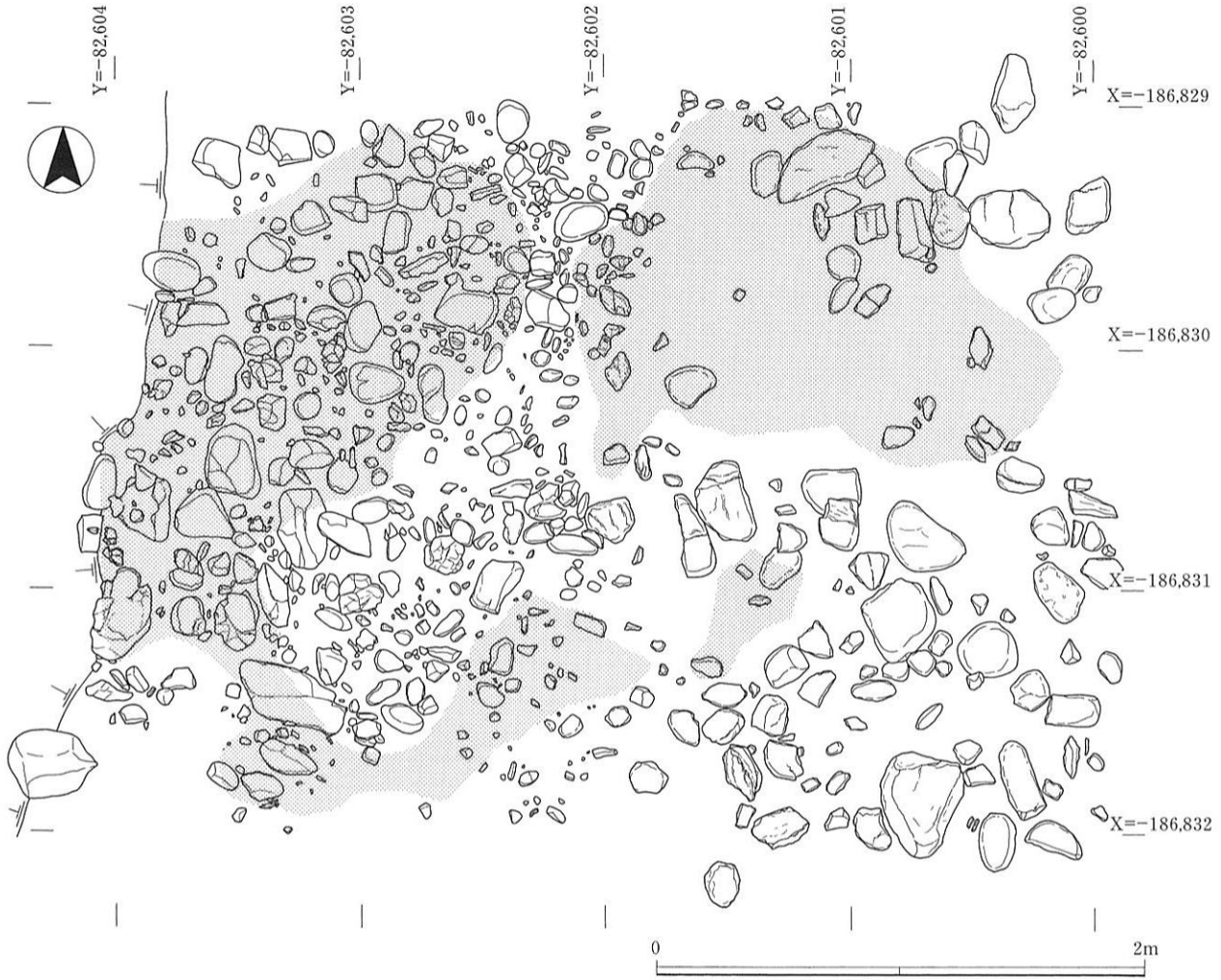


図 52 5 トレンチ 第 5 面 地床炉 36・51 平面図

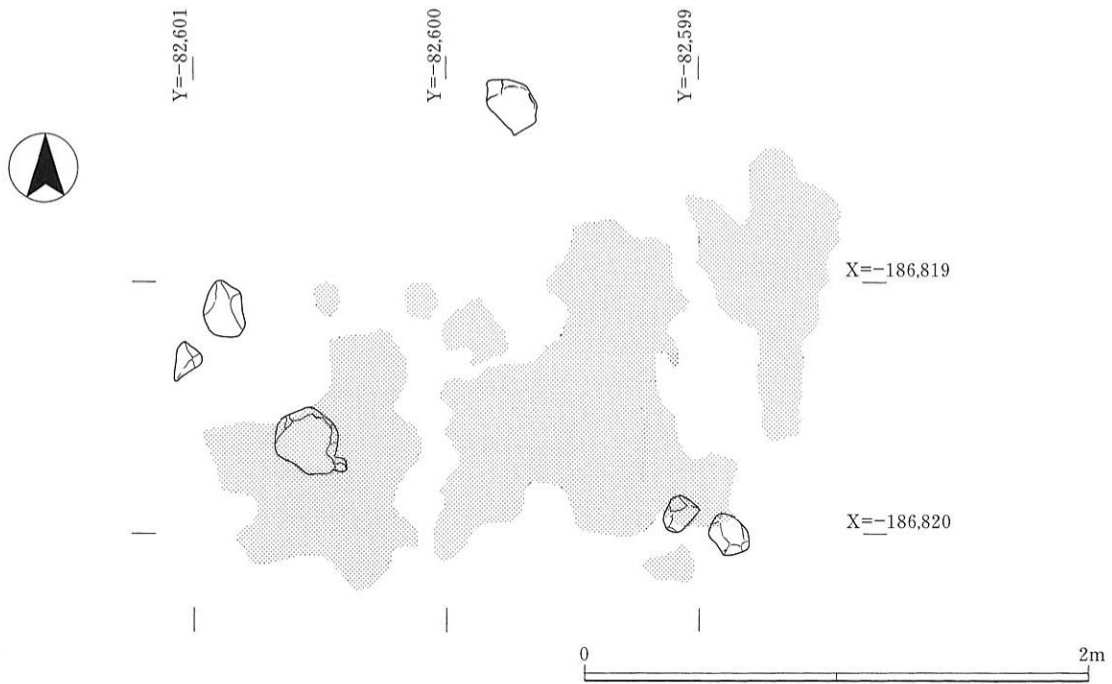


図 53 5 トレンチ 第 5 面 地床炉 46 平面図

第6面 (図49・54～57)

第5面の基盤層および石積みの海浜堤を除去して検出した。当該面も凹凸が激しい。検出した遺構は地床炉3基で、いずれも石積みの海浜堤と浸食崖の間にある狭小な低地部分に分布する。地床炉55は調査区の中央に位置し、概ね3.2×1.8mの範囲が赤変する。レベルは2.2mを測る。地床炉56は地床炉55の北約5mに位置し、帯状に広がる。レベルは2.1mを測る。地床炉60は地床炉55の下層に位置する。地山面より厚さ約5cm堆積する炭を多く含むシルト層の上面につくられており、レベルは2.1mを測る。出土した遺物から当該面は弥生時代前期後葉から中期後葉に比定される。

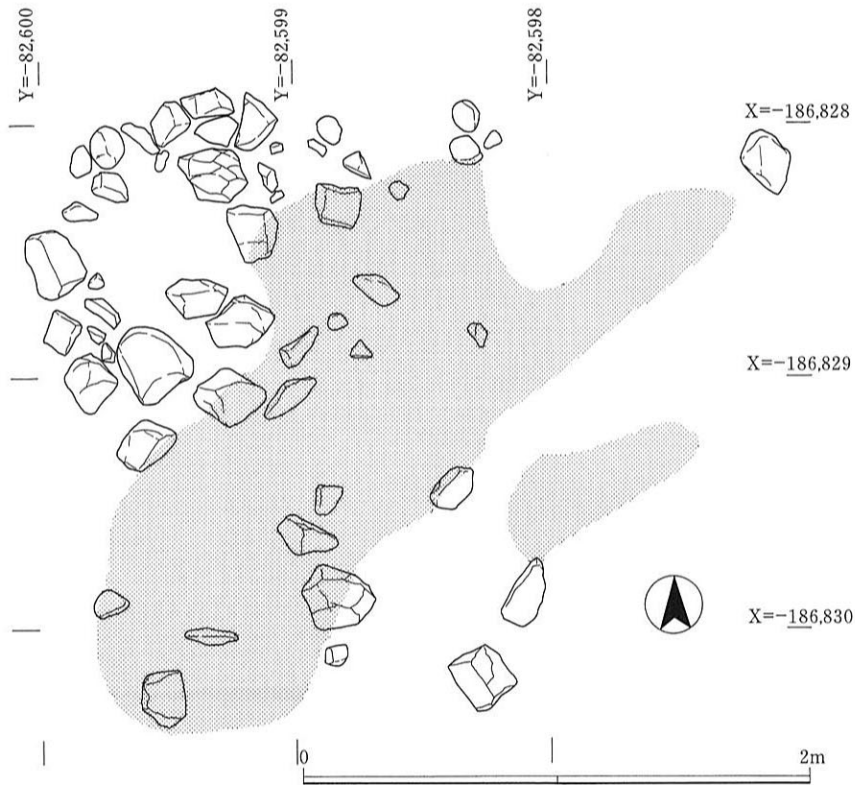


図54 5トレンチ 第6面 地床炉55平面図

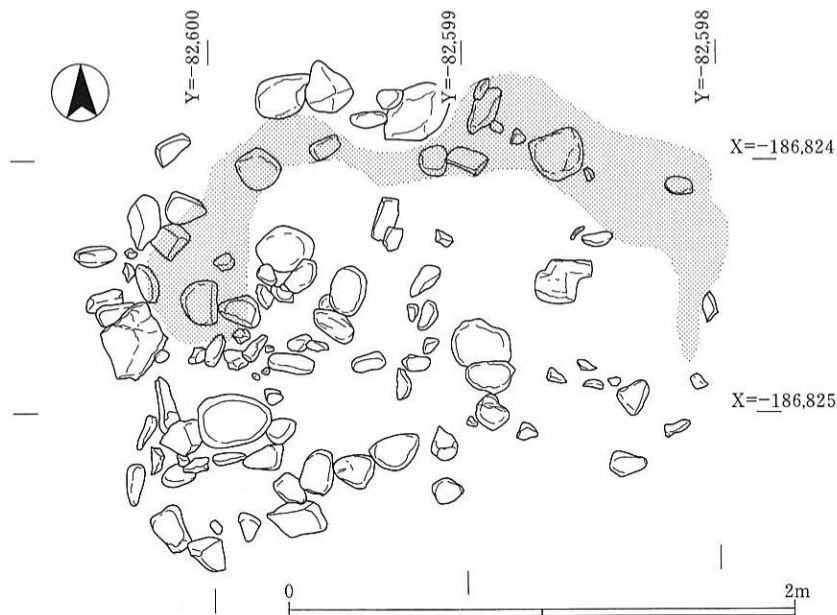
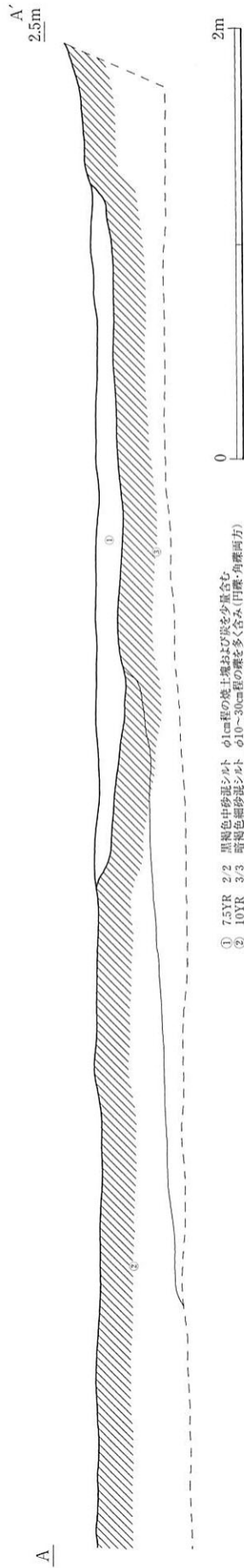
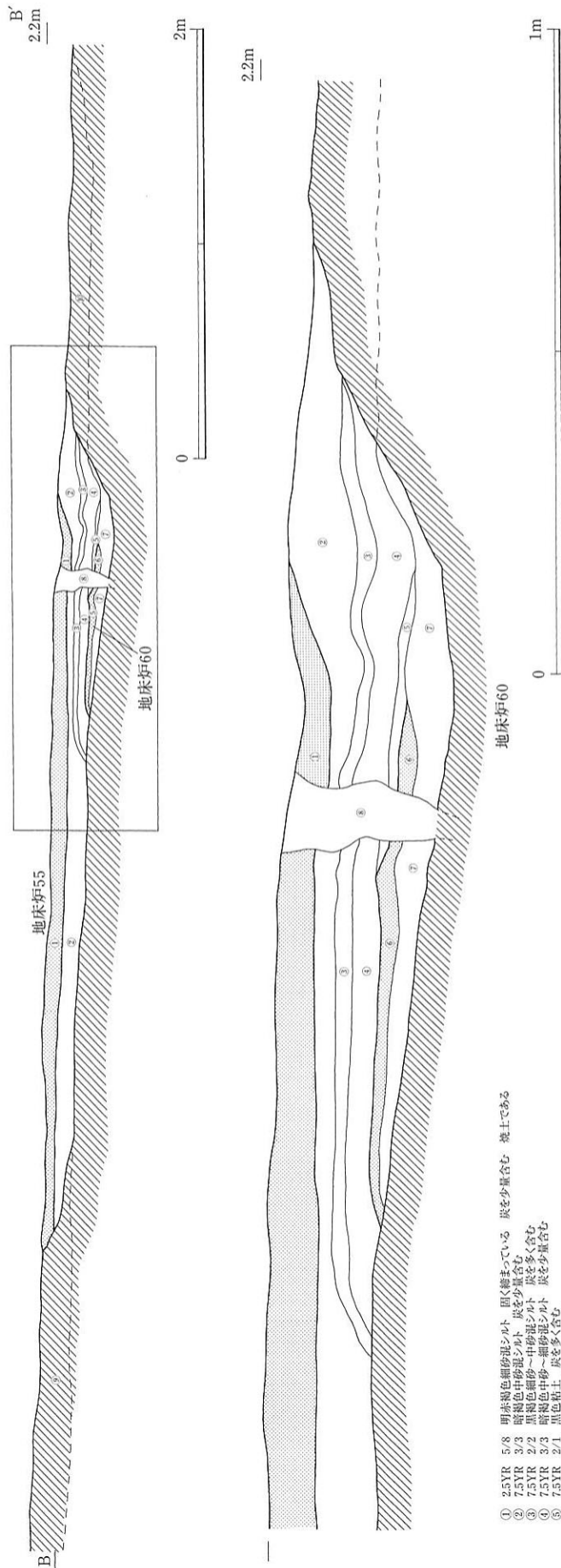


図55 5トレンチ 第6面 地床炉56平面図



- ① 7.5YR 2/2 黒褐色中砂混シルト φ1cm程の焼土塊および珪を少量含む
- ② 10YR 3/3 黒褐色細砂混シルト φ1cm程の珪を多く含む(甲標・角標両方)
- ③ 2.5Y 3/2 黒褐色シルト φ1~10cm程の礫を多く含む

図 56 5 トレンチ 第6面 断ち割り断面図



- ① 2.5YR 5/8 明赤褐色細砂混シルト 四く締まっている 炭を少量含む 焼土である
- ② 7.5YR 3/3 暗褐色中砂混シルト 炭を少量含む
- ③ 7.5YR 2/2 黒褐色細砂混シルト 炭を多く含む
- ④ 7.5YR 3/3 暗褐色中砂混シルト 炭を多く含む
- ⑤ 7.5YR 2/1 暗褐色細砂混シルト 炭を少量含む
- ⑥ 7.5YR 4/6 赤褐色土 炭を多く含む
- ⑦ 7.5YR 2/1 暗褐色細砂混シルト(粘粒強) 炭を多く含む
- ⑧ 7.5YR 2/2 暗褐色細砂混シルト(粘粒強) 炭を多く含むφ1cm程の焼土塊を少量含む
- ⑨ 10YR 2/2 黒褐色シルト土 φ1~3cm程の地山アログを多く含む 珪も少量含む
- ⑩ 10YR 3/3 暗褐色細砂混シルト φ10~30cm程の礫を多く含む(甲標・角標両方)

図 57 5 トレンチ 第6面 地床炉55・60断面図

c. 遺物

第1層出土遺物(図58) 1は磁器碗である。高台底部に離れ砂が残る。口縁部は彎曲しながら立ちあがる。高台径は6.2cmを測る。2は唐津窯の皿である。口縁は見込み部から上外方に立ちあがり、段を有して大きく開く。口唇部は上方につまみあげて収める。内面の段部分にヘラケズリを施すが、それ以外はナデで仕上げる。内・外面共に施釉しており、胎土は比較的精緻である。3は唐津窯の碗である。底部外面以外を施釉するが、見込み部には胎土目が、高台底部には離れ砂がそれぞれ残る。4は陶器の壺で、口縁部は折り返して丸く収める。径は8.8cmを測る。5は緑釉陶器の杯である。釉は内面に若干残っている程度である。底部外面はヘラケズリ調整を行う。6は須恵器杯身である。内・外面共にヨコナデによる調整を行う。底部端やや内側に高台を貼りつける。高台径は6.0cmを測る。7は土師器甕である。口縁部は上外方に開くが、口唇部は内側につまみあげて丸く収める。8～11は土師質の土錘である。8は有溝土錘である。四方に溝を巡らすもので、溝端部は紐擦れによる磨滅がみられる。長さ7.9cm、最大径4.6cmを測る。9は棒状土錘である。丸く棒状に成形した後、両端に径5mmの孔を穿つ。長さ7.7cm、径1.5cmを測る。10・11は管状土錘である。10は長さ4.2cm、径1.6cmを測る。11は紡錘形を呈し、長さ4.0cm、最大径1.4cmを測る。

12・13は脚台Ⅱ式aの製塩土器である。12は脚裾端部に幅広の面をもち、外面はタタキ調整、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。13は脚部内面の凹みがほとんどなく平底状を呈する。体部外面にタタキ調整、内面に棒状工具によるオサエを施す。14は脚台Ⅱ式bで、脚高、脚裾径が一回り小さい。脚部外面にユビオサエを施し、体部内面に板状工具の圧痕が残る。

15はサヌカイト製の凸基有茎式石鏃であるが、先端部は欠損する。

第2層出土遺物(図59・60) 16は青磁碗底部である。高台径は3.9cmを測る。17は土師質の移動式竈である。口縁端部は面を有し、内面は指頭圧痕が残る。断面台形を呈する鋸が巡る。内径は24.0cmを測る。18は巴紋軒丸瓦である。復原径は13.0cmを測る。19は土師器碗である。内・外面共にヨコナデによる調整を行う。「ハ」字状に広がる高台は端部を丸く収める。高台径は9.2cmを測る。

20～23は須恵器である。20は杯蓋である。口縁端部は面をつくり、下方へつまみ出す。径は

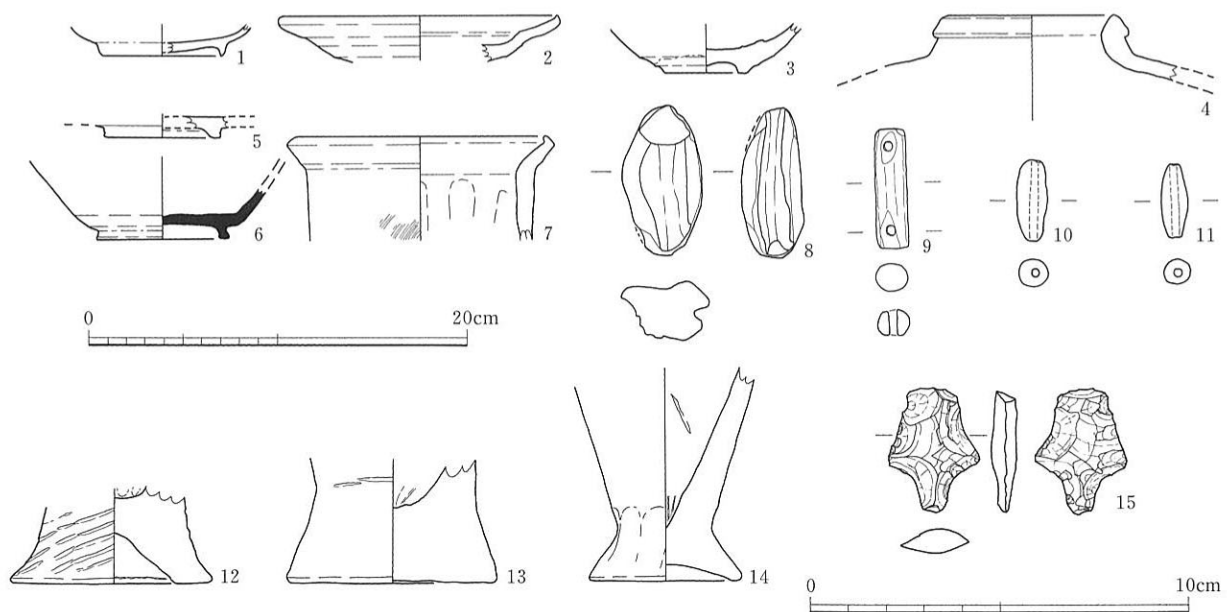


図58 第1層 出土遺物

15.8 cmを測る。21は杯身である。口縁部は上外方に広がりながら立ちあがり、端部は丸く収める。径は12.6 cmである。22は平瓶である。体部最大径は22.0 cmを測る。内・外面共にヨコナデを行う。23は壺である。断面台形状の高台がつく。内面はヨコナデを施すが、外面はヘラケズリ調整を行う。

24～30は土師器である。24～26は杯である。24は口縁部内面に暗紋状の沈線を施す。口径は15.2 cm、高さ2.2 cmを測る。25は残りが悪く口縁部のみ残存する。口縁端部を丸く収め内面に暗紋状の沈線を施す。径は17.8 cmである。26はやや外反しながら立ちあがり、口縁端部に面をもつ。見込み部には斜放射状暗紋を施す。外面底部にはヘラケズリがみられるが、その他はヨコナデである。27・28は甕である。27の口縁部は大きく外反しながら立ちあがり、端部は面を有する。口縁部の調整はヨコナデを行うが、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整を行う。口縁部径は27.4 cmを測る。28は真っ直ぐあがる体部に、大きく外反する口縁部をもつ。口縁部および体部内面はヨコナデを、外面体部はハケメをそれぞれ施す。29・30は壺である。29は二重口縁壺の口縁部で、大きく横に開いた後、上外方へ真っ直ぐ立ちあがり、口縁端部は面をもつ。調整は内面は磨耗が著しいため不明であるが、外面はヘラミガキを行う。また、口縁部下部に円形浮紋を貼りつける。口径14.4 cmを測る。30は壺の口縁部である。大きく開く頸部から上下につまみ出して面をつくり、円形浮紋を貼りつける。端部は面を有し、刻目紋を施す。口縁部下段には径0.8 cmの焼成前穿孔をもつ。口径19.0 cmを測る。

31～36は弥生土器である。31は壺である。大きく開く口縁をもち、端部をつまみあげて面をつくり、3条の凹線を施す。内・外面共にハケメ調整を行う。32は壺体部である。櫛描紋と波状紋を交互に施す。また、体部中央部に靨痕が残る。33は甕である。口縁部は横に開き、端部をつまみあげる。体部外面はタタキ調整を、内面にはヘラケズリ調整を行う。34はミニチュアの壺である。口縁部は欠損する。内面には指頭圧痕が残る。36は手焙形土器である。底部および覆部は欠損する。体部下段に刻目紋をもつ貼り付け突帯を巡らせる他、鉢部と覆部との境にも刻目紋を施す。

37～44は土師質の土錘である。37は有溝土錘で下半部は欠損する。38～44は管状土錘である。38は下半部を欠損するが、径4.8 cmを測る大型のものである。39～44は小振りのもので径0.8～1.8 cmを測る。

45～53は製塩土器である。45は丸底Ⅱ式で、精緻な胎土をもつ。口縁部は鉢状に大きく開き、丸く収める。体部は器厚が2 mmと薄く、内面に段をもつ。外面には接合痕が残る。

46～52は丸底Ⅲ式である。46はやや内傾しながら立ちあがる。口縁端部は面をもつが未調整である。これは成形時に口縁部を下にして裾えたためと考えられる。外面には指圧痕が顕著に残るが、内面は平滑に仕上げる。また、内・外面共に二次焼成時の剥離がみられる。内径は6.1 cmを測る。47は内傾気味に立ちあがる。外面の指圧痕は顕著であるが、内面は僅かに残るのみである。内径は7.0 cmを測る。48はやや外に開きながら立ちあがる。内・外面共に指圧痕が残るが、内面はナデで平滑に仕上げる。内径は6.0 cmを測る。49は体部下半部はやや開き気味に立ちあがるが、上半部は真っ直ぐ立ちあがり、端部は丸く収める。内・外面共に指圧痕が残るが、内面は平滑に仕上げる。内径は8.8 cmを測る。50は口縁端部を肥大させながら外側へ開く。外面は指圧痕が残るが、内面はナデで平滑に仕上げる。内径は7.4 cmである。51は開き気味に立ちあがり、口縁端部を外側へ大きく折り曲げる。外面は指圧痕が残るが、内面はナデによって平滑に仕上げる。内径は6.0 cmを測る。52は口縁部を肥大させながら上外方に立ちあげ、端部を大きく外に開く。内径は6.2 cmを測る。

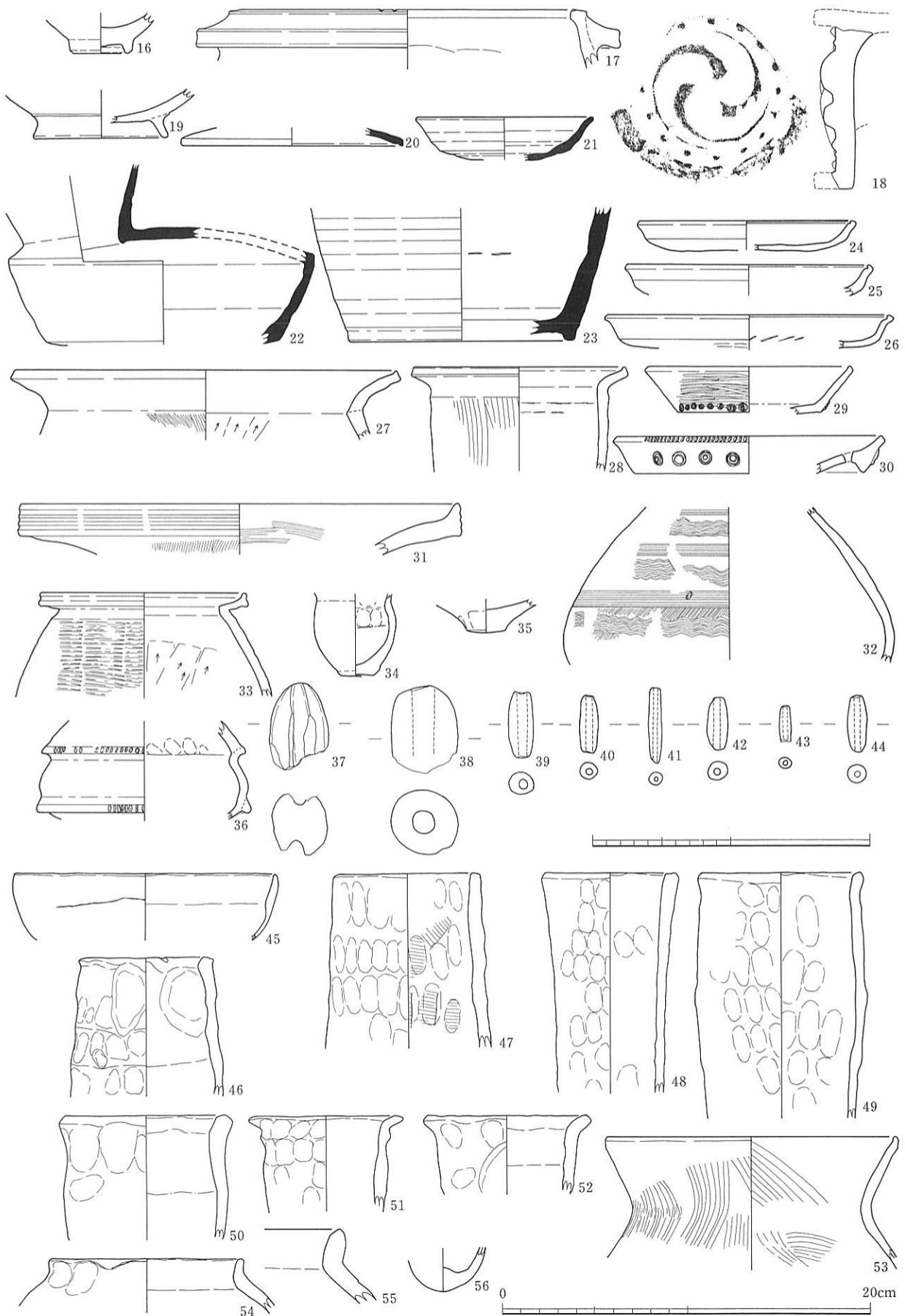


图 59 第 2 层 出土遗物 (1)

53は甕形製塩土器である。口縁部は真っ直ぐ上外方に立ちあがり、端部は内彎させて丸く収める。内・外面共にハケメ調整を施す。二次的な被火により赤変する。口径15.4cmを測る。54・55は椀形製塩である。54は厚みのある器壁をもち、口縁部は上方につまみあげて丸く収める。外面には指圧痕が残り、内面はナデ調整を行う。口径は10.0cmを測る。56は丸底Ⅲ式の底部である。器厚は0.4cmを測るが、底部厚は1.3cmと内側にへそ状に盛りあがる。

57・58は脚台Ⅰ式aの製塩土器で、脚部が特に高く脚裾径も大きい。57は脚部外面にタタキ調整を行うが、上位と下位とでタタキ目の方向が若干異なる。体部が剥がれた箇所には擬口縁が確認できるが、この部分にもタタキ目が確認できることから、体部接合前に脚部のタタキ調整を行っていることが判る。脚部内面には粘土の接合痕が確認できる。58は外面下位にタタキ調整、上位はその後に縦方向のナデ調整を行いタタキ目を消す。59は脚台Ⅰ式bで、体部が剥がれ擬口縁が確認できる。

60・61は脚台Ⅱ式aである。60は外面タタキ調整の後、縦方向のナデ調整を行う。脚裾端部内面

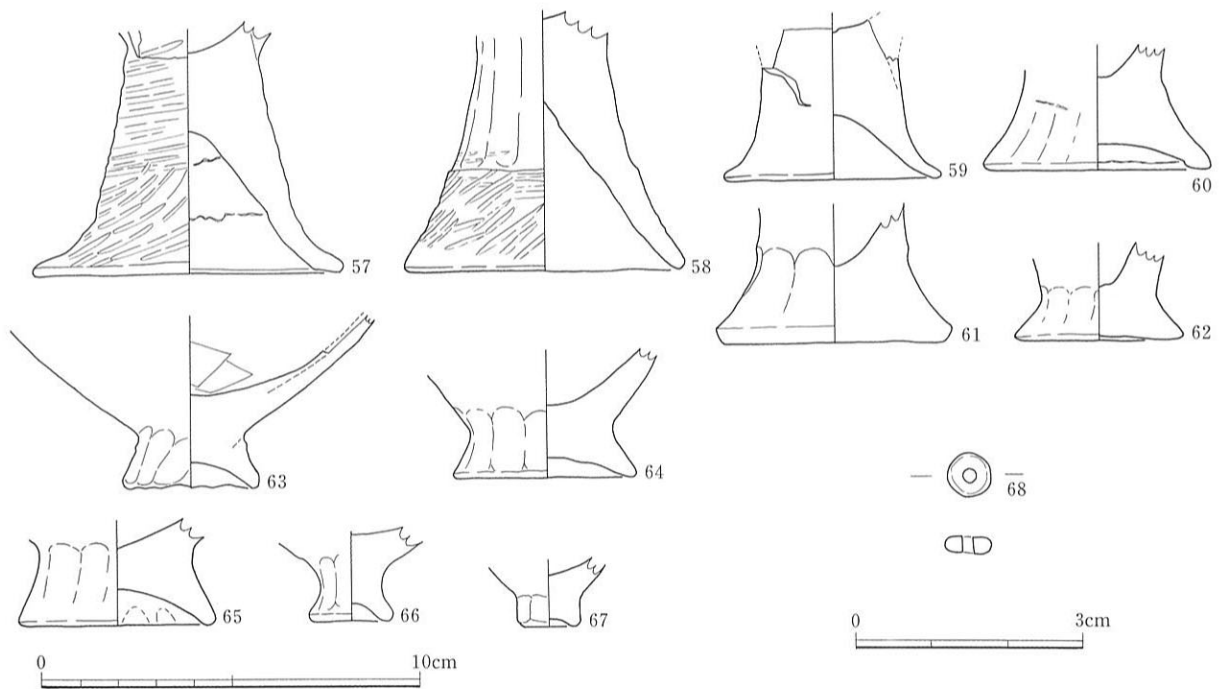


図60 第2層 出土遺物(2)

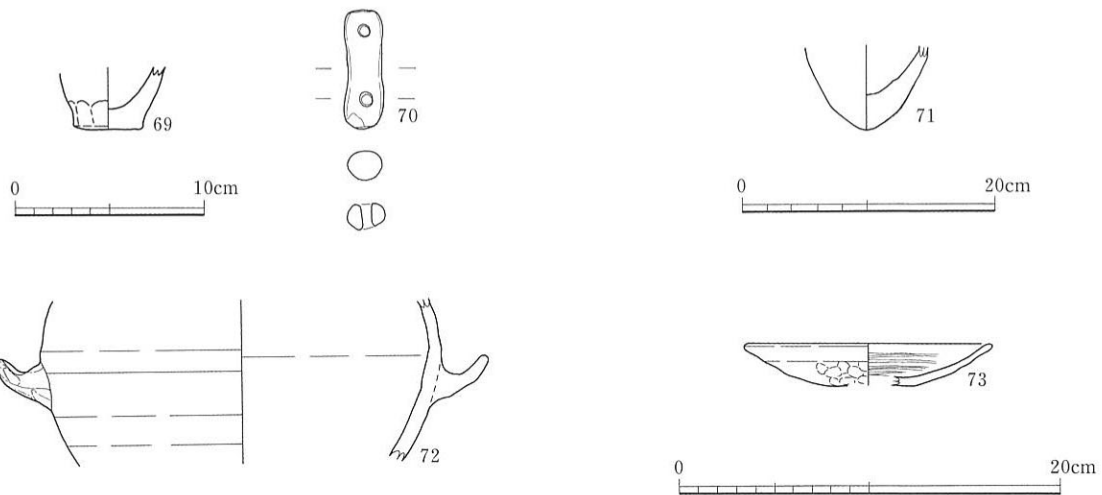


図61 第2面出土遺物

に粘土を内側に折り返したと思われる痕跡が残る。61は脚部内面の凹みがほとんどなく平底状を呈する。62は脚台Ⅱ式bで平底状を呈する。

63～65は脚台Ⅲ式である。脚部外面は全てユビオサエを施す。63は体部内面に板ナデ調整を行う。65は脚部内面にユビオサエを施す。

66・67は脚台Ⅳ式である。体部はナデ調整で、脚部にユビオサエを施す。67は脚部が退化し裾が広がらない。

68は滑石製白玉である。縁を丸く仕上げる。径0.6cm、厚さ0.2cm、孔径0.1cmである。

第2面出土遺物(図61) 70は土師質の棒状土錘である。長さ6.2cm、径1.7cmを測る。径0.5cmの穿孔を有する。71は丸底Ⅲ式の製塩土器の底部である。72は須恵器の鉢体部で、石敷炉の上面5より出土した。下半部はヘラケズリ調整を、上半部および内面はヨコナデを施す。体部下半に把手を有する。73は瓦器皿である。口縁部はナデによって仕上げ、端部を丸く収める。外面には指頭圧痕が残り、内面は僅かに暗紋を施す。口径12.6cm、器高2.2cmを測り、全体に灰白色を呈す。上層からの混入である。

第3層出土遺物(図62～66) 74～104は須恵器である。74～80は杯蓋である。74は口縁部内面にかえりをもち、端部は面を成す。天井部はふくらみをもつが、ヘラケズリにより平らに仕上げ、偏平なつまみをつける。口径15.1cm、器高3.0cmを測る。75は口縁端部を下方に屈曲する。口径14.0cmを測る。76は概ね平坦な天井部をもち、偏平な宝珠形つまみがつく。口縁部との境は段をなし、口縁端部は下方に屈曲させる。口径16.1cm、器高2.9cmを測る。77は概ね平坦な天井部をもち、口縁端部は丸く収める。口径は18.1cmである。78はほぼ平坦な天井部をもち、口縁端部は下外方へ屈曲させ丸く収める。口径は20.8cmを測る。80は天井部はややふくらみをもち、偏平な宝珠形つまみがつく。口縁部は下方へ屈曲して先端に稜をもつ。天井部およびつまみ部にヘラ状工具による線刻がみられる。口径17.0cm、器高3.0cmを測る。81～89は杯身である。81は外上方へのびる口縁をもち、底部外面にはヘラケズリ調整、その他はヨコナデを施す。口径は12.4cm、残存高は4.1cmを測る。82はほぼ平坦な底部をもち、口縁部は体部との境界で大きく彎曲しながら外上方へ立ちあがり、端部は丸く収める。口径は13.4cm、残存高3.1cmを測る。83は断面台形の高台をもち、口縁部は外上方に真っ直ぐのびて、端部はやや肥大しながら丸く収める。調整はヨコナデであるが、底部外面は未調整である。口径15.2cm、器高4.6cmを測る。84は平坦な底部に真っ直ぐ外上方へのびる口縁部をもつ。高台は底部端のやや内側につく。口径は10.0cm、器高は3.6cmを測る。85は概ね平坦な底部に真っ直ぐ外上方に立ちあがる口縁部をもち、端部は丸く収める。高台は底部端付近につく。口径は13.8cm、器高は3.8cmを測る。86は概ね平坦な底部に大きく開く口縁部をもち、端部は丸く収める。高台は断面台形で底部端につく。口径15.8cm、器高4.5cmを測る。87は平坦な底部をもつが、口縁部は欠損する。高台は底部端付近につく。88は底部のみである。底部端に断面正方形の高台がつく。89は底部のみで、底部端の内側に高台がつく。90は壺である。体部と頸部の境界部分が欠損する。頸部はラッパ状に広がり、端部は大きく外へ折り曲げて丸く収める。体部は肩部に稜線をもち、底部端に高台がつく。体部外面はヘラケズリを、後はヨコナデによる調整を行う。口径は10.0cm、復原器高は16.0cm、体部最大径は16.0cmである。また、肩部および底部内面には自然釉が残る。91は壺の口頸部である。頸部は外反しながらのびて大きく広げたのち、端部はつまみあげて面をなす。口径7.2cmを測る。92は壺体部下半部である。底部端に断面台形の高台が「ハ」字状

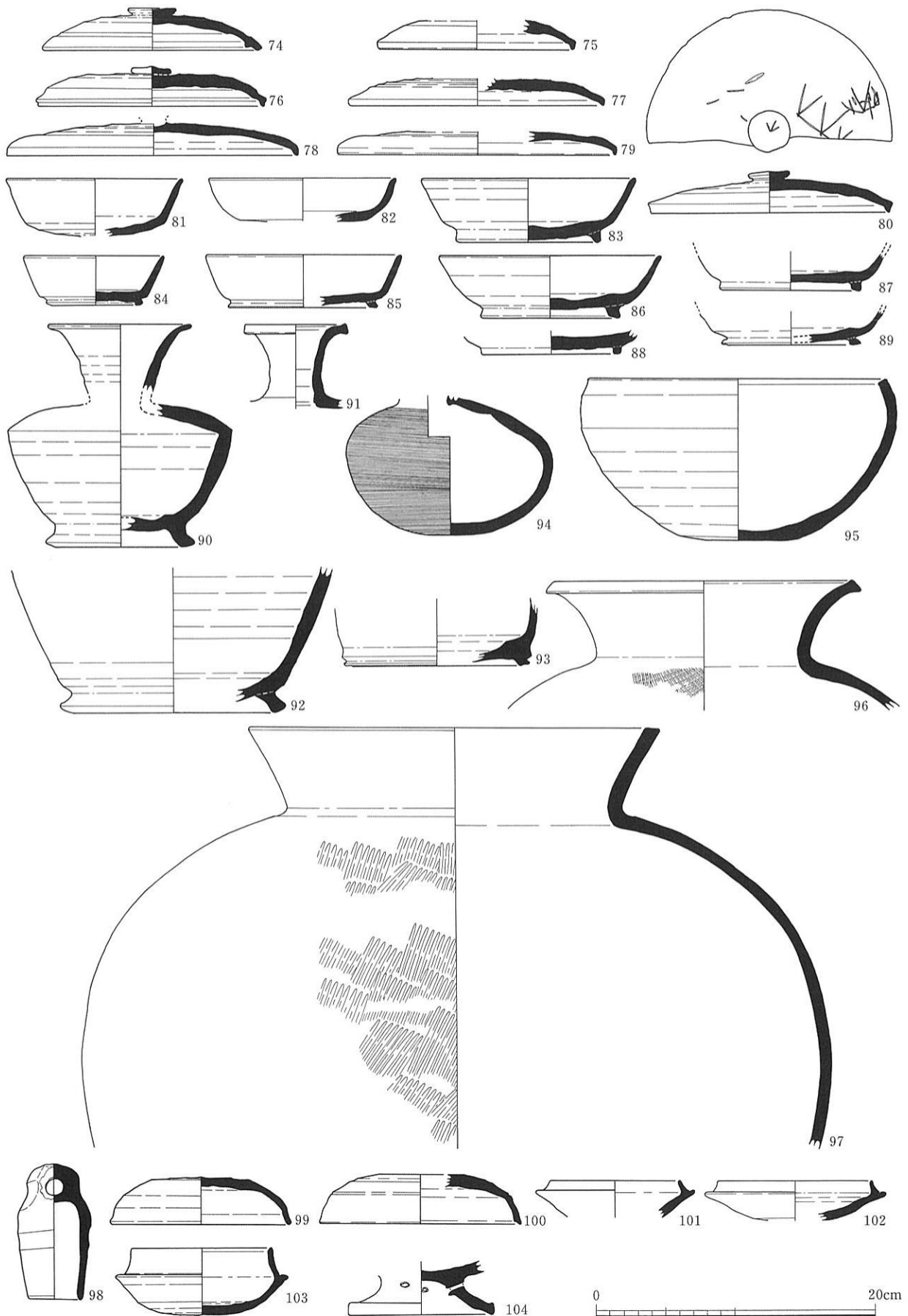


图62 第3層 出土遺物(1)

につく。底径は14.5 cmを測る。93は壺底部である。高台は底部端につき、底径12.0 cmを測る。94は平瓶の体部である。頸部および口縁部は欠損する。扁平な球状を呈し、外面にはカキメを施す。体部最大径は14.8 cmを測る。95は鉄鉢である。平坦な底部から彎曲しながら大きく広がり、口縁部は内傾する。口縁端部は面をなす。体部外面はヘラケズリを、その他はヨコナデによる調整を行うが、底部は無調整である。口径21.0 cm、器高11.6 cm、体部最大径22.6 cmを測る。96・97は甕である。96は肩部および頸部のみ残る。緩やかに広がる肩部の外面には格子目タタキを施す。頸部は大きく外反しながらのび、口縁端部は面をなす。口径は21.2 cmを測る。97は底部を欠損する。頸部は真っ直ぐ外上方にのび、口縁端部は面をなす。肩部は球形に広がり、外面を平行タタキで調整したのち、横方向のナデを施す。内面はヨコナデによる調整を行うが、体部下半には指頭圧痕が残る。口径29.4 cm、体部最大径54.0 cmを測る。98は蜻壺である。釣鐘状を呈し、天井部に径1.2 cmの孔を穿つ。体部はやや内傾しながら内下方にのび、口縁端部を丸く収める。口径3.6 cm、器高9.8 cm、体部最大径5.3 cmを測る。99～104は下層からの混入である。99・100は杯蓋である。99は概ね平坦な底部をもち、体部は彎曲しながらのびて、口縁端部を丸く収める。口径は12.8 cm、器高は3.4 cmを測る。100は天井部を欠損する。彎曲しながらのびる口縁は端部に段をもつ。口径14.4 cm、残存高3.6 cmを測る。101～103は杯身である。101・102は底部を欠損する。103は概ね平坦な底部をもつ。体部は彎曲しながら広がり、口縁部は内傾しながら立ちあがる。口縁端部の内側に段が残る。見込み部に仕上げナデを施す。口径10.0 cm、器高4.8 cmを測る。104は高杯脚部である。脚部は短く、大きく外反しながら開き、端部に面をなす。棒状工具による径5 mmの穿孔が3箇所みられる。底径は10.0 cmを測る。

105～138は土師器である。105・106は杯である。105は口縁端部は丸く収めるが、内側に沈線が入る。内面に斜放射状暗紋と螺旋状の暗紋を施す。口径18.4 cmを測る。106は外上方にのびる口縁部をもち、端部を丸く収めるが、内側に僅かに段をもつ。内面の調整は磨滅が著しく不明であるが、外面は横方向のヘラミガキを施す。口径は16.0 cmを測る。107は杯である。口縁部は内彎しながら立ちあがり、端部は丸く収める。外面に指頭圧痕が残る。口径11.4 cmを測る。108～114は甕である。108は外上方に立ちあがる口縁をもち、端部は内側につまみあげる。口径14.8 cmを測る。109の口縁部は内彎気味に立ちあがり、端部は内側につまみあげる。体部内面はヘラケズリ調整を行う。口径は11.4 cmを測る。110は外上方に立ちあがる口縁部をもち、端部はつまみあげて面をつくる。体部外面はハケメ調整を、内面はハケメの後ヘラケズリを行う。111は大きく外に開く口縁部をもち、端部を上方につまみあげて面をなす。口径は20.6 cmを測る。112は外上方にのびる口縁部をもち、端部を内側につまみあげて面をなす。肩部はあまり広がらない。口径は16.6 cmを測る。113は口縁部が大きく外上方に開き、端部は面をなす。体部はあまり広がらずに収まる。体部内面はヘラケズリ後粗いナデを、外面はハケメを施す。口径は12.2 cmを測る。114は外反しながらのびる口縁部をもち、端部は水平な面をなす。口縁部外面には粘土紐の接合痕が残る。口径は19.2 cmを測る。115～124は壺である。115は口縁部で、端部をやや肥大させながら外反する。116は口縁が外反しながらのびるが、端部は外側に折り曲げて丸く収める。117は真っ直ぐ外上方に広がる口縁をもち、端部を丸く収める。体部は大きく張り球形を呈する。内面には指頭圧痕が顕著に残る。口径は14.4 cmを測る。118は口縁端部を内側につまみあげて面をなす。119は口縁部が真っ直ぐ外上方にのび、端部は水平に面をなす。120～124は二重口縁壺の口縁部である。120は大きく横に開く口縁に外上方にの

びて面をつくり、沈線を施した後、上下2段に円形浮紋を貼りつける。口径は 18.8 cmを測る。121は頸部から大きく開いた後、外上方に立ちあがり、端部を丸く収める。口径は 18.0 cmを測る。122は頸部からはほぼ真っ直ぐ横方向に広がり、やや開き気味に真っ直ぐ立ちあがる。口径は 19.5 cmを測

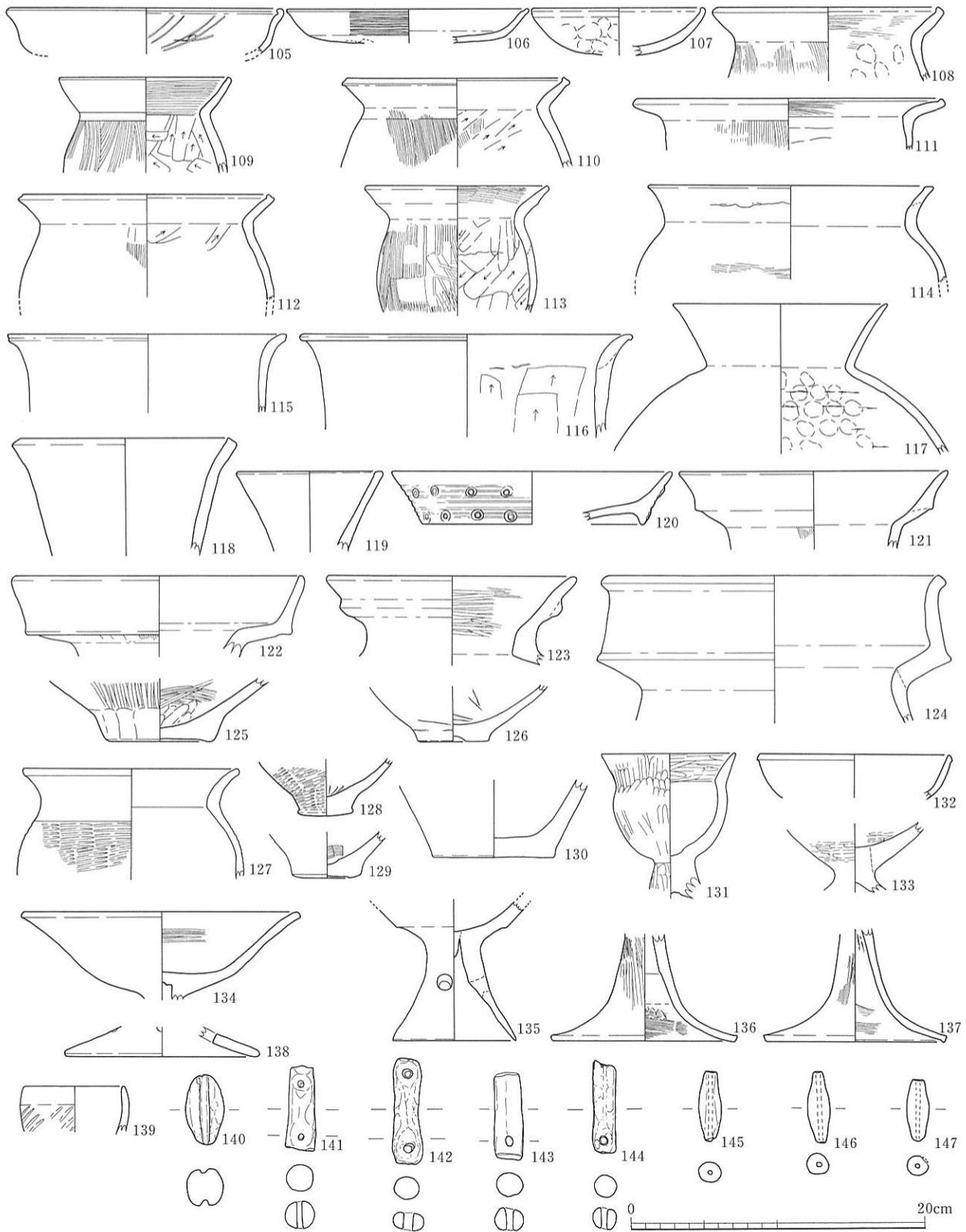


図63 第3層 出土遺物(2)

る。123は太い頸部から明確な段をもたずに広がり、端部を丸く収める。また頸部と口縁部の境に断面台形の突帯を貼りつける。内面はハケメの後ヘラミガキを、外面はナデを施す。口径は16.6cmを測る。124は頸部から大きく横に張り出した後、内傾しながら立ちあがり、端部は外側へ折り返して面をなす。口径は22.4cmを測る。125～137は弥生土器である。125・126・130は壺底部である。125はややあげ底気味の底部をもち、外上方へ大きく広がる。底径は6.8cmを測る。126の体部は底部からやや内彎しながら広がる。底径は4.8cmを測る。130はほぼ平坦な底部をもち、外上方にのびる。127～129は甕である。127は大きく外反する口縁部をもつ。体部外面にタタキ調整を施す。128は底部で外面にはタタキ、内面にはハケメが残る。口径は14.6cmを測る。129は底部で内面ハケメを施す。131は脚付き埴であるが脚部は欠損する。ヘラミガキによる調整を行うが、残りは悪い。口径は9.0cmを測る。133は鉢である。内・外面共にヘラミガキが認められる。製塩土器（脚台Ⅲ式）の可能性も考えられる。134～137は高杯である。134は杯部である。ほぼ平坦な見込み部から大きく外上方に広がり、端部は面をなす。口径18.6cmを測る。135は脚部である。「ハ」字状に広がる脚部をもち、径1.0cmの透かし孔を穿つ。口縁部は段をもって外上方にのびる。二次焼成を受けて赤変しており、製塩土器に転用していたと考えられる。底径8.3cmを測る。136は裾部がラッパ状に大きく広がり端部は面をなす。筒部外面はハケメの後ヘラミガキを、内面はヘラケズリを行う。裾部内面はハケメ調整を施す。底径12.4cmを測る。137も大きくラッパ状に広がる裾部をもち、端部には面をもつ。内・外面共にハケメを施す。底径12.2cmを測る。138は大きく広がる裾部で端部を丸く収める。

139は飯蛸壺である。内彎しながら立ちあがり、端部を丸く収める。口縁端部はナデ調整を行うが、体部外面はタタキ調整を施す。口径は6.8cmを測る。140～147は土錘である。140は有溝土錘、141～144は棒状土錘、145～147は管状土錘でいずれも紡錘形を呈する。

148～178は丸底Ⅱ式の製塩土器である。148～157は口唇部を肥大させないタイプである。148は内彎しながら外上方にのびて、端部を丸く収める。内面下半は縦方向のナデを、上半は横方向のナデの後、暗紋状のヘラミガキを施す。外面は口縁部を除いて指頭圧痕を施すが、粘土紐の接合痕が残る。口径は8.5cmを測る。149はやや内彎しながら立ちあがり、口縁端部は稜をもつものの水平ではない。調整はナデであるが、粘土紐の接合痕が残る。口径は10.6cmである。150は大きく外上方に開き、内彎しながら立ちあがる。内・外面共ナデ調整を行うが、外面には粘土紐の接合痕、下半部には指頭圧痕が残る。151は唯一完形に復原できたものである。やや尖り気味の底部から大きく外上方に立ちあがり、口縁部はやや内彎させて収めるが、端部は水平ではない。内面はナデ調整を行うが、外面には成形時の指頭圧痕および粘土紐の痕跡が残る。また、体部下半には二次焼成による黒変がみられる。口径は15.1cm、器高は11.7cmである。152は段を有しながら立ちあがり、口縁端部は面をなす。内面はナデを施すが、外面には指頭圧痕が残る。口径は16.9cmを測る。153はやや肥大する口縁部をもつ。胎土は精緻で、口径は11.0cmを測る。154の口縁部はやや内彎しながら立ちあがり、端部は稜をもつ。ユビオサエののち、ナデを施す。胎土は精緻である。155は不明瞭な段を有しながら大きく開いて立ちあがり、端部を丸く収める。内・外面共に指頭圧痕が残る。口径は16.0cmを測る。156はやや真っ直ぐ気味に立ちあがり、口縁端部は丸く収める。内・外面共にユビオサエを行い、その後内面はナデを行うが粘土紐の痕跡が残る。胎土は精緻で、口径は13.4cmを測る。157の体部は段を有して広がる。口縁部はさらに屈曲して立ちあがり、端部はナデによって外反させる。調整につ

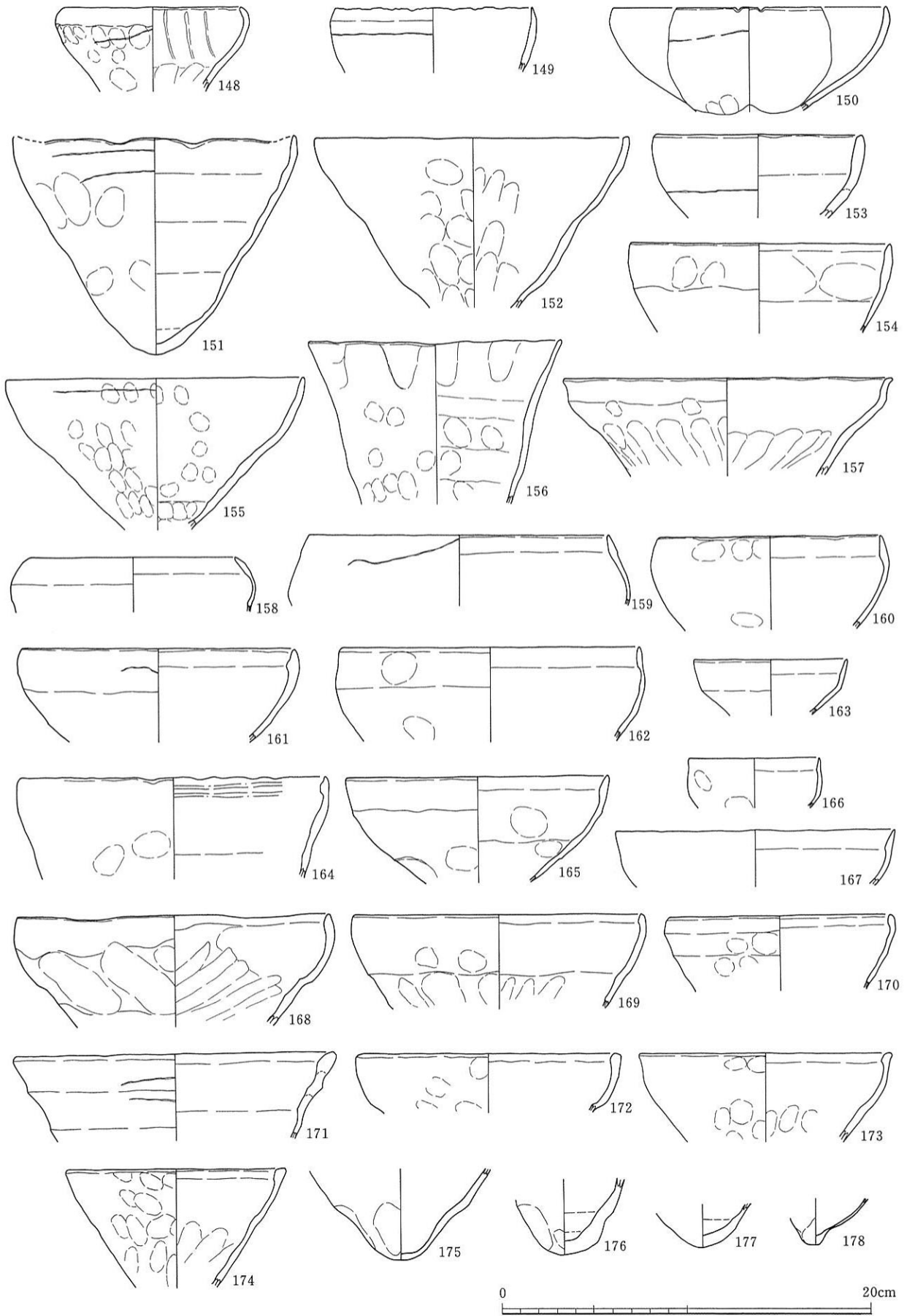


图64 第3層 出土遺物(3)

いては、口縁部は横方向のナデを行うが、体部下半は下方向から上方向に強いナデを施す。また、体部外面は指頭圧痕が残る。口径は17.6 cmを測る。158は大きく内傾する口縁部をもつ。器壁は薄く、口唇部では3 mmを測るが、体部では1～2 mmである。ナデによる調整を行う。胎土は精緻で、口径は11.0 cmを測る。159は158と同様口縁部を内傾させる。口径は16.0 cmを測る。160も口縁部を内傾させるタイプである。内・外面共にナデを行うが、外面には指頭圧痕が残る。口径は11.8 cmを測る。161は口縁部内面に段をもつ。ナデによる調整を行うが、粘土紐の痕跡が残る。胎土は精緻で、口径は14.6 cmを測る。162は内彎しながら立ちあがる。外面はユビオサエによる成形を行い、ナデを施す。胎土は精緻で、口径16.0 cmを測る。164は真っ直ぐ気味に立ちあがり、口唇部が肥大する。成形後ナデを行うが、外面には指頭圧痕が残る。口径は16.4 cmを測る。165は内彎気味に立ちあがり、口唇部を肥大させて、内面に稜をもつ。ナデによる調整を行うが、指頭圧痕および粘土紐の痕跡は残る。胎土は精緻で口径14.0 cmを測る。167は口唇部内面に稜をもち、端部は尖り気味に収める。口径は15.0 cmを測る。外上方へのび、段をつくって大きく内彎させる。端部は肥大させて内面に稜をつくる。調整は、内面体部下半は斜め上方に強いナデを行い、口縁部は横方向のナデである。体部外面には指頭圧痕が残る。口径は16.8 cmを測る。168は口縁部が段を有して内彎しながら立ちあがる。体部内面および外面には指頭圧痕、口縁部はにナデを施す。口径は15.3 cmを測る。170の体部はやや内彎気味に立ちあがり、口縁端部はやや肥大させて段をつくる。精緻な胎土をもち、口径11.6 cmを測る。171は口縁端部を肥大させて丸く収める。口径17.2 cmを測る。172の口縁部は内彎させて立ちあがり、端部を肥大させる。内面はナデを、外面は指頭圧痕が残る。口径は13.6 cmを測る。173の体部が真っ直ぐ外上方へのび、口縁部は大きく内彎しながら立ちあがり、端部を肥大させる。内・外面共に指頭圧痕が残る。174の体部はほぼ直線的へのび、口縁端部を肥大させる。内・外面共に指頭圧痕が残るが、内面は横方向のナデを施す。175～178は丸底Ⅱ式の底部である。175は尖り気味の丸底をもち、外面には指頭圧痕が残る。176は外面を指頭圧痕が残り、内面はナデによる調整を行う。177は内面をナデによる調整を行う。178の底部は絞って閉じるタイプのもので、器厚は0.1 cmと薄い。

179～217は丸底Ⅲ式である。179は真っ直ぐ気味に外上方に立ちあがる。外面は指頭圧痕が残るが、内面は水で濡らした指もしくは布や皮を使用して行ったと思われる横方向のナデによって平滑に仕上げる。また、口縁端部は成形時に口縁部を下にして据えたものもみられる。内径6.2 cmを測り、器厚は1.0 cmである。180の体部はほぼ真っ直ぐ立ちあがり、口縁上端部は面をなす。体部外面には指頭圧痕が残り、体部内面および口縁部にはナデを行う。内径6.6 cm、器厚0.7～1.0 cmを測る。181は外上方に真っ直ぐのびる体部をもつ。外面は微かに指頭圧痕が残るが、内面はナデを施す。口縁付近の器厚は0.9 cmを測るが体部では0.4 cmである。内径は8.2 cmを測る。182はやや内彎しながら立ちあがる。口縁部は肥大し、上端部は面をなす。外面には指頭圧痕が残り、内面はナデによって平滑に仕上げる。内径は8.0 cm、器厚は0.4～0.9 cmを測る。183はやや外反しながら立ちあがる。外面には指頭圧痕が残り、内面はユビオサエののちナデを施す。内径6.9 cm、器厚は1.1 cmを測る。184は曲線を描きながら立ちあがる。外面には指頭圧痕が列状にならび、内面はナデを行う。口縁端部は未調整で、刻目状の凹凸がみられ、口縁端部内面は内側にはみ出す。これは成形時に口縁部を下向きに据えた際にできたものと考えられる。内径は6.4 cmを測り、器厚0.4～0.7 cmと薄めである。185はほぼ真っ直ぐ立ちあがり、口縁部は肥大する。外面は指頭圧痕が残るが、二次的な被火

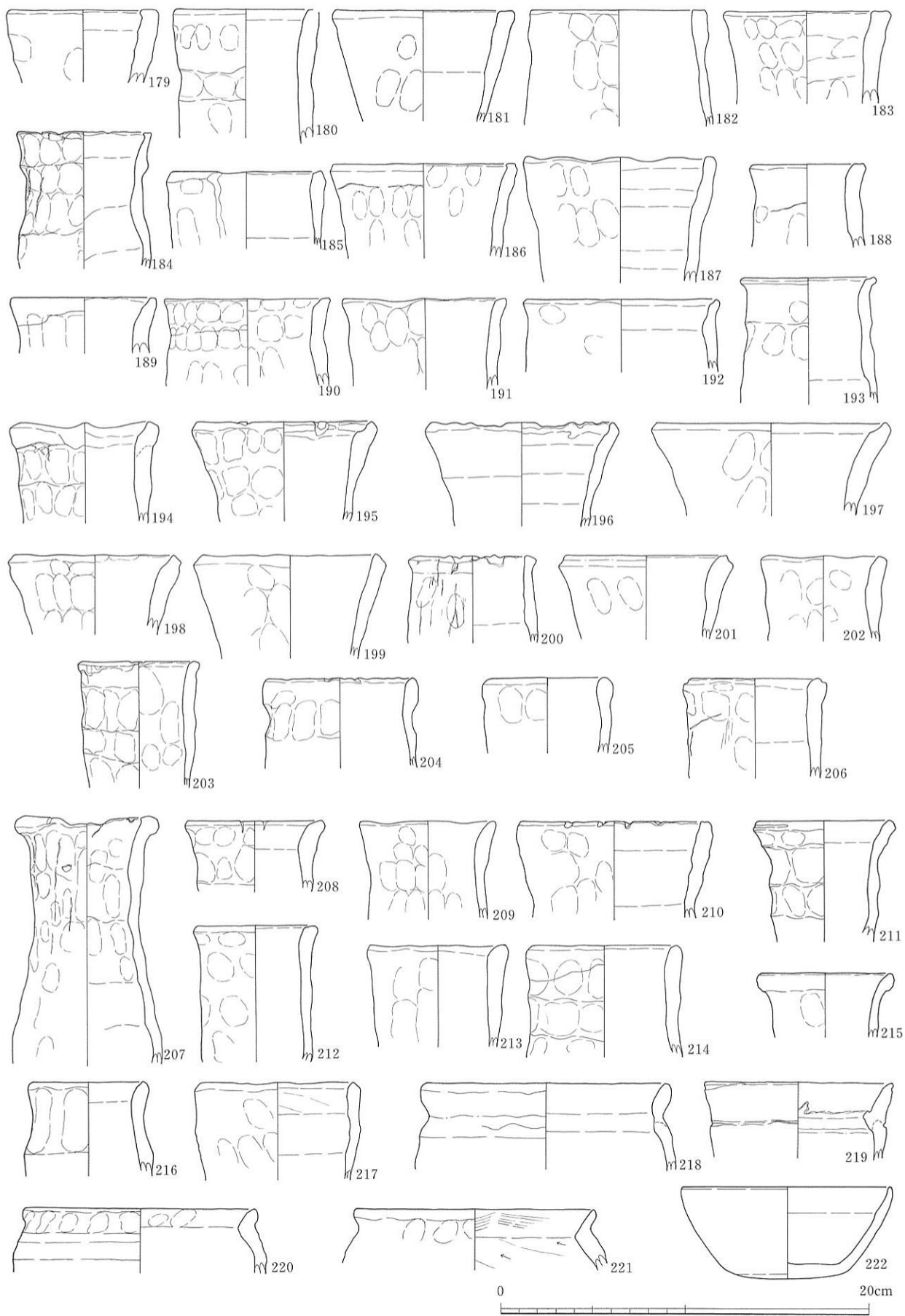


图 65 第 3 层 出土遗物 (4)

による剥離がみられる。内面はナデ調整を行う。内径7.2 cm、器厚0.3～0.8 cmを測る。186は外反しながら立ちあがる。内・外面とも指頭圧痕が残るが、内面はその後ナデを施す。187は外上方に立ちあがり、口縁端部は面をなすが水平ではなく、凹凸がみられる。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデにより平滑に仕上げる。内径は9.2 cm、器厚は0.7 cmである。188の体部はやや内傾しながら立ちあがり、口縁部は外反する。体部外面は指頭圧痕および粘土紐の痕跡が残るが、口縁部および内面はナデを施す。口径5.0 cm器厚0.9 cmを測る。190は内傾しながら立ちあがり、口縁部は外反して、端部上面は面をなす。口縁付近の外面は列状に指頭圧痕が残る。内面はユビオサエのあとにナデを施す。内径7.8 cm、器厚0.9 cmを測る。191は外面口縁部付近に指頭圧痕が残る。内面はナデを行い、平滑に仕上げる。192は真っ直ぐ立ちあがり、口縁部は外反して内面に段をもつ。調整は磨耗が著しく、外面の指頭圧痕が微かに残るのみである。また、二次焼成による赤変部分と白変部分がみられる。内径は10.2 cmを測る。193は体部は内傾しながら立ちあがるが、内面にユビオサエによる段をもつ。口縁端部は外側につまみ出す。内径6.2 cm、器厚0.3～0.7 cmを測る。194の体部はほぼ真っ直ぐ立ちあがる。口縁部は肥大し、端部内面はナデによる段をもつ。外面には列状に並ぶ指頭圧痕の他に粘土紐の接合痕も残る。内面はナデで平滑に仕上げる。内径7.0 cmを測る。195は大きく外反しながら立ちあがり、口縁部を肥大させる。外面には列状に指頭圧痕がみられ、内面はナデを行う。口縁端部は強いナデによる段をもつ。内径9.4 cm、器厚0.4～1.0 cmを測る。196も大きく外反しながら立ちあがり、口縁部はやや肥大させながら端部を上方につまみあげて内面に段を有する。調整は内・外面共にナデを施し、内径9.8 cm、器厚0.4～0.7 cmを測る。197は大きくラッパ状に広がる。口縁端部は強いナデによる段をもつ。内径12.2 cm、器厚1.0 cmを測る。198は外反させながら立ちあがり、口縁部は肥大する。外面は列状に指頭圧痕が残り、内面はナデを施す。内径8.6 cm、器厚0.7～1.1 cmを測る。199は真っ直ぐ外上方にのび、口縁端部に稜をつくる。内径9.4 cm、器厚0.5～0.8 cmを測る。200は内傾しながら立ちあがり、口縁端部に稜をつくる。外面は指頭圧痕と成形時の亀裂がみられる。内面はユビオサエによる段をもち、体部上半部は縦方向のナデを施す。口縁端部は未調整である。内径5.6 cmを測る。201は口縁部を肥大させながら外上方にのび、稜をつくる。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデにより平滑に仕上げる。内径7.8 cm、器厚0.4～1.1 cmを測る。202は口縁部が肥大しながらほぼ真っ直ぐ立ちあがり、口縁端部はやや外反して面をなす。内径5.0 cm、器厚0.4～0.9 cmを測る。内・外面とも指頭圧痕が残るが、内面はナデによる調整を行う。203は真っ直ぐ立ちあがり、口縁部をやや外反させる。端部は成形時に口縁部を下にして裾えたため未調整で、外側に粘土が広がる。外面は規則的に指頭圧痕が残り、内面はユビオサエののち、ナデで仕上げる。内径5.4 cm、器厚0.3～0.7 cmを測る。204は真っ直ぐ立ちあがり、口縁部は肥大して丸く収める。口縁部下端に指頭圧痕がみられる。内面はナデを施す。口縁端部は未調整である。内径7.0 cm、器厚0.3～0.8 cmを測る。205はやや内傾気味に立ちあがり、口縁端部は肥大して丸く収める。外面に指頭圧痕が残り、内面はナデ調整を施す。内径5.2 cm、器厚0.5～0.8 cmを測る。206は真っ直ぐ立ちあがり口縁端部を肥大させて丸く収める。外面には指頭圧痕と成形時の亀裂がみられ、内面はナデによる調整を行う。内径5.6 cm、器厚0.5～1.1 cmである。207は袋状に広がる体部下半から内傾しながら立ちあがり、再び口縁部は外反して、端部を肥大させて玉縁状に収める。内・外面共に指頭圧痕がみられるが、内面はナデによって平滑に仕上げる。内径5.8 cm、器厚0.4～0.9 cm、残存高13.4 cmを測る。208は肥大して大きく外反する口縁をもつ。外面は指頭圧痕が残り、内面は

ナデを施す。内径 5.6 cm、器厚 0.6 ~ 1.0 cm を測る。209 は内傾する体部と肥大しながら外反する口縁部をもつ。内・外面共に指頭圧痕が残るが、内面はナデで仕上げる。内径 6.8 cm、器厚 0.4 ~ 0.8 cm を測る。210 は外上方にのび、口縁端部は未調整である。外面は指頭圧痕がみられるが、二次的な被火による表面の剥離がみられる。内面はナデによって平滑に仕上げる。内径 9.4 cm、器厚 0.5 ~ 0.9 cm である。211 は真っ直ぐ立ちあがり、大きく外反する口縁部をもつ。外面は列状に並ぶ指頭圧痕がみられるが、内面はナデによって平滑に仕上げる。内径 6.8 cm、器厚 0.4 ~ 0.7 cm を測る。212 は真っ直ぐ立ちあがる体部と肥大してやや外反する口縁部をもつ。外面は指頭圧痕が残るが磨耗が著しく、内面はナデで平滑に仕上げる。内径 4.6 cm、器厚 0.4 ~ 0.8 cm である。213 は真っ直ぐ立ちあがり口縁部は肥大して丸く収める。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデで平滑に仕上げる。内径 5.4 cm、器厚 0.5 ~ 1.1 cm を測る。214 はやや内傾しながら立ちあがり口縁部は丸く収める。口縁端部は成形時に下向きに据えたため砂が付着する。外面は列状に指頭圧痕が残り、内面はナデによって平滑に仕上げる。内径 7.0 cm を測る。215 は僅かに外上方に立ちあがり、玉縁状の口縁部をもつ。外面には微かに指頭圧痕が残る。内面はナデを施す。内径 5.2 cm を測る。216 はやや内傾しながら立ちあがるが、口縁付近に施された強いユビオサエのために括れる。外面は二次的な被火による赤変がみられる。内径 5.4 cm を測る。217 は体部が外上方にのび、口縁付近で屈曲して立ちあがる。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデによる調整を施す。

218 ~ 221 は甕形の製塩土器である。218 はあまり張らない肩部から短く外上方にのびる口縁部をもつ。調整は内・外面共にナデを施すが粗雑で、粘土紐の痕跡が残る。口径は 13.0 cm を測る。219 はやや外上方にのびる体部と口縁部をもつ。頸部には接合痕が残る。また、頸部内面には口縁部接合時の粘土紐が突帯状に残る。内・外面共にナデによる調整を行うが粗雑である。口径は 10.0 cm を測る。220 は内傾する肩部から短く口縁部がのびる。頸部から口縁部にかけてはユビオサエによってつまみ出す。調整はナデである。口径は 12.4 cm を測る。221 は短い口縁部をもつ。体部内面はヘラケズリ、口縁部内面はハケメ、外面には指頭圧痕が残る。口径 12.8 cm、器厚 0.9 cm を測る。

222 は椀形の製塩土器である。ほぼ平らな底部をもち、杯部はやや内彎しながら外上方に延びて、口縁部を丸く収める。外面は磨耗が著しく調整は不明であるが、二次的な被火による赤変がみられる。見込み部は指頭圧痕が残り、杯部内面は横方向のナデを施す。

223・224 は脚台 I 式 a の製塩土器で、脚部が特に高く脚裾径も大きい。223 は脚裾がゆるやかに広がり、体部との接合は脚部上位に体部粘土をつぎ足す付加法によっている。脚部外面にナデ、内面はハケ調整、体部外面はタタキ調整を行う。224 は脚部中位程でやや屈曲して広がり、体部との接合は付加法によっている。脚部上位は体部接合前にタタキ調整を行う。内面に絞り目が確認できる。

225 ~ 235 は脚台 I 式 b である。225・226 は付加法で成形し、体部が剥がれた下に脚部のタタキ調整が確認できる。226・227 は脚部内面に絞り目が確認できる。228・229 は脚裾端部内側に粘土を折り返して肥厚させ、228 は脚部内面にユビオサエを施す。230 は脚部中位で屈曲して広がり、裾部はやや内彎気味となる。体部から脚部上位にかけてタタキ調整を行う。成形は円板充填によっており、脚部内面に絞り目が確認できる。231 は脚裾部が屈曲して外反する。付加法により体部を接合し、脚部外面は縦方向のナデ調整、脚部内面にユビオサエを施す。232 は付加法により成形を行うが、脚部断面に接合痕、脚部内面には絞り目も確認できる。脚部外面はタタキ調整ののち縦方向のナデ調整を行う。233 は脚柱部が中実状を呈し、裾部のみ外反する。外面にタタキ調整、体部内面に棒状工具

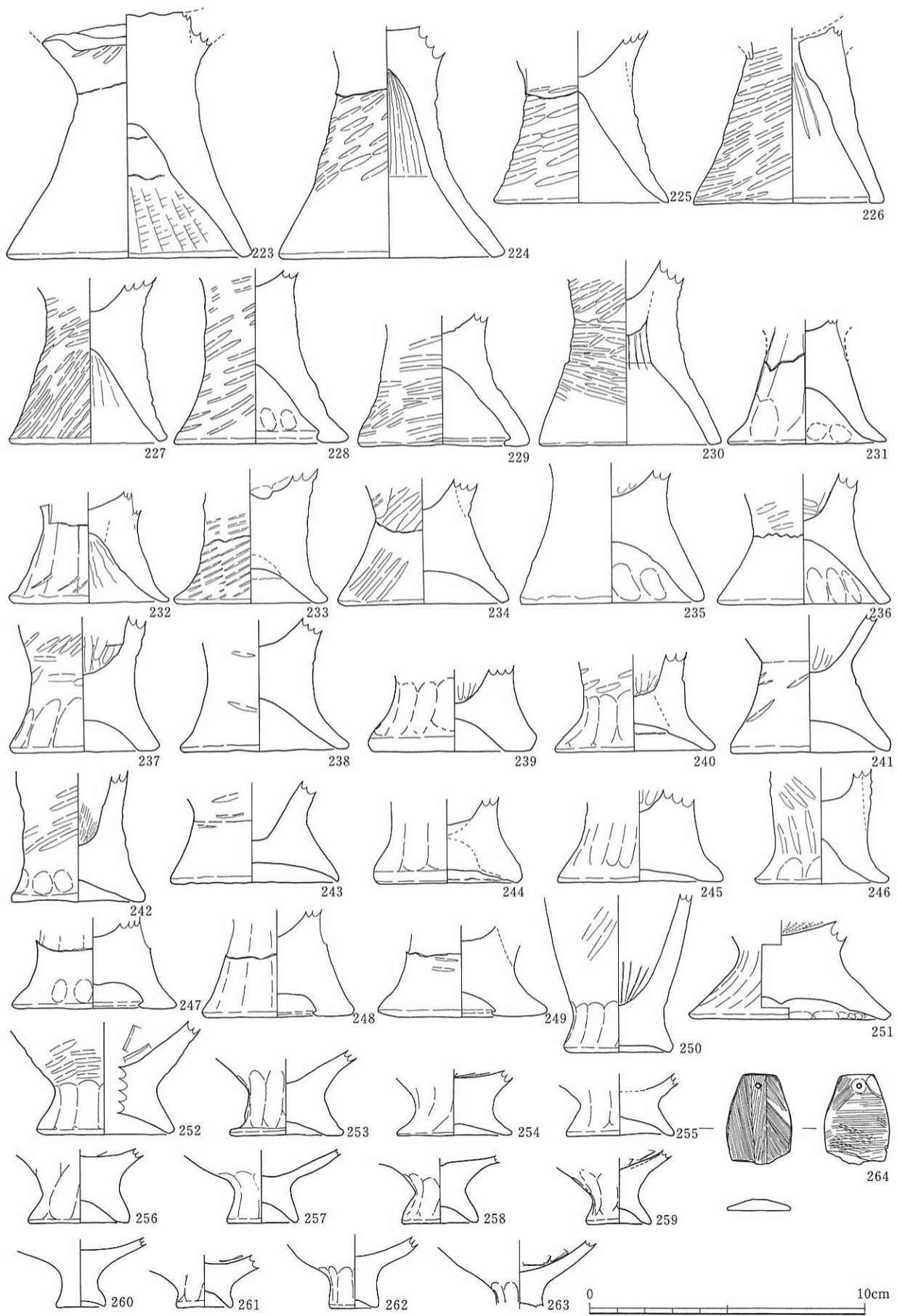


图66 第3層 出土遺物(5)

によるオサエを施す。脚部内面頂部に下方向から粘土を貼り足している。234は付加法によって成形しており、脚部にタタキ調整を行ったあと、体部の接合を行い、さらに体部にタタキ調整を行う。235は外面にナデ調整、脚部内面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。

236～242は脚台Ⅱ式aで脚部内面がしっかりと凹むものである。236は脚部と体部との境界に接合痕が確認でき、付加法の可能性が高い。体部外面にタタキ調整、体部内面に棒状工具によるオサエ、脚部内面にユビオサエを施す。237は脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。238はタタキ調整のあとナデ調整を行う。239・240は脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。240は脚部内面に接合痕のようなものが確認できるが、内面に粘土を折り返した痕跡と思われる。成形は脚部内面下方向より粘土を充填して行っている。241は脚部外面にタタキ調整のあとナデ調整を行う。体部内面に棒状工具によるオサエを施す。242は脚裾部外面にユビオサエを施し、体部内面にハケ調整を行う。

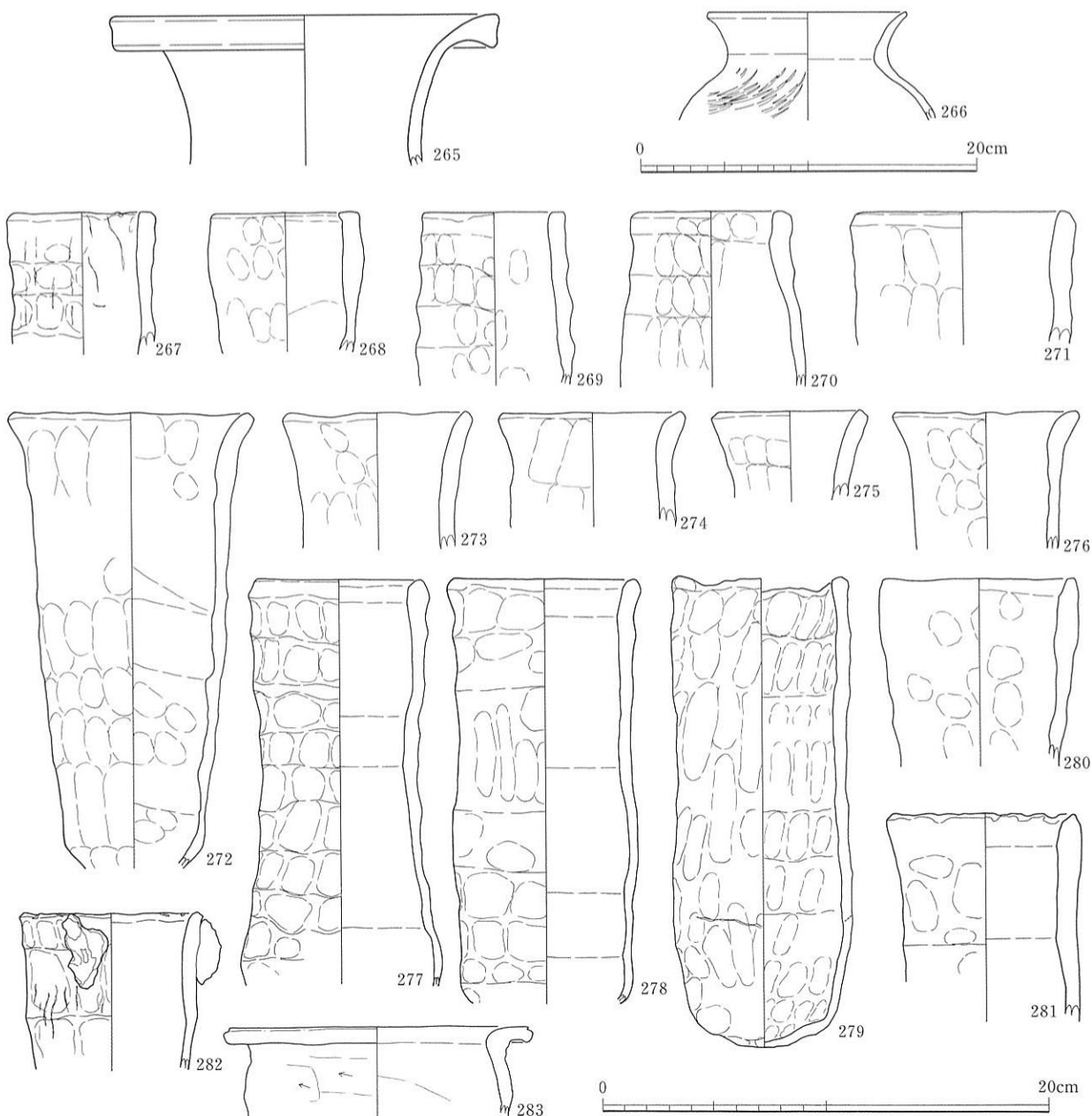


図67 第3面 出土遺物(1)

243～245は脚台Ⅱ式aだが、脚部内面の凹みが弱いものである。243は脚部外面にタタキ調整のあとナデ調整を行う。244は体部内面、および脚部内面の上下方向より粘土を充填して成形を行う。脚部外面にユビオサエを施す。245は脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。246は脚台Ⅱ式aだが、付加法によって成形している。体部が剥離した箇所ではタタキ目が確認できず、体部接合後にタタキ調整を行っていると思われる。脚裾部にユビオサエを施し、短く外反する。

247～249は脚台Ⅱ式aで、脚裾端部に幅広の面をもち、脚部内面に粘土を折り返し肥厚させるものである。全て付加法によって成形しており、247・248は体部貼り付け前に縦方向のナデ調整を行う。249は体部接合後にタタキ調整を行う。

250は脚台Ⅱ式bで、体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエを施し、体部内面に板ナデ調整を行う。

251は体部が開きながら立ちあがる。脚裾径が大きいものの脚台Ⅲ式の範疇で考えたい。脚部外面に縦方向のナデ、体部内面は板ナデ、脚部内面にユビオサエを施す。

252～256は脚台Ⅲ式である。252は体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエを施し、体部内面にハケ調整を行う。254・256は体部内面に板ナデ調整を行う。

257～263は脚台Ⅳ式である。260～262は脚部が特に矮小化しており、脚部内面の凹みもわずかである。262は裾が広がらない。259・261・263は体部内面にハケ調整を行う。

264は滑石製の剣形模造品である。断面台形状を呈し、両面共に丁寧に研磨を行って仕上げる。また、上部には表面から裏面へ径1mmの穿孔がみられる。

第3面出土遺物 (図67・68) 265・266は弥生土器であるが、いずれも混入である。265は壺である。頸部は外反しながら立ちがり、口縁部は大きく開き、下方に肥大し面をなす。調整は磨耗が著しく不明である。266は甕である。外反しながら開く口縁部をもつ。体部外面はタタキが残る。

267～283は製塩土器である。267～282は丸底Ⅲ式である。267は真っ直ぐ立ちあがり、口縁端部は成形時に下向きに据えており面をなす。外面は列状に指頭圧痕が並ぶ。内面は縦方向のナデにより平滑に仕上げるが、焼成時の亀裂が残る。内径5.0cm、器厚0.5～0.8cmを測る。268は口縁部を肥大させて、ほぼ真っ直ぐ立ちあがる。口縁端部は下向きに据えた際に面をなし、粘土を内側に巻き込む。内径5.2cm、器厚0.4～0.9cmを測る。269はやや内傾しながら真っ直ぐ立ちあがり、口縁端部は面をなす。外面は指頭圧痕が残る。内面はユビオサエののち、ナデで仕上げる。内径4.8cm、器厚0.4～0.7cmを測る。270は内傾しながら立ちあがり、口縁部は肥大して丸く収める。外面は列状に指頭圧痕が残るが、内面はユビオサエののち、ナデで仕上げる。内径5.2cm、器厚0.4～0.9cmを測る。271はやや開き気味に立ちあがる。外面には指頭圧痕、内面はナデを施す。内径8.6cmを測る。272は底部を欠損する。体部は外上方にのび、口縁部は外反しながら肥大させる。器厚は体部下半は0.2cmと薄く、口縁部0.9cmと厚い。調整は内・外面共にユビオサエによる指頭圧痕が残り、内面はナデで仕上げる。内径9.6cm、残存高20.3cmを測る。273は外反しながら立ちあがる。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデで仕上げる。内径7.6cmを測る。274は口縁部を外反させる。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデで平滑に仕上げる。内径7.8cmを測る。275は口縁部で外反する。外面ユビオサエ、内面ナデを行う。内径は6.2cmである。276は肥大させながら外反する口縁部をもつ。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデで仕上げる。内径7.6cmを測る。277はくびれた体部をもち、口縁部は肥大しながら真っ直ぐ立ちあがって丸く収める。底部を欠損する。外面は列状に指頭圧痕が残

り、内面はナデで平滑に仕上げるが、口縁端部は未調整である。最大内径は底部付近にあって8.2 cmを測り、口縁の内径は6.2 cmである。器厚は0.3～1.1 cm、残存高は18.2 cmである。278は底部を欠損するが、ほぼ真っ直ぐ立ちあがり、口縁部はやや外反して丸く収める。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデによって平滑に仕上げる。内径7.0 cm、器厚0.3～0.8 cm、残存高19.0 cmを測る。279はほぼ完形に復原できる唯一のものである。内・外面共にユビオサエにより列状に指頭圧痕が残り、さらに内面は横方向のナデで仕上げる。口縁端部は凹凸がみられるが、丸く収める。器厚は底部は0.2 cmと薄く、口縁部付近では0.7 cmを測る。内径6.4 cm、器高21.1 cmを測る。280は外上方に立ちあがり、口縁部を肥大させる。内・外面共にユビオサエによる調整を行うが、内面はナデで仕上げる。内径7.8 cmを測る。281はほぼ真っ直ぐ立ちあがるが、口縁部はやや外反する。外面は指頭圧

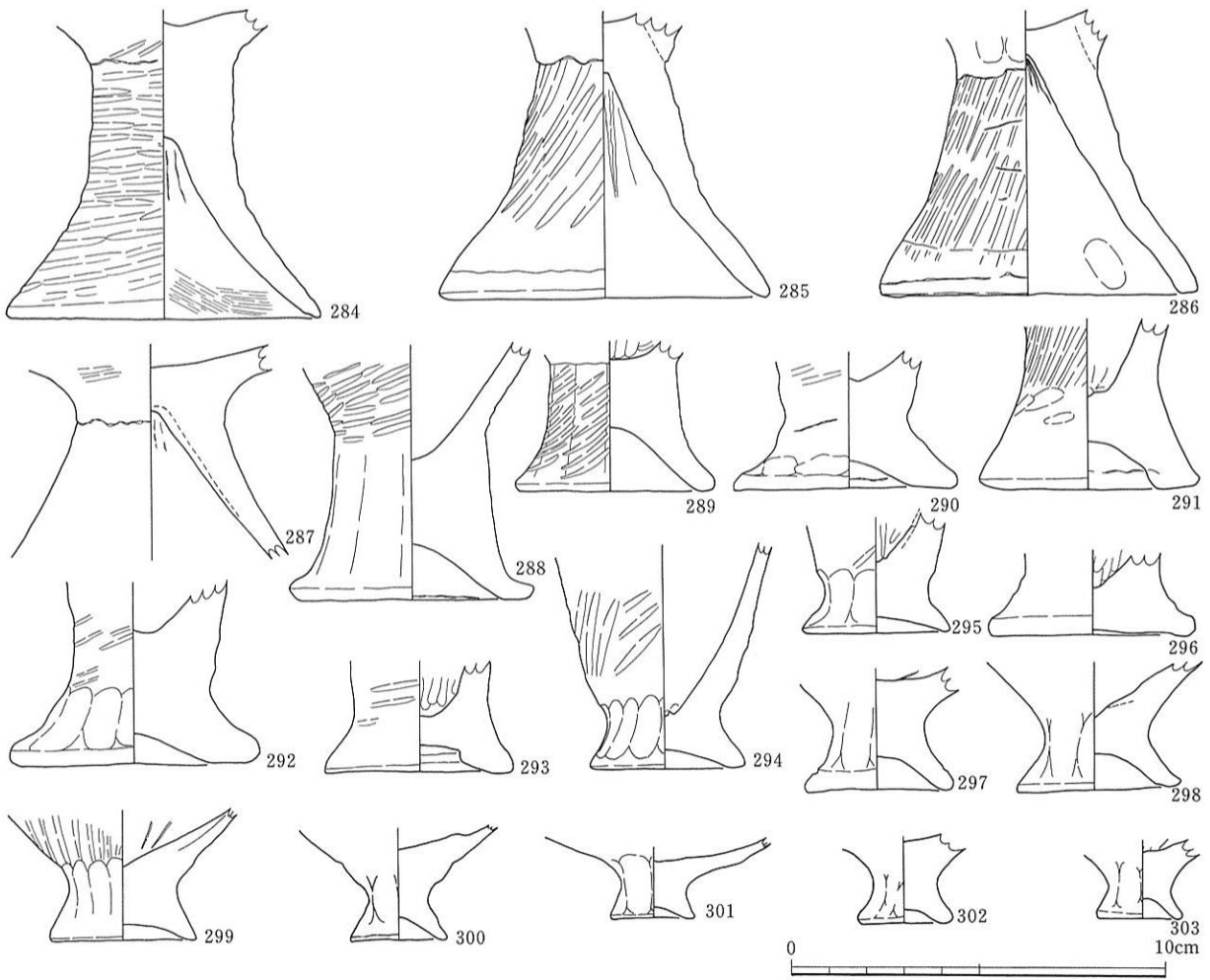


図 68 第3面 出土遺物 (2)

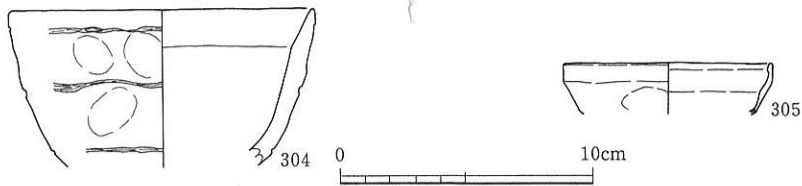


図 69 第3面 石敷炉 21 出土遺物

痕が残り、内面はナデ調整を行う。口縁端部は未調整で、凹凸がある。内径 6.8 cm を測る。282 はやや外上方にのびる。口縁端部は未調整であるが、外面は列状に指頭圧痕が残り、内面はナデによって平滑に仕上げる。また、口縁部外面には鉄滓が付着する。内径 6.8 cm を測る。

283 は甕形の製塩土器である。肩部は大きく張らないが、口縁部は横方向に大きく開く。口縁部はナデを施すが、体部はヘラケズリを行う。口径 13.8 cm を測る。

284 ～ 287 は脚台Ⅰ式 a の製塩土器である。284 はゆるやかに外反し、体部外面、脚部外面にタタキ調整、脚部内面にハケ調整を行う。体部と脚部との境界には粘土の接合痕が確認でき、付加法による成形と思われる。脚部内面頂部に絞り目が確認できる。285 はやや屈曲気味に外反し、脚裾部はやや内彎気味に収める。脚部外面上位はタタキ調整、下位はナデ調整である。付加法によって成形しており、脚部のタタキ目が体部粘土の下に確認できる。脚部内面には絞り目が確認できる。286 は脚裾部を内彎気味に収め、外面にタタキ調整、脚裾部内面に部分的にユビオサエを施す。287 は体部にタタキ調整がみられるものの、脚部はナデ調整である。体部と脚部との境界に接合痕が確認でき、付加法による成形と思われる。脚部内面に絞り目が確認できる。

288 ・ 289 は脚台Ⅰ式 b である。288 は体部の開きがやや弱く脚裾部が短く屈曲する。体部外面にタタキ調整、脚部外面に縦方向のナデ調整を行う。289 は脚部外面に縦方向のナデののちタタキ調整を行い、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。タタキ目自身が曲がっており、タタキ調整のあとに脚裾部を外反させたものと思われる。

290 ～ 292 は脚台Ⅱ式 a で、脚裾端部に幅広の面をもつ。290 は体部外面にタタキ調整、脚裾部にユビオサエを施す。脚部内面には粘土を内側へ折り返した痕跡が残る。291 は体部外面にタタキ調整、脚部外面にナデおよびユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。脚部内面に粘土の折り返した痕跡が残る。292 は脚部中位までタタキ調整、脚裾部にユビオサエを施す。

293 ～ 296 は脚台Ⅱ式 b である。293 は体部外面にタタキ調整、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。脚部内面に粘土を折り返した痕跡が残る。294 ・ 295 は体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。296 は脚部内面の凹みが弱く平底状を呈する。体部内面に棒状工具によるオサエを施す。

297 ～ 299 は脚台Ⅲ式である。299 は体部にタタキ調整、脚部にユビオサエを施す。297 ・ 299 は体部内面に板状工具の圧痕が残る。

300 ～ 303 は脚台Ⅳ式である。体部外面はナデ調整、脚部にユビオサエを施す。303 は体部内面に

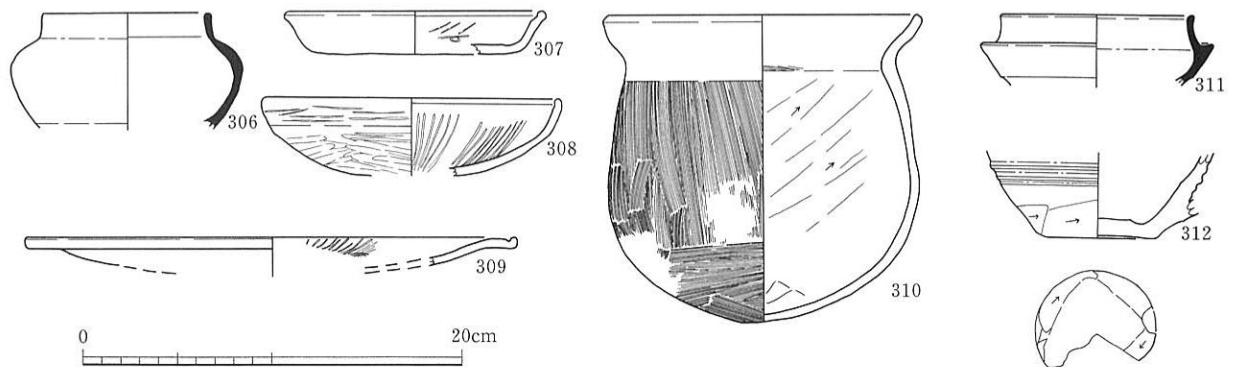


図 70 第 4 層 出土遺物 (1)

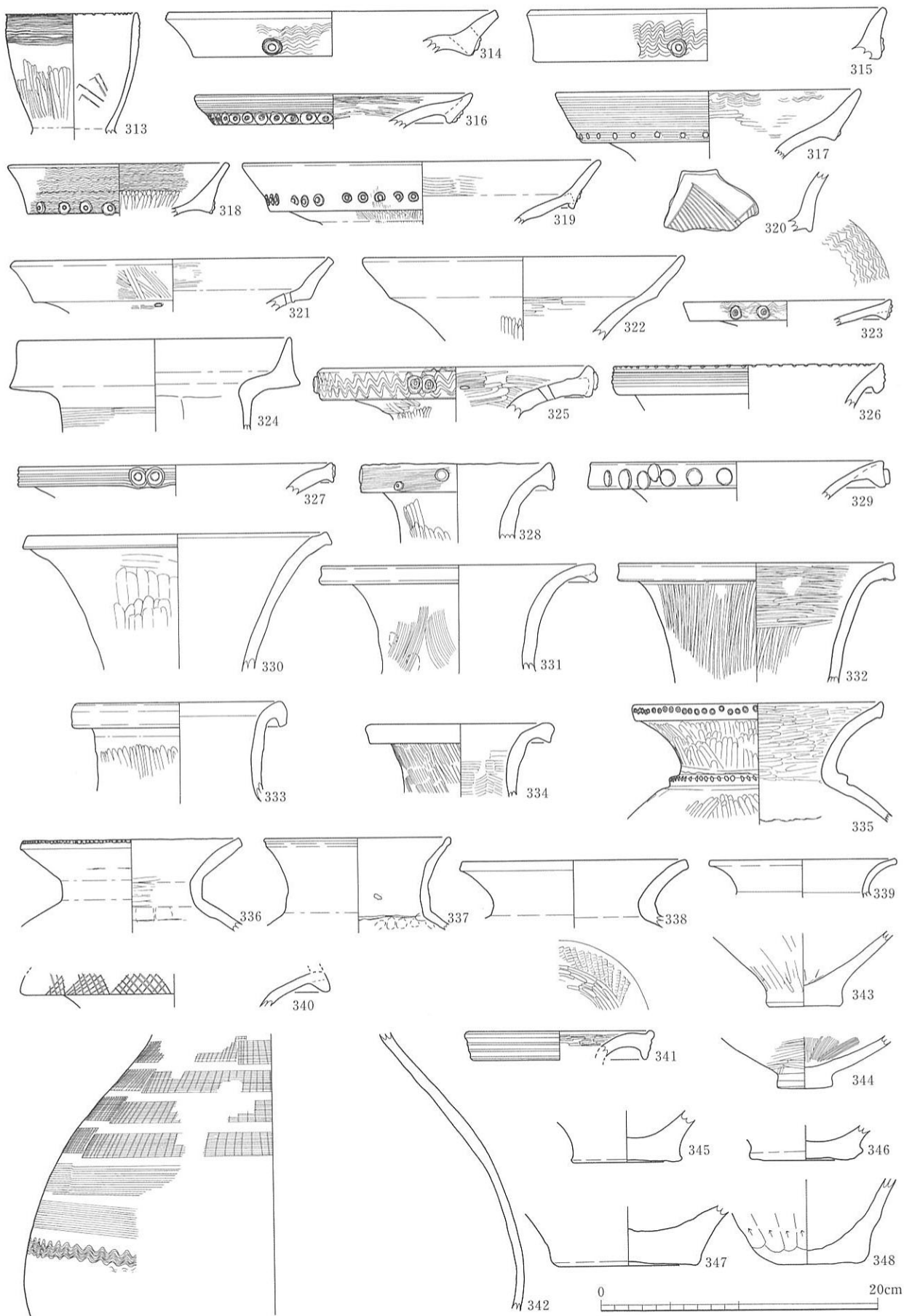


图71 第4層 出土遺物(2)

板状工具の圧痕が残る。

石敷炉 21 出土遺物 (図 69) 304 は椀形の製塩土器である。底部を欠損する。体部は外上方にのび、外面は指頭圧痕と粘土紐の痕跡が残る。内面および口縁部はナデを施す。口径 12.0 cm を測る。305 は丸底Ⅱ式の製塩土器の口縁部である。内彎しながら立ちあがり、口縁端部は丸く収める。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデを施す。内径 7.8 cm、器厚 0.2 cm を測る。

第 4 層出土遺物 (図 70～78) 306 は小型の須恵器壺 A である。肩の張りはやや弱く、やや内傾気味に直立する短い口縁部をもつ。307 は土師器杯 A で口縁端部が内側に肥厚し、内面に 1 段の放射状暗紋と螺旋状暗紋をもつ。口縁部外面はヨコナデ、体部にミガキ調整を行う。308 は土師器杯 C で、内面に放射状暗紋を施す。体部外面はケズリ調整の後ミガキ調整を行う。309 は土師器高杯で、内面に放射状暗紋を施す。310 は奈良時代の土師器甕 A で、口縁端部は肥厚せず口縁部上半が内彎する。口縁部内面はナデ調整を行うが、先に施したハケ目が残る。体部外面上半は縦方向、下半から底部にかけては横方向のハケ調整、体部内面はケズリ調整を行う。311 は須恵器杯 H で、口縁部は内傾して立ちあがり、端部に面をもつ。体部下半に回転ヘラケズリを行う。312 は把手付きの陶質土器と思われる、外面に沈線を最低 3 条もつ。体部下半には把手を取りつけたあとに板ナデ調整を行う。内面には自然釉がかかる。胎土は黒色粒を含み、器面は暗赤灰色を呈する。

313 は東海系の瓢形壺で口縁は内彎し、外面上位に櫛描による沈線、口縁端部には刻目をもち、外面は縦方向のミガキ、内面は板ナデによる調整を行う。314～320 は加飾する二重口縁壺で、314・315・318 は外面に波状紋、316・317 は直線紋を施し、それぞれ竹管紋を押捺した円形浮紋で加飾する。317・318 は内面にも波状紋をもつ。319 は円形浮紋のみを貼付する。320 は外面にヘラ状工具による鋸歯紋をもつ。321・322・324 は無紋の二重口縁壺であり、321 は口縁下に穿孔がされ、口縁外面はハケ調整を行う。324 は口縁の立ちあがり直線的で、端部にかけて器壁が薄くなり端部は尖り気味に収める。全面ヨコナデ調整である。323・325～329 は口縁を拡張し、加飾する広口壺である。323・325 は口縁を波状紋と竹管紋押捺の円形浮紋で加飾する。323 は内面にも波状紋をもつ。326～328 は直線紋を施し、327・328 はさらに竹管紋押捺の円形浮紋で加飾する。326 は上端部に刻目をもち、329 は小さく口縁部を垂下させ、円形浮紋のみを貼付する。330～334 は口縁端を短く垂下させる無紋の広口壺である。330 は口縁が直線的に開き、端部下端がわずかにつまみ出される。外面はナデ、内面はわずかにハケ調整の痕跡がある。333・334 は頸部が直立し、口縁部が短く外反する。335～339 は口頸部が短く「く」の字状に外反する広口壺であり、335 は口縁端部をわずかに立ちあげ、竹管紋を押捺する。頸胴部界には突帯を貼りつけ刻目を施す。調整は外面に縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキである。336 は口縁端部に刻目を施す。337 は口縁端部をわずかに立ちあげ、外面にヨコナデの際のスジがつく。内面には糊痕がみられる。340・341 は口縁を上下に拡張する壺であり、340 は鋸歯状の区画内にヘラ描きの斜格子紋をもつ。341 は外面に凹線紋を、内面に板状工具による連続刺突紋を施す。342 はⅢ様式の広口壺の体部であり、最大径に櫛描波状紋、上位に簾状紋と直線紋を施す。343～348 は壺の底部で、348 は外面にケズリ調整を行う。

349 は布留式甕であり、口縁内面の肥厚は退化し弱い。体部内面にケズリ調整を行う。350 は庄内式甕で、口縁部はやや外反し、端部を上方へつまみあげる。体部にハケ調整を行う。胎土に角閃石を含み生駒西麓産と思われる。351 は布留系甕と考えられ、口縁部はやや内彎し、端部は小さく内側へつまみあげる。体部は上位にタタキ調整、下位にハケ調整を施す。352 はハケ調整の甕で、大きく張

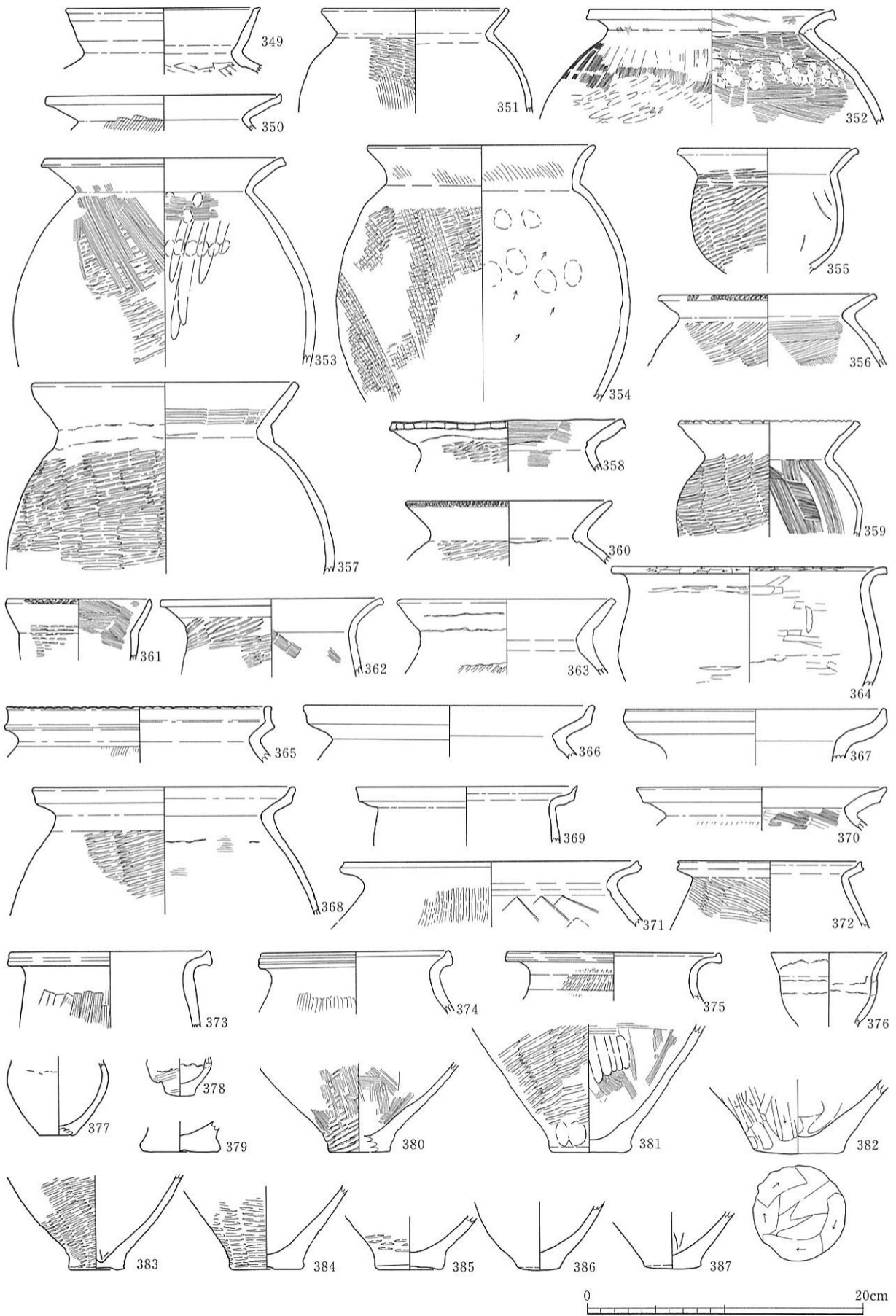


图 72 第 4 层 出土遗物 (3)

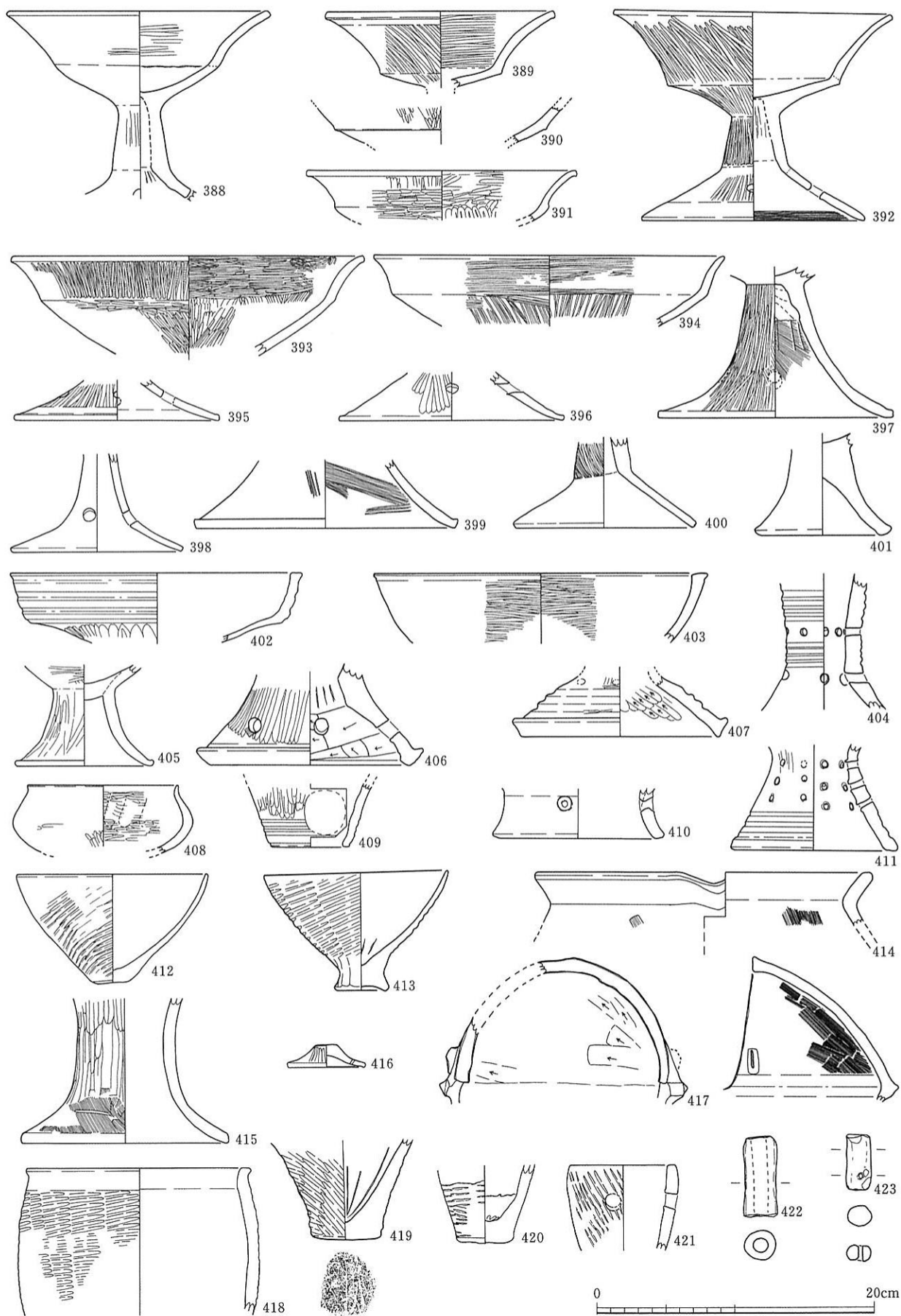


图73 第4层 出土遗物(4)

る体部に外反する口縁部が取りつき、端部は強いヨコナデによる面をもつ。体部外面下位にはミガキ調整を行う。353・354はタタキ調整のちにハケ調整を行う甕で、354は内面にユビオサエのあとケズリ調整を行う。355～363は外面にタタキ調整を行うV様式およびV様式系の素口縁の甕で、356・358～361は口縁端部に刻目を施す。358の刻目の押し引き単位は長い。362は体部から口縁部にかけての屈曲がやや弱い。364は体部で弱く屈曲し、短く外反する口縁をもつ甕である。外面はタタキのちナデ調整、内面は板ナデ調整であり、口縁部内面から口縁端部にかけてはケズリ調整を行う。弥生中期のものであろう。365～370は口縁が受け口状を呈するV様式甕である。365の口縁は立ちあがりの屈曲が強く、端部に刻目をもつ。外面はハケ調整である。370は口縁端部内面の上方への拡張が弱く、外面に稜を形成する。371～375は口縁端部を上方へ拡張し、外面を施紋する甕である。371・372は端部外面に強いナデによる凹線を加え、体部外面は371がタタキの後にハケ調整を、372はハケ調整のみを行う。373は端部外面に1条の沈線をもつ。374は2条の凹線を施す。375は端部外面に強いナデの際のスジが残る。376～378はミニチュアの甕で粘土紐の痕跡がよく残る。379～387は甕の底部で、380は外面にタタキ調整のあとハケ調整を行う。382は外面ケズリ調整である。

388～392は庄内式～布留式の口縁が長く外反する有稜高杯である。388は脚部中位で屈曲して広がり、口縁部は横方向のミガキ、脚部は縦方向のミガキ調整を行う。389は口縁部外面に斜方向のミガキ、内面は横方向のミガキ調整を行う。390は二次焼成を受け赤変しており、白い付着物が認められる。391は口縁部の長さがやや短く、横方向のミガキ調整を行う。392は脚部中位で屈曲して広がり、裾部内面にハケ調整を行う。393・394はV様式の長い体部に短く外反する口縁部を備える有稜高杯である。393は口縁部に鋸歯状紋をもち、端部は弱いながらも面をもつ。394の口縁部外面は横方向のミガキのみであり、端部は丸く収める。395～401はV様式～布留式の高杯脚部である。397はゆるやかに外反し、外面に縦方向のミガキ、内面はハケ調整を行う。398は基部付近が細く、脚部中位から大きく外反し、透かし孔をもつ。400は脚部中位で明瞭に屈曲して広がり、脚柱部に縦方向のミガキ調整を行う。401は広がり具合が弱く、形態は製塩土器に似るが、タタキが認められないことから高杯として理解したい。

402～407は弥生時代中期の高杯である。402は開き気味に立ちあがる口縁部外面に凹線紋を施す。403は椀状の杯部をもち、内外面に横方向にミガキ調整を行う。杯部がやや深いため鉢とした方がよいかもしい。404は筒状の長い柱状部に屈曲して広がる裾部を有し、柱状部に沈線と透かし孔を施す。405は円板充填法により成形し、脚部は縦方向、杯部は横方向のミガキ調整を行う。406は裾部端部を拡張し、外面に縦方向のミガキ調整、内面にケズリ調整を行い、透かし孔を有する。407は屈曲して広がる裾部で透かし孔をもつ。筒状の長い柱状部を有すると思われる。裾部端部を拡張し、裾部外面に3条の凹線紋をもつ。内面はケズリ調整を行う。408は無頸壺で、口縁部が短く外反する。409～411は台付鉢の脚部である。409はすばまる裾部に2条の凹線紋と大きな透かし孔を有する。410は短い脚部で透かし孔を有する。411は外方向に開く脚部に3条の凹線紋と、縦方向に連続する小さな透かし孔が展開する。412・413は直口の鉢で、外面はタタキ調整を行う。413は外側へ張り出しやや上げ底になる脚部を有する。414は屈曲部から外反する鉢であり、片口を有する。415は器台で、胴部に縦方向の粗いミガキ調整、裾部にハケ調整を行う。416は蓋で紐孔を有する。417は手焙り形土器で覆部側面に小さなつまみ状の突起を有する。覆部外面にハケ調整、内面にケズリ調整を行う。418～420は外面タタキ調整の真蛸壺である。418は口縁部外面に強いヨコナデを施し端部を

突出させる。419は底部に葉脈痕が確認できる。421は飯蛸壺で、タタキ調整を行い紐孔を有する。422・423は土錘である。422は管状のもので、端部にかけて細くならない。423は棒状を呈し、端部付近に小さい孔を有する。

424・425は丸底Ⅱ式の製塩土器である。開き気味の体部に内彎する口縁部を有し、内面に段をもつ。

426・427は丸底Ⅲ式の製塩土器である。口縁部は直線的に開き、端部を調整した際に粘土が内側にはみ出す。調整はユビオサエが顕著にみられる。428は「く」の字状に外反し、ユビオサエを施す。429～431は丸底製塩土器の底部であるが、431は内面をハケ調整しており製塩土器でない可能性も高い。

432・433は脚台Ⅰ式製塩土器の内彎気味に広がる口縁部で、外面にタタキ調整を行う。

434～441は脚台Ⅰ式aの脚部である。434はゆるやかに外反し、外面にタタキ調整を行う。脚部内面は上位にユビによるナデを行う。体部と脚部との境界には粘土の接合痕がみられる。435の脚部上位は体部の粘土が剥がれ、擬口縁が認められる。436は脚部中位より外に広がる裾部を有し、脚柱部にタタキ調整、脚部内面および体部内面にハケ調整を行う。脚部内面には絞り目と粘土の接合痕がみられる。437は脚部中位より屈曲し、やや内彎気味の裾部を有する。外面は部分的にユビオサエを行い、内面には絞り目がみられる。付加法により成形しており、体部と脚部の境界には粘土の接合痕がみられる。438はゆるやかに外反するが、裾端部はやや内彎気味に取める。外面はタタキ調整、内面はハケ調整を行い、絞り目がみられる。439は脚部と体部との境界に擬口縁が確認でき、接合は付加法によるものと思われるが、脚部に粘土の充填も確認できる。441は半中実の脚部で体部との境界には接合痕がみられる。

442～453は脚台Ⅰ式bである。442は脚部内面にハケ調整、脚部外面にタタキ調整後上位をナデ調整し、境界に段が生じる。付加法によって成形し、体部にもタタキ調整を行う。443は脚部下位にユビオサエを、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。444～447は脚裾部がゆるやかに外反する。付加法により成形し、体部と脚部の境界には粘土の接合痕がみられる。脚部内面に絞り目がみられるものも多い。448～453は脚裾端部に面をもつもので、449～451は端部内側に粘土を折り返し肥厚させる。452も内側に折り返すが、粘土が薄く肥厚しない。451・453は付加法によって成形し、体部接合前にタタキ調整を行う。体部内面は棒状工具によるオサエを施す。

454・455は脚台Ⅱ式製塩土器の直線的に開く口縁部で、外面にタタキ調整を行う。454の内面は板ナデ調整を行う。

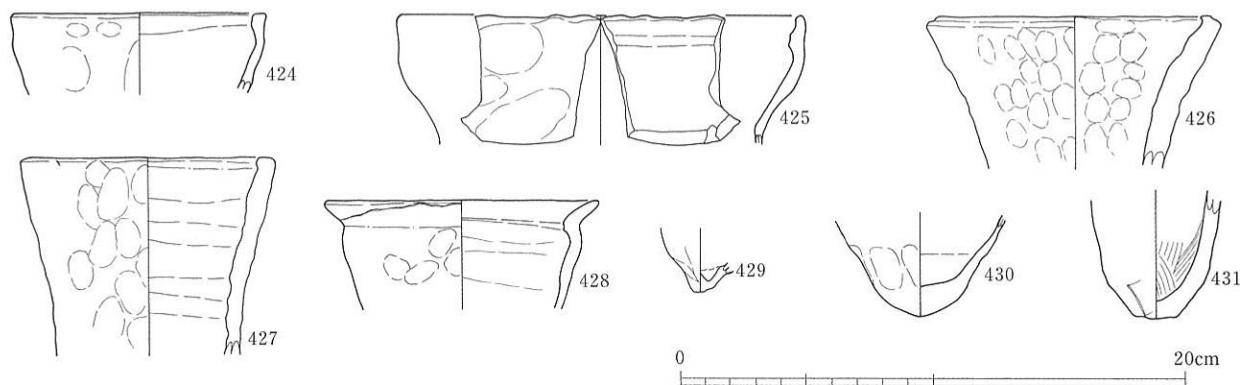


図74 第4層 出土遺物(5)

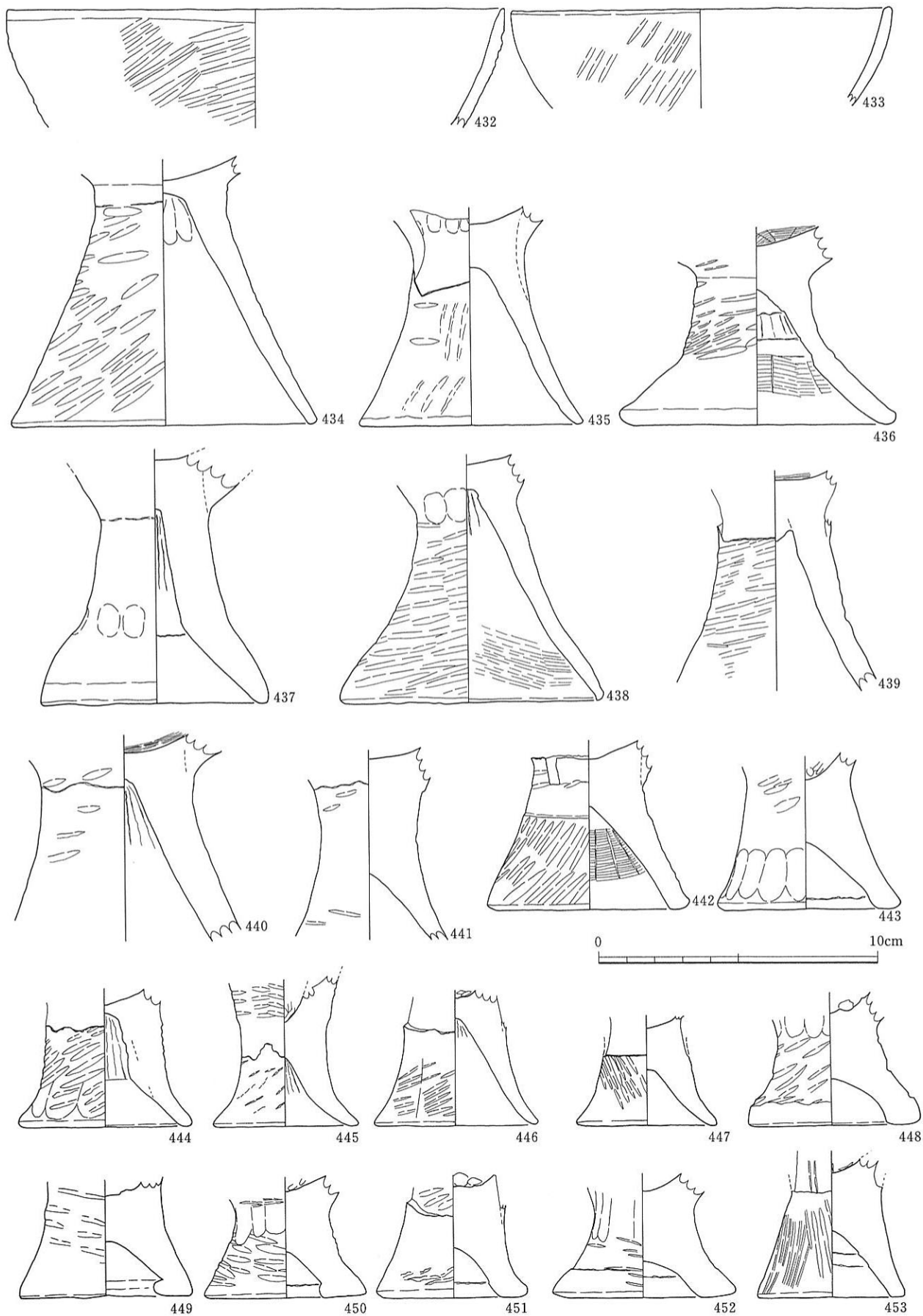


图 75 第 4 层 出土遗物 (6)

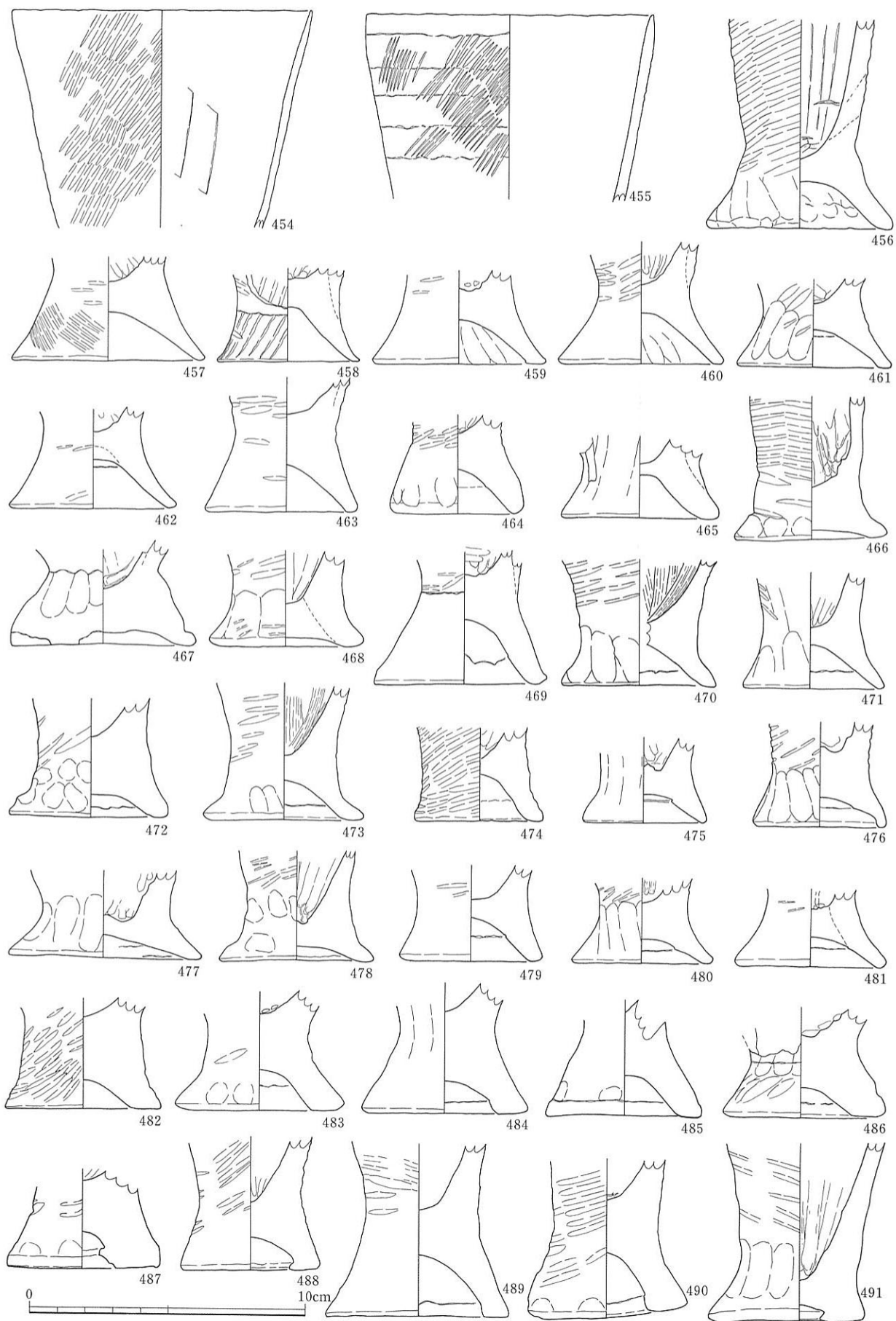


图 76 第 4 层 出土遗物 (7)

456～465は脚台Ⅱ式aで脚部内面がしっかりと凹むものである。456は脚部内外面にユビオサエを施し、体部外面はタタキ調整を行う。体部内面は板状工具による調整を行い、底に工具の当たった痕が残る。457は脚部外面にハケ調整を行う珍しい例である。体部内面は棒状工具によるオサエがみられる。458は付加法により成形し、脚部外面にタタキ調整を行う。タタキ調整は擬口縁部にも連続してみられる。体部にもタタキ調整がみられるが、タタキ目の向きが脚部と異なる。体部内面には棒

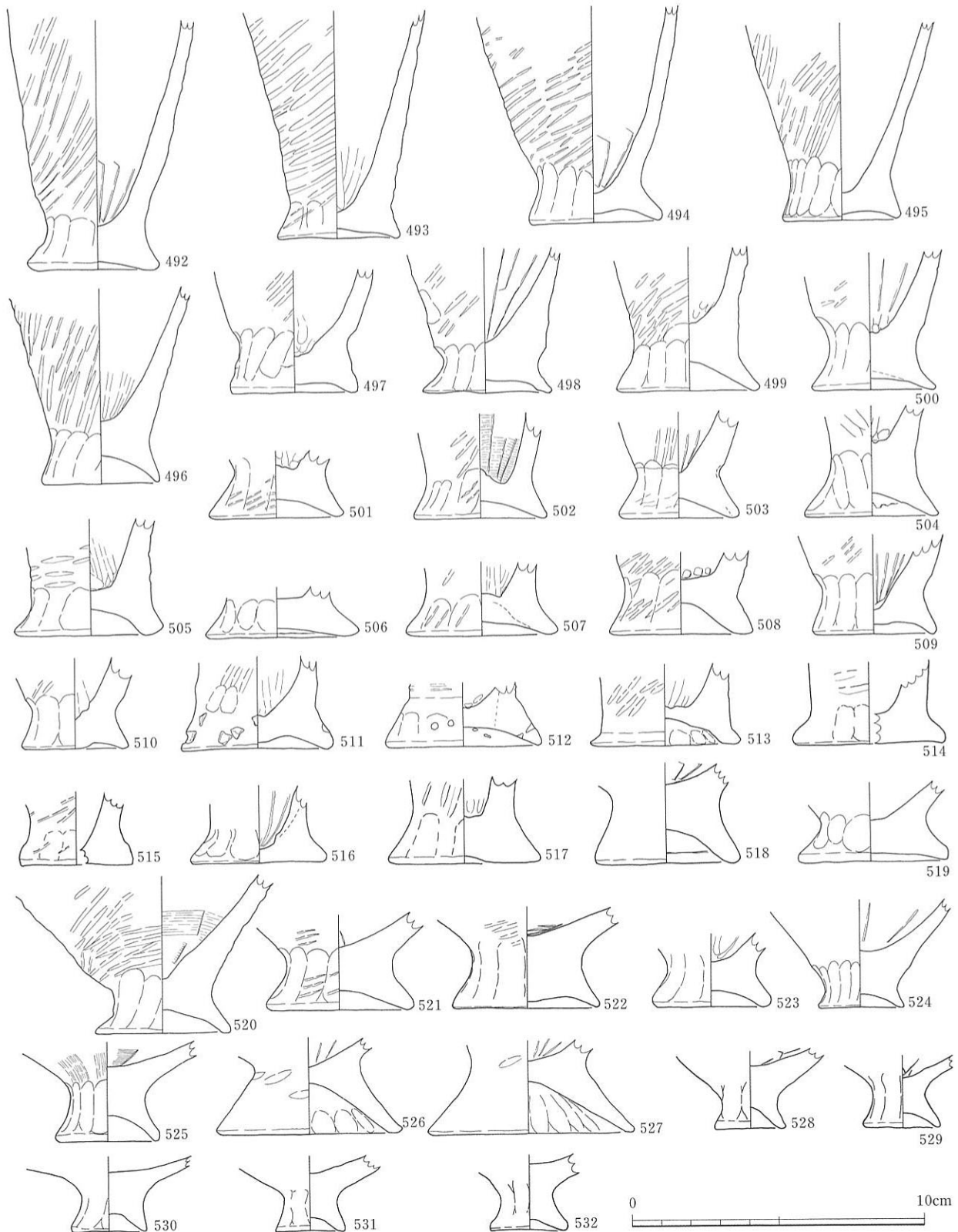


図77 第4層 出土遺物(8)

状工具によるオサエを施す。459・460は脚部は外面にナデ調整、内面にユビオサエ、体部は外面にタタキ調整、内面に棒状工具によるオサエを施す。461は脚部外面にユビオサエ、体部内面は棒状工具によるオサエを施す。462は脚部内面頂部に下方向から粘土を少量貼り足す。体部内面は棒状工具によるオサエを施す。464は脚裾部を内彎気味に収め、外面にユビオサエを施す。465は付加法により成形し、脚部および擬口縁部に縦方向のナデ調整を行う。

466～468は脚台Ⅱ式aで脚部内面の凹みが弱いものである。体部内面はいずれも棒状工具によるオサエを施す。466は脚裾部外面にユビオサエを施し、端部を外側へ張り出す。468は脚部下方向から粘土を充填して成形する。脚部外面はユビオサエによりタタキ痕を消す。

469～481は脚台Ⅱ式aで脚部内面に粘土を折り返すものである。469は付加法によって成形し、脚部はナデ、体部外面はタタキ調整、体部内面は棒状工具によるオサエを施す。470は脚部外面にユビオサエ、体部内面にハケ調整を行う。471は外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。474は脚部外面にタタキ調整、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。475は外面に縦方向のナデ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。476～478・480は外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。481は脚部下方向から粘土を充填して成形する。体部内面は棒状工具によるオサエを施す。

482～486は脚台Ⅱ式aで脚裾端部に幅広の面をもつものである。中でも483～486は脚部内面に粘土の折り返しがみられる。482は外面にタタキ調整を行う。483は体部内面に棒状工具によるオサエを施す。486は付加法により成形し、脚部外面にタタキ調整を行う。脚部と体部との境界にユビオ

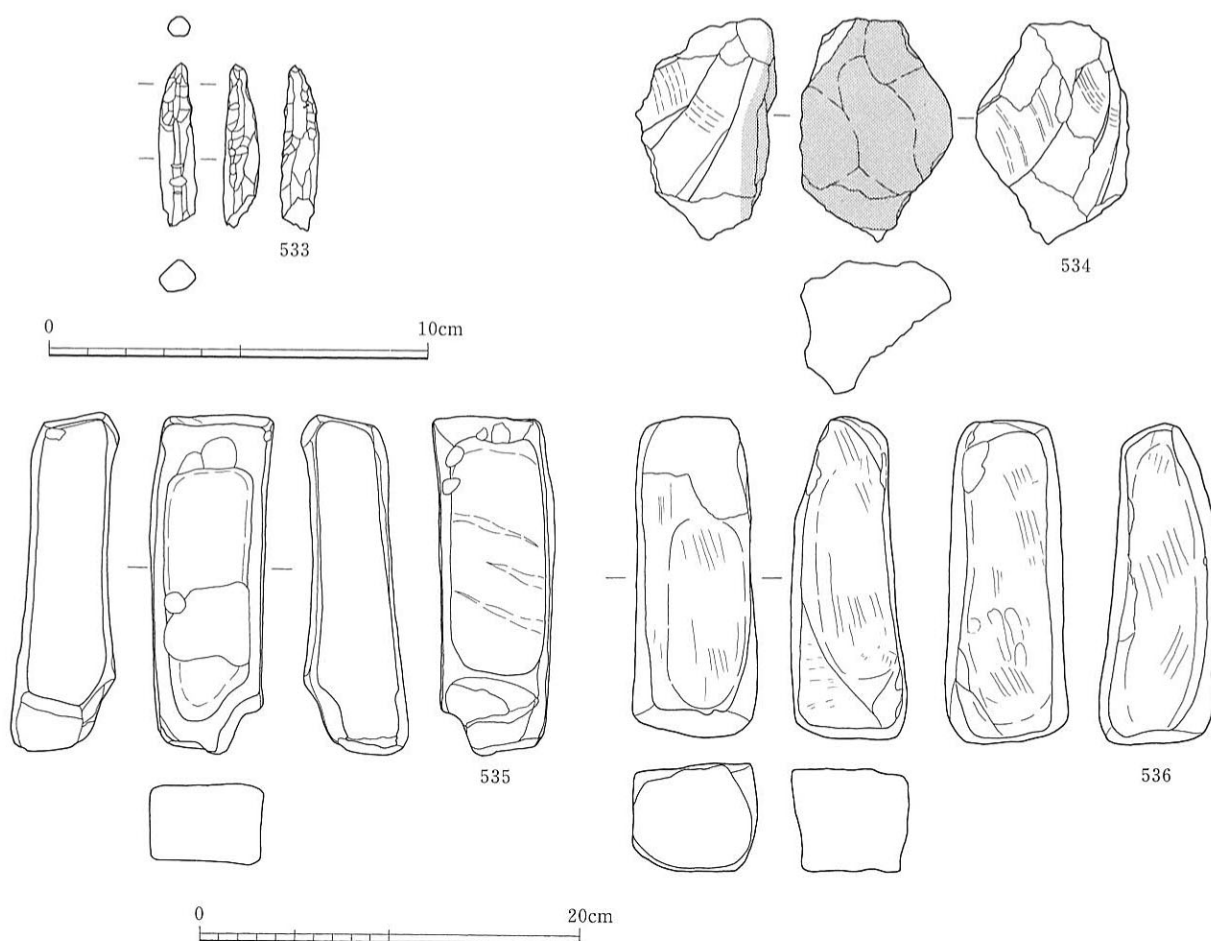


図78 第4層 出土遺物(9)

サエ、体部内面には棒状工具によるオサエを施す。

487～491は脚台Ⅱ式aで脚裾端部に幅広の面をもち、脚部内面に粘土を折り返し肥厚させるものである。487・488・490は脚部上位までタタキ調整を行い、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。491は脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。

492～517は脚台Ⅱ式bで、ほとんどのものが体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエを施す。脚部外面にタタキ調整とユビオサエの両者がみられるものは、先にタタキ調整を行い、後でユビオサエによってタタキ目を消す手法をとる。492・494・498は体部内面に板ナデ調整を行う。493・496・497・499・500は体部内面に棒状工具によるオサエを施す。500は脚部内面頂部に薄く粘土を貼りつける。501は脚部外面にタタキ調整のあとユビオサエ、体部内面は棒状工具によるオサエを施す。502は内面に板ナデ調整を行い、底の部分の側面寄りはその際に工具が当たり抉られる。503は脚部外側に補強のためか粘土を巡らす。脚部外面はタタキ調整ののちにユビオサエ、体部内面は板ナデ調整を行う。504は脚部内面に下方向から薄く粘土を貼りつける。体部内面に棒状工具によるオサエを施す。505は脚裾端部が太いまま収まる。体部内面は棒状工具によるオサエを施す。507は脚部内面頂部に下方向から粘土を貼りつける。体部内面は棒状工具によるオサエを施す。508は外面タタキ調整のあとユビオサエ、体部内面は棒状工具によるオサエを施す。509～511は脚部内面に強いナデを施し、頂部が盛りあがる。509は体部内面に板ナデ、510は棒状工具によるオサエを施す。511は脚部外面に刺突、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。512は脚部に接合痕が確認できる。内外両面より2mm程の刺突を施す。513は脚裾部のみが短く屈曲する。脚部内面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。514～517は脚部内面の凹みがほとんどなく平底状を呈する。516・517は体部内面に棒状工具によるオサエを施す。

518～527は脚台Ⅲ式の製塩土器である。518は体部内面にハケ調整を行う。脚部内面には粘土の折り返しがみられる。520は体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエを施す。体部内面はハケ調整を行う。521は脚部にタタキ調整ののちユビオサエを施し、体部内面に板状工具の圧痕が残る。522は体部内面にハケ調整を行う。523は体部内面に棒状工具によるオサエを施す。524は脚部の張り出しが弱く、鉢の可能性もある。体部内面はハケ調整を行う。525は体部内外面にハケ調整を行う。526・527は脚裾径が大きく脚部内面の凹みも大きいため、脚台Ⅰ式の可能性もある。脚部内面にユビオサエ、体部内面にハケ調整を行う。

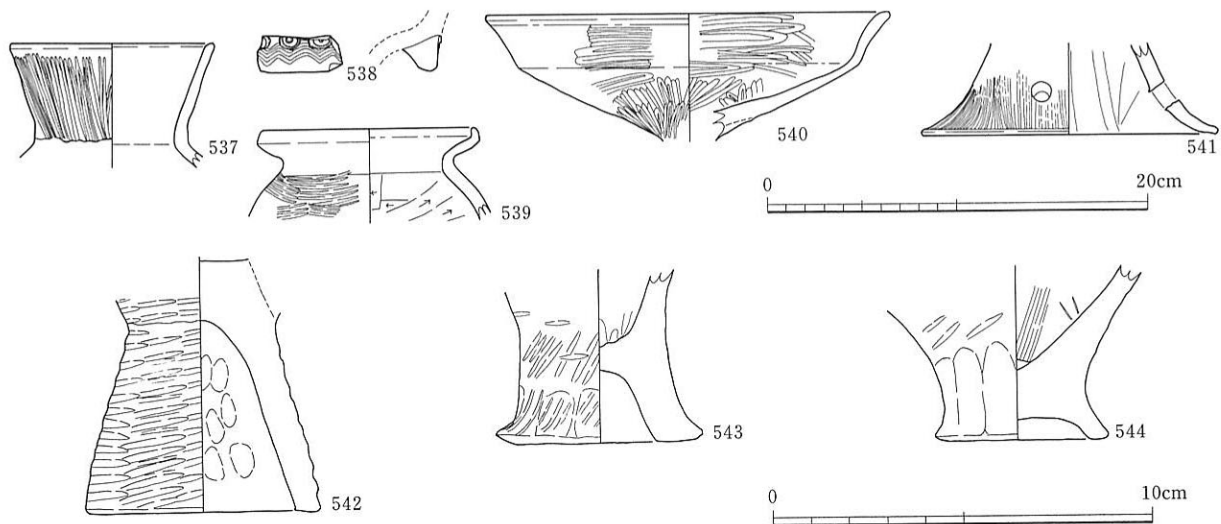


図79 第4面 石敷道路35下部出土遺物

528～532は脚台Ⅳ式の製塩土器である。体部外面はナデ調整、脚部はユビオサエを施す。528・529は体部内面に板状工具の圧痕が残る。

533は鹿角製のヤスで、細かい調整痕が残る。534は焼土である。赤変しているのは一側面のみで、その他は直接火を受けておらず、何かしらの構築物の一部と思われる。火を受けていない面には棒状の芯材の圧痕が確認でき、骨組みの上に粘土をかぶせたものと思われる。棒状の芯材には紐を巻きつけたのか、直交する格好で凹んだ線が確認できる。535・536は砥石である。535は2面、536は4面の砥面をもつ。**石敷道路35下部出土遺物(図79)** 537はV様式の短頸壺で、口頸部外面に縦方向のミガキ調整を行う。538は加飾する二重口縁壺の口縁部下端の破片であり、破損部に擬口縁が確認できる。外面に波状紋と、竹管紋押捺の円形浮紋を施す。539は甕で、口縁が立ちあがり受け口状を呈する。体部外面はタタキ、内面はケズリ調整を行う。540は有稜高杯で、口縁部は内外面横方向のミガキ、体部は縦方向のミガキ調整を行う。541は器台もしくは高杯の脚部で、透かし孔をもつ。外面に縦方向のハケ調整を行う。542は脚台Ⅰ式b製塩土器で、脚部外面にタタキ調整、体部外面にタタキ調整、内面にユビオサエを施す。付加法によって成形し、体部外面にもタタキ調整を行う。543は脚台Ⅱ式aで脚裾部で屈曲し、端部は広い面をもつ。脚部外面はタタキ調整のあとユビオサエ、体部内面は棒状工具によるオサエを施す。544は脚台Ⅲ式で脚部外面にユビオサエを施す。体部は外面にタタキ調整、内面はハケ調整を行う。

第5層出土遺物(図80・81) 545～579は弥生土器である。545～556は壺である。545は口縁部で屈曲して外反しながら大きく開く。外面はナデののち竹管紋と円形浮紋を施す。内面はヘラミガキを行う。546の頸部はほぼ真っ直ぐ立ちあがり、口縁部は外反して下方へつまみ出して面をなす。頸部は内・外面共にハケ調整を行うが、口縁部はナデで仕上げる。547はなだらかに広がる体部と口縁部のみ残る。体部外面は縦方向のヘラミガキを施すが、体部中位にはハケメも残る。内面は強いナデによる調整を行う。548は壺の口縁部で下方へつまみ出して凹線を施し、円形浮紋を貼りつける。549は大きく朝顔形に開く口縁部をもち、端部は上下方につまみ出して面をつくり、籐状紋を施した後、円形浮紋を貼りつける。また、内面には列点紋を施す。550はやや外反しながら外上方にのび、口縁端部は面をもつ。外面は綾杉状の櫛描き紋とヘラミガキ状の沈線を、口縁端部内面にも櫛描き紋を施す。551はほぼ真っ直ぐ立ちあがる頸部をもつ。口縁端部は折り曲げて面をつくる。頸部上半には凹線を施す。552はやや外反しながら外上方に立ちあがり、口縁端部を内側に屈曲させる。内・外面共にハケ調整を行う。553はやや内傾しながら立ちあがり、口縁端部は面をなす。口縁部付近には凹線紋を施し、頸部には波状紋が残る。554は口縁部下半部に突帯をもつ。555・556は体部で、それぞれ櫛描き紋や波状紋を施す。559～569は甕である。559は複合口縁をもつ。560・561は大きく横に開く頸部をもち、口縁端部を上方につまみ出す。562は頸部が短く外上方にのび、口縁端部は上下方につまみ出して面をなす。563はなだらかにのびる体部と大きく横に開く頸部をもつ。内・外面共にハケ調整を行う。564は外反しながらのびる頸部と上方につまみ出す口縁端部をもつ。また、口縁部下部には焼成後の穿孔が2個みられる。565は短く外反する口縁部をもつ。567～569は底部である。570～577は高杯である。570～572は杯部である。573～577は脚部および筒部である。578・579は器台である。578は、外面には凹線紋を施す。579は外反しながら大きく外上方に開き、口縁端部は下方へ肥大させて面をつくり、3条の凹線状の沈線を施した後、円形浮紋を貼りつける。580は真蛸壺である。内傾しながら立ちあがり、口縁部は肥大させて面をなす。外面はタタキ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。581は刻目突帯紋土器の深鉢である。突帯は端部に接するが、口唇部と突帯の調整は別々に行う。刻目はD字で、突

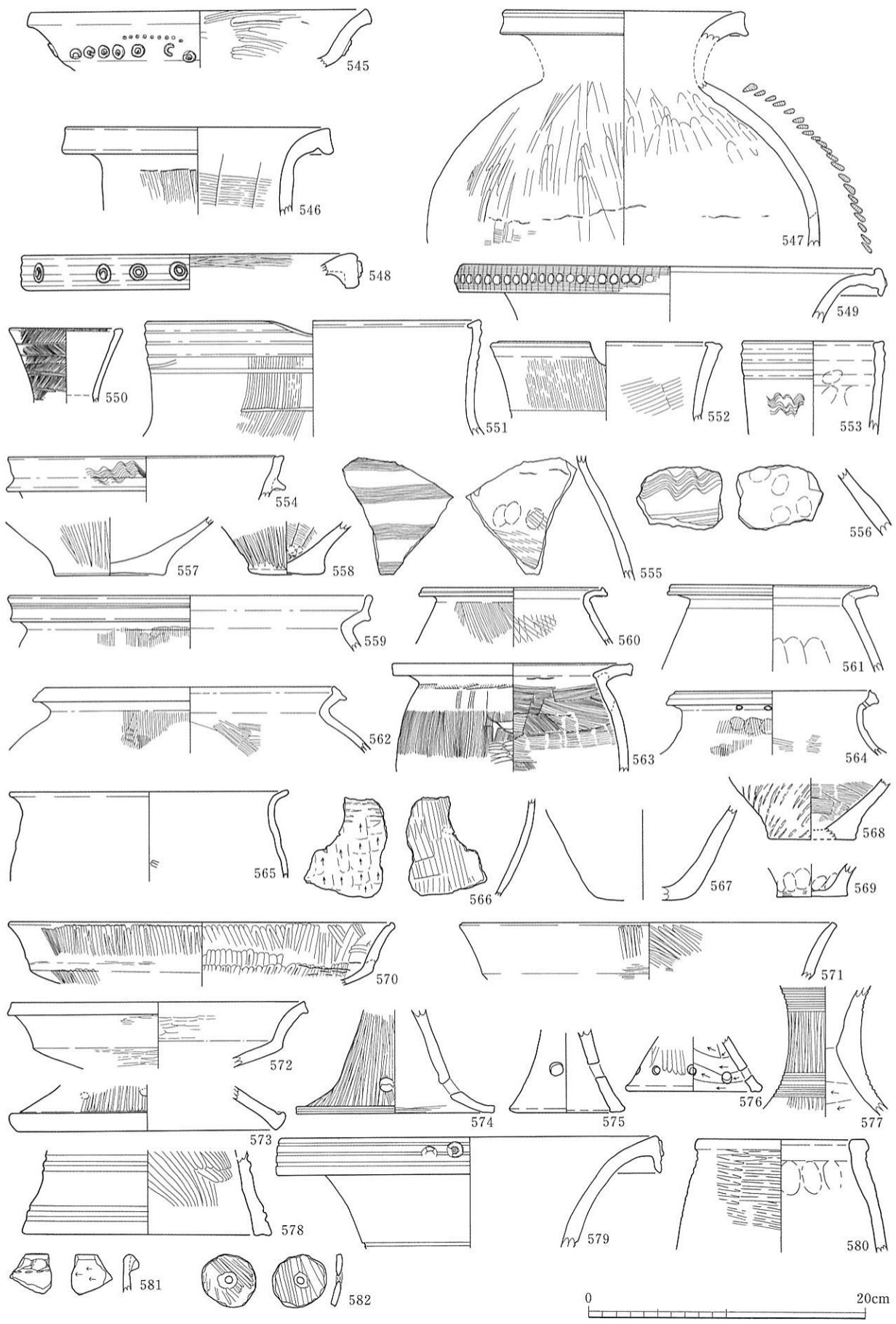


图80 第5层 出土遗物(1)

帯より下位の器面にも工具の圧痕が残る。外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。582は土製の紡錘車である。土器の転用で焼成後に穿孔および成形を行う。

583は脚台I式の直線的に開く口縁～体部破片と思われる。外面にタタキ調整を行い、口縁部は後でナデ調整を行う。

584は脚台I式aの脚部で、外面にタタキ調整、体部内面にハケ調整を行う。脚部内面に絞り目が確認できる。585は脚台I式bで、外面はタタキ調整のあと脚裾部をナデ調整、脚部内面にハケ調整を行う。脚部内面頂部に棒状工具によるオサエのようなものがみられる。

586～589は脚台II式aで、脚高が高く脚部内面がしっかりと凹むものである。586は体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。脚部内面に粘土を折り返した痕が残る。587は体部にタタキ調整、脚裾部にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。体部と脚部との境界に接合痕が確認できる。脚部内面には粘土を内側に折り返した痕跡が残る。588は体部外面にタタキ調整、脚部内外面にユビオサエを施し、体部内面に縦方向のハケ調整を行う。脚部内面に粘土を折り返した痕跡が残る。589は脚裾端部に幅広の面をもち、体部と脚部との境界にユ

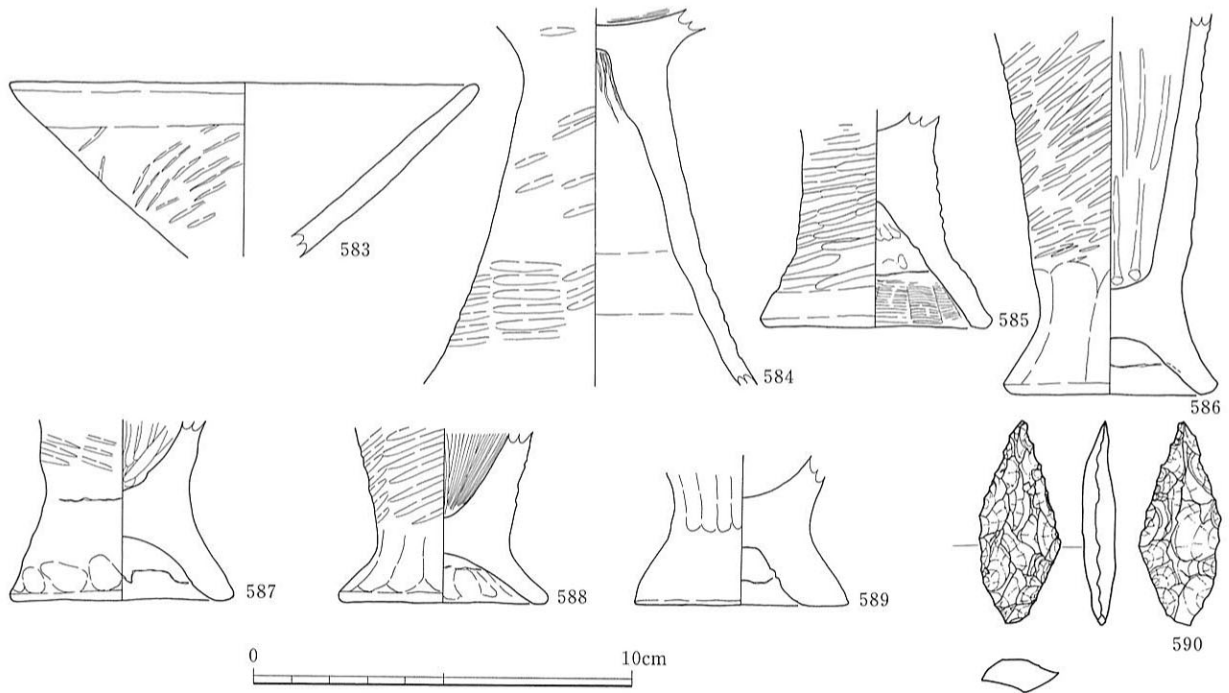


図 81 第5層 出土遺物(2)

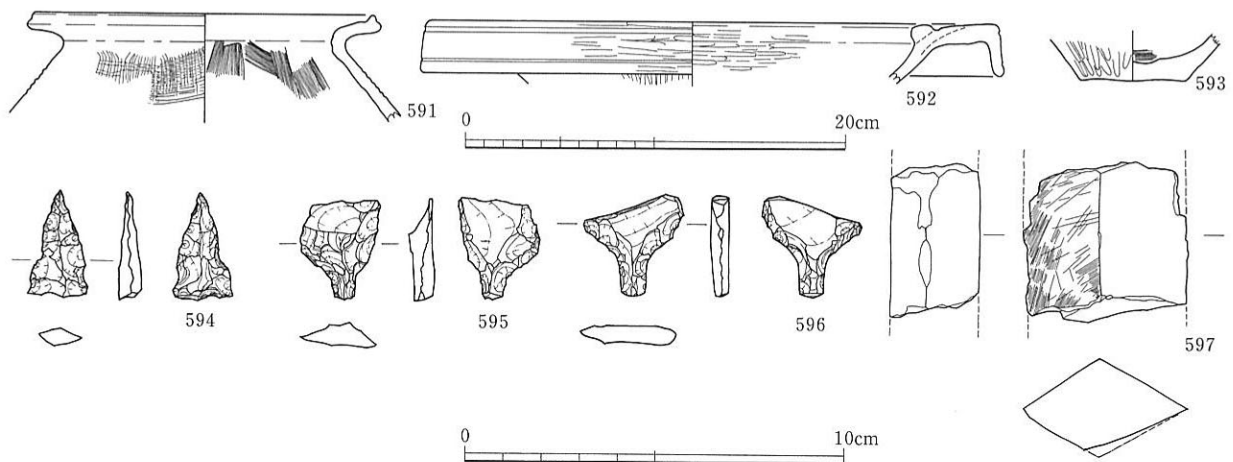


図 82 第5面 地床炉 36 出土遺物

ビオサエを施す。脚部内面に粘土を折り返した痕跡が残る。

590はサヌカイト製の凸基無茎石鏃である。

地床炉 36 出土遺物 (図 82) 591～593は弥生土器である。591は甕で大きく横に開く口縁部をもち、端部は上方につまみ出す。体部は内・外面共ハケ調整を行う。592は高杯で杯部は彎曲しながら外上方に立ちあがる。口縁部は横方向に張り出したあと、下方へのぼして面をなす。内面には突帯がつく。

594～596はサヌカイト製の石鏃である。595・596は凸基有茎石鏃だが、いずれも欠損する。597は剣形磨製石器で上下を欠損する。断面は菱形を呈し、表面には研磨痕が顕著に残る。

第6層出土遺物 (図 83) 598～609は弥生土器である。598は壺で朝顔形に大きく開き、口縁端部を肥厚させて面をなす。口縁部下端には刻み目を入れる。畿内第IV様式である。599は壺の口縁部である。外反しながら立ちあがり、端部は丸く収める。600～603は前期新段階の壺の体部で、数条の沈線を施す。604は中期の壺である。内彎しながら立ちあがり、口縁端部は内側につまみ出す。内・外面共にヘラミガキ調整を行う。また、外面には数条の凹線紋を施す。605・606・608は底部である。605は二次的な被火によって外面の剥離が顕著に認められる。607は甕の口縁部である。大きく横に外反し、口縁端部を上方へつまみあげる。609は器台である。断面三角形の突帯を2条貼りつける。

その他 (図 84・85) 610～615は須恵器である。610は杯蓋で内面にかえりがつく。611～613は杯Aである。614は杯Bである。615は杯Cである。616は土師器甕である。617～626は弥生土器である。617～622は壺、623～625は甕である。626は高杯、627はミニチュアの土製品である。628～634は土錘である。

635～637は丸底式の製塩土器である。635は丸底Ⅱ式で内彎しながら立ちあがり、口縁端部を肥大させて段を有す。636は甕形の製塩土器である。短く外上方に立ちあがって丸く収める。637は丸底Ⅲ式の製塩土器で、やや外反しながら立ちあがり、端部は面をもつ。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデで平滑に仕上げる。

638・639は脚台Ⅰ式aで、脚高が特に高く脚裾径も大きいものである。両者とも体部と脚部との境界に接合痕が確認でき、付加法による成形と思われるが、体部の底は円板充填をしており、脚部内面に絞り目が確認できる。638は体部と脚部上位にタタキ調整を行う。639は脚部外面にタタキ調整、脚裾部内面にハケ調整を行う。

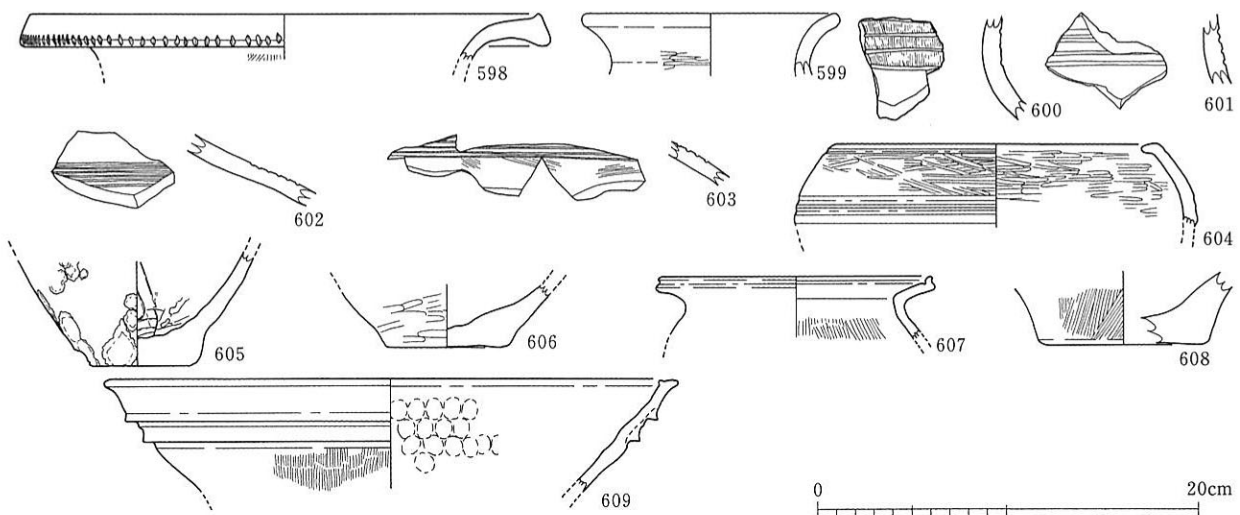


図 83 第6層 出土遺物

640・641は脚台Ⅰ式bである。640は成形を付加法によっており、体部が剥がれた下にタタキ目を確認できる。体部内面に棒状工具によるオサエを施し、脚部内面に粘土の折り返した痕跡が残る。641は脚部上位にタタキ調整を行い、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。脚部内面に粘土の折り返した痕跡が残る。

642は脚台Ⅱ式aで、脚裾端部に面をもつ。643は脚台Ⅱ式aで、脚部内面の凹みが弱い。体部外面にタタキ調整を行い、脚部外面にユビオサエを施す。体部内面に板状工具の圧痕が残る。644・645は脚台Ⅱ式aで脚部内面の凹みがほとんどなく平底状を呈する。644は体部内面に棒状工具によるオサエを、645は脚部外面に縦方向のナデを施す。

646・647は脚台Ⅱ式bで、体部外面にタタキ調整、脚部外面にユビオサエを施す。体部内面には、646は棒状工具によるオサエを施し、647は粗いハケ調整を行う。648は脚台Ⅱ式bで、脚部内面の凹みがほとんどなく平底状を呈する。脚部外面にユビオサエ、体部内面に棒状工具によるオサエを施す。

649～651は脚台Ⅲ式である。649は脚裾径が大きく、体部外面にタタキ調整を行う。体部内面に板状工具の圧痕が残る。脚部内面に粘土を折り返した痕跡が残る。650は脚部外面にユビオサエを施し、体部内面に板状工具の圧痕が残る。652は脚台Ⅳ式で、脚部外面にユビオサエを施す。653は礎石である。

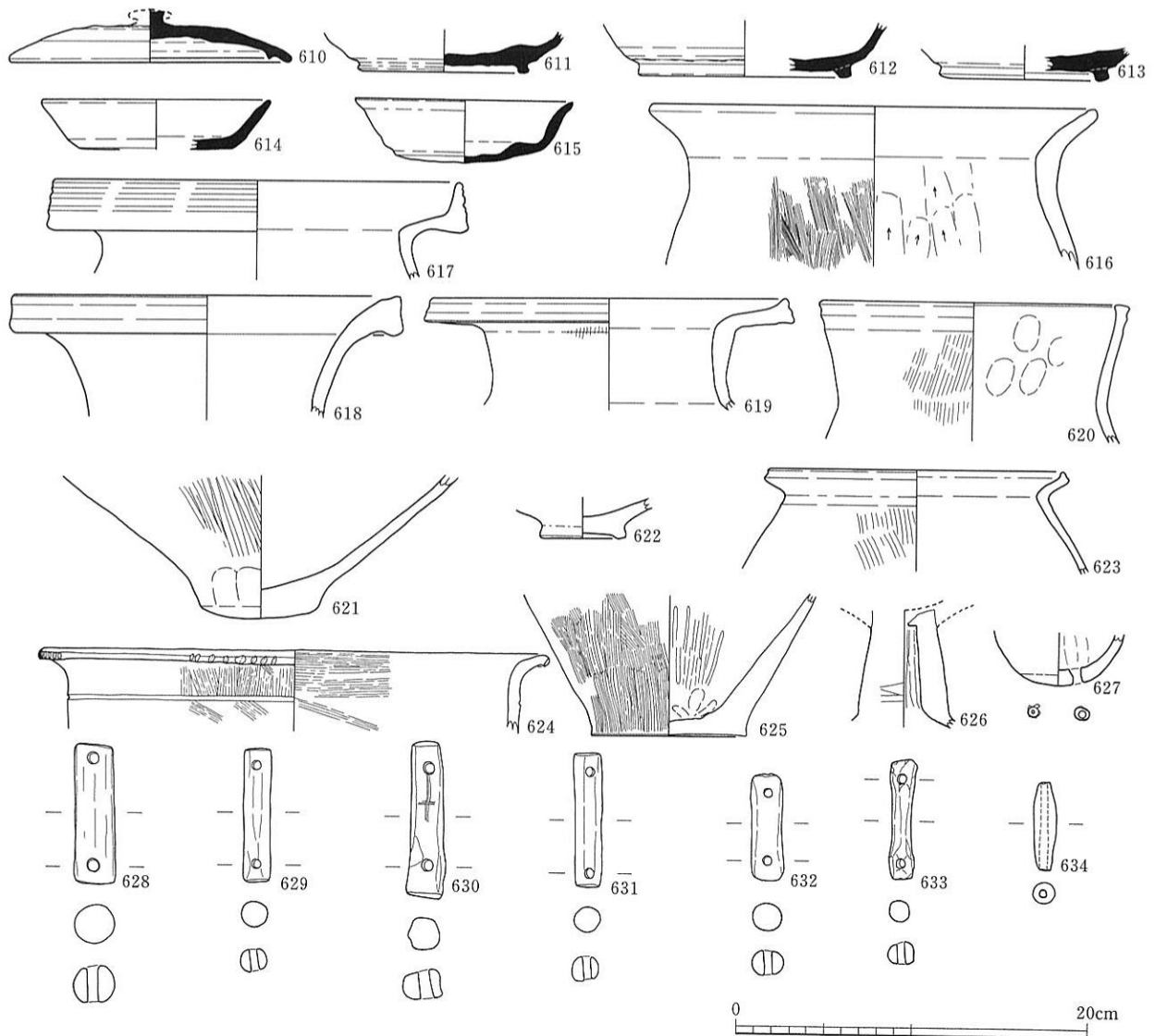
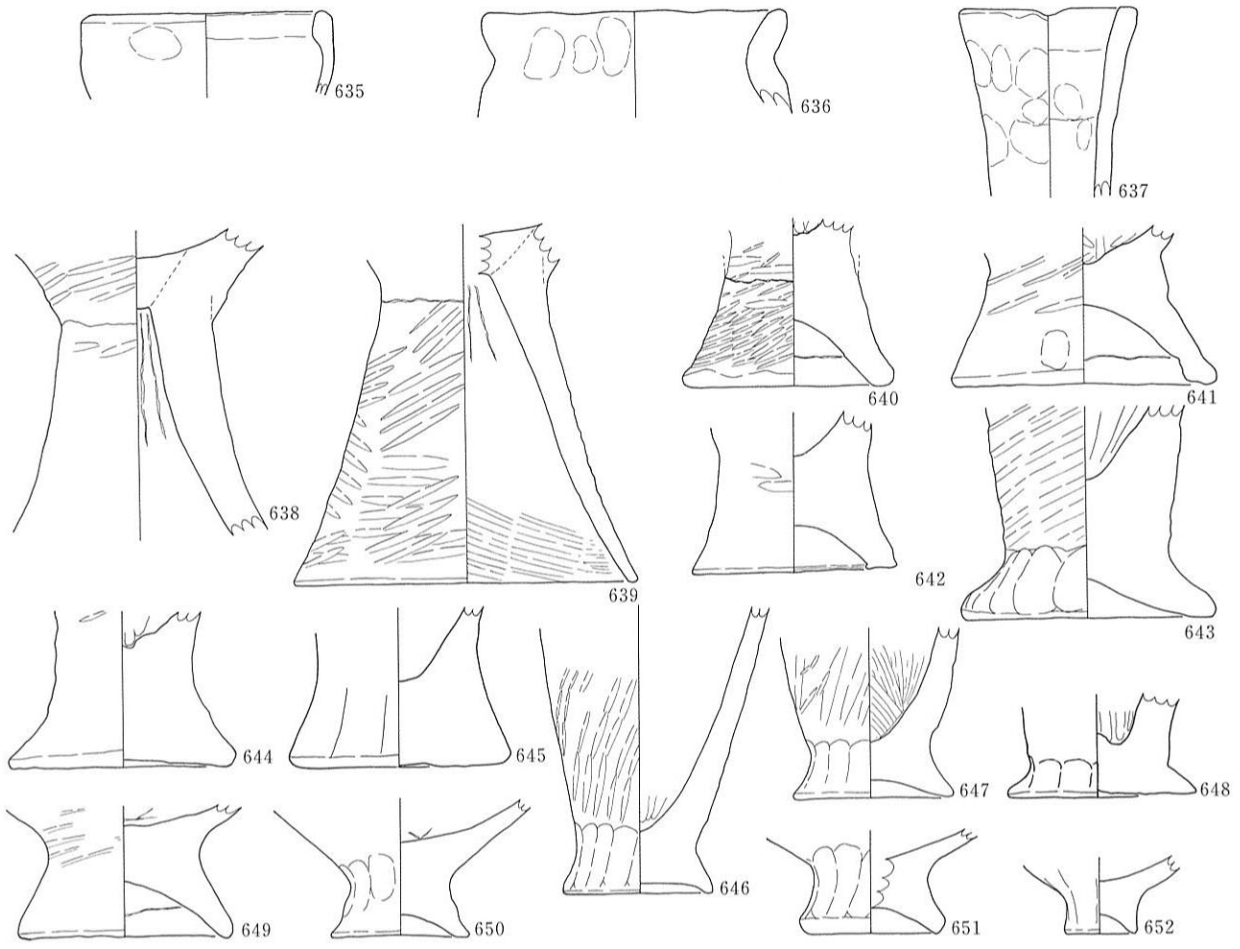
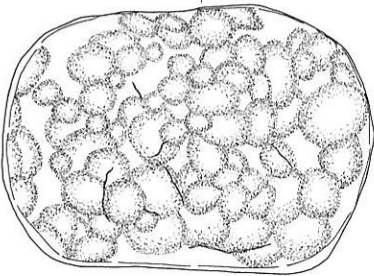
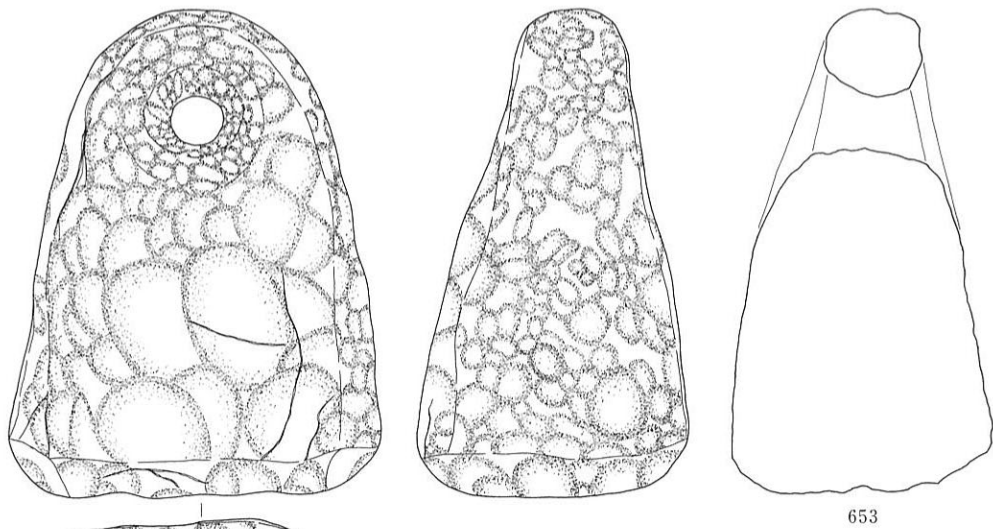


図84 その他 出土遺物(1)



0 10cm



0 20cm

図 85 その他 出土遺物 (2)

V.まとめ

小島北磯遺跡で今回行った調査成果についてまとめてみる。遺跡の立地は、紀淡海峡に面した小さな独立した海浜に位置する。海浜の周囲は和泉山脈から派生する急峻な尾根が迫っているため、海岸伝いに歩いてくることは容易ではなく、当時は海上からアクセスする以外に海浜に取りつく方法はなかったであろうと推測される。

次に時代順に遺跡の変遷を追ってみると、当遺跡において生活の痕跡がはっきりと確認できたのは、弥生時代前期後葉～中期にかけてである（第6面）¹⁾。角礫や円礫で構成された海浜堤と浸食崖に挟まれた鞍部にあたる堤間低地に地床炉が築かれた。炉の床面はよく焼けており赤変が著しいが、その形状は不定形を呈する。炉の周辺からは弥生時代前期後葉～中期後葉の土器が出土した。

弥生時代中期後葉になると地床炉の数が増加する（第5面）。炉はやはり堤間低地につくられるが、残りは悪く不定形を呈する²⁾。当該面の包含層からは、弥生時代中期後葉の土器のほかに石鏃、磨製石剣、土製の紡錘車などが出土した。弥生土器のなかには二次的に火を受けて器面の剥離が顕著な壺底部があり、製塩土器として転用された可能性も考えられる³⁾。しかし、既往の調査から大阪湾沿岸における土器製塩の開始およびいわゆる製塩土器の出現は弥生後期にまで降ることなどから、地床炉の存在と二次的に被火した土器が出土した現段階で、土器製塩の開始は弥生時代中期後葉にまで遡ると断言するにはあまりにも資料が少な過ぎるため、ここでは可能性があるに留めておく。

弥生時代後期中葉～古墳時代前期になると、石敷道路がつくられた（第4面）ほかには顕著な遺構は検出されなかった。石敷道路は長さ約6.5m、上幅約1mを測り、弧を描きながら、堤間低地に拳大の礫と炭や地山ブロックを含む土で土台を築いたのち、長さ50cmの扁平な礫を並列に並べて仕上げる。この石敷道路は海水の汲み上げなど製塩作業に重要な役割を果たしたものと推測される。

石敷道路が海浜堤と浸食崖を結んでいることや、石敷道路の周辺から脚台式製塩土器やサザエの殻をはじめ多量の遺物が廃棄された状態で出土しているにも関わらず製塩炉をはじめ顕著な遺構が検出されなかったことなどを考えあわせると、当遺跡におけるこの時期の活動の拠点は、波の影響を受けにくい浸食崖の上、つまり調査区外に求めることができる。しかし、試掘調査の結果から、その範囲は府道の東側までは広がらないと考えられる。

当該面の包含層からは、弥生土器、土師器、脚台式製塩土器のほかに土錘や鹿角製のヤスといった漁撈具や砥石、獣骨などが出土しており、製塩に従事していた集団が製塩活動以外に漁撈など多岐にわたる活動を行っていたことが推察される⁴⁾。なお、この層からも二次的に被火して変色し製塩土器に酷似した器壁をもつ古墳時代後期の土師器高杯が出土した。これは、第VI章の考察で詳しく述べるが、今回の調査で大阪湾沿岸における最古の脚台式製塩土器の可能性をもつ資料が出土しており、その系譜が高杯に求められることから、これを裏づける資料といえる。

また、今回の調査では、古墳時代中期に相当する丸底I式製塩土器の出土が非常に少なかった。丸底I式と確認できた口縁部は9点のみで、しかもすべて小片である。このことは、東へ約300m離れた地点に所在する小島東遺跡において僅か35㎡の調査区の中から6000点を超える出土があったのとは対照的であり、この地域における製塩活動の実態を探るうえで非常に興味深い結果といえる。

奈良時代に入ると泉南から和歌山県にかけての大阪湾沿岸部で製塩遺跡が爆発的に増加するが、これ

は律令体制において塩を税として徴収するようになり、その生産流通に対する管理体制が強化されたためと考えられ、当遺跡においても2面の遺構面を検出した。当該面は弥生時代後期中葉～古墳時代前期の遺構面が埋没したのち、わずかに残っていた堤間低地に盛土による整地を行って旧汀線際まで平坦面を拡幅した。このことは、作業効率上より海水を摂取し易い場所に作業域を移動させると同時に、製塩活動の拡大を計った結果であるといえよう。そして、第3面では12基の石敷製塩炉と1基の地床炉を、第2面でも6基の石敷製塩炉を検出した。これら検出された石敷製塩炉は、一辺20～40cmの大きな礫を使用した炉と、拳大の円礫を使用した炉の2種類がみられる。さらに、製塩土器も丸底Ⅱ式と丸底Ⅲ式の2種類が出土したことなどから、作業工程上の使い分けが行われていた可能性が考えられる。

一般に平安時代に入ると鉄釜を使った新たな製塩技術が採用されて土器製塩は終焉を迎えるが、当遺跡においても製塩をはじめとする活動の痕跡がみられなくなり、その役割を終える。そして、鎌倉時代になってようやく谷部を中心に水田耕作が営まれる。さらに、近代に入ると谷周辺の斜面地をカットして里山として利用擦するようになる。

註

- 1) 弥生時代中期後半の土器に混じって弥生時代前期新段階の土器が出土した他、わずか1点ではあるが縄紋時代晩期の突帯紋土器の口縁部が出土したが、土器に伴う時期の遺構はなかった。
- 2) 地床炉の年代を探るため株式会社パレオ・ラボに地床炉の熱残留磁気法による分析を委託して10数箇所分析を行ったが、磁気曲線に該当するデータは得られなかった。但し、いずれのデータも同じ方向に振れていることから、通商産業省地質研究所の寒川 旭氏より海浜そのものが後世の地震などの影響によって変動した可能性があるとの指摘を受けた。
- 3) ちなみに二次的に被火を受けた土器については、財団法人 塩事業センターに土器残留の成分分析を委託したが、土器の洗浄後の試料を提出してしまっただけ十分な成果は得られなかった。
- 4) 余談ではあるが、当遺跡の沖合いは現在でも良好な漁場として釣りや素潜り漁が盛んで、その風景は当時を偲ばせる。

主な参考文献

- 森 浩一他『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部考古学調査報告第2冊
同志社大学文学部文化学科内考古学研究室 1968
- 広瀬和雄「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会 1978
- 石部正志「土器製塩をめぐって若干」『古代学研究』86 古代学研究会 1978
- 國乗和雄他『田山遺跡』(財)大阪文化財センター 1983
- 國乗和雄「大阪湾沿岸の製塩土器」『交通・交易・交流』昭和61年度文化財講座資料 (財)大阪文化財センター 1986
- 広瀬和雄「近畿地方における土器製塩—大阪湾周辺を中心として—」『考古学ジャーナル』298 1988
- 小川正純『山田海岸遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1989
- 岩本正二「7～9世紀の土器製塩」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983
- 広瀬和雄「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩—首長ネットワーク論の提唱—」『弥生文化博物館研究報告』第1集 弥生文化博物館 1992
- 富加見泰彦『県下土器製塩遺跡の調査』広域遺跡群詳細分布調査6 和歌山県教育委員会 1992
- 富加見泰彦「紀伊における土器製塩の現状と課題」『古文化談叢』第30集(中)九州古文化研究会 1993
- 近藤義郎他『日本土器製塩研究』青木書店 1994
- 富加見泰彦『西庄遺跡発掘調査I』(財)和歌山県文化財センター 1995
- 紀伊風土記の丘資料館『特別展 古代の塩作りと海』1995
- 『岬町の歴史』岬町 1995
- 河田泰之「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996
- (財)和歌山県文化財センター「西庄遺跡発掘調査現地説明会資料」1998

VI. 考察

脚台式製塩土器について

宮地 聡一郎
(現 福岡県教育委員会)

1. はじめに

大阪湾沿岸、及び周辺地域の脚台式製塩土器についてはこれまでも多くの研究がなされており、特に広瀬和雄氏の小島東遺跡報文中での脚台Ⅰ式～脚台Ⅳ式の設定は、以後の研究の指針となる重要なものであった¹⁾。近年は下田遺跡等の消費地で良好な出土例が多く報告され、河田泰之氏により脚台式製塩土器各類の編年及び所属時期の整理が行われている²⁾。今回報告する小島北磯遺跡からは製塩遺跡にふさわしく極めて多量の脚台式製塩土器が出土し、脚台Ⅰ式～脚台Ⅳ式までの残りの良い豊富な資料を得ることができた。個々遺物についての詳細はⅣ章において説明したとおりであるが、資料の重要性から若干の考察を行うことにしたい。

2. 分析資料と分析方法

小島北磯遺跡の脚台式製塩土器は全て5トレンチから出土しているが、東側から西側へ傾斜する斜面堆積、及び奈良時代以降の堆積土中より出土しており、残念ながら遺構等には伴っていない。層位及び地点別に有意な差もほとんど認められず、脚台Ⅰ式～脚台Ⅳ式が混在した状況であった。脚台式製塩土器と判断できる土器は計2744点出土し、うち脚台Ⅰ式が296点、脚台Ⅱ式が2063点、脚台Ⅲ式が65点、脚台Ⅳ式が99点、脚台Ⅰ式もしくは脚台Ⅱ式が69点、脚台Ⅱ式もしくは脚台Ⅲ式が39点、不明が113点であった。判別可能なものでは脚台Ⅰ式が11.7%、脚台Ⅱ式が81.8%、脚台Ⅲ式が2.6%、脚台Ⅳ式が3.9%となる。分析にあたってはそれぞれの個体の調整や製作技法に注目し、型式ごとに

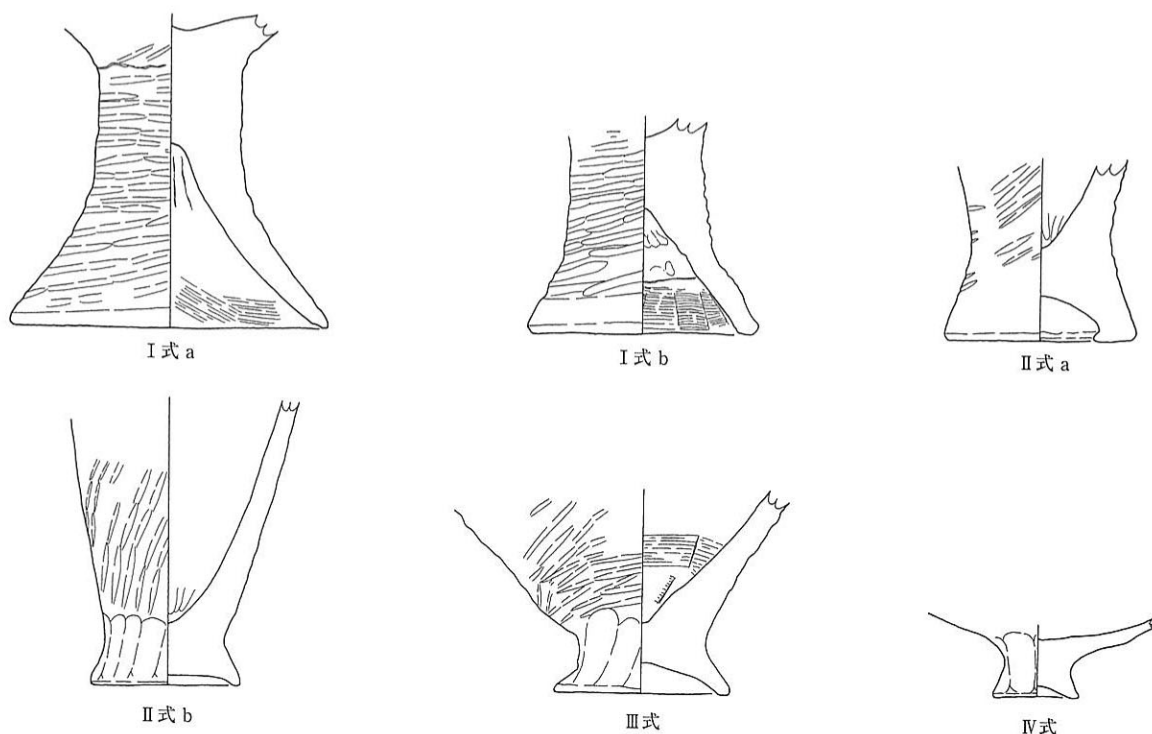


図 86 脚台式製塩土器型式分類

傾向を見ることにしたい。

ここで分析を進めるにあたって脚台式製塩土器の本稿での分類基準について整理を行っておきたい(図 86)。

脚台Ⅰ式 脚裾径が 5 cm 以上、脚高が 3 cm 以上と大きく、体部が外側へ開くものである。脚部の大きさによって脚高が 5.5 cm 以上の脚台Ⅰ式 a と、それ以下の脚台Ⅰ式 b とに細分できる³⁾。脚部と体部の接合は付加法⁴⁾によるものが多く、調整は脚部、体部とも外面はタタキ調整が多い。

脚台Ⅱ式 脚高が 3 cm 以下と小さめで、体部が斜め上方に直線的に立ち上がるものである⁵⁾。脚部の大きさによって、脚高が 2～3 cm と大きめの脚台Ⅱ式 a と、脚高が 2 cm 以下の脚台Ⅱ式 b とに細分できる⁶⁾。脚部と体部の接合はⅡ式 a で一部付加法によるものがあるが、連続して作り上げているものが多い。

脚台Ⅲ式 脚高が 2 cm 以下と小さめで、体部が開き、椀状を呈するものである⁷⁾。脚部と体部は連続して作っている。調整は脚部がユビオサエ、体部にタタキ調整を行う。

脚台Ⅳ式 脚高が 1 cm 程と小さく、体部が開き、椀状を呈するものである。脚部は体部よりつまみ出して作り出す。外面調整は脚部にユビオサエ、体部はナデによるものがほとんどである。他の型式に比べ二次比熱による変色が著しく、赤橙色を呈するものが多い。

以上が基本的な分類基準であるが、特に脚台Ⅰ式については、鈴木陽一氏の湊遺跡出土脚台式製塩土器の分析によってかなりの多様性があることが指摘されており⁸⁾、成形や調整技法、細部の形状に着目すれば、脚台式製塩土器はきわめて多くの変異があることは既に指摘されているとおりでである。ここではその実態をいくつかの属性に着目し、各型式の内容を再考することとしたい。

3. 個別的分析

ここではそれぞれの属性について各型式ごとに比率を出し、傾向をつかむこととする。

脚部外面調整(表 1) 広瀬氏の指摘どおり脚台Ⅰ式にはタタキ調整が、脚台Ⅱ式から脚台Ⅳ式はユビオサエを施すものが多いものの、脚台Ⅰ式の中でも 2 割程はナデ調整によっており、脚台Ⅱ式でもⅡ式 a には 25.9% にタタキ調整を確認することができる。脚台Ⅰ式 b と脚台Ⅱ式 a との間には大きな比率の差が見られ、タタキ調整の消滅とユビオサエの導入という点に注目するならば、脚台Ⅱ式 a と脚台Ⅱ式 b との間に画期が求められよう。後出の脚台Ⅲ・Ⅳ式はほとんどのものでユビオサエを施す。

体部内面調整(表 2) 脚台Ⅰ式 a では少量のハケ調整の他はほとんどがナデであるが、脚台Ⅰ式 b には棒状工具によるオサエが出現し画期が見出せる。脚台Ⅱ式 a、Ⅱ式 b とも棒状工具によるオサエが多いものの、脚台Ⅲ式は著しく減少し、ハケ及び板ナデ調整が増加する。脚台Ⅳ式はほとんどがナデ調整による。

体脚部接合方法 これも広瀬氏によって脚台Ⅰ式の体脚部分離製作技法から、脚台Ⅱ式の体脚部連続製作技法への変化が指摘されている⁹⁾。脚台Ⅰ式は体部と脚台部を別々にタタキ調整したのち接合し、くびれ部に補強粘土を貼り付けるとされているが、小島北磯遺跡の資料を見る限りでは脚台Ⅰ式で補強粘土はほとんど確認することができず、脚部上位で粘土が剥離しているのは補強粘土ではなく、体部そのものの粘土が剥離していると判断できる。実際にはタタキ調整を行い脚部を作り上げた後に体部を付加して成形し、最後に体部のタタキ調整を行うものと判断できる。脚部にしばしば少量の方向の違うタタキ目が確認できるのは、体部をタタキ調整した際のものと思われる。したがって「体脚部分離製作技法」という表現は適切ではない。むしろタタキ調整は用いないものの、高杯の接合方法と類似することか

表1 脚台式製塩土器脚部外面調整 ※ 各枠内上段は点数、下段はパーセンテージ、調整が不明なものは除外している。

調整 型式	タタキ	タタキ 十ナデ	タタキ 十ユピオサエ	ナデ	ナデ 十ユピオサエ	ユピオサエ	ハケ	計
I式 a	94 (66.7)	14 (9.9)	0 (0.0)	31 (22.0)	1 (0.7)	0 (0.0)	1 (0.7)	141 (100.0)
I式 b	58 (63.3)	9 (9.8)	6 (6.5)	15 (16.3)	1 (1.1)	3 (3.3)	0 (0.0)	92 (100.0)
II式 a	88 (12.7)	42 (6.1)	49 (7.1)	299 (43.1)	17 (2.5)	197 (28.4)	1 (0.1)	693 (100.0)
II式 b	24 (1.8)	22 (1.6)	58 (4.3)	362 (27.1)	20 (1.5)	851 (63.6)	0 (0.0)	1337 (99.9)
III式	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.6)	12 (19.4)	1 (1.6)	48 (77.4)	0 (0.0)	62 (100.0)
IV式	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (6.3)	1 (1.0)	89 (92.7)	0 (0.0)	96 (100.0)

表2 脚台式製塩土器体部内面調整 ※ 各枠内上段は点数、下段はパーセンテージ、調整が不明なものは除外している。

調整 型式	ナデ	ハケ	板ナデ	棒状工具 オサエ	計
I式 a	83 (92.2)	5 (5.6)	2 (2.2)	0 (0.0)	90 (100.0)
I式 b	52 (68.4)	2 (2.6)	0 (0.0)	22 (28.9)	76 (99.9)
II式 a	260 (51.6)	6 (1.2)	5 (1.0)	233 (46.2)	504 (100.0)
II式 b	359 (32.4)	9 (0.8)	80 (7.2)	659 (59.5)	1107 (99.9)
III式	31 (54.4)	13 (22.8)	10 (17.5)	3 (5.3)	57 (100.0)
IV式	89 (93.7)	3 (3.2)	3 (3.2)	0 (0.0)	95 (100.1)

ら、本稿では高杯の接合方法で呼称されている「付加法」を使用することにした。以上のように実際は広瀬氏の指摘とは若干異なるものの、連続して成形する方法への変化は正しく、脚部上位で体部粘土が剥離している個体、もしくは脚部上位に粘土の接合痕が確認でき、確実に付加法によるものと判断できるものが、脚台I式aでは48.0%、脚台I式bでは32.5%なのに対し、脚台II式aでは5.1%、脚台II式b、脚台III式、脚台IV式では0%となる。確実に付加法と判断できるものの割合のため、実際には特に脚台I式でこれより高率になるとと思われる。脚台II式b、脚台III式はその脚部の大きさから、おそらくほとんどのものが連続成形技法により脚部を成形していると思われ、脚台IV式はつまみ出して脚部を作り出している可能性が高い。ただし脚台II式aは断面の観察等からも粘土の接合の痕跡を残すものは非常に少なく、正確な成形技法を復元することは困難である。上記の付加法の他には240・244・468・481のように粘土を充填している例も存在することは確かである。

接合方法に注目しての研究はこれまでも鈴木陽一氏によるものがあり、脚の大きさではなく接合方法による脚台I式第1段階、脚台I式第2段階の細分案が出されている¹⁰⁾。しかし、同時期の高杯の接合方法においても単純に時間差を反映しているとは言い難いため、積極的に評価することはできない。むしろ、後述するように脚台I式は高杯と関係の深い型式であることを考えれば、高杯の接合方法の多

様性が、脚台Ⅰ式の多様性に反映されていると考えた方が得策であろう。

ここでは脚台Ⅰ式は付加法によるものが多いが、脚台Ⅱ式aではそのようなものが少なく、連続成形によって粘土を充填するもの等も存在してかなり多様であること、脚台Ⅱ式b、脚台Ⅲ式では連続成形に画一化し、脚台Ⅳ式では粘土をつまみ出して成形すること等を指摘するにとどめたい。

脚裾部の折り返し 脚台式製塩土器の脚裾内面には、しばしば粘土の接合痕のように見えるものが存在する(図版34 - 469)。これらは断面の観察によって、586のようなものの存在から、そのほとんどは内側に粘土を折り返した際の粘土の端と思われる。この痕跡は脚台Ⅰ式aでは2.2%、脚台Ⅰ式bでは4.9%なのに対し、脚台Ⅱ式aでは26.1%に認められる。しかし脚台Ⅱ式bでは0.6%、脚台Ⅲ式では1.8%、脚台Ⅳ式では0%と極めて少なく、脚台Ⅱ式aに特徴的な技法であることが判る。

4. 型式推移の実態

上記の分析によって脚台式製塩土器の推移の概略は示すことができたが、仮に型式の推移が順次に起きたと考えた場合、属性によって画期となる型式に差が認められしかも段階的である。例えば外面調整では脚台Ⅱ式a(期)でタタキ調整の減少が見られ、脚台Ⅱ式b(期)にほぼ消滅する。体部内面調整では脚台Ⅰ式b(期)に棒状工具によるオサエの導入がはじまり、脚台Ⅱ式a(期)に増加する。体部と脚部の接合では脚台Ⅱ式a(期)に付加法によるものが減少し、脚台Ⅱ式b(期)に連続成形への画一化が見られる。また脚裾内面の折り返しは、少量脚台Ⅰ式に認められたが、脚台Ⅱ式a(期)に増加し脚台Ⅱ式b(期)に激減する。

このような推移が実態であるならば、脚台式製塩土器の各属性の変化は漸次的なものだと判断せざるをえず、各型式において、古い要素と新しい要素が常に存在することになる。このようなことも脚台式製塩土器、特にⅠ式～Ⅱ式aの多様性を印象付ける原因の一つであろう。

各型式の共存関係 型式推移の実態を考えるためにも、脚台式製塩土器各型式の所属時期についての研究は重要である。このことについては河田氏の論考によってかなり明らかになりつつあり、庄内式併行期前半に脚台Ⅰ式と脚台Ⅱ式の共存関係が見られ、また布留式初頭を前後する時期に脚台Ⅱ式と脚台Ⅲ式が共存することが判ってきた¹¹⁾。本稿の細分型式がそれぞれどのような共存関係にあるかは今後にゆだねるとするが、西大路遺跡533 - OX¹²⁾において、庄内式併行期古段階に伴って、脚台Ⅰ式aと脚台Ⅱ式aが共伴している事例は興味深い。このような共存関係を積極的に評価するならば、脚台式製塩土器が見せる多様性についても理解がしやすくなる。

例えば、脚台Ⅰ式aに少量ナデ調整が見られること、また逆に脚台Ⅱ式aにもタタキ調整が見られることは、本来タタキ調整の特徴的な脚台Ⅰ式と、ナデ調整が特徴的である脚台Ⅱ式aが同時期に存在し、お互いの技術の折衷が起きたと考えれば理解しやすい。また脚台Ⅰ式bの生起にしても、脚台Ⅱ式aとの関係から、脚台Ⅰ式aの脚部が縮小したものと考えれば、型式変化の理由も説明しやすくなる。脚台Ⅱ式aにも付加法が使用されること、脚裾部の折り返しが脚台Ⅰ式に少量見られることも、この想定を支持するものである。

以上のことを考えるうえで、脚台Ⅱ式aの出現過程の解明は重要である。これまでの脚台式製塩土器の理解では、脚台Ⅰ式と脚台Ⅱ式との間に、製作技法の変化や、形態の斉一化等の差が考えられてきたが、その際に脚台Ⅱ式とされてきたものは本稿の脚台Ⅱ式bを指してきたものが多い¹³⁾。脚台Ⅱ式でも、脚高の高いⅡ式aには、製作技法にも多様性があることは上述のとおりである。この脚台Ⅱ式aの特徴の一つに、脚裾端部に幅広の接地面を持つことが挙げられ、290～292・452・543・589のよ

うに幅広の面を持つものや、247・249・449・450のように内側へ粘土がはみ出るもの(図版34-247)、13・61・644・645のように平底を呈するもの(図版34-13)等が存在する。それぞれの割合は、端部が素直に収まるものが90.5%、幅広の面を持つものが4.5%、面を持ち内側へ粘土がはみ出るものが3.8%、平底のものが1.2%となり、脚台Ⅱ式aの1割程は脚裾端部に幅広の接地面を持つことが判る。この接地面を持つものが特に脚台Ⅱ式aに多いことには、製作技法に関係することが考えられるが、中部瀬戸内の脚台式製塩土器にも同様の特徴が見られることは単なる偶然ではないであろう。これまでに脚台Ⅱ式については、その器形や脚部形態から、中部瀬戸内との交流の産物であることが指摘されてきたがそれを傍証するものとして注目できる。

各型式の系譜 上記したような共存関係は、脚台式製塩土器の自立的な型式変化を想定しては理解できない。おおまかな流れとしてのⅠ式からⅣ式への変化は妥当であるものの、各型式の系譜を考える必要がある。これまでの分析から、脚台Ⅰ式はその形態や脚部と体部の接合方法の類似、また脚部内面に絞り目やハケ調整が見られること等から、高杯との関係性は明らかである。それに対し脚台Ⅱ式は、その形態や製作技法等から、中部瀬戸内の脚台式製塩土器との関係が深い型式であり、Ⅰ式とは系譜が異なる。また、脚台Ⅲ式もその形態、及び体部内面にハケ及び板ナデ調整が増加することを勘案すると、上げ底の脚部を有する小型鉢¹⁴⁾との関係性の上で成立した可能性が高いのではないだろうか。

このように、脚台式製塩土器の型式変化を1系列で捉えるのではなく、他地域との関係や、日常生活土器との関係性といった系譜の違いを考えると、複数型式の共存現象は理解しやすくなる。脚台式製塩土器の多様性の要因の一つに、複数型式の共存が生み出す技術の折衷が起きていることを指摘しておきたい。

5. 脚台式製塩土器の出現時期

今回の小島北磯遺跡の調査では、脚台Ⅰ式でも脚高の極めて高いものが多く確認できたことも成果の一つである。脚台Ⅰ式aの中でも434・584・638・639等は特に大きく、現時点で確実に時期を押しえられる最古の資料、下田遺跡の下田Ⅰ-2式に伴うもの¹⁵⁾よりも型式学的に古いと判断できる。小島北磯遺跡の継続性も考えると、上記資料が大阪湾沿岸の最古の脚台式製塩土器である可能性は高い。注目されるのは、その形態と製作技法が同時期の高杯と極めて類似していることであり、外面のタタキ調整を除けば見間違え程である。大阪湾沿岸の脚台式製塩土器の出現は、高杯との深い関係性の上で起こったことを物語っていよう。

これらの資料により、高杯との形態の比較から、大阪湾沿岸の脚台式製塩土器の出現時期をより細かに推定できるようになった。弥生後期の高杯の編年は、柱状の脚部に裾部が屈曲して広がるものと、脚部全体が直線的に広がるものが共存する段階から、柱状のものがなくなり緩やかに脚部全体が広がるものが主体となる段階、そして脚部付け根が細く、裾部の広がりが大きく外反するものを主体とする段階へと変遷するが、ここで仮にそれぞれを後期の前葉、中葉、後葉とするならば、小島北磯遺跡の脚台Ⅰ式aに柱状の脚部を持つものは存在しないため、後期前葉にはまだ脚台式製塩土器は出現していないと判断することができる。形態の類似性から考えるのならば、その出現時期を後期中葉に求めるのが妥当であろう。遅くとも下田遺跡の編年¹⁶⁾の下田Ⅰ-1式には存在していると考えられ、さらに一段階前に出現している可能性も高いと思われる。より詳細な出現時期については今後の良好な一括資料の増加に期待したい。

6. おわりに

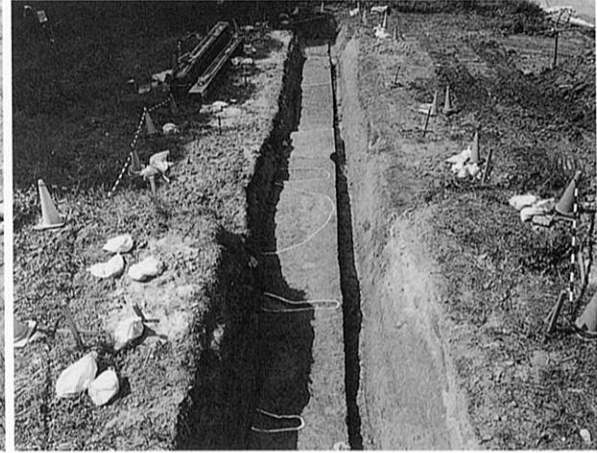
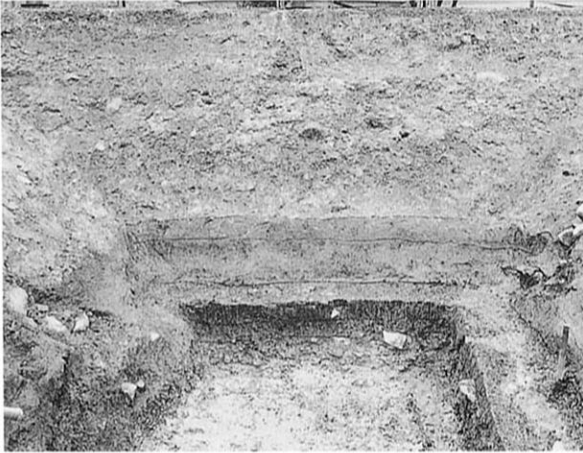
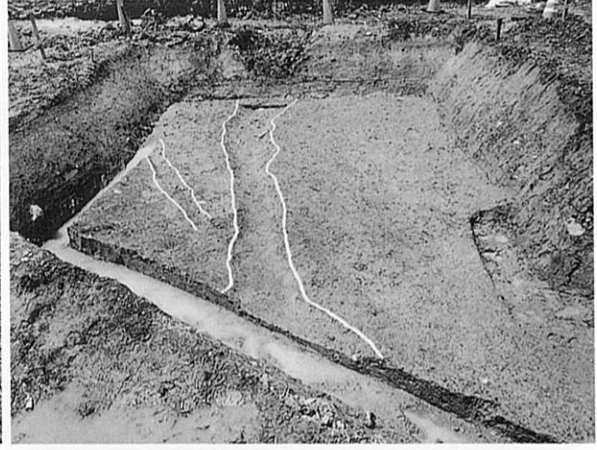
以上小島北磯遺跡出土の脚台式製塩土器の分析を通じて若干の小論を進めてきた。一括資料ではない

ものの、多量の全型式にわたる脚台式製塩土器、及びより古相の脚台Ⅰ式の資料を得られたことは調査の成果の特筆すべきことである。今回若干ではあるが各型式のデータを提示できたことも、その豊富な資料のおかげであることは言うまでもない。また今回はこれまで指摘されてきたように各型式の共存を認め、各型式の系譜を整理することによって、脚台式製塩土器の多様性の理解に努めてみた。この良好な資料を前にしながらも、筆者の力量不足から十分に検討を加えられたわけではないが、脚台式製塩土器の出現時期、各型式の系譜、変遷過程の解明にむけての一助となれば幸いである。

註

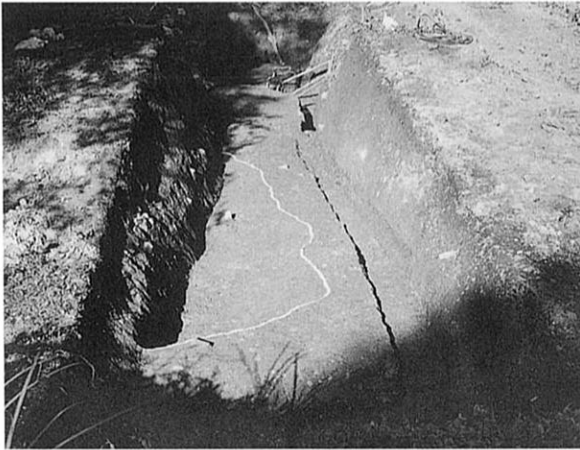
- 1) 広瀬和雄「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会 1978
- 2) 河田泰之「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996
- 3) 本稿の脚台Ⅰ式a、脚台Ⅰ式bは、それぞれ広瀬氏の脚台ⅠA式、脚台ⅠB式にほぼ相当する。
広瀬和雄「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店 1994
なお小島北磯遺跡出土の脚台Ⅰ式296点中、Ⅰ式aは143点、Ⅰ式bは92点、破片が小さく判断のつかないものは61点である。
- 4) 付加法という用語は寺沢薫氏、次山淳氏の高杯の接合方法の呼称であるが、製塩土器にもこの手法がとられているため、本稿ではこの用語を使用している。
寺沢薫「弥生土器の形式分類」『六条山遺跡』奈良県教育委員会 1980
次山淳「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 1993
- 5) 中には脚台Ⅰ式bと脚台Ⅱ式aとの区別がつきにくいものも存在するが、脚高が3.0cmをやや下回っても体部が外側へ開くものは脚台Ⅰ式bに、逆に脚高が3.0cmをやや上回っても体部が斜め上方へ直線的に立ち上がるものは脚台Ⅱ式aにしている。
- 6) 脚台Ⅱ式の細分については、註1文献で広瀬氏によりポピュラーなⅡA式と、脚台部が一回り大きく底部裏面が平坦なⅡB式とが提唱されているが、本稿では脚台部の大きさ、特に脚高を基準としている。
なお、小島北磯遺跡出土の脚台Ⅱ式2063点中、Ⅱ式aは702点、Ⅱ式bは1355点、破片が小さく判断のつかないものは6点である。
- 7) 脚台Ⅲ式についても広瀬氏によりⅢA式とⅢB式とに細分されているが、註1文献では大型のものをⅢB式としているのに対し、註3文献では体部にタタキ調整を行わないものをⅢB式としている。脚台Ⅲ式は確かに大型のものも存在するが、量が少ないこともあり本稿では特に細分を行わない。
- 8) 鈴木陽一「脚台式製塩土器について」『湊遺跡90-4区の調査』泉佐野市教育委員会 1993
- 9) 広瀬註1文献、註3文献
- 10) 註8に同じ
- 11) 註2文献。河田氏は脚台何式とは記述していないが、論考中のA類・B類・C類が、それぞれ脚台Ⅰ式・脚台Ⅱ式・脚台Ⅲ式概念におおむね相当するものと思われる。
- 12) (財)大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡発掘調査報告書』1988
- 13) 広瀬氏の脚台Ⅱ式の説明では、脚裾径4cm前後、脚高1.5cm前後となっているが、これは本稿では脚台Ⅱ式bに相当する。註3広瀬文献で例示している西大路例は脚裾径が5cm、脚高が2.5cm程度あり、このようなものが本稿の脚台Ⅱ式aに相当する。
- 14) 413のような小型鉢。
- 15) (財)大阪府文化財調査研究センター『下田遺跡』1996
報文中の170の脚台式製塩土器がそれにあたる。
- 16) 西村 歩「和泉北部の右式土師器と地域社会」『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996

版 圖



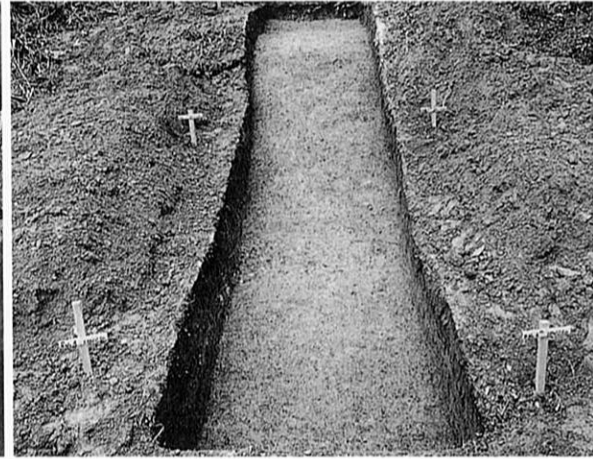
左上 1トレンチ 第1面 全景 (北から)
左下 2トレンチ 断面 (南西から)

右上 1トレンチ 第1面 全景 (北東から)
右下 3トレンチ 第2面 全景 (南東から)



左上 4トレンチ 第1面 全景 (南西から)
左下 7トレンチ 第1面 全景 (北から)

右上 6トレンチ 第1面 全景 (西から)
右下 8トレンチ 第1面 全景 (東から)



左上 9 トレンチ 第1面 全景 (南東から)
左下 11 トレンチ 第1面 全景 (北西から)

右上 10 トレンチ 第1面 全景 (南東から)
右下 12 トレンチ 第1面 全景 (北東から)



5 トレンチ 第2面 全景 (南から)



5トレンチ 第2面 南半部全景 (東から)



5トレンチ 第2面 中央部全景 (東から)



5 トレンチ 第2面 北半部全景 (南から)



5 トレンチ 第2面 石敷炉4 (北から)



左上 5トレンチ 第2面 石敷炉3 (東から)
左下 5トレンチ 第2面 石敷炉6 (南から)

右上 5トレンチ 第2面 石敷炉5 (西から)
右下 5トレンチ 第2面 石敷炉7 (北から)



5トレンチ 第2面 石敷炉8 (北から)



5 トレンチ 第3面 全景 (南西から)



5 トレンチ 第3面 中央部全景 (南から)

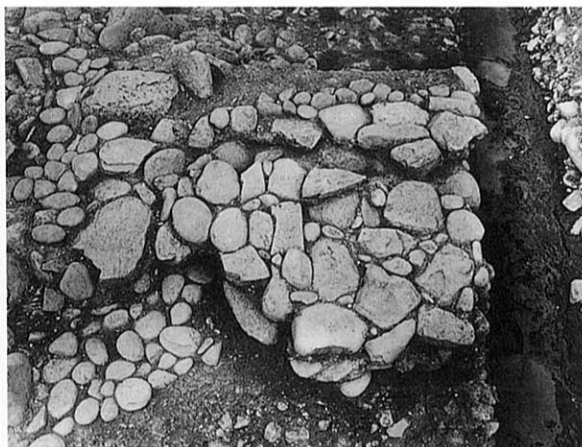


左上 5トレンチ 第3面 ピット20 断面 (北から)
左下 5トレンチ 第3面 石敷炉40 (北から)

右上 5トレンチ 第3面 石敷炉39・47 (南から)
右下 5トレンチ 第3面 石敷炉32 (北西から)



5トレンチ 第3面 石敷炉21 (北から)



左上 5トレンチ 第3面 石敷炉 47 (西から)
左下 5トレンチ 第3面 石敷炉 49 (東から)

右上 5トレンチ 第3面 石敷炉 39 (北西から)
右下 5トレンチ 第3面 石敷炉 48 (東から)



5トレンチ 第3面 石敷炉 54 (南西から)



左上 5トレンチ 第3面 ピット57 (西から)
左下 5トレンチ 第3面 ピット59 (西から)

右上 5トレンチ 第3面 ピット58 (西から)
右下 5トレンチ 第4面 全景 (南西から)



5トレンチ 第4面 中央部全景 (南から)



5トレンチ 第4面 石敷道路35 (北西から)



5トレンチ 第4面 石敷道路35 (南西から)



左上 5トレンチ 第4面 石敷道路35下部構造(東から)
左下 5トレンチ 第5面 全景(南西から)

右上 5トレンチ 第4面 調査区北壁断面(南から)
右下 5トレンチ 第5面 地床炉33(東から)



5トレンチ 第5面 中央部全景(東から)

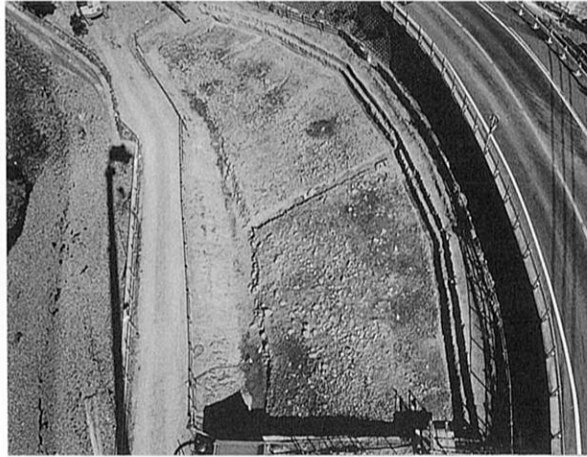


左上 5トレンチ 第5面 地床炉 34 (北から)
左下 5トレンチ 第5面 地床炉 41 (東から)

右上 5トレンチ 第5面 地床炉 36 (東から)
右下 5トレンチ 第5面 地床炉 42 (西から)



下段 5トレンチ 第5面 地床炉 46 (東から)

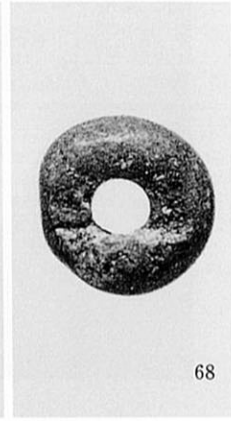
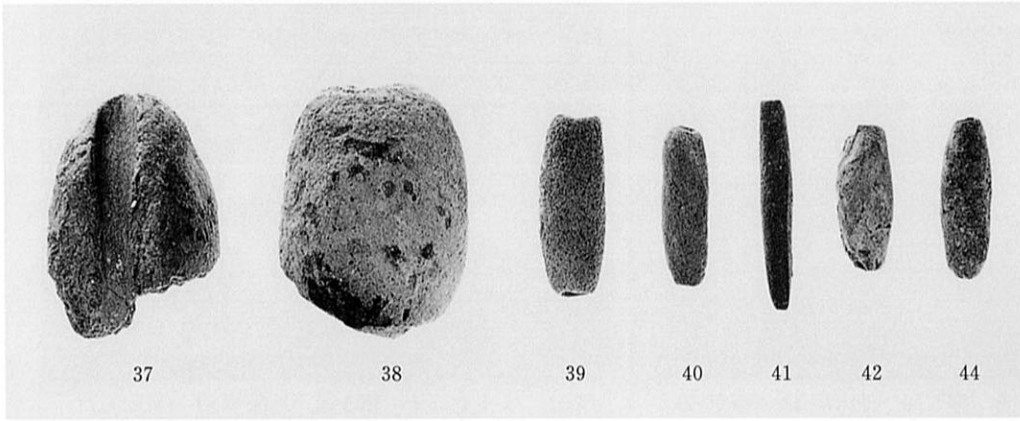


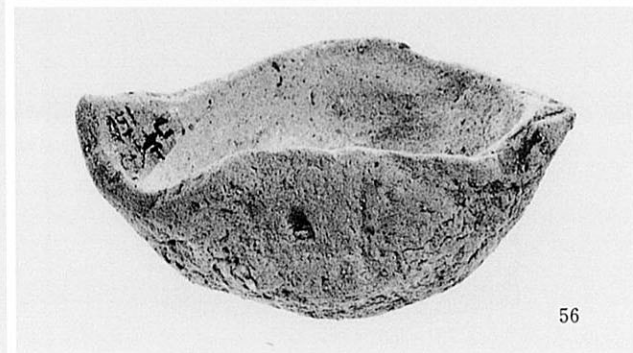
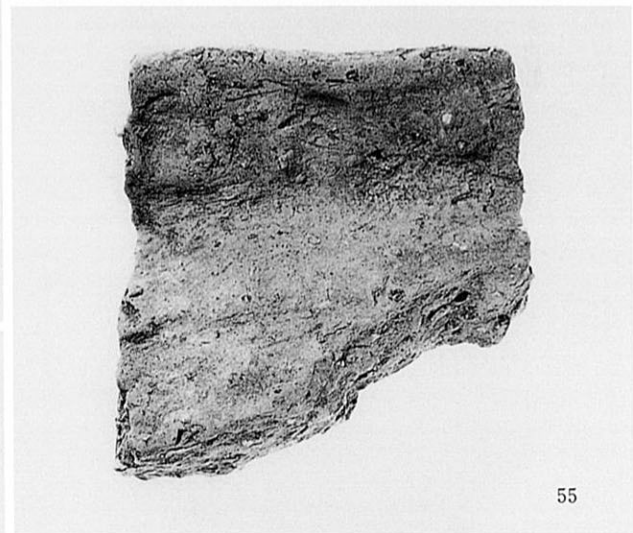
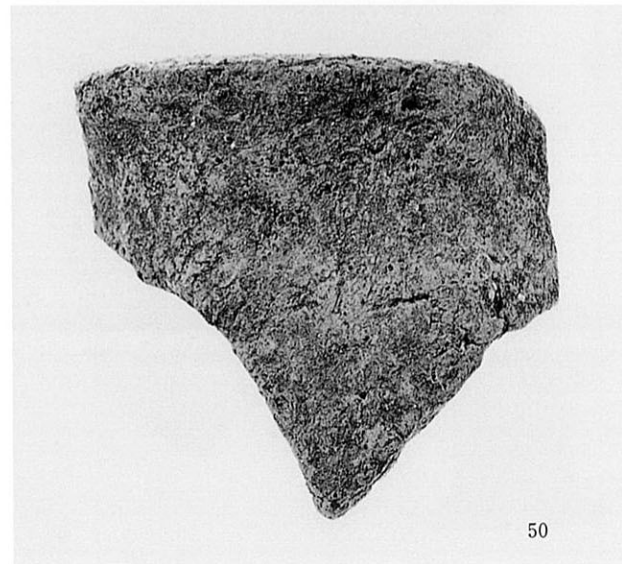
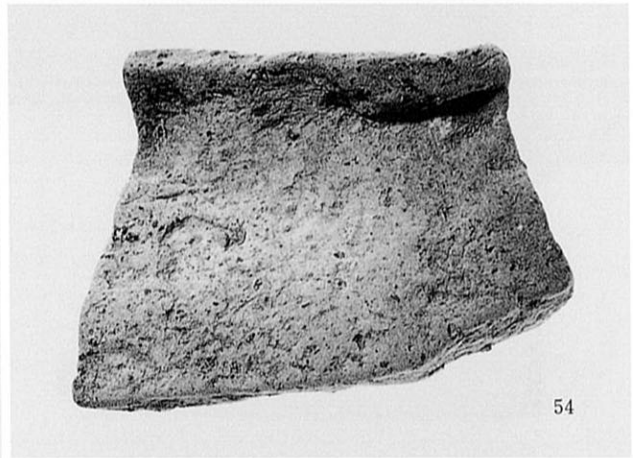
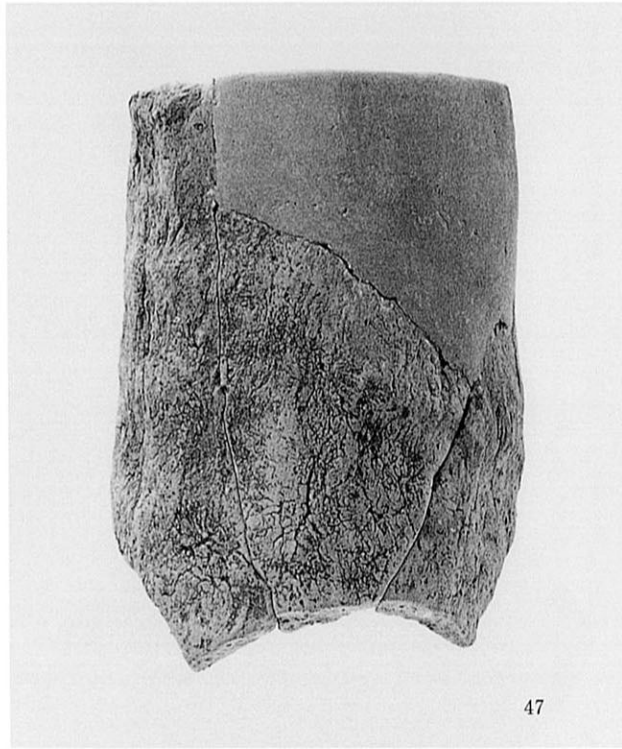
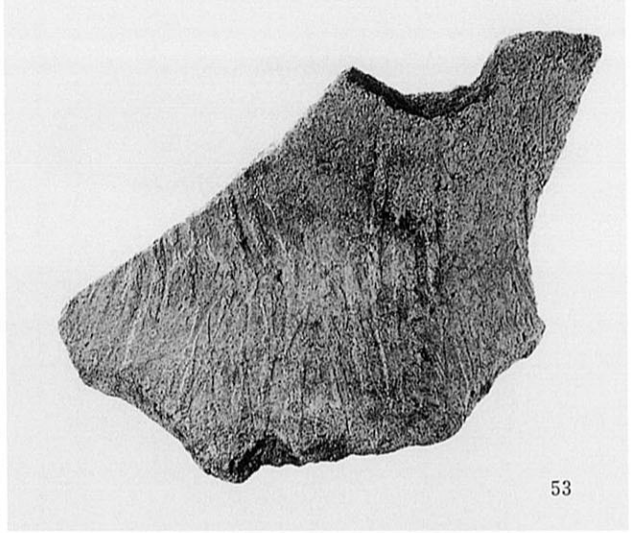
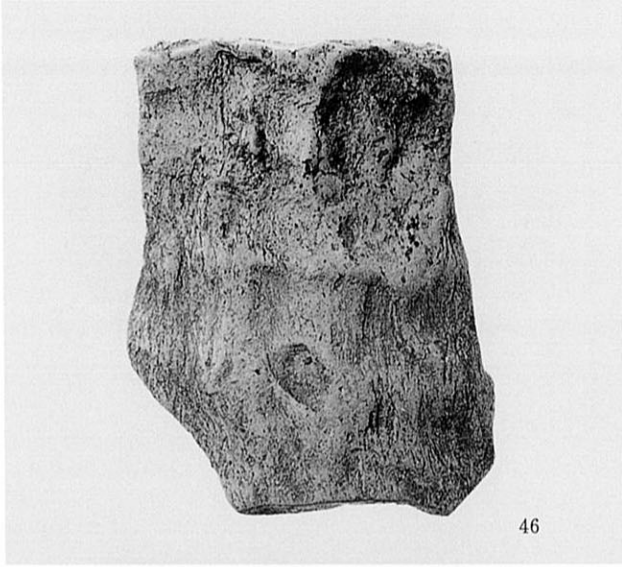
左上 5トレンチ 第5面 地床炉 43 (西から)
左下 5トレンチ 第6面 全景 (南西から)

右上 5トレンチ 第5面 地床炉 51 (東から)
右下 5トレンチ 第6面 地床炉 56 (南から)



5トレンチ 第6面 地床炉 55 (東から)







76



94



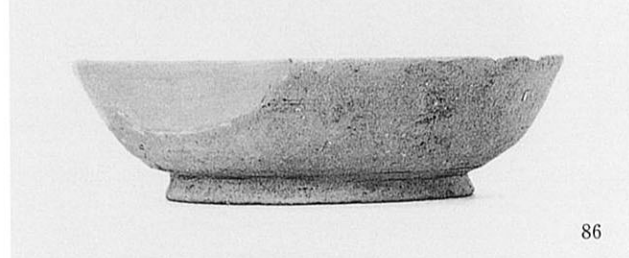
80



95



83



86



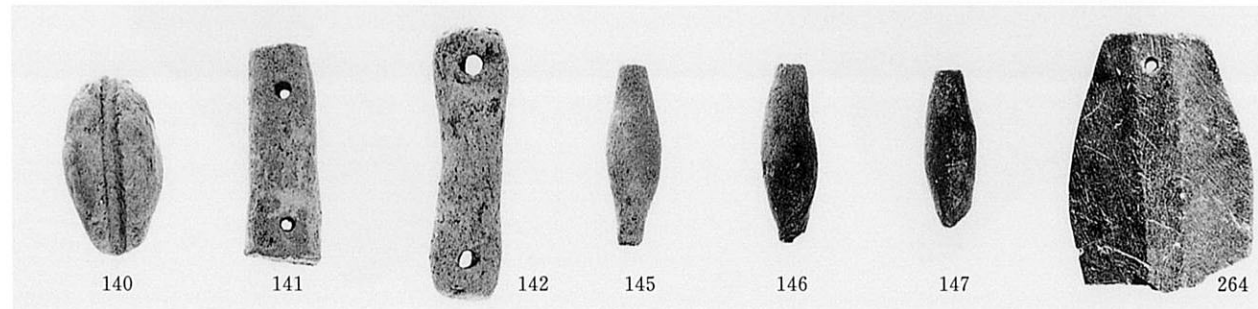
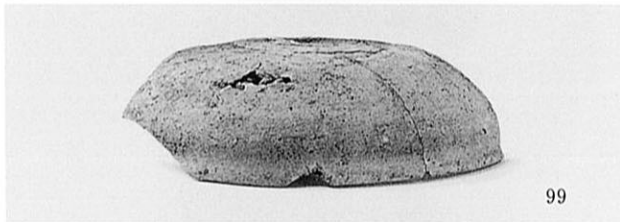
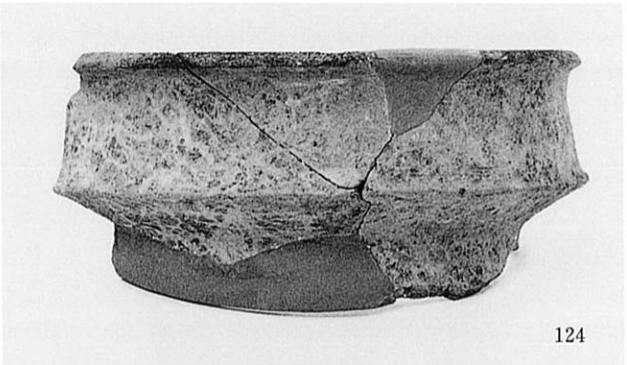
84

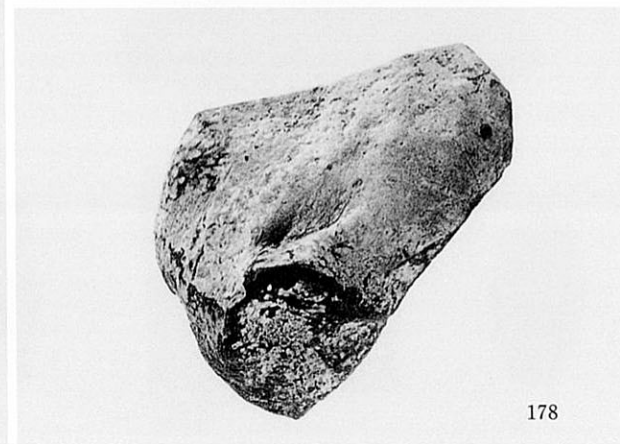
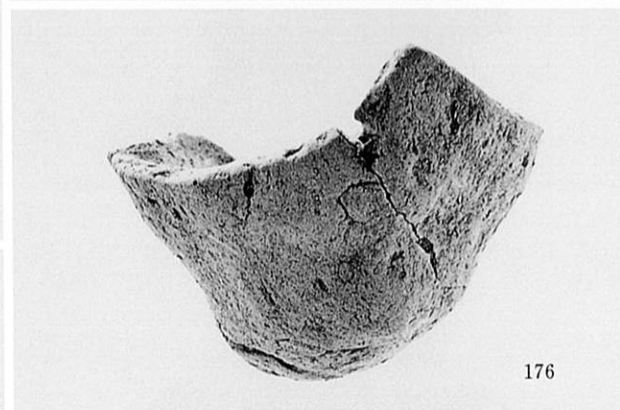
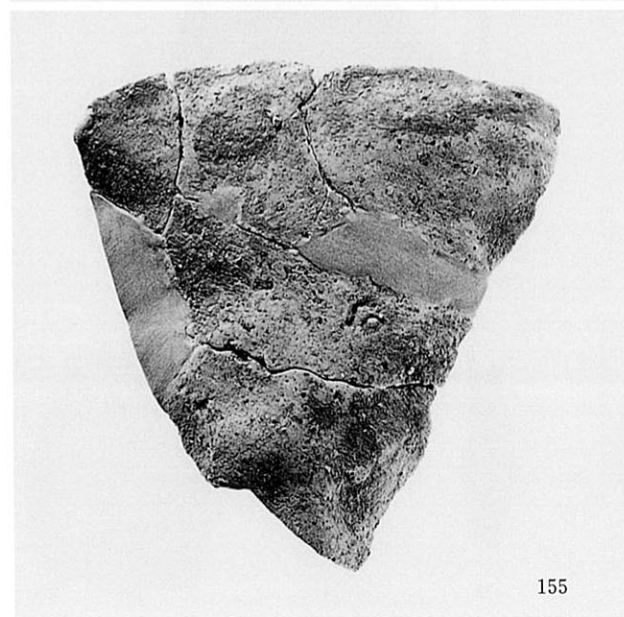
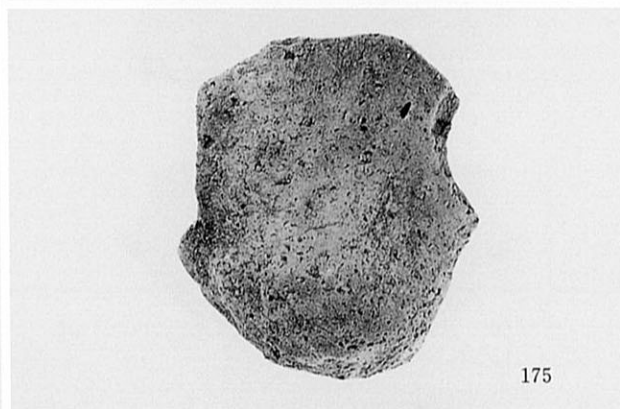
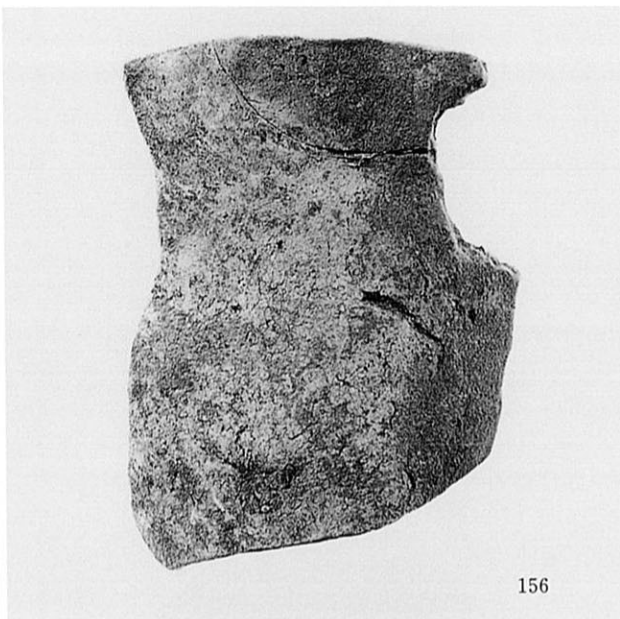
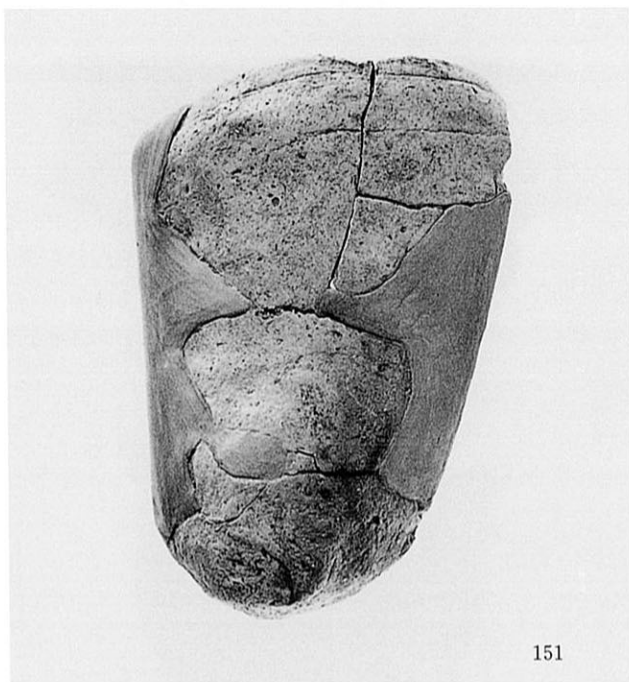


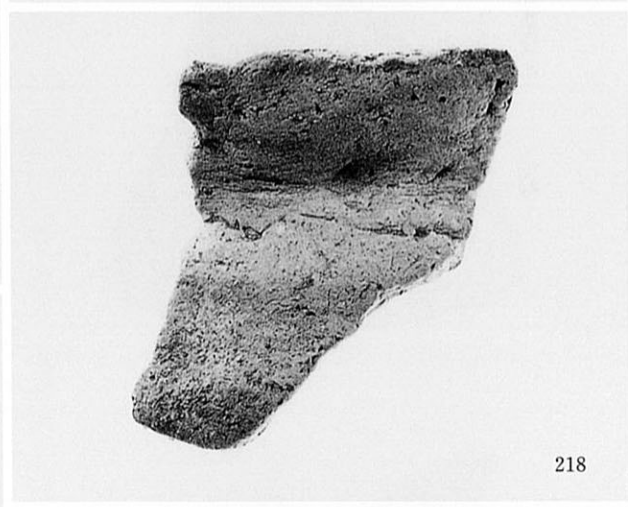
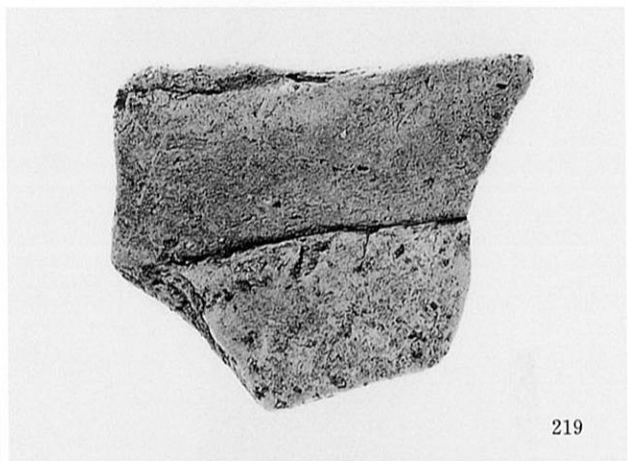
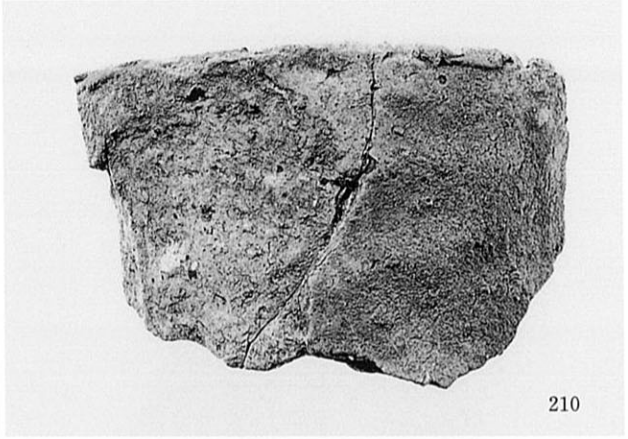
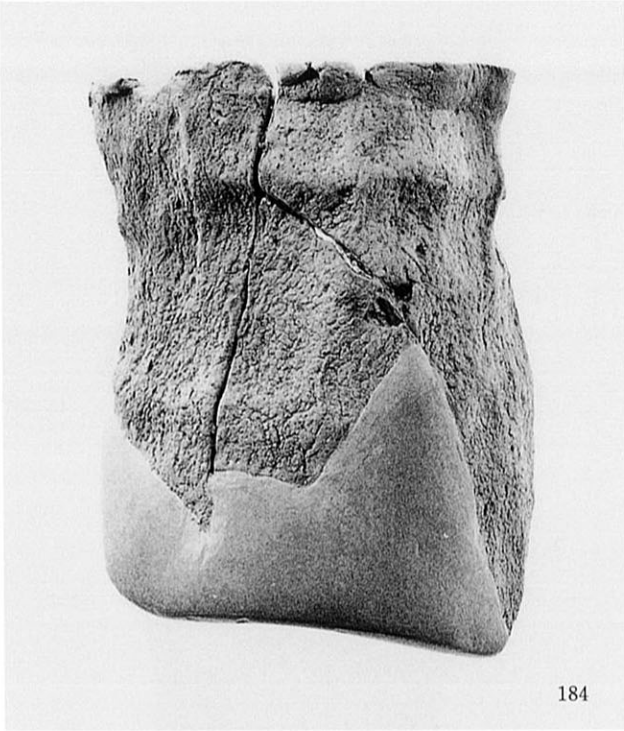
97



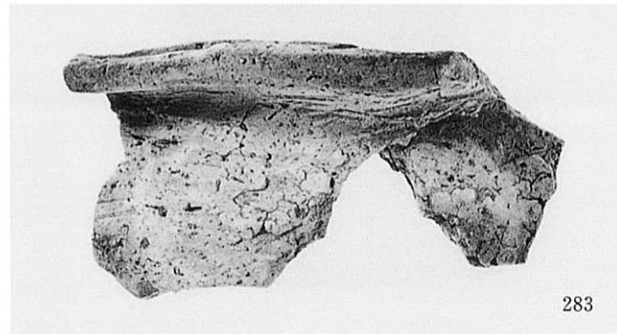
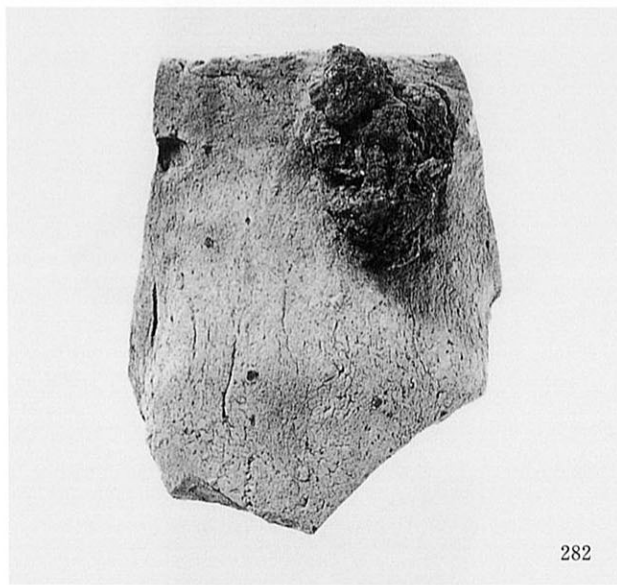
91



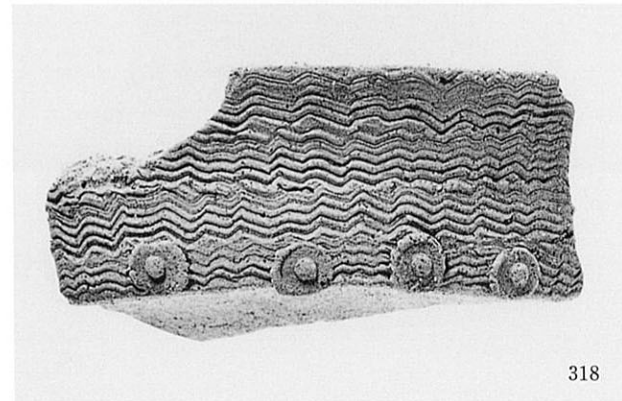
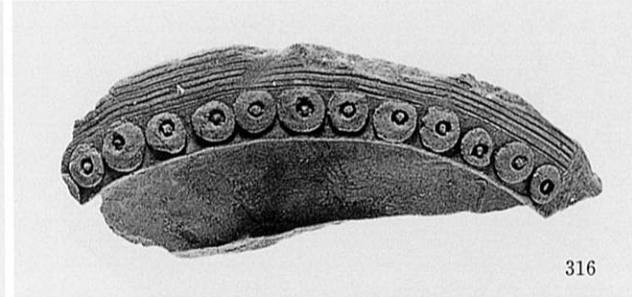
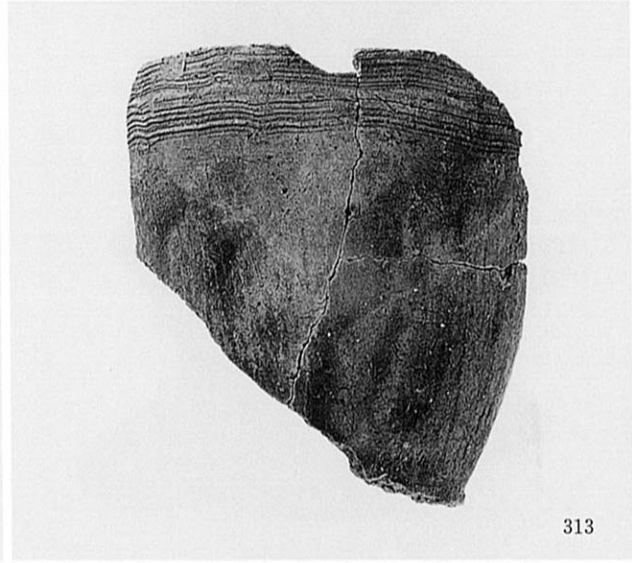
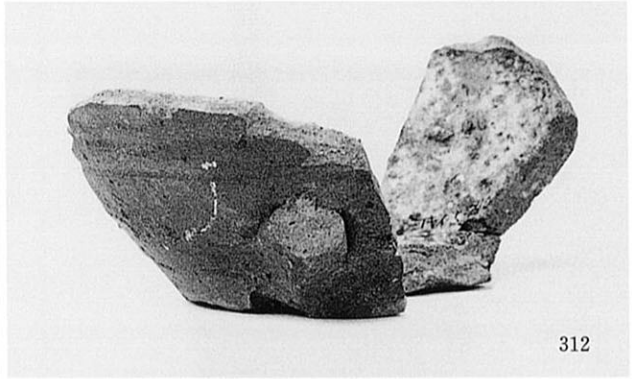
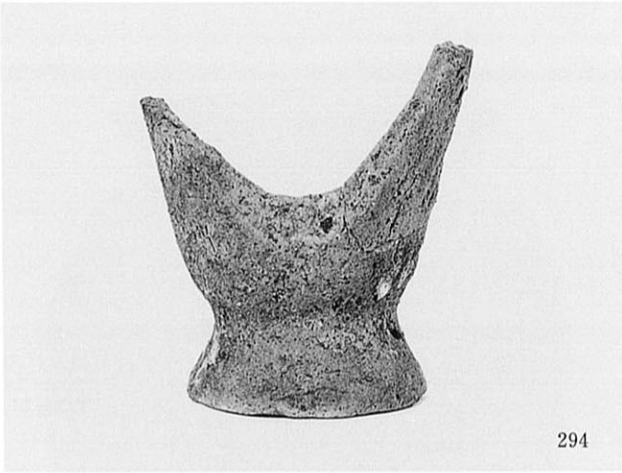


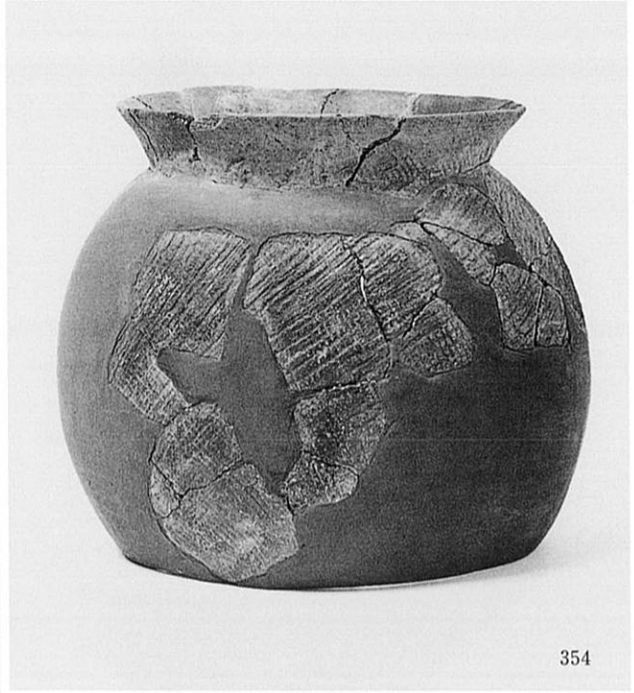
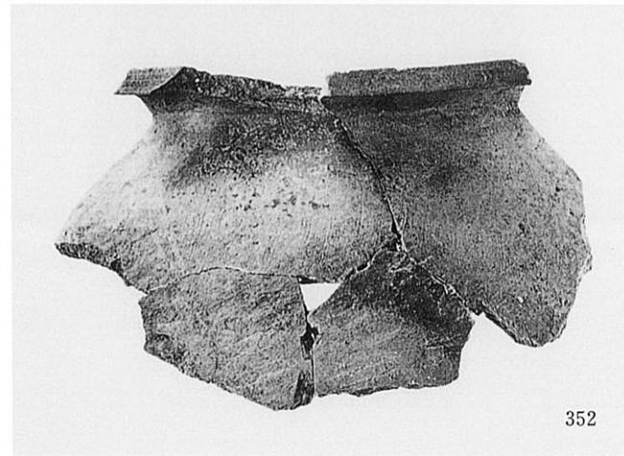
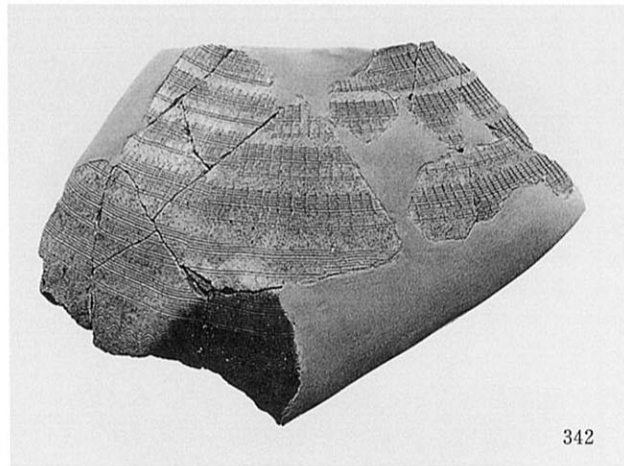


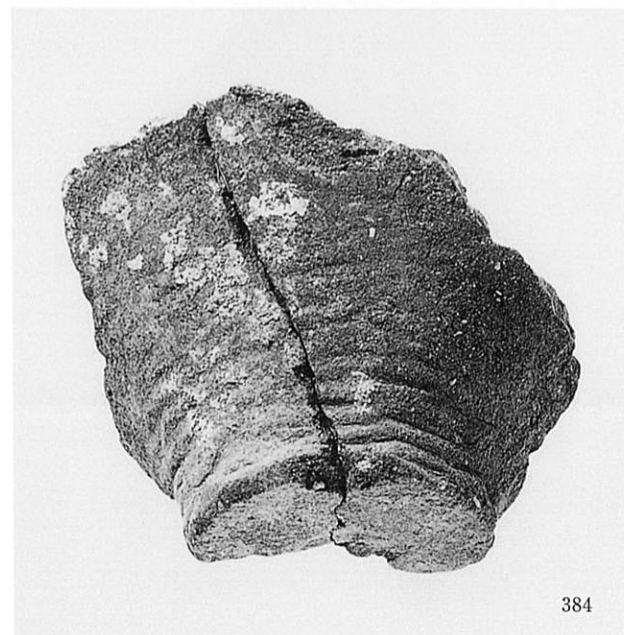
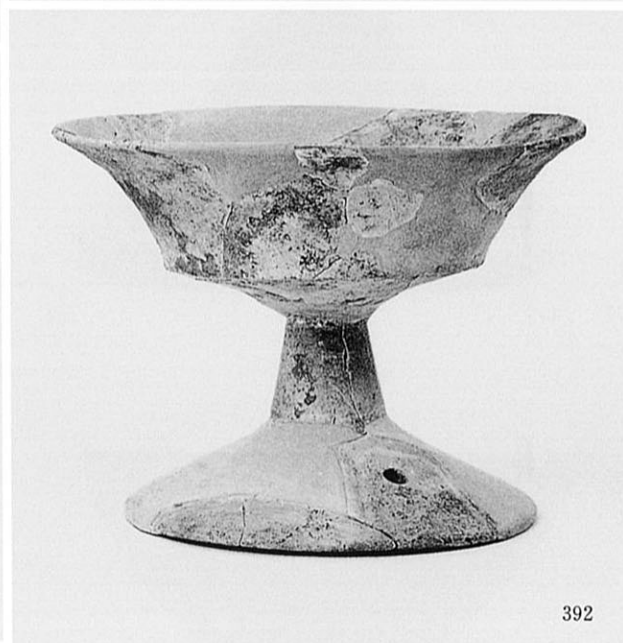
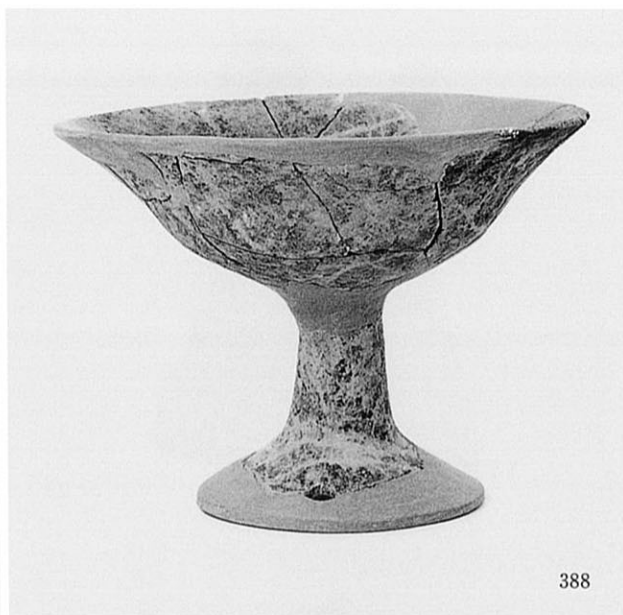


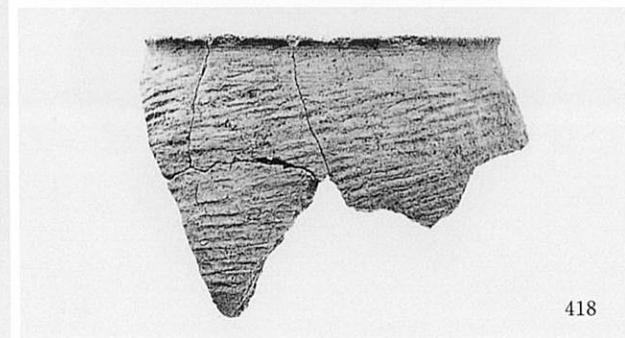
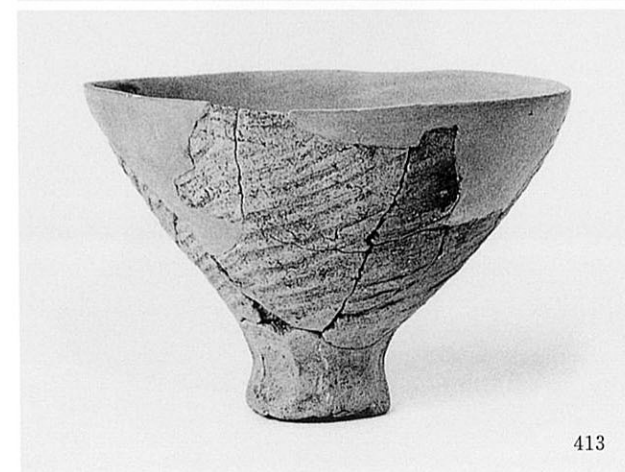
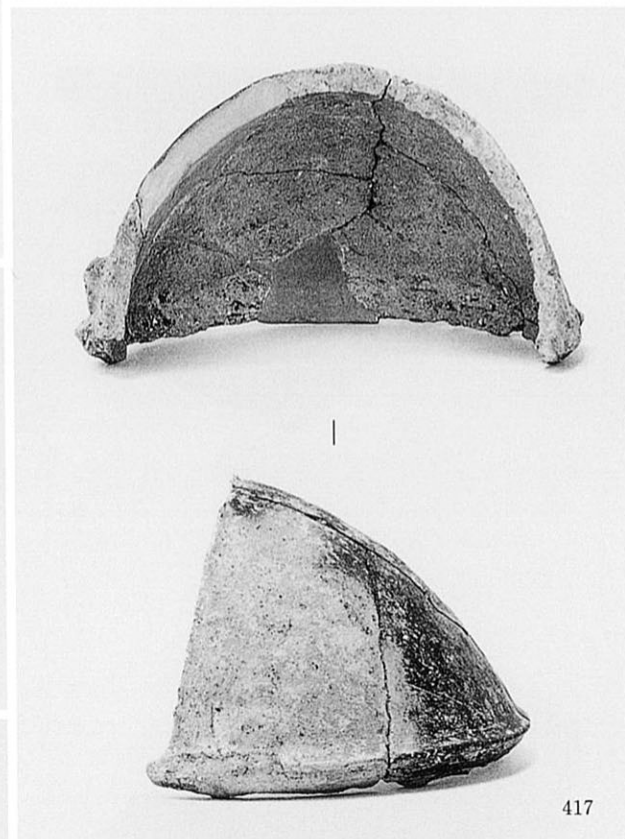
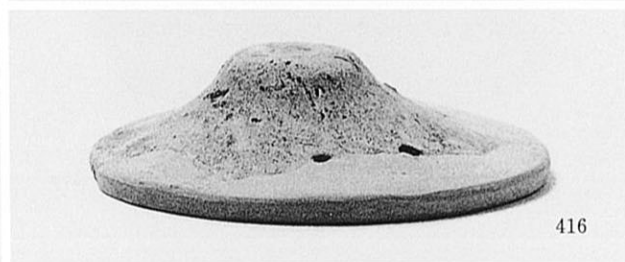
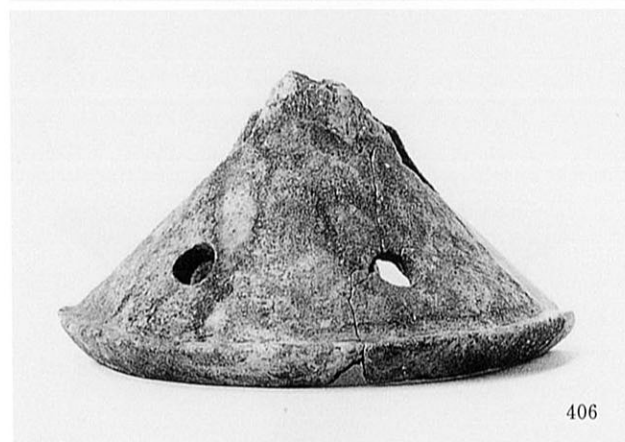
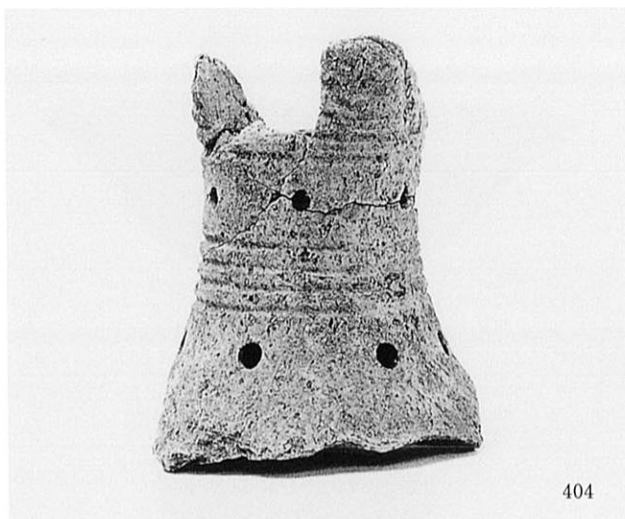














|



419



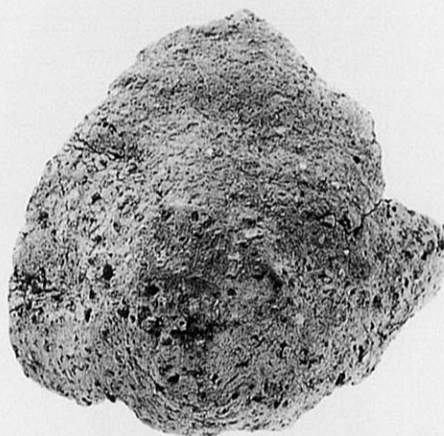
421



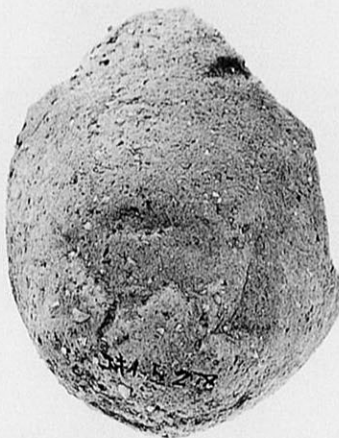
427



429



430



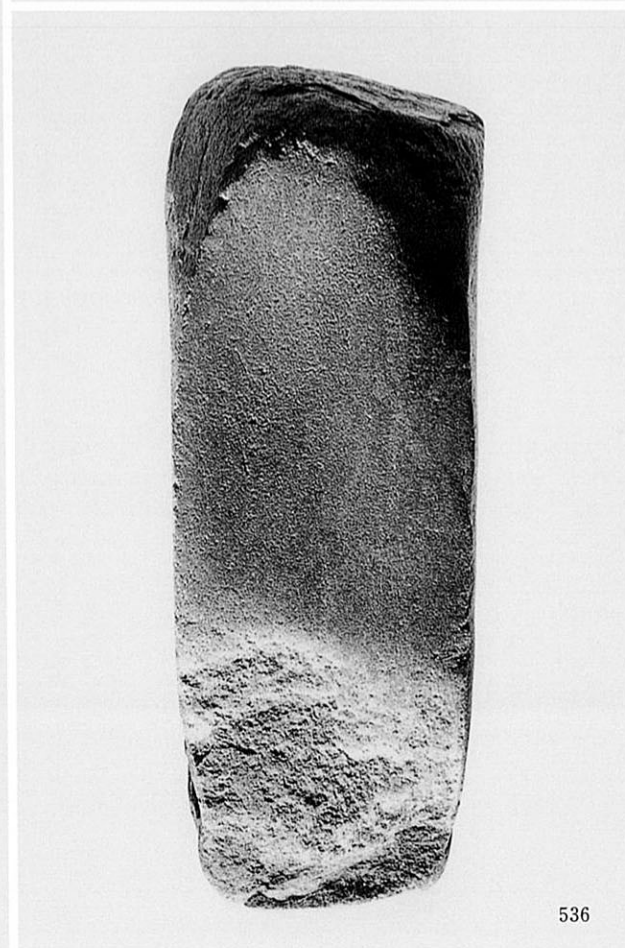
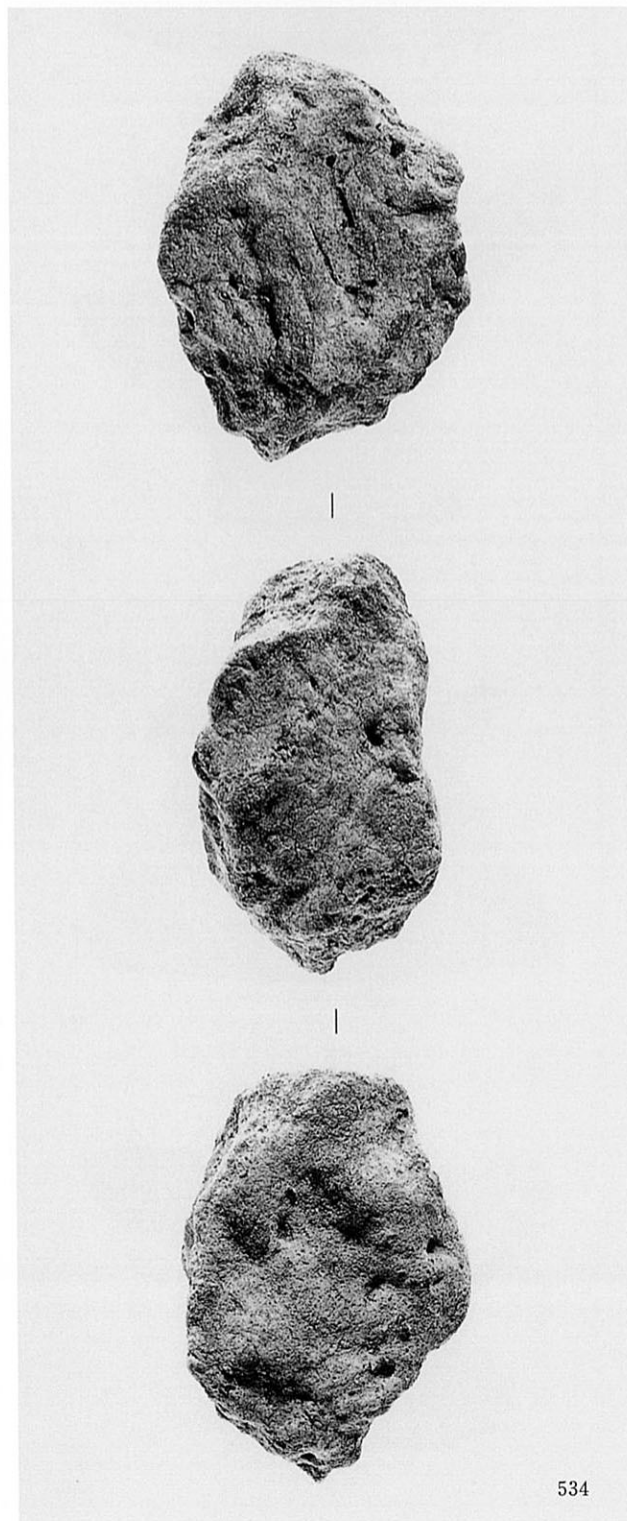
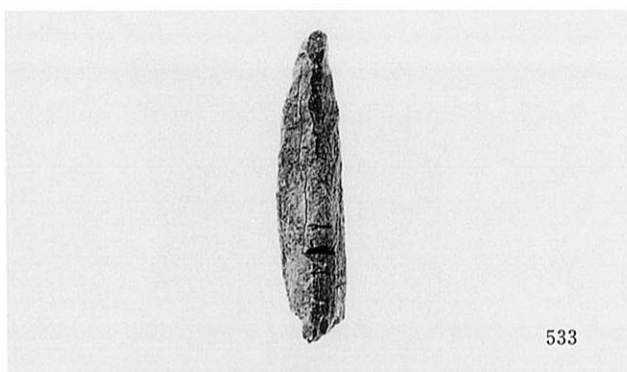
431

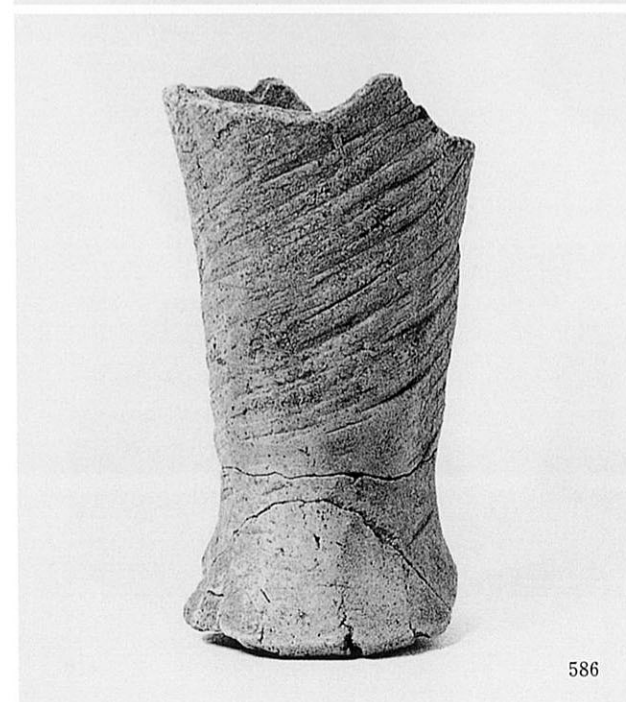
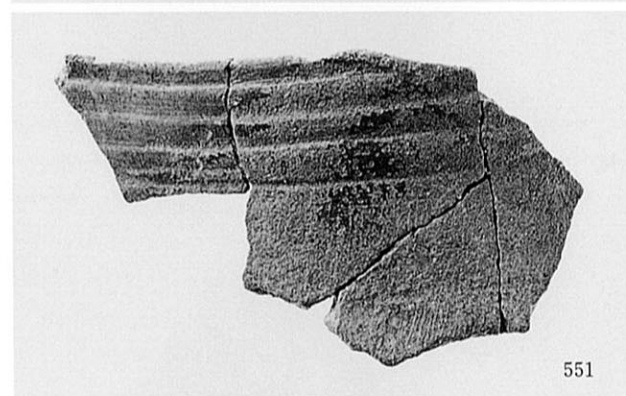
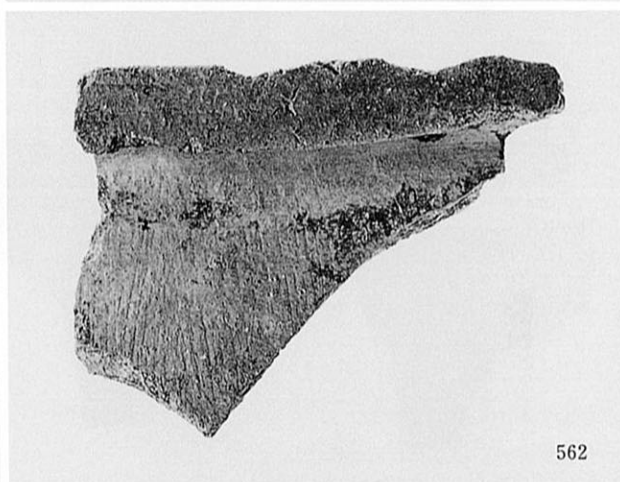
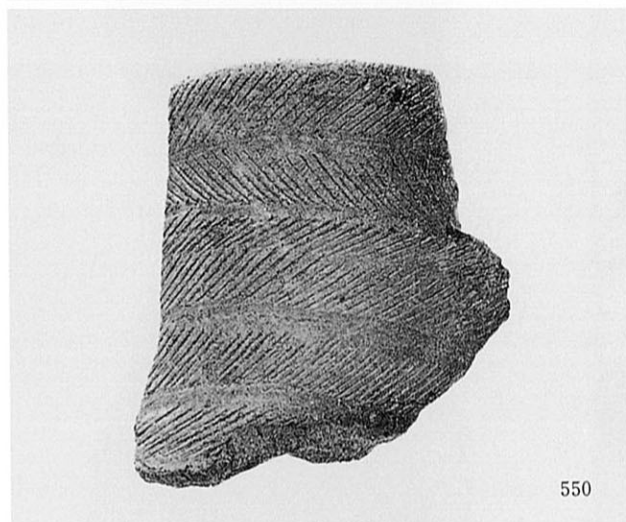
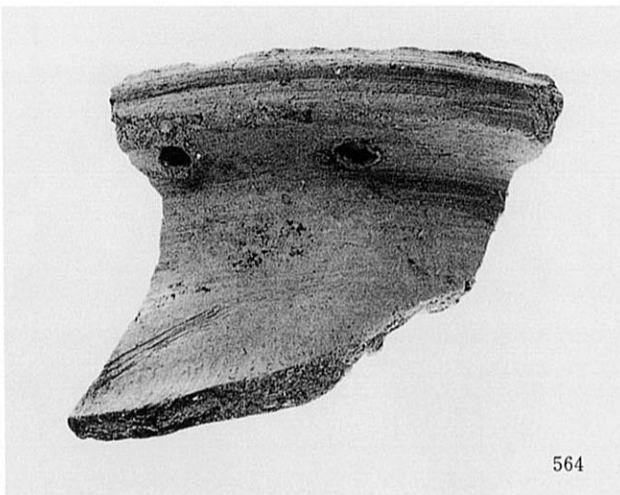
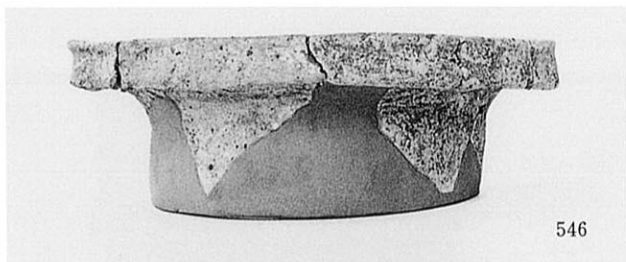


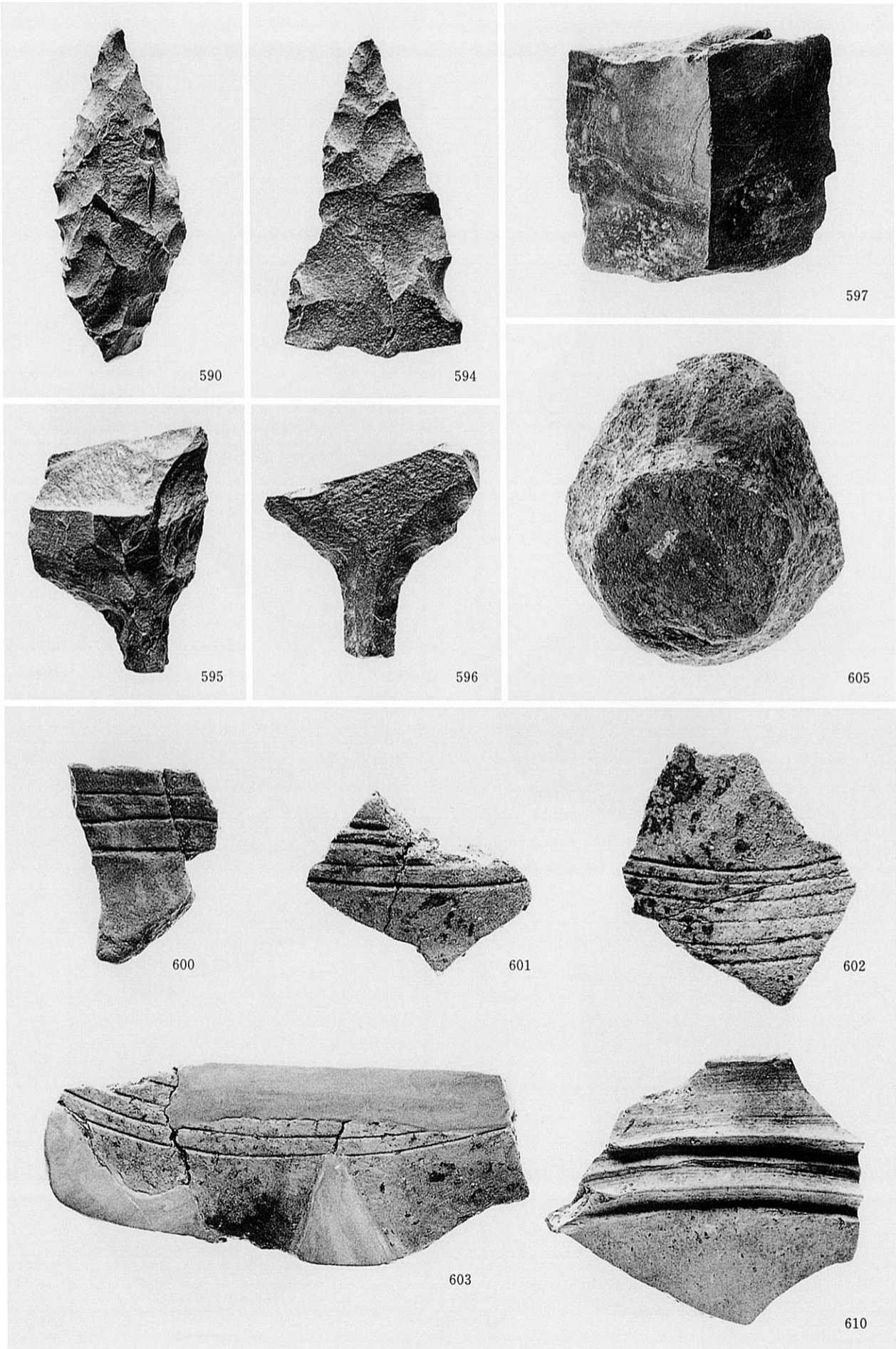
455











590

594

597

595

596

605

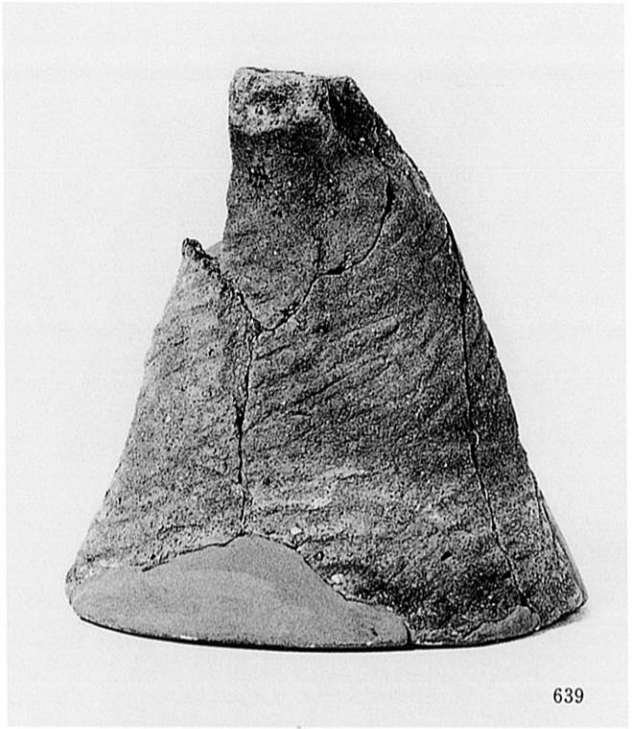
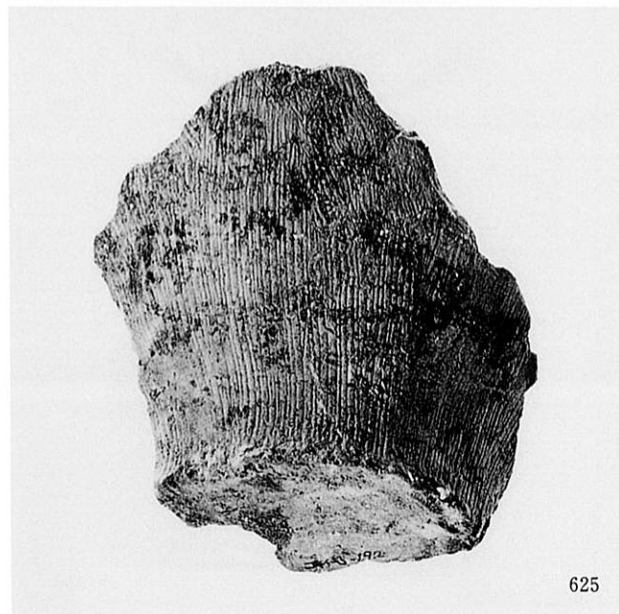
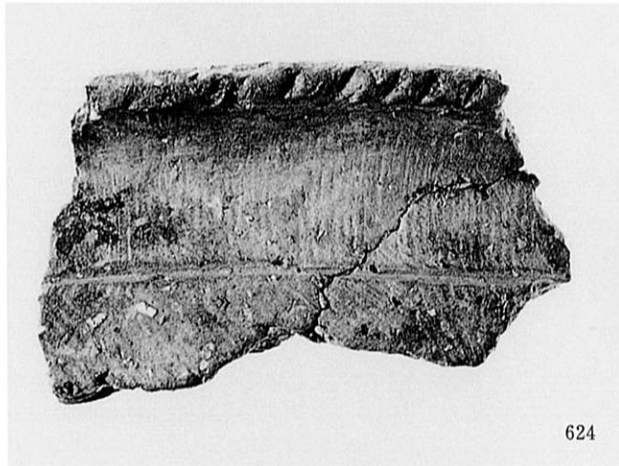
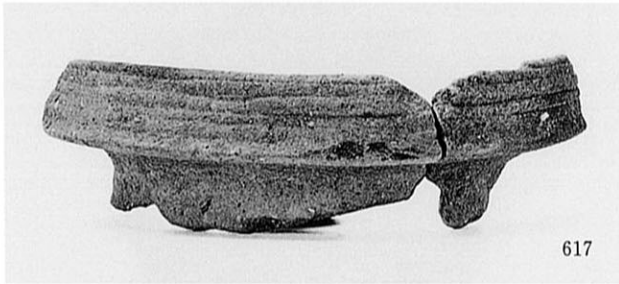
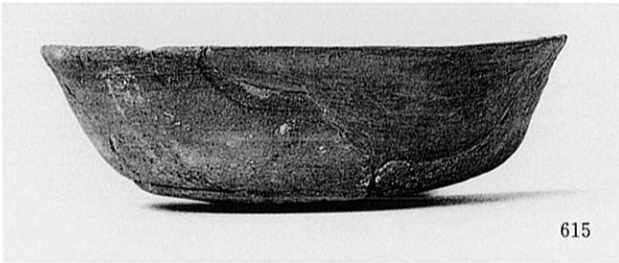
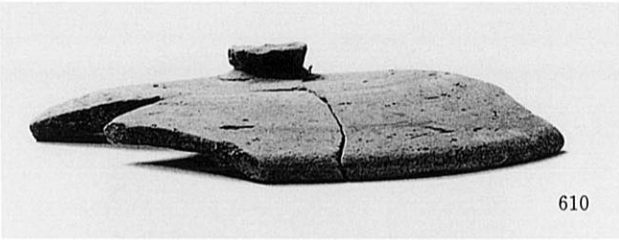
600

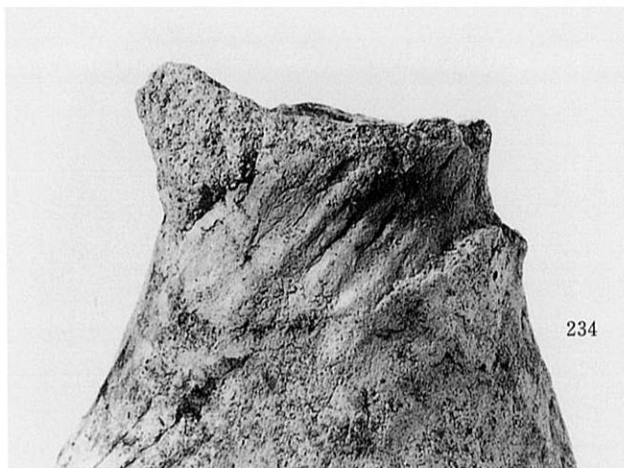
601

602

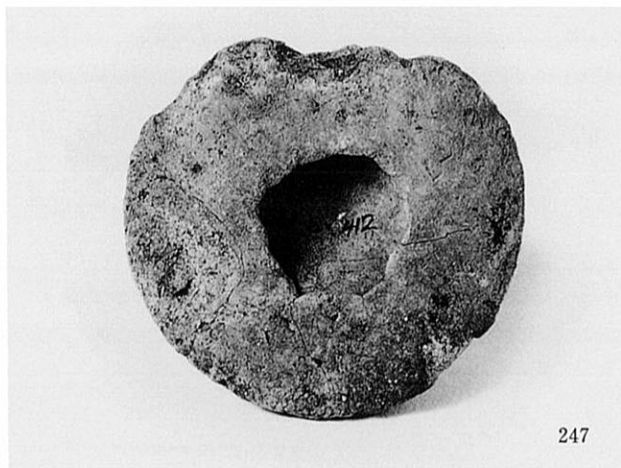
603

610

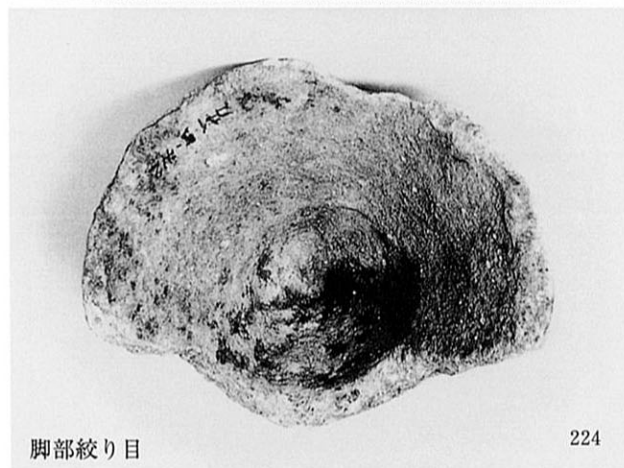




234



247



脚部絞り目

224



13



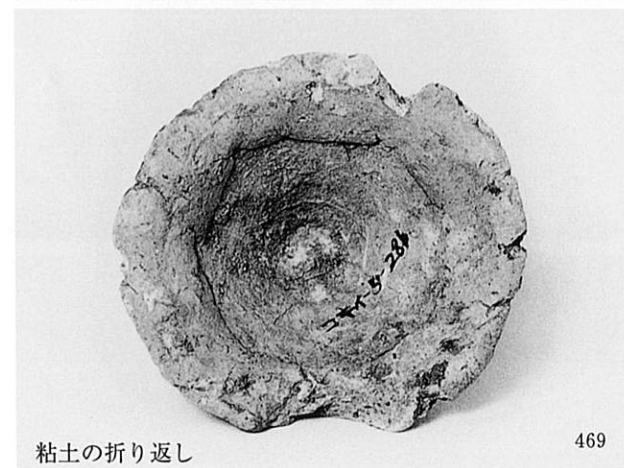
脚部ハケ調整

442



棒状工具によるオサエ

491



粘土の折り返し

469



体部板ナデ調整

494

報 告 書 抄 録

ふりがな	こじまきたいそいせき							
書名	小島北磯遺跡							
副書名	岬町多奈川地区多目的公園用地造成土砂採取事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番	第54集							
編集者名	阪田育功・後藤信義・宮地聡一郎							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号 TEL 0722-99-8791							
発行年月日	2000年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積/m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こじまきたいそいせき 小島北磯遺跡	おおさかふせんなんぐんみさきちやう 大阪府泉南郡岬町 たながわこじまちない 多奈川小島地内	27366		34度 18分 44秒	135度 06分 08秒	1999.7.28 ～ 1999.11.19	本調査部 933m ² 試掘調査部 196m ²	岬町多奈川地区多目的公園用地造成土砂採取事業に伴う事前の埋蔵文化財の調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構	主な遺物	特記事項		
小島北磯遺跡	生産遺跡 (製塩遺跡)	奈良時代 古墳時代 弥生時代		石敷製塩炉、礫群 石敷道路、地床炉 地床炉	製塩土器、須恵器、 土師器、弥生土器 石鏃、サザエ	独立した海浜で弥生時代後期～奈良時代まで営まれた製塩遺跡だが、土器製塩の開始が弥生時代中期にまで遡る可能性も考えられる。		

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第54集

小島北磯遺跡

— 岬町多奈川地区多目的公園用地造成土砂採取事業に伴う発掘調査 —

発行 2000(平成12)年8月31日

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号

TEL (0722)99-8791

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所